

栄村

## ひんご遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
一般県道箕作飯山線 下水内郡栄村箕作～下高井郡野沢温泉村明石

2018.9

長野県建設部北信建設事務所  
長野県埋蔵文化財センター



調査区全景（北から、後方は千曲川、左端に箕作平滝大橋）



2016年度調査区全景

上下とも栄村 福原洋一氏撮影



SB26 敷石住居跡完掘状況 (南から)



SB28 竪穴建物跡完掘状況 (南から)



2015年度調査区全景（西から）



SB9 罫穴建物跡（外側）・SB12 敷石住居跡完掘状況（南から）





SB1 敷石住居跡完掘状況（南から）



SB2（右）・23 敷石住居跡完掘状況（南から）



縄文中期中葉土器（中央現存高さ 50.7cm）



縄文中期後葉土器（後方中央現存高さ 25.0cm）



縄文後期前葉土器 1 (後方左から 2 番目現存高 36.6cm)



縄文後期前葉土器 2 (後方中央現存高 40.5cm)



縄文後期前葉土器 3 (中央後方現存高 24.5cm)

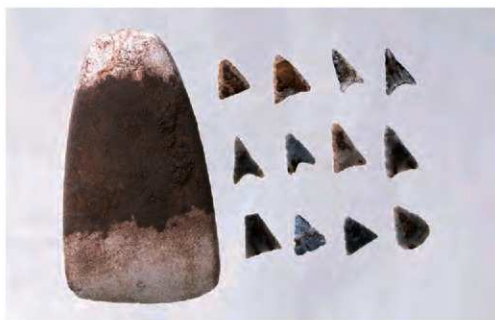


土 罎 (左下現存高 9.2cm)





ミニチュア土器  
(左端高さ 5.4cm)



アスファルト付着石器  
(磨製石斧 長さ 10.0cm)

アスファルト塊  
(横幅約 20cm)



## 例 言

- 1 本書は、長野県下水内郡栄村に所在する、ひんご遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県道箕作飯山線建設に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。受委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』32～34で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業に当っては、以下の機関・諸氏に業務委託または指導を得た。（敬称略）
  - 業務委託
  - 放射性炭素年代測定 : 株式会社パレオ・ラボ（平成27・28年度）  
: バリノ・サーヴェイ株式会社（平成29年度）
  - 樹種同定 : 株式会社パレオ・ラボ（平成27年度）  
: バリノ・サーヴェイ株式会社（平成29年度）
  - 種実同定 : 株式会社パレオ・ラボ（平成29年度）
  - 動物遺存体同定 : 株式会社パレオ・ラボ（平成29年度）
  - 土器胎土分析 : 株式会社パレオ・ラボ（平成29年度）
  - 漆・有機物分析 : 株式会社パレオ・ラボ（平成29年度）
  - 黒曜石産地推定 : 株式会社パレオ・ラボ（平成29年度）
  - 遺物実測・トレース : 株式会社アルカ（平成28・29年度）
  - 遺物写真撮影 : 信毎書籍印刷株式会社（平成29年度）
  - 調査指導
  - 地質・地形環境指導 : 信州大学名誉教授 赤羽貞幸（平成28年度）
  - 遺物調査指導 : 新潟県考古学会長 寺崎裕助（平成28年度）  
: 長野県立歴史館 寺内隆夫（平成28年度）  
: 本庄市立歴史民俗資料館 鈴木徳雄（平成29年度）  
: 有限会社ベントラボ 石坂圭介（平成29年度）
- 7 発掘調査および報告書刊行に当たり、下記の機関・諸氏に御指導、御協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。  
〔機関〕栄村役場、栄村教育委員会、栄村文化財保護審議会、栄村公民館、社会福祉法人博悠会特別養護老人ホームフランセーズ悠さかえ、津南町教育委員会、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料

部会（会田 進、市澤英利、小野 昭）、平滝区

〔個人〕今井哲哉、長田友也、上条信彦、倉石広太、小林謙一、小林達雄、櫻井秀雄、佐藤信之、佐藤雅一、茂原信生、関根愷二、谷藤保彦、長澤展生、新田康則、樋口和雄、福原洋一、本郷一美、望月静雄

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第1節に記載した。
- 9 石器の器種・石材分類は主任調査研究員 谷 和隆が担当し、綿田が一部補助した。
- 10 本書の執筆分担等は、以下のとおりである。  
執筆分担  
第1章 平林 彰  
第2章 川崎 保  
第3章 第1～3節、第4節1・2・6～8、第5節 綿田弘実  
第4節3～5 平林  
第4章 綿田  
校閲 調査部長 平林 彰、調査第3課長 櫻井秀雄  
総括 平林
- 11 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。  
掲載写真カラーデータ、遺物観察表、遺物集計表、自然科学分析報告書、その他

## 凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番にしたもの、整理事業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、本報告の本文・図表・写真のすべてに共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - (1) 遺構実測図  
堅穴建物跡・敷石住居跡・掘立柱建物跡・焼土跡・遺物集中 1 : 60、土坑 1 : 40  
遺構割付図 1 : 60
  - (2) 遺物実測図  
土器 1 : 4、土器拓影 1 : 4・1 : 3、石器 2 : 3～1 : 5  
土製品 1 : 2、1 : 3、石製品 1 : 2～1 : 4
  - (3) 遺物写真  
原則として遺物実測図とおおよそ共通であるが、任意縮尺にしているものもある。
- 4 遺物の器種名については細分せず、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。
- 5 基本層序および遺構埋土、土器の色調、粒径の区分等は「新版 標準土色帖 2005 年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」に準拠した。
- 6 実測図中のスクリーンパターン等の凡例は、以下のとおりである。





# 目 次

口 絵	
例 言	i
凡 例	iii
目 次	iv
挿表目次	vi
挿図目次	vi
遺構・遺物図版目次	vii
口絵目次	ix
写真図版目次	x
第1章 調査の経緯	1～10
第1節 調査に至る経緯	1～4
1 事業計画の概要	1
2 保護措置の調整	1
3 行政手続の経過	2
4 発掘作業と整理等作業の体制	3
第2節 発掘調査の経過	5～8
1 発掘作業	5
2 整理等作業	6
3 普及啓発活動	7
4 作業日誌抄録	8
第2章 遺跡の位置と環境	11～19
第1節 地理的環境	11～13
1 遺跡の位置	11
2 遺跡の範囲	11
3 遺跡周辺の地形・地質環境	13
第2節 歴史的環境	14～19
1 周辺の遺跡	14
2 歴史の変遷	16
第3章 調査の方法と成果	20～98
第1節 調査の方法	20
第2節 基本層序	24
第3節 遺構	26～62
1 概要	26
2 竪穴建物跡、敷石住居跡	26
3 掘立柱建物跡	43

	4 土 坑	46
	5 墓 跡	52
	6 配石遺構	53
	7 遺物集中	55
	8 焼土・炭化物集中	59
第4節	遺 物	63～98
	1 概 要	63
	2 縄文土器	63～87
	3 土製品	88～92
	4 焼成粘土塊	92
	5 骨角器	92
	6 石 器	93～96
	7 石製品	96～98
	8 アスファルト	98
第5節	自然科学分析	99～128
	1 概 要	99
	2 放射線炭素年代測定	99
	3 樹種同定	112
	4 種実同定	114
	5 動物遺存体同定	119
	6 縄文土器の胎土分析	123
	7 漆・有機物分析	124
	8 黒曜石産地推定	127
第4章	総 括	129～135
	1 縄文土器の様相	129
	2 「ひんご1・2式土器」	129
	3 石器の器種組成	131
	4 集落の変遷と構成	132
	5 まとめ	132

付表 遺構一覧表

遺構・遺物図版……………図版1～73（遺構：1～29、遺物：30～73）

遺構・遺物写真図版……………PL1～58（遺構：1～22、遺物：23～58）

報告書抄録

## 挿 表 目 次

第1表	発掘調査にかかわる行政手続
第2表	受委託契約にかかわる手続
第3表	2015年度発掘作業工程表
第4表	2016年度発掘作業工程表
第5表	2016年度整理等作業工程表
第6表	2017年度整理等作業工程表
第7表	2018年度整理等作業工程表
第8表	周辺遺跡一覧その1
第9表	周辺遺跡一覧その2
第10表	栄村成立までの変遷
第11表	遺構・遺物包含層出土石器集計表
第12表	石器・石製品用途別器種組成表
第13表	石器・石製品器種別石材組成表
第14表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果
第15表	推定される較正年代と注記（BC/AD表記）
第16表	樹種同定結果一覧
第17表	炭化種実同定結果
第18表	動物遺存体同定結果
第19表	胎土分析対象石器
第20表	蛍光X線分析結果
第21表	漆・有機物分析試料とその詳細
第22表	アスファルト・生漆の赤外吸収位置とその強度
第23表	分析対象となる黒曜石製石器
第24表	測定値および産地推定結果

## 挿 図 目 次

第1図	県道箕作飯山線改築事業計画図
第2図	長野盆地周辺地質略図
第3図	ひんご遺跡位置図
第4図	遺跡周辺地質図
第5図	遺跡周辺地形区分図
第6図	遺跡周辺の地すべり地形およびせき止め堆積物分布

- 第7図 周辺遺跡位置図
- 第8図 調査区範囲とグリッド設定図
- 第9図 グリッドの呼称
- 第10図 2b-1区北壁土層堆積層概念図
- 第11図 調査区全体図および立面図
- 第12図 縄文中・後期土器分類配列図(1)
- 第13図 縄文中・後期土器分類配列図(2)
- 第14図 出土土偶の部位別の割合
- 第15図 土偶出土分布図
- 第16図 ミニチュア土器出土分布図
- 第17図 土製円板の研磨と現存長の関係
- 第18図 土製円板の重さの分布
- 第19図 土製円板出土分布図
- 第20図 焼成粘土塊出土分布図
- 第21図 石器・石製品器種組成図
- 第22図 装身具ほか石製品出土分布図
- 第23図 軽石製品出土分布図
- 第24図 ひんご遺跡<sup>14</sup>C測定値と校正曲線
- 第25図 ひんご遺跡の種実
- 第26図 ひんご遺跡の動物遺存体
- 第27図 黒色付着物の赤外吸収スペクトル図
- 第28図 土器・遺物と付着物の実体顕微鏡写真
- 第29図 黒色付着物の赤外吸収スペクトル図
- 第30図 千曲川・信濃川沿岸の縄文中・後期遺跡石器器種組成

## 遺構・遺物図版目次

- 図版1 遺構分布図
- 図版2 遺構割付図1 (IWR 05~IXD 05)
- 図版3 遺構割付図2 (IXD 05~IXJ 05)
- 図版4 遺構割付図3 (IXK 05~IXQ 05)
- 図版5 遺構割付図4 (IXR 05~IYD 05)
- 図版6 遺構割付図5 (IYE 05~IYK 05)
- 図版7 遺構割付図6 (IYK 05~IYR 05)
- 図版8 遺構割付図7 (IYR 05~IIUE 05)
- 図版9 遺構割付図8 (IIUE 05~IIUK 05)
- 図版10 SB1敷石住居跡



- 図版 11 S B 2 敷石住居跡、S B 3・4 竪穴建物跡  
図版 12 S B 5・7・6 竪穴建物跡  
図版 13 S B 9 竪穴建物跡、S B 12 敷石住居跡 (1)  
図版 14 S B 9 竪穴建物跡、S B 12 敷石住居跡 (2)  
図版 15 S B 8・10・13 竪穴建物跡  
図版 16 S B 14・20・15 竪穴建物跡  
図版 17 S B 16・17 竪穴建物跡  
図版 18 S B 21・22 竪穴建物跡  
図版 19 S B 23・24 敷石住居跡  
図版 20 S B 26 敷石住居跡  
図版 21 S B 28・29 竪穴建物跡  
図版 22 S B 27・30・31・32 竪穴建物跡  
図版 23 S T 1・2・5 掘立柱建物跡  
図版 24 S T 4・6 掘立柱建物跡  
図版 25 S T 3 掘立柱建物跡、S H 13 墓跡、S H 9・2・8 配石遺構、S Q 6 遺物集中  
図版 26 S K 111・313・202 土坑、S Q 18 遺物集中、S H 14 配石遺構、S K 83 土坑  
図版 27 S K 65・81・125・173・172 土坑  
図版 28 S K 109・8・203・205・279 土坑  
図版 29 S K 320・411・156・253 土坑  
図版 30 土器 1 S B 1・5~10  
図版 31 土器 2 S B 12  
図版 32 土器 3 S B 16  
図版 33 土器 4 S B 20・21・24  
図版 34 土器 5 S B 26 (1)  
図版 35 土器 6 S B 26 (2)・27・28 (1)  
図版 36 土器 7 S B 28 (2)  
図版 37 土器 8 S B 28 (3)、S K 8・111・125・156・279  
図版 38 土器 9 S K 202・203・305、S H 13、S Q 1・7  
図版 39 土器 10 S Q 3・6・10・11・16・17・27  
図版 40 土器 11 S Q 17・30・33・34、S F 5  
図版 41 土器 12 第 3 群  
図版 42 土器 13 第 3・4 群  
図版 43 土器 14 第 4・5 群  
図版 44 土器 15 第 6 群 (1)  
図版 45 土器 16 第 6 群 (2)  
図版 46 土器 17 第 6 群 (3)  
図版 47 土器 18 S B 1~5・6 (1)  
図版 48 土器 19 S B 6 (2)・9  
図版 49 土器 20 S B 10・12 (1)  
図版 50 土器 21 S B 12 (2)・12 (B)・13 (1)

- 図版 51 土器 22 S B 13 (2)・14・15・16 (1)
- 図版 52 土器 23 S B 16 (2)・17・21
- 図版 53 土器 24 S B 22~24・26 (1)
- 図版 54 土器 25 S B 26 (2)
- 図版 55 土器 26 S B 27・28・32
- 図版 56 土器 27 S H 14、S Q 18、S K 3・5・10・12・51・65・159・177・178・200・224・253・  
260・267・283・299・313・322・379・396
- 図版 57 土器 28 S Q 1~5・11・13~15・19・27~30、S F 2・4・5
- 図版 58 土器 29 1・2群土器
- 図版 59 土器 30 1・3・4群土器
- 図版 60 土器 31 6群土器
- 図版 61 土製品 1 土偶
- 図版 62 土製品 2 ミニチュア土器、貝輪形土製品、土製耳飾、匙形土製品ほか、骨角製品
- 図版 63 石器 1 石鎌、石錐、石槍、石匙、搔器
- 図版 64 石器 2 削器 (1)
- 図版 65 石器 3 削器 (2)、打製石斧 (1)
- 図版 66 石器 4 打製石斧 (2)、磨製石斧
- 図版 67 石器 5 小形砥石、石錘、敲石、凹石 (1)
- 図版 68 石器 6 凹石 (2)、特殊磨石、磨石 (1)
- 図版 69 石器 7 磨石 (2)、大形砥石
- 図版 70 石器 8 石皿 (1)
- 図版 71 石器 9 石皿 (2)
- 図版 72 石製品 1 石製装身具、軽石製品
- 図版 73 石製品 2 三角埴形石製品、石棒

## 目次

- 口絵 1 上 調査区全景 (北から)、下 2016年度調査区全景
- 口絵 2 上 S B 26 敷石住居跡完掘状況 (南から)、下 S B 28 竪穴建物跡完掘状況 (南から)
- 口絵 3 上 2015年度調査区全景 (西から)、下 S B 9 竪穴建物跡 (外側)・S B 12 敷石住居跡完掘状況 (南から)
- 口絵 4 上 S B 1 敷石住居跡完掘状況 (南から)、下 S B 2 (右)・23 敷石住居跡完掘状況 (南から)
- 口絵 5 上 縄文中期中葉土器、下 縄文中期後葉土器
- 口絵 6 上 縄文後期前葉土器 1、下 縄文後期前葉土器 2
- 口絵 7 上 縄文後期前葉土器 3、下 土偶
- 口絵 8 上 ミニチュア土器、中 アスファルト付着石器、下 アスファルト塊

## 写真図版目次

- P L 1 遺跡遠景、土層断面
- P L 2 2 b - 1 区遺構 (S B 1 敷石住居跡)
- P L 3 2 a · 2 b - 1 区遺構 (S B 2 敷石住居跡、S B 3 · 4 · 6 · 7 竪穴建物跡)
- P L 4 2 b - 1 区遺構 (S B 5 · 8 · 10 竪穴建物跡)
- P L 5 2 b - 1 区遺構 (S B 9 竪穴建物跡、S B 12 · 12 - B 敷石住居跡)
- P L 6 2 b - 1 区遺構 (S B 9 · 13 竪穴建物跡、S B 12 敷石住居跡)
- P L 7 2 a · 2 b - 1 区遺構 (S B 14 · 15 · 16 · 17 · 20 竪穴建物跡)
- P L 8 2 a 区遺構 (S B 20 ~ 22 竪穴建物跡)、全景
- P L 9 2 b - 1 区遺構 (S B 2 · 23 敷石住居跡)、全景
- P L 10 3 区遺構 (S B 24 敷石住居跡)
- P L 11 3 区遺構 (S B 26 敷石住居跡)
- P L 12 3 区遺構 (S B 28 竪穴建物跡)
- P L 13 3 区遺構 (S B 27 · 29 · 30 ~ 32 竪穴建物跡)、全景
- P L 14 掘立柱建物跡 1 (S T 2)
- P L 15 掘立柱建物跡 2 (S T 3)
- P L 16 掘立柱建物跡 3、根固石がある柱穴 (S T 4、S K 81 · 83 · 109 · 172 · 173)
- P L 17 土坑 1 (S K 156 · 253 · 111 · 202 · 313 · 205)
- P L 18 土坑 2 (S K 8 · 279 · 65 · 203 · 411 · 320 · 180 · 215)
- P L 19 配石遺構、墓跡 (S H 2 · 10 · 13 · 14)
- P L 20 遺物集中 1 (S Q 3 · 7 · 9 · 18 · 11 · 16 · 12 · 13)
- P L 21 遺物集中 2、焼土・炭化物集中 (S Q 33 · 34、S F 2 · 23 · 25 · 26 · 27 · 29 · 33)
- P L 22 遺物出土状況 (2 a · 3 区付番遺物)
- P L 23 縄文土器 1 S B 1 · 3 · 5 · 6 · 7 · 8 · 9
- P L 24 縄文土器 2 S B 10 · 12
- P L 25 縄文土器 3 S B 16
- P L 26 縄文土器 4 S B 20 · 21 · 24
- P L 27 縄文土器 5 S B 24 · 26
- P L 28 縄文土器 6 S B 26 · 27 · 28
- P L 29 縄文土器 7 S B 28
- P L 30 縄文土器 8 S B 28、S K 8 · 65 · 111 · 118 · 156 · 222 · 254
- P L 31 縄文土器 9 S K 202 · 203 · 279 · 305、S H 13、S Q 7
- P L 32 縄文土器 10 S Q 1 · 3 · 5 · 6 · 9 · 16 · 27
- P L 33 縄文土器 11 S Q 10 · 11 · 17 · 18 · 28 · 30 · 35
- P L 34 縄文土器 12 S Q 33 · 34、S F 5、第 4 群土器 1、第 5 群土器 1
- P L 35 縄文土器 13 第 3 群土器 1
- P L 36 縄文土器 14 第 3 群土器 2、第 4 群土器 2

- P L 37 縄文土器 15 第 1 群土器 1、第 4 群土器 3、第 5 群土器 2、第 6 群土器 1
- P L 38 縄文土器 16 第 6 群土器 2
- P L 39 縄文土器 17 第 6 群土器 3
- P L 40 縄文土器 18 第 6 群土器 4
- P L 41 縄文土器 19 上 第 1 群土器 2、下 第 2 群土器
- P L 42 縄文土器 20 上 第 3 群土器 3、下 第 3 群土器 4
- P L 43 縄文土器 21 上 第 3 群土器 5、第 4 群土器 4、下 第 4 群土器 5
- P L 44 縄文土器 22 上 第 6 群土器 5、下 第 6 群土器 6
- P L 45 縄文土器 23 上 第 6 群土器 7、下 第 6 群土器 8
- P L 46 縄文土器 24 上 第 6 群土器 9、下 第 6 群土器 10
- P L 47 土製品 1 土製円板
- P L 48 土製品 2 土製耳飾、貝輪形土製品、匙形土製品ほか、焼成粘土塊
- P L 49 土製品 3 ミニチュア土器、アスファルト塊
- P L 50 石器 1 石鎌、石錘、石槍、搔器、石匙
- P L 51 石器 2 削器
- P L 52 石器 3 打製石斧
- P L 53 石器 4 磨製石斧、砥石 1、石錘、敲石、ハンマー
- P L 54 石器 5 凹石
- P L 55 石器 6 磨石、砥石 2、石皿 1
- P L 56 石器 7 石皿 2
- P L 57 石器 8 石核
- P L 58 石製品 石製垂飾、軽石製品、石棒、三角壺形石製品



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 事業計画の概要（第1図）

一般国道箕作飯山線道路改良事業（以下「本事業」という。）は、東日本大震災の翌日、2011（平成23）年3月12日に発生した長野県北部地震により国道117号が被災し、通行止めとなったため、代替え道路機能の確保による災害に強い道路整備を目的として、長野県が計画した。事業内容は、下水内郡栄村箕作地区から野沢温泉村明石地区まで全長約2,000m、幅員10mの道路改良で、長野県北信建設事務所（以下「北信建」という。）は翌年度から早速着手した。



2015年5月9日付け信濃毎日新聞朝刊 北信2面

### 2 保護措置の調整

2013（平成25）年5月2日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下「県教委」という。）は栄村教育委員会生涯学習係（以下「栄村教委」という。）からの依頼により、本事業にかかる埋蔵文化財の保護について北信建と調整会議を開催した。その際、本事業によって影響を受けるひんご遺跡は、これまで本格的な発掘調査歴がないことから、適正な保護措置を決定するためにも、埋蔵文化財包蔵地の正確な範囲と内容を確認する必要性が確認された。なお、その際、記録保存のための本発掘調査が必要になった場合は、（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が北信建から受託して行うことも、あわせて合意された。



第1図 県道箕作飯山線改良事業計画図

栄村教委は調整会議を受けて、2014年12月4日、県教委の指導を得ながら埋蔵文化財包蔵地に登録されている範囲およびその西側で試掘確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財包蔵地内の3か所で、耕作土(約20cm)下に黄褐色砂質土が厚さ60~80cm堆積し、その下の黒褐色土から縄文土器・石器が出土したことにより、遺物包含層とみて間違いないという所見を得た。県教委はただちに栄村教委、北信建および埋文センターの四者による保護協議を実施。下記により、平成27年度以降、特別養護老人ホーム フランセーズ悠さかえの北側約1,800㎡について、埋文センターが本発掘調査を行うことで合意した。

## 記

- ア 本事業は長野県北部地震による国道117号の代替え道路機能を確保するため不可欠な事業であり、事業の中止による埋蔵文化財包蔵地の現状保存は不可能であること。
- イ 地形・地質調査や道路完成後の利用方法、用地取得の便等を勘案した場合、計画路線が最善の選択であり、路線変更による埋蔵文化財包蔵地の現状保存は不可能であること。
- ウ 建設する道路は恒久的構築物であること。以上により記録保存のための本発掘調査を実施。
- エ 本事業は災害時における代替え道路であり、早期完成のためには効率的かつ迅速な発掘調査が望まれること。
- オ 村教委には本発掘調査を担当できる職員が不在であること。以上により埋文センターが本発掘調査を実施。

## 3 行政手続の経過

調査にかかわる行政手続については次表、北信建と埋文センターとの受委託契約にかかわる手続きについては第1表のとおりである。

第1表 発掘調査にかかわる行政手続

年度	年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2014年度	2014.12.9	26栄教委第38号	村教委	発掘調査終了報告	県教委	確認調査で遺跡範囲および内容を把握
	2014.12.9	26栄教委第36号	村教委	埋蔵物発見届	飯山警	
	2014.12.9	26栄教委第37号	村教委	埋蔵文化財保管証	県教委	
	2014.12.26	26教文第20-92号	県教委	文化財の認定及び県帰属について	村教委	県帰属年月日 2015年6月11日
	2015.1.20	26北建第297号	北信建	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	法第94条第1項
	2015.2.2	26教文第8-292号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	北信建 埋文セ	法第94条第4項 発掘調査を埋文セへ委託するよう通知
2015年度	2015.5.26	27長埋第1-3号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	法第92条第1項 調査面積1,300㎡
	2015.6.16	27教文第6-3号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	法第92条第2項
	2015.11.18	27長埋第4-6号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	調査面積1,300㎡
	2015.11.18	27長埋第2-5号	埋文セ	埋蔵物発見届	飯山警	縄文土器・石器138箱
	2015.11.18	27長埋第3-5号	埋文セ	埋蔵文化財保管証	県教委	
	2015.12.7	27教文第20-77号	県教委	文化財の認定及び県帰属について	村教委	県帰属年月日 2016年6月2日
2016年度	2016.4.15	28長埋第9-1号	埋文セ	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	法第92条第1項 調査面積517㎡
	2016.4.25	28教文第6-1号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文セ	法第92条第2項
	2016.10.7	28長埋第12-3号	埋文セ	発掘調査終了報告	県教委	調査面積517㎡

年度	年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016年度	2016.10.7	28長埋第10-3号	埋文七	埋蔵物発見届	飯山警	縄文土器・石器123箱
	2016.10.7	28長埋第11-3号	埋文七	埋蔵文化財保管証	県教委	
	2016.10.19	28教文第20-72号	県教委	文化財の認定及び県帰属について	埋文七	県帰属年月日 2017年4月12日

第2表 受委託契約にかかわる手続

年度	年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2015年度	2015.7.1	27長埋第110-2号	埋文七	平成27年度受委託契約	北信建	契約額 34,743,600円
	2016.2.5	27長埋第110-4号	埋文七	平成27年度受委託契約変更	北信建	変更契約額 36,072,000円
	2016.3.22	不明	埋文七	平成27年度業務完了届	北信建	精算額 36,072,000円
2016年度	2016.3.29	27北建第32701069号	北信建	平成27年度完了検査結果通知	埋文七	平成27年度事業合格
	2016.6.1	28長埋第33-2号	埋文七	平成28年度受委託契約	北信建	契約額 42,271,000円
	2017.3.16	28長埋第315号	埋文七	平成28年度受委託契約変更	北信建	期間延長 ～平成29年5月31日
	2017.3.23	28長埋第33-7号	埋文七	平成28年度受委託契約 出来高報告書	北信建	出来高 39,560,400円
2017年度	2017.6.30	29長埋第49-4号	埋文七	平成28年度業務完了届	北信建	精算額 44,636,400円
	2017.8.1	29北建第32800474号	北信建	平成28年度完了結果通知書	埋文七	平成28年度事業合格
	2018.6.30	29長埋第67-3号	埋文七	平成29年度受委託契約	北信建	契約額 24,084,000円
	2018.3.22	29長埋第67-7-2号	埋文七	平成29年度受委託契約変更	北信建	期間延長 ～平成30年6月29日
2018年度	2018.3.23	29長埋第67-8号	埋文七	平成29年度受委託契約 出来高報告書	北信建	出来高 22,226,400円
	2018.6.26	30長埋第51-2号	埋文七	平成29年度受委託契約 変更	北信建	期間延長 ～平成30年9月28日 H29繰越額 1,859,600円 H30契約額 2,430,000円
	2018.9.〇	30長埋第〇号	埋文七	平成30年度業務完了届	北信建	精算額 24,084,000円
	2018.〇.〇	30北建第〇号	北信建	平成30年度完了結果通知書	埋文七	平成29年度事業合格予定

#### 4 発掘作業と整理等作業の体制

発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

##### 2015年度 発掘作業（基礎整理作業を含む）

調査担当:	谷 和隆	綿田弘実	太田光春	鈴木時夫	鶴田典昭		
所 長:	会津敏男	調査部長:	平林 彰	担当課長:	町田勝剛		
作業員:	阿部貞幸	池田道保	石井 博	江尻正人	上倉悦子	上倉一晃	坂本清一
	櫻沢ハルヨ	櫻沢裕隆	柴草高雄	関谷道昭	高橋咲江	田尻伸雄	中澤謙吾
	中澤静枝	博多芳明	橋内賢裕	林七三男	原 恵美	藤沢豊治	坂坂真由美
	水井久男	望月悦夫	山本里加	油料光子	渡辺要範		



2016年度 発掘作業（基礎整理作業を含む）、本格整理作業

調査担当： 谷 和隆 綿田弘実  
所 長： 会津敏男 調査部長： 平林 彰 担当課長： 町田勝則  
作 業 員： 伊東宣和 伊藤由美 丑山 弘 江尻正人 大内秀子 上倉悦子 川久保夕美  
小林とも子 小林秀樹 近藤朋子 櫻沢健一 櫻沢ハルヨ 櫻沢裕隆 清水秋子  
清水正夫 杉村悦子 祖山克彦 高橋咲江 中澤謙吾 中澤静枝 中村千恵子  
博多芳明 原 恵美 日向富美子 藤澤和枝 保坂真由美 真藤正二 松倉昌市  
水井久男 望月悦夫 油科光子 渡辺要範 渡辺要範

2017年度 本格整理作業

調査担当： 綿田弘実  
所 長： 会津敏男 調査部長： 平林 彰 担当課長： 川崎 保  
作 業 員： 近藤朋子 相馬麻織 中澤克子

2018年度 報告書刊行

所 長： 会津敏男 調査部長： 平林 彰 担当課長： 櫻井秀雄 課長補佐： 綿田弘実



## 第2節 発掘調査の経過

## 1 発掘作業

## (1) 2015年度

前年度に実施した栄村教委の試掘確認調査で、厚さ約1mの縄文時代以降の遺物包含層が確認されたことを受け、まず、東西に細長い調査区を縦断する幅2mのトレンチを人力で掘削し、遺構の種類や密度を把握した上でトレンチ以外の遺物包含層掘削の方法を決定する。続いて、遺物包含層下面での遺構・遺物の検出状況から、当年度の面的調査範囲1,300㎡について遺構調査を行う。縄文時代以降の遺物包含層を調査後、下位の土層中に旧石器時代の遺構・遺物が存在するかどうかについて、グリッドを設定して確認を行い、存在が確認された場合は改めて調査方法を検討し調査することとした。

第3表 2015年度発掘作業工程表

作業内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
発掘作業	準備												
	基準点設定												
	確認調査												
	表土掘削												
	遺構検出												
	遺構精査												
	記録作成												
	遺物水洗												
	埋戻し												
	後片付け												
基礎整理作業													

## (2) 2016年度

前年度は、調査範囲の東半部で現地表下約1mの深さに多量の縄文時代遺物を含んだ厚さ30～30cmの黒褐色腐食土層を確認できたため、517㎡を対象として、2m四方の小区画単位に人力掘削し、遺物を採取した。また、遺物包含層の調査後、黄褐色土層上面で遺構のプランを検出し、敷石住居跡3軒を含む縄文時代中・後期の堅穴建物跡17軒、土坑170基、配石遺構5か所など多数の遺構が高密度に分布していることが確認できた。

第4表 2016年度発掘作業工程表

作業内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
発掘作業	準備												
	基準点設定												
	確認調査												
	表土掘削												
	遺構検出												
	遺構精査												
	記録作成												
	埋戻し												
	後片付け												
	基礎整理作業												

当年度は西半部について、前年度と同様の状況で遺構・遺物が分布していると予測し、遺物包含層を掘り下げて遺物を採取したのちに、遺構調査を行う手順となる。遺物包含層については、重機で表土を除去したあとに南北方向（等高線に直交する方向）にサブレンチを10m間隔で掘り下げ、厚さや遺構の密度と広がりを目視した上で、2m四方の小区画を基準に人力掘削を行う。遺構調査は、前年度と同様に、測量支援システムによって平面図を作成する。出土遺物は、発掘作業の期間に現場プレハブで行い、乾燥後仮収納して事務所に持ち帰り注記を行う。図面や写真等の記録類については、記載事項の点検後台帳を作成するとともに、それらをもとに遺跡・遺構の調査所見をまとめることとした。

## 2 整理等作業

### (1) 2016年度

当年度は発掘作業（基礎整理作業を含む）に引き続いて本格整理作業を行い、2か年にわたって実施した発掘で検出した遺構・遺物の事実確認を行うこととした。

第5表 2016年度整理等作業工程表

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
整理 作業	写真収納													
	遺構図面修正													
	全体図作成													
	遺物注記													
	遺物選別・接合													
	土器復元													
	所見記録作成													

### (2) 2017年度

前年度に引き続いて事実確認を行った上で、縄文時代中期から後期に営まれた集落の構成と変遷、長野県・新潟県側それぞれの特徴が見られる建物跡や土器・石器等の生活用具の変遷、さらに周辺遺跡との関連などを把握し、信越国境地域における文物の交流をその社会的背景とともに検討する。報告書の作成は必要な表および図面、写真の編集と版組み、原稿の執筆まで行うこととした。

第6表 2017年度整理等作業工程表

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
記録 整理 遺物 整理	遺構図トレス													
	遺構図版組													
	一覧表作成													
	遺構写真編集													
	写真組版													
	原稿作成													
	遺物観察選別													
	接合・復元													
	遺物実測													業者委託（一部所内）
	遺物図トレス													業者委託（一部所内）
遺物図版組														
一覧表作成														
遺物撮影														業者委託
遺物写真版組														
原稿作成														

## (3) 2018年度

報告書は編集、校正を行った上で発刊し、移管に備えて遺物や記録を収納することとした。

第7表 2018年度整理等作業工程表

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
報告書	編集・校正													
	印刷・発送													
	収納													

## 3 普及啓発活動

## (1) 遺跡説明会および発掘体験等

2015.7.15	発掘体験（栄村立栄小学校3年生児童、引率教諭）	15名
2015.7.16	発掘体験（栄村立栄小学校6年生・特別支援学級児童、引率教諭）	12名
2015.8.29	遺跡現地説明会	159名
2015.8.29	発掘体験（遺跡説明会来場者）	30名
2015.10.17	遺跡見学（苗場山麓ジオパークガイド養成受講者）	17名
2016.6.22	発掘体験（栄村立栄小学校5・6年生児童、引率教諭）	22名
2016.8.27	遺跡現地説明会	116名
2016.9.9	発掘体験（栄村立栄中学校1年生生徒）	6名
2018.10.11	整理作業体験（長野市立犀原中学校生徒）	5名

## (2) 展示会および講演会等

2015.11.24～12.2	展示会「長野県北信合同庁舎ロビー展」	北信合同庁舎	不明
2016.2.14～2.9	速報展「掘るしん in しなのい2016」	埋文センター	265名
2016.3.12～6.26	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2016」	長野県立歴史館	11,826名
2016.3.13	学習会「栄村ひんご遺跡」	栄村平滝公民館	不明
2016.7.9～8.21	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2016」	長野県伊那文化会館	1,202名
2016.9.3～10.16	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2016」	長野県立歴史館	2,577名
2016.10.29～11.13	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2016」	長野県立歴史館	1,033名
2017.2.18～2.24	速報展「掘るしん in しなのい2017」	埋文センター	199名
2017.2.18	報告会「栄村ひんご遺跡」	JAグリーンプラザ	110名
2017.2.18	講演会「信越国境の縄文文化」	JAグリーンプラザ	
2017.3.18～6.25	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2017」	長野県立歴史館	12,066名
2017.5.11	講演会「ひんご遺跡の発掘調査」	栄村文化会館	20名
2017.7.29～8.20	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2017」	長野県伊那文化会館	1,146名
2017.8.26～9.24	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2017」	安曇野市豊科郷土博物館	944名
2017.9.30～11.26	巡回企画展「長野県の遺跡発掘2017」	浅間縄文ミュージアム	955名

## (3) 調査情報誌等の発行

2015.10.28	「最新調査から栄村ひんご遺跡」『信州の遺跡』第8号
2016.1.27	「ひんご遺跡 発掘だより」通巻1号
2016.3.18	「発掘調査の概要 ひんご遺跡」『年報』32
2016.8.25	「ひんご遺跡 発掘だより」通巻2号

2016.10.21	「ひんご遺跡 発掘だより」通巻3号
2017.2.23	「最新調査成果から栄村ひんご遺跡」『信州の遺跡』第10号
2017.3.23	「発掘調査の概要 ひんご遺跡」「整理等作業の概要 ひんご遺跡」『年報』33
2018.3.23	「整理等作業の概要 ひんご遺跡」『年報』34

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

## 4 作業日誌抄録

### 2015年度

7月1日	2015年度受委託契約締結 発掘開始、4区の表土剥ぎ開始 プレハブ・トイレ設置工事実施 地元関係機関・区長等へあいさつ	9月3日	2a区から完形に近い注口土器(No.3)が出土
7月2日	仮設電気設備工事(～7月3日)	9月9日	台風17・18号の影響により発掘作業中止
7月6日	2区の表土剥ぎ開始、複数の縄文土器片を検出し、遺物包含層を確認	9月28日	高所作業車で2区の遺構検出状況を撮影
7月7日	発掘機材の搬入 作業員(12名)が入り、発掘調査が本格化 2区で多数の縄文土器片と配石遺構を検出 4区の掘削土のほとんどが客土で、遺構・遺物はないことを確認	9月29日	敷石住居跡(SB1)の敷石の取り上げ
7月8日	作業員開始式	10月1日	作業員2名追加
7月9日	遺構測量支援システムによる測量開始	10月13日	採用作業員8名追加
7月10日	2区包含層上面の遺構検出状況写真撮影後、包含層の掘削	10月15日	堅穴建物跡(SB9・12)掘り下げ、埋土上部に礫と炭が集中
7月13日	4区埋め戻し	10月17日	苗場山麓ジオパークボランティアガイド養成講座受講者および引率者の現地見学
7月14日	2区で敷石住居跡の石を確認	10月26日	国学院大学名誉教授小林達雄氏現地見学
7月15日	4区完了検査(北信建整備課) 栄小学校3年生の発掘体験	10月28日	作業員終了式、2区の埋め戻し開始
7月16日	栄小学校6年生、特別支援学級の発掘体験	10月30日	機材搬出、仮設電気設備撤去、プレハブ(作業員棟)撤去、作業員作業最終日
7月27日	安全対策(ガードフェンス)設置工事	11月5日	粘土採掘坑(SK156)を検出掘り下げ
7月29日	高所作業車で2区の遺構検出状況を撮影	11月13日	プレハブ(調査員棟)・トイレ撤去 2区埋め戻し完了、ガードフェンス撤去 2区を北信建に引き渡し、発掘終了
8月26日	2区の包含層から土偶(No.2)が出土	11月16日	発掘調査終了報告書、埋蔵物発見届、埋蔵物保管証の作成、協行 基礎整理作業開始、発掘機材の整理
8月27日	2区の一部で包含層下面までの掘り下げ終了、複数の堅穴建物跡と土坑を確認	11月24日	北信合同庁舎ロビー展示(～12月2日)
8月29日	現地説明会・発掘体験を実施	11月25日	遺物台帳の作成開始
9月1日	1区で確認トレンチ掘削、3.5m掘り下げても遺物包含層まで達せず、安全勾配が確保できないため面調査は不可能と判断	12月2日	記録図面類の整理、図面・写真・遺構台帳の作成開始
		12月3日	遺構個別図出力作業開始
		12月10日	遺物注記・分類・選別の開始
		12月11日	デジタルカメララインデックス出力、フィルム写真の貼り込み、内容確認、タイトル貼り込み
		12月16日	遺構平・断面図照合・修正開始
		12月17日	遺構所見カードの作成開始
		1月6日	放射性炭素年代測定委託試料引き渡し 成分分析(赤外分光分析)試料引き渡し
		1月8日	年報原稿作成開始
		1月18日	遺物洗浄の再開
		1月27日	発掘だよりの発行
		2月5日	実績報告書作成開始
		2月14日	長野県埋蔵文化財センター出土品に展示
		3月8日	放射性炭素年代測定委託成果品納品 成分分析(赤外分光分析)委託成果品納品
		3月12日	長野県立歴史館巡回企画展に出土資料を展示
		3月13日	平滝公民館ひんご遺跡学習会の実施
		3月18日	基礎整理作業終了、作業員終了式



## 2016年度

6月1日	2016年度受委託契約締結
6月2日	発掘開始、3区重機による表土剥ぎ開始 安全対策（ガードフェンス）設置工事 プレハブ・トイレ設置工事実施
6月6日	遺構測量支援システムで基準杭設置 作業員出勤、発掘開始式、機材搬入
6月8日	西端から包含層の掘り下げ開始
6月10日	調査区中央で土器集中・炭化物集中し、取り上げ 後再度掘り下げて遺構検出
6月20日	土坑 SK177~189 断面実測
6月22日	栄小学校5・6年生発掘体験、栄村森川村長視察
6月27日	土坑 SK176~185 完掘、全景写真撮影
6月29日	炉石と推定される礎検出、敷石住居跡を検出、 SB24を付番
7月1日	調査区西端土坑群から歌管取り上げ。包含層から 火焔型土器出土
7月5日	炭化物集中 SF29・31 付番、遺物№46・47 写真 撮影、実測、取り上げ
7月7日	敷石住居跡 SB24 埋土掘り下げ。土器・炭化物集 中調査、栄村森川村長視察
7月11日	調査区外西壁断面実測、長野県文化振興事業団 市淨理事ら視察
7月14日	建物跡 SB25 をサブトレで確認、土坑群 SK191~ 231 掘り下げ、実測
7月15日	SB25 は建物跡ではなかった。土坑 SK221~246 掘り下げ
7月19日	敷石住居跡 SB24 炉・床下掘り下げ、土器集中 SQ27 掘り下げ
7月20日	土坑 SK253 サブトレ掘り下げ、貯蔵穴か
7月22日	新たに建物跡 SB26 確認、土坑 SK201~265 掘り 下げ
7月27日	敷石住居跡 SB24 実測、栄村公民館島崎主事取材
8月1日	建物跡 SB26 サブトレ掘り下げ、土坑 216~283 掘り下げ、写真撮影 本格整理作業開始、2015年度調査出土土器 138 箱の接合・抽出・分類・集計
8月3日	土坑 SK253 から王冠型土器出土、配石墓 SH13 撮影、土偶出土
8月5日	敷石住居跡 SB24 炉精査・写真撮影、石製ペンダ ント出土
8月8日	建物跡 SB27 検出、配石墓 SH13 半截掘り下げ
8月9日	土坑 SK286~305 掘り下げ、発掘たより作成
8月10日	敷石住居跡 SB24 完掘、人物入り写真撮影、火焔 系・大木系土器出土
8月17日	排水作業、建物跡 SB26・27 掘り下げ
8月19日	建物跡 SB28 サブトレ掘り下げ、土坑 SK228~ 313 掘り下げ
8月24日	建物跡 SB26~28 掘り下げ、発掘現場報道公開 G 社来跡
8月27日	遺跡現地説明会開催
8月31日	敷石住居跡 SB24 床面下掘り下げ、配石墓 SH13 羨坑土器確認
9月1日	調査区西側半分の土坑群完掘状況撮影
9月2日	栄村福原秋山支所長来跡、ドローンによる空撮
9月5日	重機で排土移動、西・東端部を拡幅（～6日）



9月12日	敷石・堅穴住居 SB26~28 埋土掘り下げ
9月16日	SB26~28-30-31 撮影、根固め石ある掘立柱建物 跡 SK220~324 撮影
9月21日	元信州大学教育学部学部長赤羽貞幸氏による地形 環境の指導
9月23日	SB26・28 土器片敷炉精査・実測・取り上げ
9月26日	SB26・27・5・32、SK263~414 実測
9月27日	SB26 炉実測、現場作業終了、埋め戻し開始
9月29日	機材撤出、発掘調査終了式、仮設電気撤去
10月4日	ガードフェンス撤去
10月5日	埋め戻し終了、関係機関挨拶回り、北信建へ終了 状況写真送信
10月6日	北信建に引き渡し、発掘終了 発掘調査終了報告書、埋蔵物発見届、埋蔵物保管 証の作成、基礎整理作業開始、遺物注記開始
10月7日	写真アルバム収納
10月11日	写真点検・台帳入力開始、厚陵中学生職場体験
10月19日	図面台帳作成・入力開始
10月26日	発掘速報 2017 展示候補遺物抽出・接合開始
11月1日	遺物洗浄再開
11月16日	北信建宮崎担当係長来所、29年度予算協議、整 理作業視察
11月24日	土壌試料整理開始、分析鑑定委託準備
11月28日	遺物洗浄中に抽出した炭化物・種実・骨等選別
11月30日	土壌試料水洗選別開始
12月5日	土壌試料から抽出した炭化物・種実・骨等の選 別・台帳作成開始
12月20日	2016年度調査出土土器の接合・抽出・分類・集 計開始
1月5日	分析鑑定資料（土器付着炭化物）採取、発掘現場 実測の出力遺構図修正開始



## 第1章 調査に至る経緯

1月12日	土器復元開始	2月18日	発掘速報展開始、講演会
1月13日	分析鑑定委託（年代測定）打ち合わせと試料搬出	2月21日	栄村森川村長視察
1月18日	年報原稿作成	2月27日	個別遺構図作成開始
1月27日	発掘速報展講演資料作成	2月28日	分析鑑定委託（年代測定）成果納品
1月30日	所内遺跡報告会、栄村教育委員大庭事務局長・島田係長会来所	3月1日	出来高報告書添付資料作成、遺構所見作成
2月1日	石器分類・集計開始	3月14日	「長野県の遺跡発掘2017」の資料展示
2月10日	手掘断面図・平面図の照合開始	3月15日	遺構全体図作成
2月17日	新潟県考古学会長寺崎祐助氏縄文土器分類指導	3月16日	遺物・図面等仮収納、整理終了、作業員終了式
<b>2017年度</b>			
4月3日	整理作業再開、土器接合・抽出、石器実測委託準備	11月1日	脆弱遺物整理作業終了、動物骨・種実・樹種等分析委託準備開始
4月13日	石器実測委託打ち合わせ	11月6日	土器実測委託成果品納品
4月28日	石器実測委託中間検査・校正	11月16日	報告書掲載遺物観察表作成作業開始
5月16日	石器実測委託成果納品	11月21日	石器・石製品・土製品実測委託打合せ、資料搬出第2回報告書編集会議
6月1日	遺構図版組み・トレース、土器復元・補強、実測・拓本開始	12月15日	種実・動物骨同定、胎土分析・漆有機物分析・黒曜石産地推定打合せ、試料搬出
6月27日	2016年度繰越分の実績報告作成	12月19日	樹種同定・年代測定打合せ、試料搬出
6月28日	2016年度繰越分の整理作業終了	12月21日	拓本図作成終了、遺構・遺物図版作成開始、原稿作成開始
6月30日	2017年度受委託契約締結	1月9日	拓本図作成終了、遺構・遺物図版作成開始、原稿作成開始
7月3日	本格整理作業員作業開始、28年度調査出土土器の分類・抽出・集計・収納、遺構図デジタルトレース、土器実測・拓本図作成、土器復元・補強作業開始	1月15日	石器・石製品・土製品実測委託、土器トレース委託成果品納品
7月5日	写真データ遺構別フォルダ作成、長野市三陽中学校職場体験（7月中長野市内5校来所）	1月17日	土器集計表作成作業終了、遺構写真図版作成開始、栄村教委視察
7月6日	2016年度繰越分完了検査受検、実績報告書提出	1月23日	遺物写真真撮影開始（～2月2日）
7月10日	石器分類・抽出・集計・収納作業開始	1月29日	遺物写真真撮影作成開始
7月13日	第1回報告書編集会議	2月13日	遺物写真真撮影委託成果品納品
7月16日	所内展示室へ新資料を展示公開		鈴木徳雄・石坂主介氏縄文土器等整理指導（～14日）
8月21日	土壌試料の水洗選別・炭化物等脆弱遺物分類抽出・台帳作成作業開始	2月16日	報告書掲載遺物観察表作成作業終了
8月30日	土器実測委託打合せ、資料搬出	3月1日	年代測定・樹種同定委託成果品納品
9月6日	土器実測作業終了	3月5日	種実・獣骨同定委託成果品、胎土分析・漆有機物分析・黒曜石産地推定委託成果品納品
9月8日	土器復元・補強作業終了	3月12日	報告書原稿起草
9月12日	遺構計画一覧表作成作業開始	3月16日	本格整理終了、作業員終了式
10月10日	遺構計画一覧表作成作業終了	3月22日	北信建と変更契約締結
10月12日	石器分類・抽出・集計・収納作業終了		
10月26日	遺構・地区別土器集計表作成作業開始		
<b>2018年度</b>			
5月29日	印刷製本等請負契約締結		
6月26日	北信建と変更契約締結		
9月18日	発掘調査報告書刊行		





## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 遺跡の位置

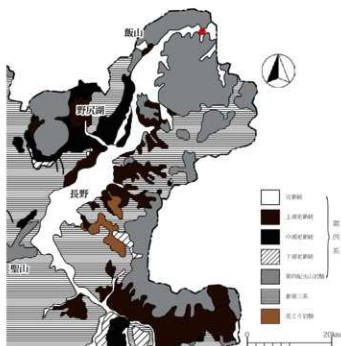
千曲川は、長野県北部の長野盆地や飯山盆地を北流する。飯山盆地は常盤・照岡付近から左岸には比較的平坦な丘陵や段丘が発達し、右岸には野沢山地が迫る。さらに、飯山市と栄村の境付近で、千曲川左岸の緩やかな丘陵や段丘はなくなり、流れもほぼ直角に向きを変え、東へ向かう。栄村に入ると長野県と新潟県の県境にほぼ平行して流れる志久見川と合流する地点まで、左岸の関田山地と右岸の野沢山地に挟まれた溪谷の中を千曲川は流れる（花岡・赤羽 1988、赤羽 1991）。志久見川との合流点より下流は、信濃川（県境より下流の千曲川は、信濃川に変わる）左岸は関田山地の延長が続くが、右岸は風化火山灰層（いわゆるローム層）で形成された信濃川の広く平坦な河岸段丘が発達する（渡辺・稲葉 1988）。

ひんご遺跡を含む栄村は、この長野県北端の飯山盆地と新潟県側のローム層からなる開けた河岸段丘の間の千曲川によって形成された細い溪谷内に立地している（赤羽 1991、第2図）。

また、栄村は長野県（信濃）と新潟県（越後）の地理的な境界部分に位置するという意味だけでなく、日本列島を地質的に東北と西南に分ける大地溝帯（フォッサ・マグナ）の東端に位置しており、日本列島を東西に分断するいくつかの大境界線の一つの上にあるともいえる。

ひんご遺跡は、現在の行政区分からいうと、長野県下水内郡栄村豊栄 2153-1 ほか<sup>1)</sup>に位置し、栄村は長野県の最北端、北と東側は新潟県（上越市、津南町等）、南側は群馬県（中之条町）、西側は飯山市、野沢温泉村、木島平村、山ノ内町と接する県境の村でもある。栄村は、千曲川を挟んで北側の大字豊栄と北信（旧下水内郡水内村）、南側が大字塚（旧下高井郡塚村）にわかれ、豊栄地区は北信地区の上流側（西側）に当るので、栄村の中では、北西部に位置する。

また、現在大字豊栄は、白鳥（西側）と平滝（東側）からなるが、ひんご遺跡は平滝に位置する。なお、地区名としての平滝は、大字としては現在使われていないが、郵便局や駅の名称にとどめている。地域の歴史的名称や変遷については、次節や第10表も参照されたい。

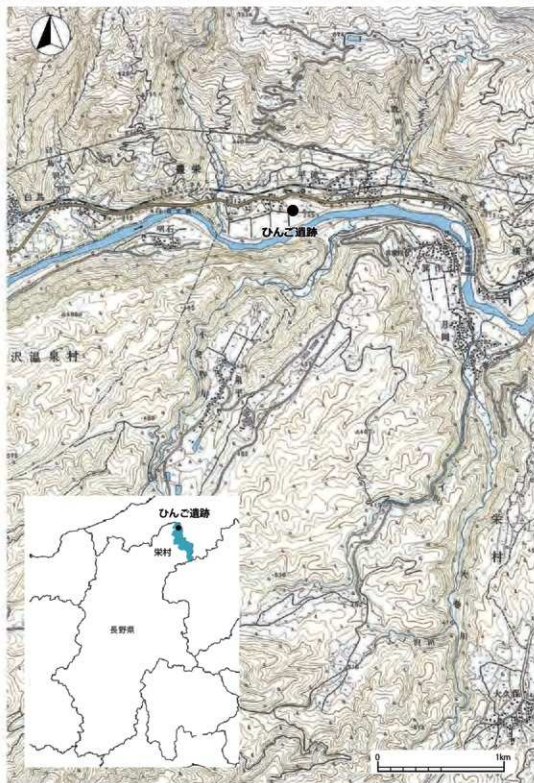


第2図 長野盆地周辺地質略図



## 2 遺跡の範囲

栄村教委作成の遺跡地図によれば、ひんご遺跡は、平滝地区の千曲川左岸、関田山地南麓の舌状に張り出した平坦地上に位置する(第3図)。村教委によって指定された遺跡範囲は、国道117号線と現千曲川の最下位段丘崖に挟まれた間となるが、そのほぼ中央、国道117号線に並行する形で県道箕作飯山線が建設予定地内で、県教委による試掘調査で面的な調査が必要とされた範囲を、今回、埋文センターでは調査した。



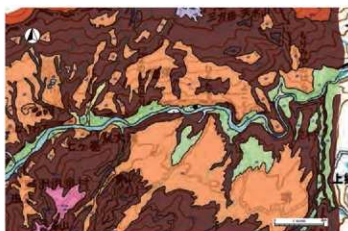
第3図 ひんご遺跡位置図  
(国土地理院平成7年発行1/25,000「信濃森」に加筆)

### 3 遺跡周辺の地形・地質環境

ひんご遺跡は、関田山地南麓の完新世河段丘上の平坦地 (t4) にある (長野県地質図活用普及事業研究会 2015, 第4図)。関田山地は第4紀の火山灰噴出物などの比較的軟らかい地質でも形成されており、とくに遺跡周辺は、地すべり多発地帯としても知られている (久保田ほか 2016, 第5図)。千曲川に対して舌状に突出する平滝周辺の平坦地は、約6,000年前 (縄文時代前期に相当) に津南町羽倉付近で発生した地すべりによる信濃川のせき止め湖 (羽倉～飯山市西大滝 13kmの天然ダム) の細粒堆積物によって形成されたものとされる (久保田ほか 2016, 第6図)。遺跡付近は地すべり多発地帯であり、フォッサマグナの東縁 (柏崎・千葉構造線) 近辺では、中越大地震や東北日本三陸沖地震 (2011年3月11日) に連動し、翌日に発生した長野県北部地震といった、地殻変動を伴うような地震の例も知られており、6,000年前以降にも、地すべりの影響をこうむった可能性もある。

地質学的な1,000年単位のタイムスケールでは極めて不安定にも見えるが、人間が生活する上では、安定していた時期も1,000年単位であったので、せき止め堆積物による平坦地が陸化した段階で、人間が定住したものと思われる。

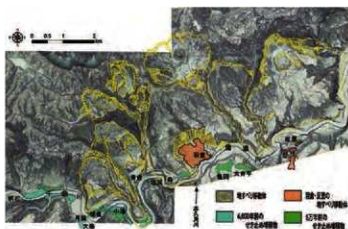
当遺跡では、縄文早期の押型土器が最古の遺物であり、この時期には人間の活動に適した環境が形成されつつあったと考えられる。遺物量から推定して、縄文中期中葉に集落形成が開始され、後期中葉加曾利B1式に廃絶されたものと推定する。縄文後期前半の竪穴建物跡の床面は、いずれも南の千曲川に向かって傾斜している。堆積層も南側ほど層厚が厚いため、縄文時代から傾斜地と推定されるが、洪水による浸食や、せき止め湖決壊時の水力による土壌流出などの影響が重なっていることと推定する。



第4図 遺跡周辺地質図



第5図 遺跡周辺地形区分図



第6図 遺跡周辺の地すべり地形およびせき止め堆積物分布

## 第2節 歴史的環境

### 1 周辺の遺跡

ひんご遺跡は、『信濃史料考古資料編』（1956）には見られないが、『栄村史水内編』（1960）には、両頭の大型の石棒、小形磨製石斧が出土した縄文時代中期の遺跡として紹介されている。『遺跡分布調査報告Ⅰ』（長野県飯山北高等学校OB会 1977）『長野県史考古資料編遺跡地名表』（1981）などにも同書を出典として紹介されているが、学術的な調査は今回が初めてである。

地理的環境で触れたように、長野盆地北端の飯山盆地がすほまる飯山市常郷付近から、千曲川と志久見川が合流する栄村と新潟県津南町との境界付近までの間が、谷地形となる。鎌倉時代に当地を支配した市河氏にちなみ「市川谷」と呼ばれる（一志ほか1979・竹内編1990）。こうした地形及び歴史的背景を念頭に置き、ひんご遺跡の周辺の遺跡を概観した上で、歴史的環境について述べる。



第7図 周辺遺跡位置図

第8表 周辺遺跡一覧その1

番号	遺跡名	主な時代・出土品等	番号	遺跡名	主な時代・出土品等
栄村			38	小坂	旧石器・縄文早期、灰軸陶器
1	ひんご	縄文中・後期	39	村下	縄文前期
2	城坂城	戦国、城館跡	40	天地	平安
3	仙当城	戦国、城館跡	41	長瀬新田	縄文中・後期
4	大峰城	鎌倉～室町、城館跡	42	東部開拓	縄文前期
5	牛ヶ窪城	室町、城館跡	43	天代トド	旧石器・縄文草創期
6	中峰城	室町、城館跡	44	野口A	縄文前期、土師器
7	天代牛子城	室町、城館跡	45	野口B	縄文前期、土師器
8	烏帽子形城	室町、城館跡	46	平太郎	縄文前期・平安
9	今泉城	城館跡	飯山市		
10	志久見館	鎌倉～室町、城館跡	51	西大滝	縄文
11	北の屋敷	室町、城館跡	52	大滝城	安土桃山、城館跡
12	鳥尾沢	縄文前・中期、珠状耳飾	53	下り尾	縄文
13	向原	土師器・扁平片刃石斧	54	馬場1号墳	古墳、円墳
14	古屋敷	縄文前・中期	55	馬場2号墳	古墳、円墳
15	白鳥城	戦国、城館跡	56	東原	縄文
16	久保	縄文	57	雨池	縄文
17	ヤスンバ	縄文前期	58	藤原の堤	縄文
18	村木	旧石器、縄文草創期	59	オリハンザ	旧石器・縄文
19	泉平	縄文早・中期	60	水の沢	旧石器・縄文
20	上の山	縄文早・前期	61	カササギ野池	縄文
21	城の館	縄文	62	休場	縄文
22	横倉	旧石器・縄文中期	63	鳴沢頭	縄文・平安
23	横倉十王堂	縄文中期	64	カツボ池上	平安
24	北信小学校	縄文中・後期	65	長者清水	平安・中世、館跡
25	小滝	縄文早期・土師器	66	温井城	城館跡
26	妹木	縄文早・前期	67	新堤	旧石器・縄文
27	十王峯	縄文早・前期	68	向原	縄文
28	後ノ沢	縄文前期	69	大原	縄文
29	乗落	土師器・灰軸陶器	70	下堤	平安
30	四ツ廻	縄文中期	71	カツボ池上	平安
31	堂原	縄文後期	72	中塚谷地	旧石器・平安
32	千場峯	縄文中期	73	温井	旧石器
33	遠見	縄文前期	74	上境	旧石器
34	楊平	縄文早・前期	75	上境城	戦国、城館跡
35	仙当	旧石器・縄文前期	76	トトノ池(南)	旧石器・縄文・平安
36	御林	縄文前期	77	中外	旧石器・縄文
37	水頭	縄文			

第9表 周辺遺跡一覧その2

番号	遺跡名	主な時代・出土品等	番号	遺跡名	主な時代・出土品等
野沢温泉村			新潟県津南町		
81	麻平	旧石器・縄文・平安	101	羽倉五輪塔群	室町、石塔
82	二座	縄文	102	仲田	古銭出土地
83	池ノ平	縄文	103	八反田	縄文
84	アサビラ	縄文	104	上郷小学校	縄文
85	七ヶ巻	平安	105	しぐね	旧石器・縄文、「すぐね」とも
86	朝上	縄文	106	宮ノ脇	縄文
87	虫生A	縄文	107	宮野原の古碑群	室町、石塔
88	虫生B	縄文	108	宮野原城跡	南北朝、城館跡
89	浦町	縄文	109	北林A	縄文
90	平林A	縄文	110	北林B	縄文
91	平林B	平安	111	北林C	縄文
92	坪山	旧石器・縄文	112	小池木ノ下A	縄文
93	重地原	縄文	113	小池木ノ下B	中世
94	前坂	平安	114	天狗寺	南北朝
95	岡ノ峰	縄文	115	天狗寺東	中世
96	中尾	縄文	116	加用中桑A	旧石器、縄文、中世
97	日影	縄文	117	加用中桑B	縄文
98	上ノ平	旧石器	118	加用中桑C	旧石器
99	狸平	平安	119	加用大面	縄文・中世
100	山崎	平安	120	釜坂	縄文

表の出典 栄村史水内編編集委員会 1960、栄村史界編編集委員会 1964、栄村教育委員会 1995、長野県飯山北高校地歴部OB会 1977、飯山市教育委員会 1997・2003、野沢温泉村教育委員会 2007、津南町内遺跡については、津南町教育委員会提供の遺跡位置図による。

## 2 歴史の変遷

**旧石器時代** ひんご遺跡を含む栄村は、前節の地理的環境でも概観したとおり、千曲川が縦断する飯山盆地と千曲川の downstream である信濃川が形成した広大な河岸段丘が発達する十日町盆地との結節点に当たる谷地形の中に位置している。隣接する信濃川によって形成された河岸段丘上の津南町正面ヶ原D遺跡では、始良丹沢火山灰(約29,000～26,000年前)下から局部磨製石斧などの石器群が出土しており、30,000年前頃には、当地でも人類が活動し始めていた可能性はある。

しかし、確実に当地で人類が活動しはじめたことがわかるのは、始良丹沢火山灰降下以降の時期となる。栄村では、村木遺跡(18、以下数字は第8表の遺跡番号、数字が付与されていないものは周辺遺跡地図外)、横倉遺跡(22:尖頭器)、仙当遺跡(35)、小坂遺跡(38:ナイフ形石器、尖頭器)、天代トド遺跡(43:尖頭器、丸ノミ形石斧)があり、飯山市太子林遺跡(ナイフ形石器、局部磨製石斧)、新堤遺跡(67:ナイフ形石器)、トトノ池(南)遺跡(76:ナイフ形石器)、野沢温泉村麻平遺跡(81:ナイフ形石器)といった旧石器時代の遺跡が存在することから、当地における人類の活動は、約15,000年以前に遡ることは確かである。

**縄文時代** 縄文時代の栄村の遺跡分布は、千曲川左岸に位置する水内地区と、右岸に位置する堺地区を比較すると、堺地区が圧倒的多数である。その理由は、前述のとおり、千曲川が栄村域にかかる、左岸には依然として急峻な関田山地の傾斜面が迫り、狭小な段丘、平地を点々と残す。これに対して、右岸は、

千曲川に面した地帯は同様であるが、一段上の地帯は千曲川が形成した、高原状の段丘面である。この地形面は、三国山脈から流出した小河川が、深い渓谷を刻んでいる。堺地区の遺跡の大部分は、この高原状の台地に分布する（高橋1977）。

縄文時代の古い段階（草創期～早期：約15,000年～7,000年前）の遺跡として、栄村では仙当遺跡（35）、村木遺跡（18）、天代トド遺跡（43）では表裏縄文、押型文、上の山遺跡（20）、城の館遺跡（21）、妹木遺跡（26）、小坂遺跡では押型文、泉平遺跡（19）では条痕文、小滝遺跡（25）や十王峯遺跡（27）では絡条体圧痕文、同様に飯山市でも新堤遺跡やトノ池（南）遺跡で押型文や沈線文が出土しており、この時期には、人類が当地で生活していたことも明らかである。ひんご遺跡でも早期の押型文や絡条体圧痕文土器が出土しており、このことを裏付けている。ただし、飯山盆地（飯山市小佐原遺跡・北竜湖遺跡等）や信濃川河岸段丘上（津南町卯ノ木遺跡等）でも、草創期から早期の遺跡は見つかっているが、堅穴建物跡群は見つかっていない。定住的な集落跡はまだ展開していないと思われる。村木遺跡（18）では、個縁に急角度の加工を施す片刃の無斑品質安山岩製の石器が多数採集されている（望月2018）。

縄文時代前期（約7,000年前）になると、飯山盆地では飯山市有尾遺跡（前期中葉：有尾式期）と大倉崎遺跡（前期後葉：諸磯a～b式期）、野沢温泉村二座遺跡（前期後葉～中期前葉）、信濃川河岸段丘上でも、津南町干溝遺跡（有尾式）、下モ原Ⅱ遺跡（諸磯c式）などで堅穴建物跡が検出されており、当地付近では定住的な集落が展開し、栄村内でも鳥尾沢遺跡（12）、古屋敷遺跡（14）、上の山遺跡（20）等で、前期の土器が出土しているとされるが、詳細は不明であり、当地に定住的な集落があったかどうかはわからない。

中期になると、飯山盆地では、飯山市深沢遺跡（中期前葉～中葉）、宮中遺跡（中期中葉～後葉）で、信濃川河岸段丘上では、道尻手遺跡（中期前葉～後葉）、堂平遺跡（中期中葉～後葉）で堅穴建物跡や地床跡が見つかっている。栄村でも、十王峯遺跡（27）や長瀬新田遺跡（41）では、中期中葉から後期の土器が採集されている（寺内2003・2005ab、望月2018）。詳細は第3章に譲るが、調査以前に、本遺跡では、縄文土器や両頭の大形石棒が採集され、今回の調査でも中期の堅穴建物跡や土坑群が検出されており、遅くともこの時期には定住的な集落が当地にも展開したことがうかがえる。

ただ、後期になると飯山盆地では、東原遺跡や宮中遺跡で配石遺構や石棺墓群が検出されているが、東原遺跡も中期後葉（加曾利E式期）から後期中葉（加曾利B式期）が主体で、津南町でも、遺跡の存続期間が中期中葉から後期中葉にかけては連続するが、後期中葉以降遺構・遺物が少なくなる傾向が指摘されている（津南町教育委員会2011）。これは、ひんご遺跡の傾向とも一致している。

晩期になると、飯山盆地では山ノ神遺跡で晩期前半の集石遺構や魚形線刻画のある土器などが出土しているが、遺跡数は減少する。栄村内でも当該期に限定できる資料は知られていない。

**弥生時代～古墳時代** 飯山盆地には弥生時代中期後葉から後期の遺跡（集落跡：小泉遺跡群、田草川尻遺跡、方形周溝墓群：須多ヶ峰遺跡）古墳時代の集落遺跡（前期：柳町遺跡、上野遺跡、須多ヶ峰遺跡、中期～後期：有尾遺跡、田草川尻遺跡）といった集落遺跡が展開し、勘介山古墳（前方後方墳）や法伝寺2号墳（前方後円墳）をはじめとする古墳も存在するが、市川谷では、その西端に、飯山市馬場1号墳と2号墳（54・55）が存在するだけで様相は不明である。

**奈良時代～平安時代** 当地は「延喜式」「和名類聚抄」（10世紀）に見られる高井郡と水内郡に含まれると考えられる。高井郡に含まれていたとされる「神戸郷」が飯山市域を中心としていたとする説（飯山市誌編纂専門委員会1993）もあり、当地が神戸郷に含まれていた可能性もある。

令制の東山道支道は、多胡（長野市）から沼辺（信濃町）へ通じていたとされ、市川谷を通ってはいないと考えられている。遺跡などの研究成果によるものではないが、令制以前の古道には、栄村白鳥付近から信越国境の深坂峠に通じるルートもあったかとも推定されている。乗落遺跡（29）で1960（昭和35）年の

用水工事の際に、土師器坑と灰釉陶器坑・水甕、八稜鏡や鉄器が出土している。その後の発掘で、カマド状の遺構が検出され、平安時代の堅穴建物跡であった可能性が高い（栄村史編纂委員会1964）。定住集落の存在はわからないが、人間の往来や営みは続いていたことがうかがえる。詳細は不明であるが、栄村天地遺跡（40）、飯山市鳴沢頭遺跡（63）、野沢温泉村藤平遺跡（81）、七ヶ巻遺跡（85）、平林B遺跡（91）で遺物が採集され、平安時代の遺跡とされる。

**鎌倉時代～戦国時代** 鎌倉時代になると、千曲川右岸の現在の栄村志久見から野沢温泉一帯は、志久見と呼ばれたと考えられている。志久見の初出は、1184（寿永3）年の「志久見山」（『市河文書』阿野全成下文）、ついで1192（建久3）年には「榑山」（同將軍家政所下文）、1203（建仁3）年に「志久見郷」（同鎌倉幕府下知状）と見える。1274（文永11）年には、市河盛房の所領となったことが知られ（同將軍家政所下文）、南北朝時代には、市河氏の領土化が進んだとされる。室町時代に市河氏は下水内郡に勢力を伸ばした。永禄年間（1558～70）には、武田信玄に属したが、後に越後の上杉に従った（一志ほか1979）。

千曲川右岸の現在の野沢温泉村付近は「市川」と呼ばれていたが、志久見郷の地頭が市河氏であったこともあり、江戸時代には志久見を含めて、「高井郡之内奥詰り市川谷」と総称された（竹内編1990）。ひんご遺跡が含まれる「平滝」も応永7年（同小笠原長秀安塔状）に地名として見える。

栄村内には中世とされる城館跡（2：城坂城、3：仙当城、4：大峰城、5：牛ヶ窪城、6：中峰城、7：天代牛子城、8：烏帽子形城、9：今泉城、10：志久見館、15：白鳥城）が知られる。天代牛子城や烏帽子形城といった城館跡以外は、いずれも千曲川沿いに存在しており、中世の交通や流通の要路であったことを反映しているであろう。当然、これらに対応するような集落などが存在した可能性がある。今後の解明すべき課題である。

**江戸時代以後** 平滝村は、江戸時代ははじめ飯山藩領であったが、1717（享保2）年から幕府領（中野代官所支配）となった。近代になると1876（明治9）年に豊栄村の一部となり、さらに1879（明治22）年に水内村、1956（昭和31）年には栄村の一部となった（第10表）。また、『栄村地籍図』によれば、調査地点の字名は、2015年度調査区は「ヒンゴ」、2016年度調査区は「馬場」となる。『慶安五年信州水内郡平滝村検地帳』（1652年）などに、「ひんこ」「ひんご」「飛んこ」などの表記で見られ、「田方」「畑方」と記載されていることから、江戸時代にはすでに水田、あるいは畑として利用されていたことがわかっている<sup>1</sup>。

第10表 栄村成立までの変遷

年	～1874	1875	1876	1889	1956～
名 称	白鳥村	豊栄村	水内村	栄村	
	平滝村				
	青倉村				
	森村	北信村			
	箕作村	堀村			
	志久見村				

1 栄村史編纂室専門委員樋口和雄の教示による。

## 引用・参考文献

- 赤羽貞幸 1991 「地形・地質」『飯山市誌自然編』飯山市
- 飯山市教育委員会 1977 「遺跡分布調査報告」
- 飯山市教育委員会 2003 「飯山市遺跡分布図」
- 飯山市誌編纂専門委員会編 1993 「飯山市誌歴史編（上）」飯山市
- 一志茂樹監修 1979 「日本歴史地名大系 長野県の地名」平凡社
- 久保田喜裕ほか 2016 「忘れまい 3.12 - 2011 年長野・新潟県地震 -」長野県北部地震調査団
- 栄村教育委員会 1995 「栄村城館跡・遺跡一覧図」
- 栄村史水内編纂委員会 1960 「栄村史水内編」
- 栄村史塚編纂委員会 1964 「栄村史塚編」
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料考古資料編上」
- 高橋 桂 1977 「考古学上よりみたる栄村 - 遺跡分布からみて -」『高井』39
- 竹内理三編 1990 「角川日本地名大辞典 20 長野県」角川書店
- 津南町教育委員会 2002 「貝坂桐ノ平遺跡群（縄文時代編）」
- 津南町教育委員会 2005 「道尻手遺跡」
- 津南町教育委員会 2011 「堂平遺跡」
- 寺内隆夫 2003 「栄村・長瀬新田遺跡出土の縄文土器 - 石沢巖氏所蔵資料の紹介 -」『長野県考古学会誌』103・104
- 寺内隆夫 2005a 「栄村・長瀬新田遺跡出土の縄文土器（2）」『長野県考古学会誌』106
- 寺内隆夫 2005b 「栄村・長瀬新田遺跡出土の縄文土器（3） - 長瀬新田遺跡台地西側採取土器および十王塚遺跡採取の土器 -」『長野県考古学会誌』109
- 長野県編 1936 「豊栄村」『長野県町村誌北信篇』長野県町村誌刊行会
- 長野県史刊行会 1981 「長野県史考古資料編遺跡地名表」
- 長野県飯山北高等学校地歴部 OB 会 1977 「遺跡分布調査報告」I（飯山市・下水内郡栄村・下高井郡木島平村・下高井郡野沢温泉村）
- 長野県地質図活用普及事業研究会 2015 「長野県デジタル地質図 2015」
- 野沢温泉村史編纂委員会 1974 「野沢温泉村史」
- 野沢温泉村教育委員会 2007 「野沢温泉村埋蔵文化財包蔵地位置図」
- 花岡邦明・赤羽貞幸 1988 「飯山 - 長野盆地」『日本の地質 中部地方 I』共立出版
- 望月静雄 2018 「下水内郡栄村の考古学 - 故平藤達朗氏蒐集資料から -」『高井』202
- 渡辺秀男・稲葉明 1988 「信濃川流域」『日本の地質 中部地方 I』共立出版



慶応五年平滝村検地帳 左：田方、右：畑方

栄村史編纂室提供



## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

#### 1 発掘作業の方法

##### (1) 発掘作業における記録の方法

###### ア 遺跡の名称と記号

本遺跡は、調査地点のほぼ東半分にあたる2015年度調査区が小字「ひんご」、西側の2016年度調査区が小字「大門」に位置する。遺跡の名称は、小字「ひんご」から命名された。前章のとおり、「ひんご」・「飛んご」の地名は、1652年の平滝村検地帳に記載されているが、由来は不明で地元で伝承もない。遺跡記号は、下記のとおりである。遺跡記号は記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字で略表現した記号である。1文字目は当センターが独自に長野県を9分割した地区記号で、中野市は「A」、2文字目および3文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの2文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記にこの遺跡記号を使用している。

遺跡名称：ひんご遺跡（HINGO） 遺跡記号：AHG

###### イ 遺構記号と番号

遺構は、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構記号は、主に平面形状や分布の特徴を指標として検出時に決定するため、想定される遺構の機能・性格が反映しない場合がある。たとえば、SK・SH・SQを付番した遺構にも、跡跡の痕跡と思われるものが含まれている。遺構記号は時代に拘わらず種類ごと、検出時に付けた。遺物・写真を含めて混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。発掘の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。遺構内施設についても同様である。発掘作業および本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

SB：長径2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘込み。[竪穴建物跡、敷石住居跡]

SK：単独もしくは他の掘込みと関係が認められないSBより小さな掘込み。[土坑]

ST：SBより小さな掘込みや礎を一定間隔で方形、長方形、円形に配置するもの。[掘立柱建物跡]

SD：溝状の掘込み。[溝跡、流路跡]

SF：火を焚いた跡や焼土、炭化物が面的に広がるもの。[焼土跡、火床、炭化物集中]

SH：石が面的に集中するもの。[礎群、集石遺構、配石遺構]

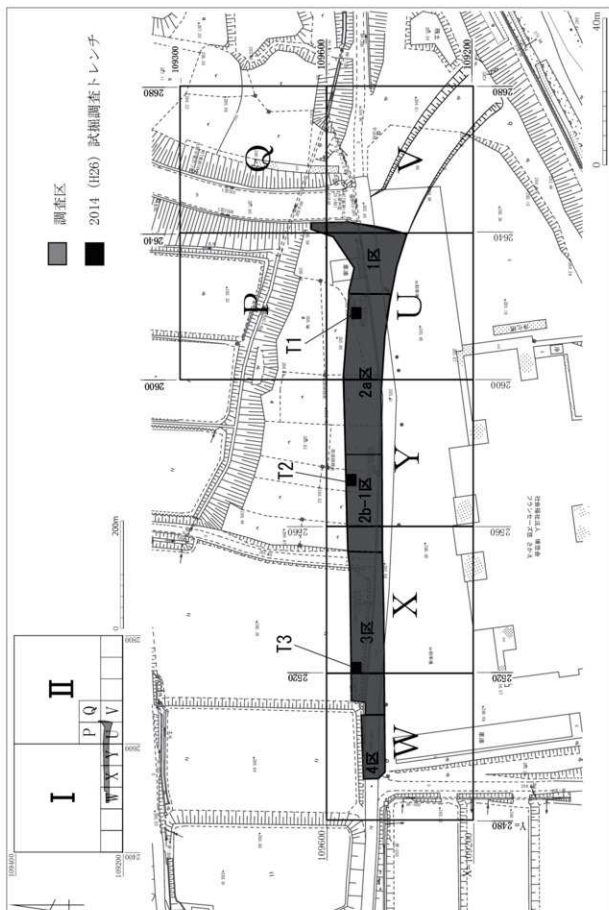
SQ：遺物が面的に集中するもの。[遺物集中、土器集中、廃棄場]

なお、SB内の柱穴にはPitを付した。

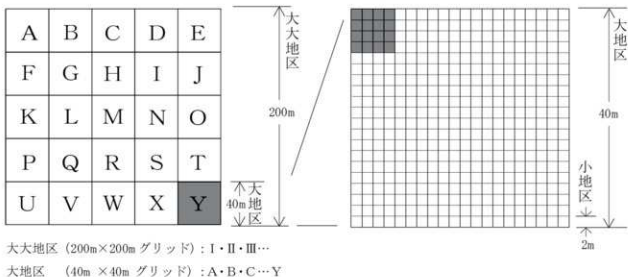
###### ウ 調査区（グリッド）の設定と略称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（東経138°30′0″、北緯36°0′0″）を基準に、200の倍数を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」、「大地区」、「小地区」に区画した。

「大々地区」は200×200mの区画で、北西から南東へ東西方向にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。「大地区」は大々地区を40×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へ東西方向にA



第8図 調査区範囲とグリッド設定図



大グリッドの呼称 IY  
 小グリッドの呼称 IYA01

YA01	YB01	YC01	YD01
YA02	YB02	YC02	YD02
YA03	YB03	YC03	YD03
YA04	YB04	YC04	YD04

小地区 (2m×2m グリッド) : 東西 A・B・C…T  
 南北 01・02・03…20

第9図 グリッドの呼称

～Yのアルファベット記号を与えた。調査区が狭長であるため、大地区を8×8mの25区画に分割した「中地区」は設定しなかった。「小地区」は、大地区を2×2mの400区画に分割したもので、西から東へA～Tのアルファベット、北から南へ1～20のアラビア数字を組み合わせる番号を与えた。

グリッド名の実際の表記においては、小グリッドを「IXE04」のように記した。座標値については、世界測地系によっている。

エ 図面記録

遺構の図面記録は、平面図は測量支援システム「遺構くん」を職員が操作して実測した。グリッド杭の打設もこれによった。水準測量にはレベルを用い、直視または水糸で水平線を設置し、スタッフ、コンベックス等によって測点を計測し、A2判の所定の実測用紙に記録した。遺構平面図はA2判、縮尺1:20で出力し、機械結線の修正を行った。

オ 写真記録

各地区の全景、個別の遺構、土層断面等の撮影は、調査担当者が6×7フィルムカメラを用い、モノクロネガ、カラーポジフィルムで撮影した。6×7カメラは重要な記録写真撮影に用い、通常は35mmフィルムカメラ相当のデジタル一眼レフカメラで撮影した。

(2) 表土掘削と土層確認

いずれの地区も、前年度あるいは当該年度初めに重機でトレンチを掘削し、基本土層・遺物包含層・遺構検出面の確認を行った。遺物包含層の遺物密度が高いため、この上面まで重機掘削によって排土を行っ

た。調査区は千曲川に並行して延長約110 mにおよび、排土後は全体が南に傾斜する地形であった。調査区南側は2.5～3 mの深さとなり、降雨時には全面舗装された駐車場から雨水が流入して調査区が水没した。このため、南側の調査区外周に排水溝を兼ねたトレンチを切って土層観察に利用した。調査区短軸となる南北方向の遺物包含層の土層は、薄い土層が小規模の範囲で頻繁に変化する状況であった。このため、10 m間隔で土層観察用ベルトを残し、遺物包含層上面から深さ5 cmごとに掘り下げ、遺物采取了。土層の記録は『新版標準土色帖』に則って色調・粒度等を記録した。

### (3) 遺構検出と遺構調査の手順

基本的な調査の進め方は、重機で表土を掘削した後、グリッドを設定して、当初は草かきなど大きな道具、次いで遺物出土状況に応じて両刃鎌、移植こて、竹べらなど小さな道具を用い、人力で遺物採取と遺構検出を行った。遺物は、グリッド名と出土した土層名および深さ、遺構に関連する遺物は、帰属遺構名をポリ袋に記して取り上げた。遺構調査の順序は原則として、切合い関係が新しい遺構から古い遺構の順に行った。平面検出時に新旧が分からない場合は、随時サブトレンチを入れて断面観察し、土層堆積状況等を確認して作業を進めた。遺構の切合い状況に応じて十文字方向、あるいは単一方向のトレンチまたはベルト断面で土層観察し、写真撮影、実測図化を行った。その後遺物を残しながら掘り下げ、遺物の出土状況に特徴があるものなどは、付番して出土状況を撮影・実測図化した。遺物取り上げ後に完掘状態の写真撮影・実測図化を行った。竪穴建物跡・敷石住居跡では、完掘後にトレンチあるいは平面的に掘り下げ、床面下(掘方)の状況を確認し、遺構調査を終了した。



## 第2節 基本層序

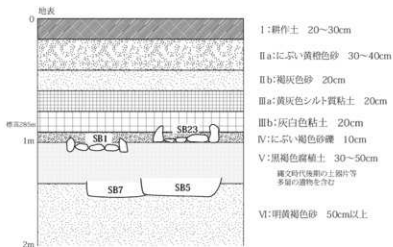
ひんご遺跡は、東流する千曲川左岸の段丘上に位置し、流路方向に形成された東西に長軸を取る微高地上に広がっている。試掘調査の結果、東西約120mに及ぶ調査範囲の東西端は、沢状の低地に隠されていることがわかった。この地区の平地部分の地形は、国道117号を北限に広がる河岸段丘であり、総体的に千曲川本流を最低標高地点として北から南に緩傾斜している。本遺跡が広がる微高地の北側はやや低くなり、北側の山地から流出する水を用水として水田に利用している。調査区中央部の現地表面は標高約286mを測る。遺構検出面は北側では現地表下約1m、南側では2.5m前後に達し、傾斜が強まる。調査区南半から養護老人ホーム用地にかけて、西大滝ダム建設に伴う残土を厚く盛り土されたため、旧地形は明らかではない。南壁では客土の厚さは約1.5mであった。

2015年度に調査した2b-1区の西端の北側壁面を標準として基本土層を示すと、第10図のとおりである。

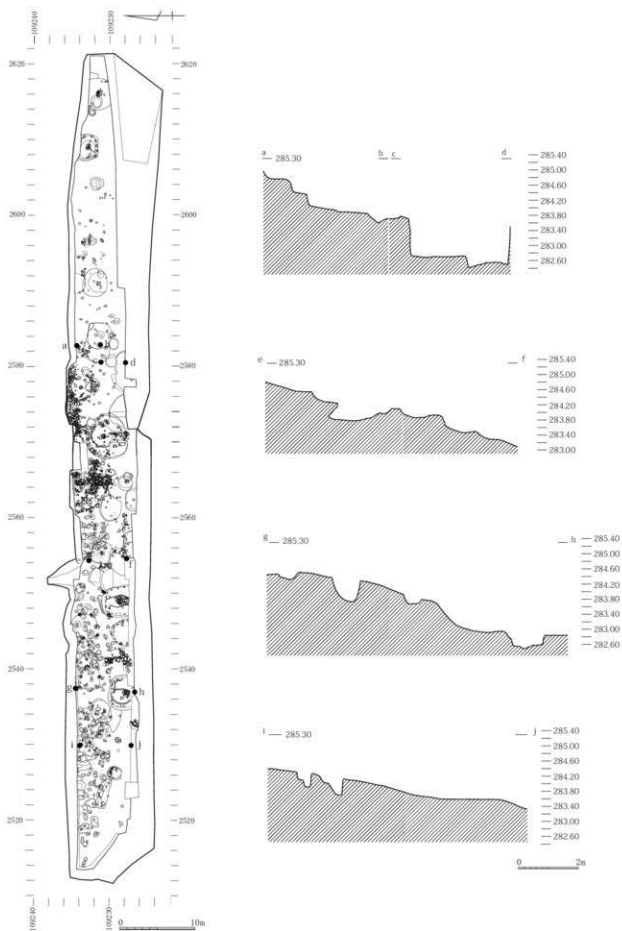
厚いⅡ・Ⅲ層は黄灰色シルト質粘土、あるいは褐灰色の砂が主体の、分厚い堆積層である。下流で地すべりによる天然ダム湖が形成された際に、千曲川から運搬された細粒の堆積物と推定される。遺構・遺物は全く含まれない。Ⅳ層は粒子が粗く鉄分が凝固した礫まじりの砂層である。北側の山地から流出した堆積物と推定される。ここにも遺物は含まれない。Ⅳ層に直接被覆された遺構SB3から、加曽利B1式土器が出土しているため、Ⅳ層堆積層時期の根拠となる。ほかにⅣ層に直接被覆された遺構には、Ⅴ層上面に構築された敷石住居跡SB23、配石遺構SH4などがある。

V層が遺物包含層である。平坦面となり北半部では薄く、斜面の南半部では厚い。黒褐色を基調とするが、炭化物や地山のⅥ層の混在程度によって、暗褐色・黄褐色など、色調が異なる。包含される土器の時期は、上層に縄文後期、下層に中期土器が多い傾向が見られたが、明確には分離できない。縄文中期中葉土器は層が厚い南半部の下層から多出した。層が薄い北半部では混在状態であった。V層に被覆された遺構には、埋没後にV層に被覆され、Ⅵ層上部をわずかに掘り込む敷石住居跡SB1・24（いずれも堀之内2式新段階）、V層下部で検出され、Ⅵ層を掘り込む堅穴建物跡SB5（堀之内2式新段階）、SB26・28（堀之内1式後半）などがある。

地山のⅥ層は、工事に伴うボーリングに立ち会ったところ、砂層と礫層が交互に数m下層まで連続する状況であった。



第10図 2b-1区北壁土層堆積概念図



第11図 調査区全体図および立面図

## 第3節 遺構

### 1 概要

検出された遺構の種類と数は、竪穴建物跡23軒、敷石住居跡7軒、掘立柱建物跡6棟、土坑337基、墓跡1基、配石遺構4基、遺物集中34か所、焼土・炭化物集中31か所である。

以下、前記の順序で個別の遺構説明を行う。竪穴建物跡と敷石住居跡は、遺構範囲の敷石の有無の違いによる呼称である。今回の調査では、遺構全体を検出できたものが限られること、切り合うものが多いことから部分敷石が確認できないこともありうるため、分離せずに記述する。

掘立柱建物跡は、発掘時に確認したものは3棟であった。それらに属す個々の柱穴には、検出時点で土坑の遺構記号SKを付番した。その他の掘立柱建物跡は図面整理時に平面・深さの規模、形状、礎の有無、配列等を勘案して認定したものである。柱穴はいずれもSK番号を付番し、遺物注記も済んでいるため、新たにピット番号に変更することは行わなかった。

土坑については、整理時に掘立柱建物跡の柱穴としたもののほか、発掘時に粘土採掘坑、貯蔵穴と認められた大形のもの、土坑墓の可能性を考えたもの等がある。ほかに炉跡の痕跡と考える例も含めて、土器埋設、石器埋納、巨礫共伴等、土坑の性格をうかがわせる特徴がある事例を抽出して個別に説明した。

土器集中は、掘込みや囲み礫等を伴わず、平面的に土器破片が複数集中して出土した地点の呼称である。数量には多・少の差があり、1個体が復元されたものや、複数個体の破片であったものがある。焼土・炭化物集中は土器破片、石器も混在するが、焼土あるいは炭化物、または両者が顕著に含まれる土層が面的に広がる部分の呼称である。層厚が薄く、広いものでも1つの小グリッド分前後の面積であることから、1回あるいは短時間に行われた廃棄行為の痕跡と推定する。土器集中と焼土・炭化物集中は、平面的な遺構であり土層も薄いため、発掘時には分布範囲を記録した。このため遺構の規模・形状は割付図に図示した。

遺構の帰属時期は、出土土器型式によって表記する。土器分類については遺物の項で記述するが、型式分類を基本に、次のとおり群・類に分類した。時期を限定しない系統、器種、部位、地文等により分類した類・種は省略し、必要に応じて本文中初出時に触れる。「第6群第6類」は、「6(6)類」のように略記する。

第1群 縄文早期 第1類 押型文系土器、第2類 絡条体瓦痕文系土器

第2群 縄文前期 第1類 羽状縄文系土器、第2類 竹管文系土器

第3群 縄文中期前・中葉 第1類 中期前葉土器、第2類 中期中葉土器

第4群 縄文中期後葉 第0類 大木8b式土器、第1類 櫛倉式土器、第2類 加曾利EⅢ式古段階土器、第3類 加曾利EⅢ式新段階土器、第4類 加曾利EⅣ式土器、第5類 沖ノ原Ⅰ式土器、第6類 沖ノ原Ⅱ式土器

第5群 縄文中期～後期前半非意匠文系土器(縄文・摺糸文・条線文地文、無文など)

第6群 縄文後期前半土器 第1類 称名寺式並行期土器、第2類 三十稲場式土器、第3類 南三十稲場Ⅰ式土器、第4類 南三十稲場Ⅱ式土器、第5類 堀之内Ⅰ式並行期土器、第6類 堀之内Ⅱ式並行期土器、第7類 石神類型土器、第8類 加曾利BⅠ式土器

### 2 竪穴建物跡、敷石住居跡

SB1 口絵4、図版5・10、PL2 位置：2b-1区 IYA-D04~06、C07グリッド

**経過:** 表土剥ぎ中、張出部南端の立石が重機に当たり傾いた。付近に複数の礫が見えたので、重機掘削は止めた。立石の頂部はⅢ層下部にあった。これを契機に調査区全体の重機による表土掘削は、Ⅳ層上面までに留めた。Ⅳ層を人力で掘削し、Ⅴ層上面を露出させると、張出部南辺に東西に並ぶ石列を検出した。Ⅴ層上面から約5cm下で敷石が現われ、柄鏡形敷石住居跡であることが判明した。それまではSH1としていたが、SB1に改称した。村教委がこの遺構を移築保存する方針を決めたため、北側は調査区限界まで拡幅し、炉全体まで調査した。敷石面を完掘した後、実測図中の礫に付番し、礫自体にも注記して後日に照合できるよう取り上げながら、主軸断面観察ベルトを残して床下まで調査した。本跡は、根固石があるSK61・81・83・109・172・173の上に構築されている。SB6とは直接の切合いは確認できないが、本跡の敷石がSB6の埋土上層相当層に敷設されているため、本跡が後出である。

**規模・形状:** 主体部の北側3分の1程度は調査区外となった。調査範囲内の主体部長軸は、南北約2.5m、張出部先端まで約5.34m、短軸の東西径は約5.64mを測る。主体部南西の外縁に人頭大礫を円形に配する。この礫から約1.5～2m外側にも、大型礫が巡り、外側の外縁礫南端は張出部先端に接続し、炉とほとんど空間をおかず張出部に連続する敷石がある。張出部は、長さ2.6m、幅1.2mを測り、扁平な円礫または亜円礫をほぼ全面に敷設する。長さ20cm前後の棒状礫の長辺を東西側縁に立て並べ、この間に直径30～40cm大の扁平礫を敷き、隙間には小さな礫を込めている。先端は扁平礫を外側に並べ、中央には厚板状の巨礫を立てている。

**施設:** 長方形石組炉が主体部中央にあり、南北1m、東西60cmを測る。中から深鉢形土器(図版30-1、47-178)が設置された状態で検出された。炉石の内面は煤けているが、焼土は少なく炭化物は外側に多く分布する。敷石面では柱穴は検出されず、敷石下のⅤ層下面からは、直径約20～40cm大のビットが多数検出されたが、本跡の柱穴か否か不明である。二重の外縁礫の間に並ぶSK169・174・96・98・103・102は壁柱穴の可能性はある。

**埋土:** 敷石より上層は、薄く北壁断面以外では記録できなかった。北壁断面ではSB1埋土上部にぶい黄褐色砂層Ⅴ層が流れ込んでおり、浸水した可能性が高い。この浸水により礫上の埋土大半が失われた可能性がある。敷石面下の4層は、部分的ながら掘方と思われる。

**遺物:** 土器は13.33kg、1,157点が出土した。内訳は、6(6)類が1,040g、炉内出土の2個体を含む6(7)類が678g出土したほか、6(10)類注口土器が583gと多い。6(11)類蓋形土器もある。5群では5(2)d種無文土器が4,522g、同a種縄文施文土器が1,975g、5(4)類軽白胎土器が791g出土した。石器は19点出土し、主な器種は石鏃4点、打製石斧1点、磨石4点、凹石3点、削器2点、石錐2点、磨製石斧2点がある。土製品はミニチュア土器4点、土製円板1点がある。

**時期:** 炉内に設置された2点の6(7)類から、堀之内2式新段階の遺構と判断した。

**SB2** 口絵4、図版6・11、PL3 位置: 2b-1区 IYH04・05、I・J04～06グリッド

**経過:** 重機によりⅣ層上面まで掘削後、人力でⅤ層上面を出したところ、丈の高い石を複数検出し、SH5(IYH04付近)、SH6(IYI05南端付近)として調査に着手した。その後Ⅴ層上面から約5cm掘り下げたところ、弧状に並ぶ直径30～40cmの礫と、弧の中心付近に位置する石垣炉を検出し、SH5・6が敷石住居跡の一部と判明したため、これを欠番としSB2を付番した。この時点でSB2北側の壇状配石については本跡の一部と考えていた。その後SB2の北側を調査区限界まで拡幅したところ、炉の北の調査区際立つ石と壇状の配石を検出した。さらに西側へ拡張したところ、SH4としていた配石と連続した。またIYH04グリッド北側で、石棺状を呈する長方形の配石を検出した。この施設は柄鏡形敷石住居の張出部に例があることから、一連の配石は本跡とは別の柄鏡形敷石住居跡(整理時にSB23とした)と認められた。これと重なる部分で、サブトレンチによりSB23の敷石下層に砂のラミナ堆積が見られ、その下層



に本跡の敷石があることがわかった。本跡が洪水等で埋没した後に、堆積土上にS B 23が構築されたこととなる。そのためS B 23の調査を先行し、敷石除去後に下層から本跡の敷石を検出し、完掘写真撮影を行った後、炉と床下の調査を実施した。

**規模・形状：**主軸は南北方向と考えられ、北壁は僅かに調査範囲外となる。主体部は直径約3.75mの円形である。外縁部に直径30~40cmの扁平円礫が巡り、南端付近の配石は2重となり、先端に敷いた1個の直径40cm大扁平円礫を挟んで立石2個が配されている。東側と北側縁辺には、礫が検出できない部分があった。敷石に用いた礫はS B 1と同様に扁平な円礫・亜円礫で、石材は輝石安山岩が大半を占める。明確な柱穴はない。張出部相当の敷石直下にはS K 152が位置するが、検出面が敷石より30cm以上も下位であり、敷石下の掘削時に特別な遺物は出土しなかった。

**施設：**中央に方形石囲炉がある。縁石の内法が約30cmの小ぶりな炉である。

**埋土：**洪水で浸食されたためか掘込みがほとんどないため、埋土は炉から北側にわずかに残っていた。前記のとおり敷石面上には砂のラミナ堆積が含まれる層があり、さらにその上にS B 23の敷石が載る。

**遺物：**土器2,094g、244点が出土した。内訳は、6(6)類88g、6(7)類52g、6(10)類97g、5(2)d種936g、5(2)a種261g、5(4)類106g等が比較的多い。石器は2点と少なく、打製石斧、刮器各1点である。炉内に遺物はなく埋土も乏しいため、確実に本跡伴うと判断できる遺物はない。

**時期：**S B 23より前出であることと少量の土器から、堀之内2式期と判断する。

#### S B 3 図版7・11、P L 3 位置：2 a 区 I Y O・P・Q 05・06グリッド

**経過：**重機によりIV層の褐色砂礫層上面まで掘削した後、人力でIV層の残存部分を除去した直下の黒褐色土上面に、炉石と周辺の石が載っている状態で検出した。直径3m弱のなだらかな凹地中央に石囲炉を検出したことから、堅穴建物跡と認定した。小土坑S K 53~58・69~75が平面的に重なるが、これらの検出面は遺物包含層である黒褐色土層下面であり、本跡床面より30cm以上も下位になるため、本跡に先行する遺構と考える。

**規模・形状：**緩斜面にあるため、南側は壁の立上がりがない。北壁高は58cmを測り、東西の壁高は計測できない。検出時のプランから円形と推定され、南北3.2m・東西3.71mを測る。本来の遺構壁面は洪水等により、浸食され残されていないと推定する。

**施設：**崩れた状態で床面に炉石が露出していた。柱穴は確認できなかった。

**埋土：**浸食により埋土は残っていない。検出面から床面を確認するため、炉を中心にトレンチを設定して床下掘削を試みたが、床面は確認できなかった。

**遺物：**土器2,285g、197点が出土した。東側壁面近くで、略完形の6(8)類の深鉢形土器(図版45-139)が潰れた状態で出土し、本跡に確実に伴う遺物と考える。これについては、放射性炭素年代測定を実施した。ほかに6(6)類104g、5(2)d種732g、5(2)a種235g、5(4)類96g等が比較的多い。ほかに土製円板1点がある。石器は、磨石・凹石各1点である。

**時期：**床面出土の略完形土器139から、加曾利B 1式期と判断する。

#### S B 4 図版5・11、P L 3 位置：2 b-1区 I Y B・C 07・08グリッド

**経過：**重機によりIV層を掘削し精査したところ、V層遺物包含層の上面に直径約2mの半円形の落込みと、その中心に集石を検出した。当初落込みと集石の関係が不明であったため、集石をS H 7、落込みをS B 4と付番した。その後、集石の土層を截り割ったところ、中央部で炭化物和焼土を確認したため、集石をS B 4の炉石と判断した。S K 51土坑が本跡の東壁を切る。本跡検出面より約30~60cm下層から掘り込まれたS B 15を本跡調査後に検出した。柄鏡形敷石住居跡S B 1の張出部南端と本跡北壁との距離は約

50cmしかない。本跡はV層最上面で検出されたが、SB1はV層最上面より約10cm下位で検出しているため、本跡が後出の可能性はある。

**規模・形状**：南側は壁の立上りがなく、他の壁線からプランは南北1.9m、東西1.97mの円形となる。壁の立上りは緩く、床面は千曲川に向かって傾斜している。

**施設**：中央に炉石が露出した状態で残存している。

**埋土**：埋土は残っていない。床面を確認するため、検出面から炉を中心にトレンチを設定して床下の掘削を試みたが、床面は確認できなかった。浸食により本来の壁・床は残されていないと推定する。

**遺物**：土器は、96g、15点と極めて少量の出土である。6(4)・6(7)・(10)類各数g、5(2)d種49g、5(4)類29g等である。石器は出土しなかった。

**時期**：少量の土器から、堀之内2式期と推定する。

#### SB5 図版5・12、PL4 位置：2b-1区 IXR・S05-07グリッド

**経過**：調査区の境界に位置し、2か年にわたる調査となった。V層下にあり、遺物包含層として埋土の一部まで掘り下げた。床面上に炭が露出した状態から北・西壁を確認し、円形の黒褐色土のプランとなることから竈穴建物跡と判断した。南側は遺物包含層の掘下げによって床面下まで掘削されていたのでプランは不明である。西側の調査区西壁部分と、本跡北壁部分に残っていた埋土に断面観察ベルトを設定し、実測・撮影後埋土を掘り下げた。途中、床面上の炭の分布状況を平面図に記録し、試料採取後に炭を剥ぎとり、床面まで調査した。西壁面の観察から、本跡が南側に位置するSB7の埋土上部を切ることが分かった。西壁付近の幅約30cmの部分は2016年度調査区の東端で検出した。この部分には石囲炉の残骸と思われるSH14、北壁には配石遺構SH2が接している。

**規模・形状**：南側は、範囲が不明だが、形状は円形で、現存長は、南北2.94m、東西3.04mを測る。深さは北壁で24cmを測る。

**施設**：床面は、南側にやや傾斜している。北壁から東壁に沿う直径15～20cm前後の小ピットが壁柱穴である。2016年度調査区の西壁付近では、検出面から深さ約10cmで貼床と考えられる硬化面を確認した。炉は中央にあり、6(6)類に属する小形の鉢形土器(図版30-4)が埋設されていた。緑石はない。

**埋土**：床面直上に炭層が広がっており、建築部材の可能性はある。床面下の掘り方からも板状の炭が出土している。炭層の上層に1～3層が自然堆積している。

**遺物**：土器は、3,678g、255点が出土した。埋土中から破片がやや多く出土し、炉内埋設土器と床面出土土器(図版30-3)はほぼ完形である。土器は、6(6)類978g、5(2)d種922g、同a種504g、5(4)類149g等が比較的多い。石器は、石鎌2点、削器1点である。ほかに石棒1点がある。

**時期**：炉内埋設土器から、堀之内2式新段階と判断する。

#### SB6 図版5・12、PL3 位置：2b-1区 IXT06・07、IYA・B06・07グリッド

**経過**：V層を掘り下げたところ、半円形の北壁が残る黒褐色土の落込みを検出した。南側は斜面下側でプランが確認できなかった。東西・南北トレンチを入れて床面を確認し、実測・撮影後埋土を掘り下げた。SQ9は埋土より上層にあるため、切合いはないと考える。SK94・95は本跡の北壁に接するのて切り合う可能性が高いが、新田は不明である。

**規模・形状**：現存長は、南北2.94m、東西3.48mを測り、南側は不明であるが、円形プランと推定する。北壁高は0.5mである。

**施設**：柱穴・炉跡は確認されなかった。

**埋土**：検出できた埋土は炭を多く含む黒褐色シルト1層の単層である。

**遺物**：土器は、10,741g、759点が出土した。6(6)類2,416g、5(2)d種4,278gが断然多い。石

器は、石鏃・削器各1点である。石製品は、軽石製品・石棒各1点である。

時期：図版30-6、および類例がない同5は正確な時期を比定しにくい、図版47-199-202は堀之内2式古段階が多く、本跡の帰属時期を当該時期と判断する。

**SB7** 図版5・12、PL3 位置：2b-1区 IXQ・R06・07グリッド

経過：V層下であり、遺物包含層として埋土の一部まで掘り下げた。先に確認されたSB5の南側床面上でプランを確認できた。南から東側はすでに掘り下げられていたためプラン不明であり、西側は調査区西端に当たり2016年度の調査となった。SB5に北壁を切られ、南側のSB10を切っている。東壁に接して分布する遺物集中SQ1・4は、本跡より後出と推定する。2016年度に調査したSH15は、本跡北壁上部にあり後出である。

規模・形状：部分的に検出したためプランは、不明瞭である。確認された現存長は南北2.52m、東西3.63mを測る。深さは北壁で14cmを測る。

施設：柱穴・炉跡は確認されなかった。

埋土：検出できた埋土は、黒褐色シルト4層の単層である。床面下の5・6層は掘方である。

遺物：土器は、328g、24点が出土した。有文土器では6(6)類202gがあり、図版30-7は堀之内2式中段階の個体である。非意匠土器では、5(2)d種76g、5(4)類40gがある。石器は出土しなかった。

時期：図版30-7は、堀之内2式中段階である。本跡を切るSB5が埋設土器は、同式新段階である。本跡を切るSB10は、堀之内1式期であり、3軒はSB10・SB7・SB5の順序となる。SQ1・4からは、堀之内2式期土器が出土しており本跡と近い時期であるが、遺物による新旧関係は明確にはできない。

**SB8** 図版5・15、PL4 位置：2b-1区 IXS・T05・06グリッド

経過：V層下であり、遺物包含層として掘り下げた。一部は床下まで下げてしまったが、平坦な床面が露出した状態の西側では、炭の分布範囲と隣接して土器底部を埋設した焼土跡SF2が確認でき、炉跡と考えた。埋土の残存部分に東西・南北の土層観察ベルトを残して断面図を記録した。東側は、床下まで掘り下げたためプランは不明である。床面が残存した範囲を平面図に記録した。SF2を中心にプランを推定するとSB5と切り合うことになるが、埋土が残っていないため、新旧関係は不明である。下層のSK群は、すべてSB8が切っている。

規模・形状：不明である。

施設：当初、SF2とした骨片を含む赤褐色シルトの中央に、深鉢形土器の底部(図版30-8)が埋設されていた。緑石は確認されず、現状では浅い掘込みがある土器埋設炉である。

埋土：残存していた埋土は、炭を含む黒褐色・暗褐色シルト1~3層である。炉の北側床面には炭を多量に含む暗褐色シルト5層が堆積していた。

遺物：土器は、950g、82点が出土した。有文土器では、6(6)類278g、非意匠土器では、5(2)a種146g、同d種194gが断然多い。石器は出土しなかった。

時期：炉埋設の図版30-8は、堀之内2式中段階頃に比定されるため、本跡の帰属時期と考える。

**SB9** 図版13・14、口絵3、PL5 位置：2b-1区 IYE・F・G05~08グリッド

経過：IYG05グリッドを先行して掘り下げた際、V層最上より約70cmの深さで遺構の立上がりとプランの一部を検出し、その規模から竪穴建物跡の一部と判断した。その後、IYD・E・F・G列を掘り下げたところ、直径約6mの円形プランの一部を確認した。先に確認した竪穴建物跡の想定プランとつながったため、1棟の竪穴建物跡と判断した。平面では南側のプランが不明瞭であり、正確な範囲を確認できなかったため、明確な北側のプランから推定し、十字トレンチを設定した(東西：a-b、南北：c-

d)。遺構検出面から約30cm掘削したところ、東西トレンチ中央で直径2mの落込みを確認し、土層観察からSB9を切る堅穴建物跡であることが判明し、SB12として登録した。また、埋土掘削時にSK112・113に切られ、SK166を切ることを確認した。このほか、東壁際に4(6)類土器(図版37-68)が出土した土坑SK111があり、南東部はSB17と切り合う。

**規模・形状**：円形プランと考える。西側は硬化した床面が残っているが、ここ以外では検出されていない。北西側以外は上端、下端を捉えるのは非常に難しかった。南側は侵食およびSB12張出部により完全に壊されている。現存長は、南北5.49m、東西5.94m、深さ0.35mを測る。

**施設**：中央部をSB12が掘り込むため、炉は残存しない。ピットは図版中に40基記録されているが、本跡の壁柱穴と考えられるものは、ピット13・17～19・22・34・38である。ほとんどが径約25～45cm、深さ約20～40cm前後の規模である。

**埋土**：地山直上に硬化面(床面)があり、床面直上には黒色シルト21層が薄く堆積することを東西断面で確認した。硬化面がない東部は地山の直上に黒色シルトが薄く堆積する。南北断面では、SB9の埋土はほとんど確認できず、SB12が掘り込まれた際に失われたものとする。

**遺物**：特記される遺物として、石棒(図版73-145)が床面直上の黒色シルト層上部から出土した。土器は、31,596g、1,828点と多量に出土した。有文土器では、4(6)類1,112g、4(4)類679g、6(6)類1,129g、6(4)類869g等、中期末葉土器(図版30-12・13等)と後期前葉土器(図版30-9～11等)が混在している。6(1)類も507gと比較的多い。非意匠土器では、5(2)d種12,299g、同a種5,915gが多い。石器は17点出土し、石鏃1点、打製石斧2点、磨石・凹石各1点、刮器5点、石錐3点、磨製石斧4点である。石製品は軽石製品7点、石棒1点である。

**時期**：埋設土器等がなく、前記のとおり遺物の内容から明確に時期を確定できない。堀之内2式期中段階のSB12に切られることおよび遺構の形状から、縄文後期初頭から堀之内2式期前半までの時期に帰属すると考える。

#### SB10 図版5・15、PL4 位置：2b-1区 1XR・S07・08グリッド

**経過**：当初は、窪地状の地点と考えていたので、SB7の調査後、西壁トレンチを南に延長して下層の状況を確認したところ、平坦な硬化面を検出した。やや黒味が強くみえる部分を堅穴建物跡のプランとした。調査区の南壁にも東西方向のトレンチを入れて範囲を確認し、断面記録、撮影後に埋土を掘り下げた。西壁断面でSB7に切られ、南壁断面で本跡下層にあるSB13の埋土上部を切っている状況を把握した。

**規模・形状**：南側は、調査区外、西側は2016年度の調査区となり、全体像が不明である。現存長は、南北1.33m、東西2.11mである。北から東側の壁線から、形状は円形と考える。深さ約0.36mを測る。

**施設**：柱穴・炉等はみつからなかった。

**埋土**：黒褐色シルト1層の単層で自然堆積と考える。部分的な黄褐色砂層2層は掘り方の可能性がある。

**遺物**：土器は、5,338g、316点が出土した。有文土器では、6(3)類1,074g、6(2)類833g、非意匠土器では、5(2)d種1,840g、同a種833gが断然多い。石器は打製石斧1点である。

**時期**：実測個体(図版30-14)を含む6(3)類の多さから、堀之内1式新段階頃が本跡の帰属時期となる。

#### SB12 図版6・13・14、口絵3、PL6 位置：2b-1区 IYE・G05～07、F05～08グリッド

**経過**：SB9のプラン検出の際、南辺のプランが不明瞭であったため、明瞭である北辺から推定しSB9の中心を通る十字トレンチ(東西a-b、南北c-d)を設定し、幅約40～50cmの掘削を行った。約30cm掘り下げたところ、東西断面の中央部で東西幅約2mの落込みを確認し、土層観察からSB9を切る堅穴建物跡と認定した。南北断面ではSB12南辺の立上りを確認することができず、これが確認できた

3 辺からプランを推定して埋土を掘削した。その結果、南側に張出部を持つ柄鏡形住居跡と確認できた。埋土掘削時にSK 113 を切ることを確認した。本跡は深く掘り込まれており、道路建設の影響を直接受けないと判断したため、床下の調査はサブトレンチのみに留め、完掘状態でピット2・3および炉跡に土嚢を詰めて養生し、人力で床面から30~40cm程度の高さまで砂で埋め、その後重機により上端まで砂で埋めるという保存措置を講じた。

**規模・形状：**主体部が東西3.18mの円形、主軸長5.46mを測る柄鏡形敷石住居跡である。深さは、90cmと非常に深い。張出部の床面は、接続部より2m程で地山上面とつながり、立上りは確認できず、埋没過程で原形を失ったものと判断した。

**施設：**壁面に沿って並ぶピット5・7~10は壁柱穴である。ピット5はやや大きい、その他は直径約10cm、深さ20cm未満である。主体部と張出部の接続部に対ピット2・3がある。奥壁に沿って長さ15~30cm前後の礫が並び、他の壁際ではまばらである。主体部中央に石囲炉があり、奥壁側は礫を平らに置き、他3辺は礫を立てて埋設する。炉内には、6(6)類の深鉢形土器2個体(図版31-21・24)、6(10)類の注口土器2個体(図版31-25・26)が埋設されていた。

**埋土：**3・7・9層は、炭化物を50%近く含み、少量の焼土も確認できたが、焚火の場とは言い切れない。掘り方および床下施設を確認するため、炉の中心を通る十字トレンチを設定して掘削した結果、2面の床面を確認した。また、掘方は確認できなかった。炉石の脇から旧床面に埋まるように、石棒(図版73-149)が出土した。

**遺物：**土器は、堅穴建物跡から最多量の50,718g、2,630点が出土した。有文土器では、6(6)類9,877gと6(4)類1,815gが断然多い。同時期の6(10)類1,813gの多さが注目される。非意匠土器では、5(2)d種20,696gが、同a種3,945gを大きく引き離している。石器は9点出土し、石鏃1点、打製石斧2点、凹石・石皿各1点、削器・磨製石斧各2点である。石製品には、軽石製品3点、石棒1点、土製品には土偶1点がある。

**時期：**4点の炉内埋設土器と同時期の多量の土器から、堀之内2式期中段階前半に帰属する。

**SB 12-B** 図版6・13・25、PL 5 位置：2b-1区 IYE・F・G 05~07グリッド

**経過：**SB 12を検出する前にV層上面で検出された遺構に、SF1、SH8、SD1がある。

SF1はIYF 05にあり、平面的にはSB 12の石囲炉東側に位置する。V層最上面より約5~10cm下位で、焼土および炭化物が集中する約80cmの円形部分を確認した。周囲に炉石と思われる石組等はなく、独立した焼土跡と判断し、SF1を付した。平面図に記録したが、焼土・炭層は薄く、断面記録は困難であった。SB 12の埋没過程で行われた焚火跡か、窪みに投棄された炭等と考えた。

SH8は、SB 12の張出部南端に位置する。V層上面を約10cm掘り下げて集石を検出し、SB 12埋土2層から検出したことになる。当初は敷石住居跡の一部と推定し、周囲のグリッドを精査したがプランは確認できず、単独のSHとして調査した。南北に載り割ったが掘り方等は確認できなかった。北辺の一部はSD1に載っている。板状礫が重なり、周囲に扁平円礫がある。SB 12埋土2層~3層で確認された礫集中範囲と隣接し、層位も同じであるため、埋土礫集中の一部と考えた。

SD1は、重機によりIV層まで掘削後、V層を精査したところ溝状に落ち込む箇所を確認したため、溝跡としてSD1を付した。SB 12埋土1・2層で検出した。IV層と区別できずに掘り下げたため、断面図の記録はない。SD1の南辺にSH8の一部が載る。自然流路か没食されて原形をとどめない遺構と推定する。

SB 12の項で記したように、埋没過程で炭および礫の投棄があったと考えられることから、以上のとおりSF1、SH8は投棄された際に形成されたもの、またV層最上面で検出されたSD1は、SB 12

張出部に重なるが、形状はいびつで、掘り込み等も確認できず自然流路と判断した。これらはそれぞれ別個の遺構として図化・撮影記録され、本報告では個別図・割付図として掲載した。

**規模・形状**：整理作業時に、SH8を含むSB12埋土2・3層にある礫集中全体を、南側から撮影した写真が目された（PL5）。最も手前のSH8は礫を密接して敷き詰めた張出部、やや奥側、主体部との接点付近に壑石状の礫、さらに奥のSF1辺りに小形の緑石を配した石囲炉が位置する。主体部は、炉辺に敷石が見られ、周辺はまばらになる状況である。平面図化された礫は、SH8のみであるが、写真には縦・横の中央に南北・東西トレンチが見え、断面図と比較すると、それらがSB12埋没後最上面にほぼ水平に配置する状況を観察した。したがって、これらの礫集中を柄杓形敷石住居跡と判断した。SD1は張出部の埋土と推定する。断面図の最上面に堆積する炭化物層の、2層北端からSH8の南端は5.3mの規模である。これにSB12-Bを付番した。

**遺物・時期**：調査の経緯から、本跡に伴う遺物は特定できない。整理時にSB12確認以前の所在グリッド取上げ遺物を点検し、図示した。特筆すべき遺物として、SH8南端の巨礫北側に近接して、V層上面からアスファルト塊（PL49）が出土した。採取した時点では、SB12埋没過程でくぼみに投棄された粘土塊と考えていたが、分析の結果アスファルトと判明した。6（4）類土器の数cm大の破片を多数含み、時期が明確な大形のアスファルト塊は極めて重要である。同時に、共伴遺物が特定できない本跡の帰属時代の根拠となる。

**SB13** 図版5・15、PL6 位置：2b-1区 IXR・S07・08、T08グリッド

**経過**：上層にあるSB10の床面下調査のために掘削したトレンチで床面を検出したが、プランは不明確であった。SB10調査後に、南壁断面で東西の範囲を確認した。断面記録・撮影後、埋土を掘下げた。埋土上部をSB10に切られている。

**規模・形状**：南側の大半は調査区外、西側は2016年度の調査区となる。現存長は、南北1.26m、東西3.57mである。北から東側の壁線から、形状は隅丸方形または円形と考える。垂直な東壁は、深さ0.63mを測る。**施設**：炉は見つからなかった。北壁下で柱穴1基が検出された。

**埋土**：7層が床面に堆積後、炭化物層の5層が中央部の窪みに投棄され、黄褐色砂層ブロックを含む4層を人為的に埋めたものと推定する。この段階で土器も捨てられたと思われる、4・5層の周辺から多く出土している。その後、3層が自然堆積したと考える。

**遺物**：土器は、10,208g、474点が出土した。有文土器では、6（3）類1,688g、6（6）類476g、非意匠土器では、5（2）d種4,415g、同a種1,009gが断然多い。石器は5点出土し、石鏃1点、打製石斧・削器各2点である。

**時期**：6（3）類の多さから、堀之内1式新段階頃が本跡の帰属時期と考える。本跡上層のSB10とは、遺物からは大きな時期差は見出せない。

**SB14** 図版8・9・16、PL7 位置：2a区 IIUD・E・F05・06グリッド

**経過**：IV層を重機で除去し、1層の黒褐色シルトの落込みを確認した。南北ベルトを残して掘り下げたところ、埋土は浅く、床面と炉石を検出した。南北断面に合わせて、炉断面から床下調査に至るトレンチを設定し、炉の精査後床下の調査を行った。この段階で、床下から本跡より古い土坑SK67を検出した。

**規模・形状**：北側は調査区外となり、床面はほぼ平坦である。現存長は、南北2.48m、東西3.57mを測る。プランは隅丸方形と推定する。検出面からの掘込みは最深で約40cmである。

**施設**：南東隅に柱穴と考えるピット1基を検出した。炉は中軸上にあり、長さ約40cmの楕円形で、やや崩れた緑石7個が浅い掘込みを囲む。少量の炭・焼土と黄褐色砂のブロックを含む黒褐色シルトが堆積していた。

埋土：3分層される。床直の壁際に褐色シルト3層が堆積し、炉周囲の中軸部分床直には炭化物層が広がる。この上に黒褐色シルト1層が堆積する。床面の状況は、やや硬い程度である。掘方は浅く、黒褐色砂4層、黄褐色シルト5層、その下部に黒褐色砂6層が堆積している。

遺物：土器は、2,898 g、289点が出土した。有文土器では、6(6)類333 g、6(7)類・6(8)類各121 g、非意匠土器では、5(4)類715 g、5(2) d種674 gが多い。石器は、打製石斧4点、削器2点である。ほかに土製甲板1点がある。

時期：第6群の縄文後期土器が主体を占め、本跡の帰属時期を堀之内2式後半から加曽利B1式期と考える。

#### SB 15 図版5・16、PL7 位置：2b-1区 IYA・B・C 08グリッド

経過：本跡北側にあるSB6上層の遺物包含層を掘り下げていたところ、当初SK41とした大きな土坑のプランを検出した。半載して確認したところ、床面が平坦であったので残り部分も掘り下げ、規模・形状から竪穴建物跡であることが判明した。西半部で床面を確認し、図面記録・撮影後に、埋土全体を掘り下げた。SB4の南西壁と本跡の北東隅は接している。

規模・形状：南側約半分が調査区外である。北半分の壁線から、プランは円形または隅丸方形と推定でき、東西3.15 m、現存長は、南北1.52 m、深さ約0.48 mである。東側のプランは確認できなかった。

施設：西側に柱穴と考えるピットが2基検出された。炉は中軸上にあり、長さ約40cmの楕円形、浅い掘込みである。少量の炭・焼土と黄褐色砂のブロックを含む黒褐色シルトが堆積し、緑石はなかった。

埋土：炭を含む黒褐色シルト1層の単層である。ブロックは顕著でなく、自然堆積層と考える。遺物は床面上にはなく、埋土中からやや多く出土した。

遺物：土器は、4,353 g、201点が出土した。有文土器では、4(4)類242 g、4(7)類169 g、非意匠土器では、5(2) a種1,881 g、同d種609 gが多い。石器は、打製石斧2点、削器1点である。

時期：第4群の縄文中期末葉土器が、第6群の縄文後期土器をはるかに上回ることから、本跡の帰属時期を加曽利EIV式期と考える。

#### SB 16 図版7・17、PL7 位置：2a区 IYK 05・06、L・M 05~07グリッド

経過：遺物包含層のV層を上面から約30~40cm下まで、移植こてなどで掘り下げた。その下部約30~50cmは、スコップで地山層VI層まで掘削した。その間、4(1)類土器片が多出した。炭・焼土も多く含まれ、明らかに通常の遺物包含層と異なる状況であったため、遺構掘込み面はV層中にあると考えた。VI層上面で東側半分の円形プランが明確にみえ、竪穴建物跡と認定したが、西半部分は不明瞭であった。特に南西部は地山が見えず、不明瞭なままプランを想定して調査を進めた。

遺構西側のプランが不確定のまま、南北a-b、東西c-dの断面線を設定し、ベルト両側をトレンチで掘り下げ床面を確認した。調査期間の都合上、ベルトを境に北西区、北東区、南西区、南東区に4分割し、埋土一括として遺物を採取しながら掘り下げた。北西区および南西区の床面上に炭層が広がることを確認し、範囲を記録した。ベルト除去後、炭層を削がしながら床面を露出し、ピット検出前の全体写真を撮影した。さらに床面を5cm程度削ってピットを検出し、完掘状況を写真撮影した。この際に北壁面から西側に弧状の段差を検出し、2軒重複の可能性を認めた。基礎整理時に炭層範囲を確認したところ、東側から円形プランの竪穴建物跡が切り(SB16-E)、西側は、床面が三日月形に残存する(SB16-W)ため、重複と確定した。

本跡に平面的に重なってSF4・5、SQ5・6・7が分布するが、いずれもかなり上層で検出されている。これらは、SB16の埋没過程の最終段階で、地表に残った凹地に投棄された遺物や炭・焼土であり、後出の遺構である。

**規模・形状**：後出のSB16-Eは、プランが南北3.36m、東西3.55mの円形である。SB16-Wは、現存長南北3.51m、東西3.18mを測り、プランは円形と推定する。いずれの建物跡も深さ約30cm、斜面下方の南壁プランは、不明瞭で、炉は確認できなかった。SB16-Wの床面に灰白色の粘土が貼られていたと考える。

**施設**：SB16-Eの床面からピット1・4・14・16・17・18、壁に接してピット11・12・13・15・20を検出した。SB16-Wでは床面からピット2・8・10・21を検出した。規模・形状から以下の2種に分類できる。

A 柱穴状のピット：1・2・8・10・13・14・16・17・20・21

B 規模が大きく深いピット：11・12・15・18

ピット18は、SB16-Eの炉痕跡の可能性が高い。ピット11・12・13は、建物範囲の境界が明確にならなかったため、新旧は不明であるが、切り合う土坑の可能性が高い。ピット15も同様に切り合う可能性がある。

**埋土**：SB16-E・Wとも床面に近いレベルで検出されたため、確認できた埋土は薄い。SB16-Eは1層黒褐色シルトの単層で、SB16-Wより若干床面レベルが低い。SB16-Wの埋土は、SB16-Eと近似し、識別は難しい。SB16-Wは、床面には4層灰白色粘土を貼り、この上に2層炭層が分布する。2層には焼骨片が多く含まれる。

**遺物**：SB16-E・Wの2軒合計で、土器は16,227g、540点が出土し、分離できない。有文土器では、4(7)類3,253g、4(1)2,614g、4(6)類1,604g、4(3)類1,376gが多い。非意匠土器では、5(2)a種1,714gが最多数である。ほかにミニチュア土器10点、土製円板1点がある。石器は16点出土し、打製石斧7点、磨石・凹石各1点、削器4点、磨製石斧2点である。石製品には軽石製品4点がある。ほかに、16(W)の炭層中から、焼けた人骨片がまとまって検出された。長野県内では最古級の焼人骨として注目される。

**時期**：縄文中期後葉の4(1)類(図版32-27~29等)と、末葉の4(3)・(6)・(7)類(図版32-30~34等)の土器は、2時期にまとまる。5(2)a種は、いずれの時期にも伴う。遺構の新旧関係から、SB16-Wが枡倉式期、SB16-Eが沖ノ原Ⅱ式期と考える。ただし、枡倉式期には壁に沿ってベッド状遺構があり、長大なコ字形や長方形石組炉を備えた堅穴建物跡が一般的であるため、それらの施設が削平された可能性がある。

**SB17** 図版6・17、PL7 位置：2b-1区 IYF08、G・H06~08・I0グリッド

**経過**：V層下面で検出した。調査区南端の深い壁際に位置し、掘り下げると崩落する危険があったため、トレンチの掘削と平面形の確認で調査を終えた。円形プランの南側半分弱が調査区にかかっていると思われる。最も北側に張り出し、弧の頂点を通るIYF06グリッド東辺約2mを断面線とし、その西側に幅約60cmのトレンチを設定し、床面まで掘削した。床面までの深さは、検出面から約30cm。本跡北西壁とSB9南東壁が平面的に接する位置関係にあるが、調査段階では、切り合うか否か明確にはならなかった。**規模・形状**：検出面の平面規模は、南壁に接する現存長は、南北2.28m、東西4.60mを測る。ここから推定すると、直径5m前後の円形となる。しかし、北側の弧状の壁線がややいびつであり、断面図の北壁から約80cm南側で別の立上りが確認できた。これを壁面とした場合、建物跡の平面形はより正円形に近くなる。調査範囲がわずかなため、2軒重複と判断ができないが、可能性はある。

**埋土**：暗褐色または黒褐色のシルト1~5層が水平方向の層状をなして堆積するため、V層遺物包含層が自然に流れ込んで堆積したものとする。前記のとおり、北側に堆積する6~10層は、不整合の堆積層であり、建物跡2軒が存在する可能性がある。



**遺物：**土器は、3,716 g、182点が出土した。有文土器では、4(6)類135 g、4(5)類85 g、4(4)類135 g、非意匠土器では、5(2)a種1298 g、同d種954 gが多い。石器は、打製石斧・削器・磨製石斧各1点である。ほかに土製門板2点、軽石製品2点、石棒1点がある。

**時期：**第4群の縄文中期末葉土器が圧倒的に多く、第6群の縄文後期土器は少量であるため、本跡の帰属時期を縄文中期末と考える。

**SB 20** 図版7・8・16、PL7 位置：2a区 IIUD・E・F 05・06 グリッド

**経過：**SB 14を検出した後、南北断面観察ベルトに沿って掘方を先行トレンチで掘り下げたところ、硬い床面を確認したため、ベルトを残して面的調査を行った結果、焼土・炭化物の広がり、土器、炉と思われる石組を検出した。北壁断面で本遺構の立上りを確認し、SK 67として登録したが、後に竪穴建物跡と判明し、SB 20に変更した。

**規模・形状：**北側は調査区外となる。地山の床面は水平で堅く締まり、壁は外傾して立ち上がる。現存長は、南北2.70 m、東西3.36 mを測る。プランは隅丸方形である。検出面からの掘込みは、最深で約40 cmを測る。

**施設：**壁面に等間隔に掘り込まれたピット1～5が柱穴である。炉は中軸上の南に片寄った位置にある。プランは径約60 cmの円形であり、底面が平坦な掘込みに板状礫2枚と土器破片を平らに敷き、隙間に炭化物・焼土・灰層が堆積していた。

**埋土：**砂質の埋土で3分層される。床直の壁際に灰黄褐色9層が堆積し、床面ほぼ全面に同質暗色の8層、上層に薄く褐灰色7層が堆積する。

**遺物：**土器は、7,498 g、168点が出土した。有文土器では、6(6)類のみが1580 g、非意匠土器では、5(2)d種5,695 gがほぼすべてを占める。石器は石鎌・打製石斧各1点、土製門板2点がある。

**時期：**復元された有文土器1個体(図版33-35)と大形無文土器2個体(図版33-36・37)が、ほぼ全出土土器であり、本跡の帰属時期を堀之内2式古段階と考える。

**SB 21** 図版9・18、PL8 位置：2a区 IIUH 05～07、I・J 06 グリッド

**経過：**調査区東端に位置し、面的調査が可能な幅は南北約2～3 mであった。2014年度の試掘溝が、調査区北壁に沿って掘削されている。IV層下で検出した。浸水等によって埋土は薄く、炉周辺の床のみ残存する遺構として、当初SH 12と命名したが、トレンチ掘削により東西断面を確認し、南北断面調査を交えながら面的調査を行ったところ、竪穴建物跡であることが判明したため、SB 21と変更した。土坑SK 42・68に切られる。

**規模・形状：**北壁・南壁は調査区外となる。現存長は、南北2.94 m、東西4.20 mを測る。プランは円形と推定する。床面は黒褐色土で、比較的硬く締まっている。ほとんど壁の立上りはなく、検出面からの掘込みは最深で27 cmを測る。

**施設：**東壁付近に柱穴と考えられるピット2・3がある。炉は中央にあり、掘方が浅い方形石囲炉である。東・西側は二重に礫を埋める。内部には土器底部を埋設しているが、ボロボロの状態であった。炉底の一部に焼土が残っていた。

**埋土：**炉の埋土は黒褐色シルトである。SK 68西側の床面下の3層は深さ約12 cmの掘方埋土と考えられ、黒味が強い黒褐色シルトである。

**遺物：**土器は、3,418 g、229点が出土した。有文土器では、6(7)類376 g、6(6)類が222 g、非意匠土器では、5(2)d種1,912 g、5(4)類500 gが多い。石器は出土しなかった。

**時期：**出土土器から、本跡の帰属時期を堀之内2式新段階と考える。

**SB 22** 図版8・18、PL8 位置：2a区 IYT 05・06 グリッド

経過：重機によりⅣ層上面まで掘削した後に、人力で約5～15cm厚のⅣ層を除去した。Ⅳ層直下の黒褐色土上面に、炉石および建物縁辺部の礫と推定される石が載っている状態で検出した。SB3のように、Ⅴ層上面が凹むことはなく平坦であったため、SH11と命名して調査を開始した。検出面に床のような硬化面はなく、遺物が集中する場所は認められなかった。a-bの西側、c-dの南側に幅約30cmのトレンチを設定し、約20cm掘り下げた。しかし、土層の変化はなく床面や掘方を把握することはできなかった。その後、炉を断面a-b方向で載ち割り、炉石内側に薄い炭化物層を確認したことから、炉と確定した。調査終了後にSB22と改称した。

SK50が平面的に重なるが、SB22はSK50を被覆する堆積層の上にあり、明確に新しい。炉を中心として本跡のプランを推定すると、IY505・06にある巨礫3～4個の集中部分3か所が本跡の西壁相当部分となる。これらの礫は円礫であり、配置に規則性がないことから、敷石住居跡の構築材とはみなせず、本跡と関連しないものとする。本跡の炉石から約2.1～3.3m南東にあるSQ2・8も関連は見出だせない。

規模・形状：壁面・床面は洪水等により浸食され、残されていない。

施設：重い炉石および炉石内側の炭層のみが流されずに残ったと考える。やや崩れているが、緑石4個で囲み、内法約20cmの小形である。

埋土：浸食により埋土は残されていない。炉内の炭化物層1層のみである。

遺物：土器は、1.181g、113点が出土した。有文土器では、6(9)類156g、6(6)類50g、非意匠土器では、5(2)d種293g、5(3)b種206gが多い。石器は6点出土し、石鎌1点、打製石斧3点、凹石・削器各1点である。ほかに軽石製品1点がある。

時期：確実に伴う土器はないが、出土土器全体の傾向から本跡の帰属時期を堀之内2式期と考える。

**SB23** 図版6・19、口絵4 PL9 位置：2b-1区 IYE・F・G・H04・05、I・J・K  
04グリッド

経過：重機によりⅣ層上面まで掘削後、人力で掘削しⅤ層上面を露出させたところ、丈の高い礫を複数検出し、SH5(IYH04付近)、SH6(IYI05南端付近)として調査に着手した。掘り下げの進捗により、弧状の列石とその中心付近で石囲炉を検出したため、SH5・6を欠番とし敷石住居跡SB2を付番した。この時点でIYH・I・J04グリッドの調査区北壁際に並ぶ壇状配石については、SB2の一部と考えていた。その後、SB2の北側を調査区限界まで拡張したところ、配石は西側に広がり、SH4と呼称していた配石と連続した。またYH04グリッド北半で、石棺状を呈する長方形の石囲施設を検出した。この施設は、柄鏡形敷石住居跡の張出部に作る事例があるため、一連の配石はSB2とは別の柄鏡形敷石住居跡(整理段階でSB23とした)に伴う、張出部に接続する列石であると考えた。SB2の炉から北側にサブトレンチを掘削したところ、SB23の列石下層にSB2の敷石があることが明らかになった。したがって、SB23はSB2の埋没後に構築され、洪水堆積層のⅣ層に直接被覆された、検出遺構の中で最も新しい時期の遺構の一つと判断した。

規模・形状：主軸は南北方向と考えられ、石囲施設の部分で現存長1.98m、南北の配石幅9.30mを測る。配石に用いた礫は、径約20～50cmの扁平な円礫が多いが、棒状の礫や拳大の礫も混じる。敷設の方法に規則性は指摘できないが、長方形石囲施設の南側では円礫を平らに置き、西側のIYG04グリッド、東端のIYJ04グリッドでは棒状礫の長軸を東西にそろえた置き方も見られる。この配石は調査区外の平坦面から、IYG・H・I・J・K05杭付近に当る、傾斜変換点の等高線に沿ってほぼ水平に並び、石囲施設付近では崩落しかけた状況となっている。

施設：張出部の先端は、東西に延びる配石よりわずかに張り出すようである。石囲施設は内法で東西140

cm、南北25cmの規模で、大形礫に小形礫を沿わせて埋設し、内部に拳大礫が散在する。石囲内にもIV層が堆積しているから、周囲より窪んだ状況であったと推定する。

埋土：敷石上に堆積層はなく、直接IV層が被覆している。

遺物：土器は、2,327 g、173点が出土した。有文土器では、6(5)類220 gが断然多く、4(5)類145 gが次ぐ。非意匠土器では、5(2) a種584 g、5(2) d種482 gが多い。石器には、石鎌・打製石斧・砥石各1点、削器2点がある。ほかにミニチュア土器1点がある。確実に本跡伴うと判断できる遺物はない。

時期：本遺構に伴う遺物は認められないものの、SB2より後出であることと、IV層に直接覆われたSB3出土の復元個体土器の時期から、加曾利B1式に帰属すると推定する。

#### SB 24 図版4・19、PL 10 位置：3区 I X K・L 06~08 グリッド

経過：遺物包含層のV層上面から約5cm掘り下げたところで、敷石および炬石を検出して敷石住居跡と判断した。炬を中心に東西(a-b)および南北(c-d)断面観察ベルトを設定し、サブトレンチとして幅約10cmを掘り下げた。炬以南の掘り下げは、敷石部分では石の上面までとした。炬より北のサブトレンチで地山層を確認したが、床面は不明瞭であった。敷石部分以外に明瞭な床面は確認できず、敷石の深さから床面レベルを想定し、記録した。壁の立上がりも明瞭な部分はなかった。敷石住居跡と確定する以前のV層掘り下げ段階で、炭化物集中S Q 14・15、付番土器4点を検出した。これらは、SB24の想定床面より高い位置にあるため、SB24より新しいものと考えられる。トレンチで切合いを確認したわけではないが、SB27・28は層位的にSB24より下位となる。

規模・形状：炬の中央から南端敷石端部の立石までの距離が、約2.85 mを測る。敷石のある南部以外は形状が把握できなかった。敷石は炬周囲と南側の張出部に敷設されている。炬周囲では、北側に大形礫2枚を平らに置き、東側に棒状礫の長軸を縦にそろえて埋設する。張出部に向かって、長径40~50cmの平石4枚の長軸を東西にそろえて1列に並べ、炬のすぐ南側は礫が見られない。張出部の左右は一回り小さな平石を東西にも並べている。炬周囲、張出部とも大形礫の隙間に小さな礫を充填している。張出部の中央南端には立石が1個ある。

施設：炬は敷石と同程度の大きさの石を立てて埋設した方形石組炬である。縁石の内法が約30cmの小ぶりな炬で、床面から約25cm掘り下げている。中央に鉢形土器(図版33-39)の下半部を埋設し、炬壁および土器の周囲に赤褐色の焼土がある。この堅穴建物跡に伴うと判断できる柱穴は検出できなかった。

埋土：本跡は水の浸食を受けているようで、壁および床が不明瞭である。埋土があるはずの部分も、周囲の遺物包含層と識別できない状況にある。おそらく、洪水等で壁・床まで浸食を受け、重量のある炬石や敷石のみが残ったものと考えられる。

遺物：土器は、17,271 g、1,822点が出土した。有文土器では、6(6)類3,385 g、6(7)類572 g、非意匠土器では、5(2) d種6,213 g、5(4)類1,780 g等が多い。石器は、21点出土し、打製石斧1点、磨石5点、凹石8点、敲石2点、石皿1点、削器2点、磨製石斧2点である。敷石の一部には脚付石皿の破片が用いられ、3点が接合した(図版70-116)。ほかに軽石製品3点、ミニチュア土器と土製円板各1点がある。

時期：炬埋設土器が、唯一この住居跡に確実に伴い、堀之内2式期後半に帰属すると考える。

#### SB 26 図版4・20、口絵2、PL 11 位置：3区 I X N・O・P 06~08 グリッド

経過：I X O 06・07グリッド付近のV層上面から約40cm掘り下げ、地山VI層のにぶい黄褐色砂質シルト塊が帯状に混在する層を確認した。これまでの経験から、住居壁際の堆積土である可能性が高いと考え、SB26と呼称した。検出当初は、東西断面線(a-b)が調査区南壁前の作業用通路最下部にあり、こ

の断面線を先行して調査した。さらに南北断面線（c-d）を設定し、断面観察用ベルトを設定した。c-dベルトの両側およびa-b断面の北面にサブトレンチを設け先行掘削したところ、明確な貼床が現れた。またc-dベルトの南端付近で炉を確認した。サブトレンチ以外は、1～3層に分層して遺物を取上げながら、ベルトを残して掘削した。

床面上で炭層分布範囲を確認し、記録しながら掘下げ、床面を露出した。作業用通路を付け替える必要があったため、断面線a-b以北の調査を先行した。壁柱穴ビット1～12を検出し、断面記録後、a-b以北のベルトを除去した。通路付け替え後、ベルトc-dの延長部分を残して、北側同様に分層して掘り下げたところ、炉南側に敷石が現れ、敷石住居跡であることが判明した。断面記録後ベルトを除去し、炉、壁柱穴ビット13～15、床面の小溝の調査を進め、完掘とした。本跡の南側は地表から深く、崩落の危険があり全体を発掘していない。本跡の北東隅壁線に礫が入り込むSQ 18からは4（2）類が出土し、本跡埋没後に崩れたものであろう。プラン内に位置するSQ 16からは6（6）類が出土し、本跡埋没後埋土上部に形成された遺構である。

**規模・形状：**現存長は、南北3.60m、東西4.13mの隅丸方形である。北壁の高さは約60cmを測るが、明確な壁がなく、なだらかに立ち上がる。北壁の上には斜面上部からの浸水を防ぐためか、南北2.4mほどの壁外溝が沿うが、東西端は浸食により失われていた。壁の浸食は東側で著しく、貼床が途切れた外圍は、だらだらと地山が立ち上がっていく状態であった。西側の残りはよかったが、壁は緩く立ち上がり、浸食の影響が見られる。

**施設：**炉は、中軸線上にあり、東西に棒状礫を配し、南側は、平置き敷石を利用した石囲炉である。北側には、緑石はない。掘方は、南北約75cm、東西約65cmを測る。床面から27cm掘下げ、鉢形土器の下半部を埋置し、炉壁際に複数個体の土器破片を貼り付けており、壁は赤化している。埋土上半部は、黄褐色砂質シルト6層、下半部は炭化物層7・10層、焼土層8・11層、灰層9層が互層をなしていた。炉の東西から南側に敷石がある。長径30～40cmの扁平円礫を敷き詰め、隙間に拳大礫を詰めている。特殊磨石（図版68-104）も含まれていた。奥壁から炉・敷石の東西に、南北方向の小溝2条がある。幅・深さとも約10cm、炉の部分で広がり、2条間の最大幅は、約1.6mとなる。

**埋土：**1層は一般的なV層と同じ黒褐色砂質シルト、2層は壁外溝、3層は壁際に見られる三角堆積層で、近似した砂質シルトである。炉北側から奥壁の床上には、炭を多く含む4層が薄く堆積する。壁付近では床上に黒褐色シルト5層が薄く堆積する。

**遺物：**土器は多量で47,502g、2,753点と、堅穴建物・敷石住居跡では2番目の出土量である。有文土器では、6（3）類7,238g、6（5）類6,826gが断然多い。非意匠土器では、5（2）d種13,255g、同a種9,513g等が多い。石器は37点出土した。主要な器種は、石鏃7点、打製石斧5点、磨石6点、凹石5点、台石1点、磨製石斧2点である。ほかに土製円板3点、軽石製品1点がある。

**時期：**炉内に埋設された土器は複数あり（図版34・35-42・44・47・51）、住居の使用時期を示すものと考えられる。2層および床面直上で取上げた遺物は、住居廃絶時期に近いものである。いずれも堀之内1式期、南三十稲場1式期である。複数個体の土器の特徴から、堀之内1式中段階を本跡の帰属時期と考える。

#### S B 27 図版4・22、P L 13 位置：3区 I X L・M・N 07・08 グリッド

**経過：**I X M 07 グリッドをV層上面から約40cm～50cm掘下げ中、調査区南辺で切られる直径3.5m弱の半円形の落込みが見えた。半円形プランの内側に、灰黄褐色砂質シルトのブロックを含む埋土の壁柱穴が巡ることを確認し、堅穴住居跡とした。検出後、半円形の中央部に南北断面線（a-b）を設定し、断面観察用ベルトを残して先行トレンチの掘り下げを開始した。サブトレンチの掘削で、本跡中央部付近には、黄褐色の砂質シルトがわずかに混じるやや硬い層があり、貼床と判断した。貼床は部分的であったため、

サブトレンチを貼床面から20cm程度深く掘削し、貼床面が床面であることを確認した。遺物集中S Q 27・32が、V層上面付近にあり平面的に重なるが、2つの遺物集中はS B 27埋土の上に載った状態なので、いずれもS B 27より後出と判断する。

**規模・形状：**円形プランの堅穴建物跡の北側半分程度を検出した。現存長は、南北2.28 m、東西3.57 mを測る。壁面が明確に立ち上がる部分がなく、どこも緩やかに立ち上がること、および貼床面が中央付近のみで壁面寄りの部分では確認できないことから、かなり浸食を受けて本来の形状を留めていないものと考えられる。

**施設：**壁柱穴となるピット16個を検出した。北壁のピット5・6、東壁のピット12・13は、本跡に伴わない可能性がある。跡跡は、検出できなかったが、南側の調査範囲外に存在する可能性がある。

**埋土：**にぶい黄褐色砂質シルトが混じる2層が貼床土と考える。1層は、建物跡全体の埋土の残存部であろう。2層以下は、地山ではないが、モヤモヤと地山に移行する漸移的な層となる。

**遺物：**土器は、11,769 g、888点が出土した。有文土器では、6(3)類872 g、6(6)類721 g、6(2)類473 gが多い。非意匠土器では、5(2) d種3,866 g、同a種2,775 g等が多い。石器は、9点出土し、主要な器種は、石鎌5点、凹石1点、削器3点である。ほかに石製垂飾、土製円板、ミニチュア土器各1点がある。

**時期：**付番取上げた土器(図版35-53)は、床面(3層)直上出土で、住居跡に伴うものである。称名寺式後半から堀之内1式前半頃に現れる土器である。他の土器からも、本跡は堀之内1式前半期に帰属すると考える。

#### S B 28 図版3・21、口絵2、P L 12 位置：3区 I X H・I・J 06~08グリッド

**経過：**I X I列南部の遺物包含層の厚さを探るため、I X I 07~08グリッドの西辺から約50cm幅で南北にトレンチを設定し、掘り下げたところ、石囲炉の西半部分と北壁の立上がり、および硬い床面を検出し、堅穴建物跡と認定した。検出後、前記した南北トレンチの東壁に南北断面線(a-b)、直交する東西断面線(c-d)を設定し、a-b東側・c-d北側に土層観察ベルトを残し、サブトレンチで掘削した。南側は、地表面から深いため崩落の恐れがあり、調査できなかった。

北壁および東壁の立上がりは、明瞭に見えたが、西壁は、はっきりしなかった。原因はS B 31と切り合うためと推定するが、本跡検出時にS B 31は調査終了しており、新旧を確認することはできなかった。ほかに、c-d断面西端近くの床下から西壁外にかけて、3(2)類土器が多く出土しており、本跡が切る遺構が存在していた可能性もある。平面的に重なるS F 20~26・29~31・35・36は、S B 28埋土の上に載っており、S B 28埋没過程で残されたものと判断できる。

**規模・形状：**現存長は、南北約3.54 m、東西4.62 mを測り、プランは隅丸方形である。壁高は北壁で81 cmと深く、南側ほど高さを減ずる。壁の傾斜はS B 26同様に、浸食のためか、なだらかに立上がり、上部ほど壁線が漸移的となる。壁際から直径20cm前後、深さ10~25cmの壁柱穴を17個検出した。床面は硬い貼床となっており、明瞭であった。

**施設：**中央部には内法が、南北54cm、東西45cmの方形石囲炉があり、床面から約35cmの深さである。内側には複数個体の土器破片が、炭を多量に含む土層を挟んで三重に敷かれ、底面から約10cm上に土器底部を埋置する。炉底から埋置土器までは、炭層13層、土器の外側には橙色の灰層12層が堆積し、同レベルの壁面は地山が赤化した14層となる。下層の土器底部の内部には、炭を多量に含む黒色砂質シルト11層、中層の土器片を挟んで上部に同質の10層、さらに上層の土器片を挟んで床面埋土と同質の9層が堆積している。床面にはS B 26と同様の小溝がある。壁から約40cm内側を巡り、北壁中央と東壁では途切れる。北壁の中央付近から一部が分岐して炉縁石の北東部に接する。

埋土：本跡内に堆積する埋土1～3層の上層は、一般的な遺物包含層V層に被覆されていた。そのため、本跡がほぼ埋没した後も、V層の堆積は、しばらく続いていたと判断できる。3層にはぶい黄褐色砂質シルトが混じる壁際の三角堆積層である。

遺物：土器は、多量で39,285g、1,991点と竪穴建物跡では3番目の出土量である。有文土器では、6(5)類10,214g、6(3)類3,641gが断然多い。非意匠土器では、5(2)a種7,744g、同d種6,478gが多い。石器は26点出土した。主要な器種は石鎌5点、打製石斧2点、磨石3点、凹石3点、削器6点、石錐2点、磨製石斧2点である。ほかに土製円板、土偶、焼成粘土塊、軽石製品1点と、時期が異なる球状耳飾1点がある。

時期：炉内に埋設された土器(図版36-58～62)は複数あり、住居の時期を示すものと考えられる。2層および床面直上で取上げた遺物は、住居廃絶時期に近いものである。いずれも堀之内1式期、南三十稲場1式期である。複数個体の土器の特徴から、堀之内1式新段階を本跡の帰属時期と考える。

**S B 29** 図版2・21、P L 13 位置：3区 I X A・B・C 06・07グリッド

経過：当該地点周辺に分布する土坑群の調査を終了する頃、東西方向の弧状の段差と、それに沿うピット列を確認し、竪穴建物跡の可能性がうかがえた。I X A・B・C 07・08グリッドの3(2)類を含む遺物包含層の調査を終え、地山を露出させたところ、地山を掘り込んだ平坦面は、幅約50cmと狭かったが、床面が黒色土中にあったものと推定し、竪穴建物跡の残存部分の可能性があると判断し、写真撮影・実測記録を行った。竪穴建物跡と考えた時点で、すでに埋土は掘り尽くされていたため、土層断面図はない。本跡の壁を掘り込むS K 203・381・190・183等の土坑は、掘込み面がレベル的に上位となり、新しい可能性が高い。

規模・形状：東西約4.06mの弧状を呈する高さ約30cmの北壁と、直下にわずかな平坦面を検出したことから、隅丸方形を呈する可能性がある。段差に沿って列状に並ぶピット1～6、小土坑S K 328～330を壁柱穴と考えた。明確な床面は検出されず、炉も確認できなかった。おそらく斜面下側は浸食され、上側の北壁部だけが残ったものと考えられる。

埋土：黒褐色の遺物包含層V層と近似した埋土と推定する。

遺物：地山が露出した状態で確認したため、伴出遺物はない。所在グリッド付近の有文土器では、6(3)類、6(4)類、6(5)類、6(6)類が、大差ない量出土している。非意匠土器では、5(2)a種と同d種がほぼ同量、断然多く出土している。

時期：壁柱穴の竪穴建物跡であることと付近出土土器から、堀之内1・2式期に帰属するものと推定する。

**S B 30** 図版2・22、P L 13 位置：3区 I X G・H 05・06、I 06グリッド

経過：当該地点周辺に分布する土坑群の調査中に、鉢形土器下半部を埋設した土坑を検出し、S K 222を付番した。焼土を伴うことから、土器埋設炉と考えた。埋設状況から推定される床面レベルは、黄褐色シルトの地山VI層に達していないものと推定した。

I X H 05～08グリッド杭を挟むように設定した南北の土層観察ベルトを残して、本跡周囲の遺物包含層を掘り下げたが、竪穴建物跡のプランは確認できなかった。ベルト西側にサブトレンチを開け、土器を南北に半載して掘方断面を確認した。東西方向も土器周囲の掘り方範囲を確認し、南北・東西それぞれのサブトレンチを延長した。埋設土器の上端高から推定される床面のレベルではプランがわからず、一旦確認を断念しグリッド掘り下げを再開した。この地点の遺物包含層、土坑の調査後黄褐色シルトの地山を露出させ、約2.5m北側に現れた段差を北壁の痕跡と考えた。この時点で炉跡S K 222の周囲から北壁までの平坦部分をS B 30と呼称した。

本跡から約90cm南側で礫を伴う埋設土器S K 254を確認した。土器埋設炉の可能性が高く、距離が近

いため切合い関係にある竪穴建物跡の施設と考え、調査の最終段階でSK 254の周囲にSB 31を付番した。本跡の埋設土器は、SK 254の埋設土器より後出である。

**規模・形状：**現存長は、南北約2.85m、東西約3.24m、高さ約30cmで、弧状を呈する壁と、直下にわずかな平坦部を検出したことから、小形の円形を呈する可能性がある。段差下には明確な平坦面はなく、10個余りの土坑が掘り込んで柱穴は確認できない。当初検出した土器埋設炉SK 222は、SB 31の北壁痕跡と推定する本跡南側に見られる段差の範囲内に位置するため、SB 31を埋め立てて床を構築した可能性がある。

**施設：**土器埋設炉SK 222は、6(5)類鉢形土器(図版37-64)の下半部を用い、南北径約40cmの掘り方に埋置している。床面、炉石が残存せず掘り方も浅いため、本来の形状は不明である。

**埋土：**黒褐色の遺物包含層V層が埋土と推定する。南北ベルトで観察した断面では、厚い黒色土層中であり、分層はできなかった。

**遺物：**埋設土器である図版37-64は、6(5)類の鉢形土器である。ほかに遺物はない。

**時期：**前記土器は堀之内I式前半に比定できるため、本跡の帰属時期とする。

**SB 31** 図版2・22、PL 13 位置：3区 IX F・G・H 06・07グリッド

**経過：**SB 30の経過のとおり、土器埋設炉SK 222を検出し、埋設状況から推定される竪穴建物跡の床面確認のため、南北にベルトを設定し周囲を掘り下げたところ、礎を伴う埋設土器の本跡を検出した。土器埋設炉と判断し、SK 254を付番した。検出レベルは遺物包含層の黒色土V層中である。

IX H 05~08グリッド杭を基準に設定した南北方向の土層観察ベルト西側にサブレンチを入れたが、竪穴建物跡プランは確認できなかった。検出時点で本跡の埋設土器が浮いた状態であったため、東西方向の土層は確認していない。先に検出されたSK 222は、本跡から約90cm北側に位置し、切合い関係にある竪穴建物跡の存在を推定した。埋設土器の型式から本跡が先行すると考える。この地区の遺物包含層・土坑の調査後、黄褐色シルトの地山VI層を露出させて現れた北側の段差を、北壁の痕跡と考えた。この時点でSK 254から北側の段差部分にSB 31を付番した。

**規模・形状：**埋設土器から1.56m北側で、東西約3.12mの直線状の段差を検出した。これを北壁の痕跡とすれば、方形を呈する竪穴建物跡の可能性がある。段差下には明確な平坦面はなく、柱穴は確認できなかった。

**施設：**埋設土器(図版56-565)に近接して、小形の安山岩平石を立てて埋設していることから、小ぶりな石囲を伴う炉跡と考えた。焼土は明確ではない。斜面上側で検出した段差を北壁の痕跡と推定するには、竪穴建物跡の炉と壁の間隔にしては近すぎるため、不確実である。あるいは掘り方部分の痕跡であろうか。  
**埋土：**黒褐色の遺物包含層V層が埋土と考える。南北ベルトで観察された断面では、厚い黒色土層中であり、分層はできなかった。

**遺物：**埋設土器である図版56-565は、6(2)類の鉢形土器である。ほかに遺物はない。

**時期：**前記は三十稲場式でも新しい段階に属するものであり、堀之内I式古段階並行期と推定する。

**SB 32** 図版4・22、PL 13 位置：2a区 IX P・Q 06・07グリッド

**経過：**SB 26の調査をほぼ終了し、IX P・Q 06・07グリッド付近の遺物包含層V層を掘り下げて、地山VI層を露出させたところ、半円形の竪穴状の凹地を検出し、竪穴建物跡の可能性があるかと判断した。この時点で、すでに完掘状態に近く、埋土は残っていなかった。したがって、直接埋土の切合いは観察できないが、検出の順序から西側を堀之内I式期に属すSB 26、東側を堀之内I式期と考えるSB 7に切られるものと推定する。SH 14・15、SQ 18はレベル的に上位となるが、SQ 18は本跡の北西壁線に接し、SH 14・25は東壁に接して、明確には新旧関係が分からない。SQ 18は、崩れた炉石に伴うような状態

で4(2)類が出土した。本跡に伴う遺物はなく、切合いの順序が明らかにできない。

**規模・形状**：現存長は、南北1.76m、東西3.48mを測る。推定径3.5m程度の円形か隅丸方形と考える。北壁の残存高は36cmを測る。

**施設**：明確な床面や壁は検出されず、炉も検出できなかった。おそらく浸食を受けてわずかに凹地として痕跡が残ったものと推定する。

**埋土**：確認時点では、残っていないかった。

**遺物**：本跡が所在するグリッドから出土した土器には、6(3)類の新しいものである図版55-562、6(5)類523、6(6)類565などがある。SB26に先行するとすれば、562の時期となる可能性があるが、SQ18を遡るなら該当する遺物はない。

**時期**：SB26に先行するとすれば、堀之内I式中段階以前であり、SQ18より古いとすれば加曾利EⅢ式以前となるが、根拠はなく時期は不明である。

### 3 掘立柱建物跡

**ST1** 図版3・23、位置：3区 I X E・F・G 05・06グリッド

**経過**：遺物包含層V層を小グリッドごとに掘り下げ、黄褐色砂質シルトVI層上面に掘り込まれた多数の土坑群を検出した。発掘時には掘立柱建物跡とは認識できず、基礎整理時に規模と深さ、分布にまとまりのある小形の土坑18基を抽出し、二重に並んで南側が開いた弧状に配置する土坑を柱穴とし、掘立柱建物跡ST1と認定した。該当する土坑は、SK175・232・233・236・237・247・270・271・272・294・301・309・321の13基である。

**規模・形状**：斜面下方の南側に柱穴はないが、柱穴の配置形状は二重に並列した弧状である。現存長は、南北約3m、東西5.4mを測る。外側の北列を構成する柱穴は、西側からSK272・270・175・247・309・232・233の7基、内側の南列の柱穴は、SK321・271・294・301・236・237の6基である。柱穴は口径約30~60cm、深さ約20~50cmの規模ある。柱穴中心で計測した柱間隔は、30~70cm前後と不規則である。

**施設**：北列西半部SK272・270・247には、根固石の可能性のある礫が残存している。

**埋土**：柱穴の埋土は、V層基調の黒褐色砂質シルト4・5層と、地山VI層に近似する1~3・6~8層がある。柱痕が観察できるものはない。ほとんどの埋土には、炭化物が含まれている。

**遺物**：発掘時には本跡を確認していないため、柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴の埋土中から出土した土器片で多いものは、非意匠の5(2)a種、同d種である。意匠文様がある土器で時期が新しいものは、6(2)・(3)・(6)類である。

**時期**：前記の柱穴出土土器から、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。柱穴に根固石がある堅穴建物跡は確認されていないが、浸食により壁を失った堅穴建物跡と考えた場合、本跡は壁柱穴となり、建物構造は、当該時期と矛盾しない。

**ST2** 図版3・23、PL14 位置：3区 I X I・J・K 04~06グリッド

**経過**：V層を小グリッドごとに掘り下げ、VI層上面に掘り込まれた多数の土坑群を検出し、SKを付番した。検出面で埋土中の礫が見えた土坑や、半截掘り下げにより礫が確認できた土坑が方形に配置されていたため、根固石がある掘立柱建物跡と認識し、礫が入った状態で完掘写真を撮影した。基礎整理時に土坑を柱穴とし、掘立柱建物跡としてST2を付番した。該当する土坑は、SK216・220・241・287・296・322・325の8基である。

**規模・形状**：調査区北半部の平坦面にあり、検出した範囲では2間×2間の方形プランとなる。柱穴外法で計測した範囲は、南北3.2m、東西3.5mを測る。柱穴は、口径の長径が50~80cmの不正楕円形が多く、



深さ約20~60cmの規模である。柱穴中心で計測した柱間隔は、1.3m前後である。

**施設:** S K 296を除き、根固石と考える礫が残存している。

**埋土:** 柱穴の埋土は、黒褐色シルトV層基調の1・5層が入るS K 241・287と、地山VI層に近似する2・3・4・6・7層が入るその他がある。柱痕が観察できるものはない。ほとんどの埋土には、炭化物が含まれている。

**遺物:** V層掘下げ時には本跡を確認していないため、柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴埋土中から出土した土器片で多いものは、非意匠の5(2)a種、同d種である。意匠文様がある土器では、4(3)類、4(6)類が入るものもあるが、時期が新しいものは、6(2)・(3)・(6)・(10)類である。

**時期:** 前記の柱穴出土土器から、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。

**ST3** 図版4・25、P L 15 位置: 3区 I X M・N・04~06グリッド

**経過:** V層を小グリッドごとに掘り下げ、VI層上面に掘り込まれた多数の土坑群を検出し、S Kを付番した。検出面で埋土中の礫が一部見えた土坑や、半截掘り下げによって礫が確認できた土坑が、南北方向に配置されていたため、根固石がある掘立柱建物跡と認識し、礫が入った状態で完掘写真を撮影した。整理時に土坑を柱穴とし、掘立柱建物跡としてS T 3を付番した。該当する土坑は、S K 256・265・268・283・342の5基である。

**規模・形状:** 調査区北半部の平坦面にあり、調査区外の北側へ広がる長方形プランと推定する。柱穴外法で計測した範囲は、南北約2.5m、東西3.6mを測る。柱穴は、口径の長径が45~70cmの不正円形あるいは楕円形、深さ約30~60cmの規模である。柱穴中心で計測した柱間隔は、1.2~1.7mである。

**施設:** いずれの柱穴も根固石と思われる礫が残存している。S K 256・268では掘り方の壁面に礫を詰め、256では断面に柱痕が見られる。

**埋土:** 柱穴の埋土は、黒褐色シルトV層基調の3層が柱痕に入るほか、地山VI層近似の褐色シルト1・2層である。

**遺物:** 柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴埋土中から出土した土器片で多いものは、非意匠の5(2)d種である。意匠文様がある土器で時期が新しいものは、6(3)類から6(6)類である。

**時期:** 前記の柱穴出土土器から、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。

**ST4** 図版5・24、P L 16 位置: 3区 I X S・T 05・06グリッド

**経過:** V層を掘下げて検出された竪穴建物跡S B 5・8の調査後、VI層上面に掘り込まれた多数の土坑群を検出し、S Kを付番した。土坑が東西・南北方向に配置するため、掘立柱建物跡と認識し、各軸土坑3個の立面を実測した。整理時に土坑を柱穴とし、掘立柱建物跡としてS T 4を付番した。該当する土坑は、S K 1・3・10・13・16・17・29・30・33の9基である。

**規模・形状:** 調査区北半部の平坦面にあり、調査区外の北側へ広がる長方形プランと推定する。柱穴外法で計測した範囲は、南北約3.7m、東西約3.4mを測る。柱穴は竪穴建物跡に切られて検出面に高低差があるため、口径の長径が40~90cmとばらつき、不正円形あるいは楕円形、深さ約40~60cmの規模である。柱穴中心で計測した柱間隔は、1.2~1.5mである。

**施設:** 確認できなかった。

**埋土:** 柱穴の埋土は、黒褐色シルトV層基調の3・5・8~10層と、地山VI層近似の褐色シルト1・2・4・6・7・11層である。S K 30には柱痕が見られる。

**遺物:** 柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴の埋土中から出土した土器片で多いものは、

非意匠の5(2)d種である。意匠文様がある土器で時期が新しいものは、6(3)・(5)類である。

時期：前記の柱穴出土土器から、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。

**ST5** 図版7・23、位置：3区 IYO・P・Q04・05グリッド

経過：経過：褐色砂礫層Ⅳ層の残存部分を除去した直下のⅤ層上面で、竪穴建物跡SB3を確認した。この調査後、平面的に重なる小土坑SK53・58・69・75を検出した。遺物包含層であるⅤ層下面であり、SB3床面より30cm以上下位になるため、SB3に先行する遺構と考えた。整理時に土坑を柱穴とし、掘立柱建物跡としてST4を付番した。該当する土坑は、SK53・54・59・63・69・70の6基である。

規模・形状：調査区北半部の緩斜面にあり、調査区外の北側へ広がる円形あるいは楕円形プランと推定する。柱穴外法で計測した範囲の現存長は、東西約2.55mを測る。柱穴は、上層をSB3に切られているため、口径の長径が約20cmの円形、深さ約15cmの規模である。柱穴中心で計測した柱間隔は、約40～50cmと近距離である。

施設：確認されていない。

埋土：柱穴の埋土は黒褐色シルトⅤ層基調の1・2層と、地山Ⅵ層近似的褐色シルト3・4層である。

遺物：柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴は小さく、埋土中から出土した土器は、SK59から非意匠の5(2)d種、意匠文様がある6(6)類が少量である。

時期：前記の柱穴出土土器、および本跡を切るSB3の時期が6(8)類であることから、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。

**ST6** 図版3・24、位置：3区 IXF・G・H04～06グリッド

経過：経過：Ⅴ層を小グリッドごとに掘下げ、地山Ⅵ層上面で密集する土坑群を検出した。整理時に、規模が等しく円形に配置する土坑を柱穴として抽出し、掘立柱建物跡としてST6を付番した。該当する土坑は、SK224・234・250・293・306・375の6基である。南西側は、掘立柱建物跡ST1と切り合うが、新旧関係は明らかではない。南東側には、下層に竪穴建物跡SB30があり、本跡が切る。

規模・形状：調査区北半部の平坦面にあり、調査区外の北側へ広がる円形あるいは楕円形プランと推定する。柱穴外法で計測した範囲の現存長は、南北約3.3m、東西約4.1mを測る。口径の長径が約40～80cm前後の不正円形、深さ約30～50cmの規模である。柱穴中心で計測した柱間隔は、約1.2～2.0mである。

施設：確認できなかった。

埋土：柱穴の埋土は、黒褐色シルトⅤ層基調の4・7・8層と、地山Ⅵ層近似的黄灰色・黄褐色シルトの1～3・5・6・9層である。

遺物：柱穴検出面での伴出遺物は明らかではない。個々の柱穴は比較的大きいため、埋土中から出土した土器は、掘立柱建物跡の柱穴としては多量である。非意匠の5(1)c種、5(2)a種、同d種、意匠文様がある土器は、SK224・250に4(5)類、4(7)類の縄文中期末葉が多く、6(6)類がSK306に見られる。

時期：前記の柱穴出土土器に縄文中期末葉が比較的多いが、新しい時期では6(6)類が見られるため、縄文後期前葉に帰属する遺構と推定する。

ここに記述したST1～6のほか、掘立柱建物跡の可能性のある土坑群に触れておく。IYH・I・J・K04～07グリッドに分布する、SK131・133～136・142・143・149・153の10基は長軸約5mの楕円形に回り、SB2と切り合う。また、IYN・O・P05～07に分布する、SK52・57・71～75の7基は現存長約4mの円形に配置され、SB3と切り合う。いずれも口径約30cmの小土坑であるが、緩斜面にあり土坑底面の深さが不ぞろいのため、1棟の掘立柱建物跡の柱穴とするには疑問の余地がある。浸食された柱穴の痕跡、あるいは平坦な床面を必要としない施設を想定すれば、掘立柱建物跡の可能性は捨て

きれないが、認定はしなかった。

## 4 土坑

### (1) 炉跡

**SK 111** 図版6・26, PL 17 位置: 3区 IYG 06グリッド

**経過:** S B 9の東側埋土掘削時に、床面より5cmほど上位から土器と礫を検出した。当初は単体の遺物と埋土中に混じった礫と推測していたが、精査したところ、土器周囲で円形のプランを検出したため、礫を含めてSK 111とした。土器と礫を通る南西から北東方向に断面線を設定、半載して浅い掘方を確認した。**規模・形状:** 長径85cm、短径77cmの楕円形、深さ11cmの皿状の掘り方に、底部から一部口縁部が残る小形の深鉢を直立で埋置する。土器に隣接して、口縁部とほぼ同レベルに円礫2個があり、炉石の残存と推定する。

**埋土:** 土器を埋置した黄褐色細粒砂の単層である。V層と近似した褐灰色砂質シルトの単層である。

**遺物:** 埋設土器(図版37-68)は、4(6)類で1.235gを測る。被熱のため赤化しており、炉内埋設土器と推定する。ほかにほとんど遺物はない。土器内からサケ科の歯が出土した。

**時期:** 埋設土器から縄文中期末葉である。S B 9は壁柱穴構造であり、縄文後期に属すと考えられるため。本跡より後出であろう。東側はプランが不明瞭であり、本跡上部をS B 9が切るものと推定する。

**SK 202** 図版4・26, PL 17 位置: 3区 IXM・N 04・05グリッド

**経過:** V層を掘り下げ地山面V層を出していたところ、炉石の一部と埋設土器と考えられる遺構を検出した。土器および石の設置部分に落込みがあったため、SKとして調査した。検出状況の写真記録後、土器底部の中央を通して南北にサブトレンチを設定し、掘り下げた。明確な焼土面は確認できなかったが、土器は被熱のため赤化し、表面が剥落している。

**規模・形状:** 西側の炉石と考える巨礫2個が残り、胴下半部を欠損した口径24cm程度の深鉢形土器を、ほぼ直立で埋設する。土器の南側には、拳大以上の礫が数個残る。実測図は、土器・礫を取上げた掘方であり、平面形は、長径93cm、短径70cmの不正円形、深さ31cmを測り、土器埋設部は一段深く掘り込む。

**埋土:** 暗褐色砂質シルトの単層である。炭化物の分布は、周辺より若干多いものの、焼土は少ない。

**遺物:** 埋設土器(図版38-71)は、4(6)類である。ほかに4(3)類の破片、石棒の破片も出土した。

**時期:** 埋設土器から縄文中期末葉である。埋設土器がある石囲炉の残存部分と考える。

**SK 313** 図版3・26, PL 17 位置: 3区 I X E・F 04・05グリッド

**経過:** V層を掘り下げ地山面V層上面で遺構を検出したところ、北壁付近で巨礫と拳大礫の間に土器片が集中する遺構を検出した。東西・南北のサブトレンチで断面観察し、落込みを確認したため、SKを付番した。

**規模・形状:** 掘込みの西側に、傾いた板状の礫と拳大前後の礫が集中し、土器破片が礫に挟まる状況で出土した。北側は調査区外となり、掘方の現存長は南北52cm、東西78cmの不正円形か楕円形、深さ18cmの皿状である。

**埋土:** 黒褐色砂質シルトの単層である。炭化物をやや多く含み、焼土は確認できなかった。

**遺物:** 土器は、4(3)類(図版56-588)、4(6)類(図版56-587)、5(2) a種の破片524g、同d種80gが出土した。石器には台石1点がある。

**時期:** 出土した土器は、縄文中期末葉と考える。破壊された石囲炉の残存部分の可能性が高い。

**SH 14** 図版5・26, PL 19 位置: 3区 I X Q・R・O 06・07グリッド

**経過:** V層を掘り下げたところ、石囲炉の一部と炉埋設の可能性のある土器を検出したが、床面等がはっきりしなかったことからSHを付番した。炉石の一部と埋設土器のみのため、切合い等も確実ではないが、

SB5に接する部分に石組がないことから、SB5に切られると考えた。また、南側の炉石下部から敷石状の平石を複数検出したため、SH15を付番した。炉石の下にあるため、本跡がSH15を切ると考える。平面図のみ記録した。

**規模・形状**：SH14は、巨礫を方形に配置し、中央に小形の鉢形土器を埋設している。礫は被熱して割れているが、外法の規模は、南北82cmであり、東側には礫がなく、SB5上端までの東西現存長は、66cmを測る。

**埋土**：SH14の炉内埋土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。炭・焼土の量は、一般的なV層と変わらない。炉石の下部にまでIV層の砂礫が入り込んでいることから、かなり浸食を受けて本来の炉内埋土は、ほとんど失われていると判断できる。

**遺物**：SH14の埋設土器（図版56-566）は、6（2）類1個体で、325g出土した。原山類型に属す鉢形土器である。灰の付着と赤化が認められ、細かく割れている。ほかに5（2）a種75g等がある。

**時期**：前記の埋設土器は、称名寺式新段階から堀之内1式古段階頃に現れる。SH14はこの時期に一般的な炉形態である。

#### SQ18 図版4・26、PL20 位置：3区 IYP06グリッド

**経過**：V層の掘削を開始して間もなく、複式炉状の配石および炉埋設土器の可能性のある土器を検出した。周囲に床面等を確認することができなかったため、遺物集中として調査した。炉としての記録を残したが、炉内埋土がほとんど失われており、石組も乱れている。SB26の北東隅上端と平面が重なっているが、出土土器から、本跡が古いことは確実である。SB26の埋没過程で一部が崩落したのであろう。

**規模・形状・遺物**：西側のみ、被熱して割れた板状の炉石が残る。炭化物の分布は周囲より多かったが、炉床面等は確認できなかった。炉内には、埋設された土器2個があり、出土範囲は長径73cm、短径46cmである。土器は、1482gが出土した。北側の個体（図版56-567）は、4（2）類の胴部433g、南側は、5（2）d種の小形深鉢の胴下部283gである。ほかに削器1点がある。縄文中期末葉の堅穴建物跡が浸食され、半壊状態の炉跡だけが残ったものと考えられる。

#### (2) 根固石がある柱穴

##### SK81 図版6・27、PL16 位置：2b-1区 IYD05・06グリッド

**経過**：SB1調査後下層の遺物包含層を掘下げ、地山VI層上面で遺構検出したところ、黒褐色土を埋土とする切り合う円形プランの土坑群を確認した。重複部分にサブトレンチを設定して断面観察し、SK65を切ることが判明した。上層に礫があったので、平面実測して取り除き、断面線c-dを設定して半截し掘り下げ、断面を記録した。西側のSK65、北側のSK165を切っていた。

**規模・形状**：平面形は、長径103cm、短径98cmの楕円形、深さ40cmのタライ状を呈する。底面は平坦である。

**埋土**：黄褐色砂ブロックを含む黒褐色シルトで、底面に堆積する9層は薄く、上層の厚い8層中に、長径40cmを最大に多数の巨礫を含む。柱穴の根固石と考えるが、礫間に明瞭な柱痕は確認できなかった。

**遺物**：土器は、5（2）a種244gを最多に、4（6）類92g、4（4）類35g等が出土した。

**時期**：出土した土器から縄文中期末葉以降の土坑と考え、根固石を伴う柱穴の可能性が高い。

##### SK83 図版5・26、PL16 位置：2b-1区 IYB・C05・06グリッド

**経過**：前記のSK81と同じ経過で、地山のVI層上面で遺構検出し、黒褐色土を埋土とする円形プランの土坑を確認した。上層の礫を平面実測して取り除き、中央部に柱痕部分を確認したため半截した。掘り部分は大きく、礫が何層にも組んであったので、礫の平面・断面を実測・写真記録しながら取り上げて完掘した。

**規模・形状：**掘り方の平面形は、120～118cmの円形、深さ80cmを測り、底面は平坦、壁は垂直に近い。掘方の埋土中には、底面から検出面まで、人頭大から拳大の礫を多数積み上げて根固めしている。中央部に直径約40cmの明瞭な柱痕がある。

**埋土：**黒褐色シルトで、根固石を含む2層は、しまりがあり、柱痕に堆積する1層は、しまりがない。

**遺物：**土器が少量出土し、有文土器は、6(3)類、6(6)類各30gがある。

**時期：**出土した土器から、SB1以前の縄文後期前葉に属す、強固な根固石を伴う大形の柱穴である。

**SK 109** 図版5・28、PL 16 位置：2b-1区 IYC 04・05グリッド

**経過：**前記のSK 81と同じ経過で検出した。半載して掘り下げたところ、壁面に礫が入っていたため、中央部のみを先に調査して実測・写真記録し、その後周囲の礫をはずしながら記録した。切合いはない。

**規模・形状：**平面形は、55～53cmの円形、深さ80cmの円筒状を呈する。

**埋土：**黄褐色砂ブロックを含む壁際に、黄褐色砂2層と黒褐色シルト3層を埋め戻し、底面から検出面まで板状の礫を詰める。中央部は、直径25cm前後の柱痕で、しまりがない黒褐色シルト1層が堆積する。

**遺物：**土器は、5(1)a種21gが出土した。

**時期：**上層の堀之内2式後半期に属すSB1以前で、根固石を伴う柱穴である。

**SK 125** 図版5・27、位置：2b-1区 IYC 05・06グリッド

**経過：**前記のSK 81と同じ経過で検出した。重複部分にサブトレンチを設定して断面観察し、SK 65を切っていることが判明した。上面の礫を平面実測して取り除き、半載し掘り下げた。調査途中で北西壁を切る土坑が見つかり、SK 173とした。当初SK 65に属すと見られた巨礫は、本跡の埋土3層上面にあり、これに接して出土した土器は本跡プラン内にあり、SK 65を切っていると考えられる。

**規模・形状：**平面形は、長径142cm、短径90cmの不整な隅丸長方形である。3・4・5層が堆積する部分は、深さ約12cmと浅く、中央部に掘り込まれ1・2層が堆積するピット部分は、底面まで60cmを測る。

**埋土：**にぶい黄褐色砂ブロックを含む黒褐色シルトを基調とする。1・2層は、3～5層を切って堆積し、ピット部分上面の周囲には拳大以上の礫があり、柱穴の根固石の可能性もある。

**遺物：**土器は頸部を欠損した6(5)類の鉢形土器(図版37-67)が、3層中から正位の状態で出土した。石器には石皿1点がある。

**時期：**出土した土器から縄文後期前葉の土坑と考える。隅丸長方形部分とピットを一体と考えれば、根固石を伴う柱穴1基となる。両者を別遺構の切合いとすれば、隅丸長方形部分は、規模・形状から土器を埋設した土坑あるいは土坑墓の可能性もある。

**SK 172** 図版5・27、PL 16 位置：2b-1区 IYC・D 04、C 05グリッド

**経過：**前記のSK 81と同じ経過で検出した。当初、掘方の中心が北側にあると考え、調査区北壁で断面を観察し掘り下げたが、礫が出土して、中心がより南側と判明した。この時点ですでに柱痕部分を底面まで掘り下げてしまった。以後、礫を平面・断面実測して掘り下げた。南側のSK 120に一部切られる。

**規模・形状：**平面形は長径127cm、短径103cmの楕円形。検出面VI層からの深さは、約30cmであるが、プラン内の最上部にある礫のレベルからは約60cmとなる。壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、柱痕の直下に平石を据える。

**埋土：**褐色または暗褐色シルトを基調とし、夾雑物の差から分層される。いずれも掘方を埋め戻した土であり、全体に巨礫から拳大の礫が入っている。柱痕は直径約25cmである。

**遺物：**土器は、6(6)類176gを最多に、5(2)d種95g、同a種80g等が出土した。石器は、打製石斧、凹石各1点が出土した。

**時期：**出土した土器から、SB1以前の縄文後期前葉に属す。SK 81・83と通ずる根固石を伴う大形柱

穴である。

**SK 173** 図版5・27、PL 16 位置：2b-1区 IYC 05・06グリッド

経過：前記のSK 125と同じ経過で検出した。SK 125を切っている。

規模・形状：平面形は、径44～36cmの不整形である。深さ49cmを測る。断面形は円筒状で、北壁はオーバーハングする。

埋土：黒褐色シルトを基調とする単層である。掘方の周囲に礫を詰めている。

遺物：土器は、5(2)a種26gのみが出土した。

時期：前記した堀之内1式の土器が出土した土坑SK 125を切ることから、縄文後期前葉と考える。根固石を伴う柱穴である。

根固石がある柱穴として報告した上記の6基は、SB1下層のIYB・C・D 04～06に集中分布する。SB1の柱穴とは考えられず、大形円形で特に根固石を多数詰めたSK 81・83・172は三角形に配置している。北側の調査範囲外に分布が拡大する可能性は高いと推定するが、現状では竪穴建物跡や、掘立柱建物跡の柱穴規模とは格差が大きいため、構造が異なる大形建物か、立柱遺構などを想定する。

(3) 遺物を埋設した土坑

**SK 8** 図版5・28、PL 18 位置：3区 IXC・D 06・07グリッド

経過：重機によりIV層まで掘削し、V層を人力で精査したところ、上面に埋壘と思われる縄文中期土器の一部を検出した。隣接する敷石住居跡SB1完掘後、V層を約10～20cm掘り下げたところ、土坑西辺のプランが確認できたためSK 8とした。平面で見えなかった東辺のプランを確定するために、土器中央を通る十字トレンチを掘削したが、断面観察でも検出できなかった。SB1張出部敷石下面からプランが確認され、同遺構が縄文後期に帰属することから、SB1に上部を切られる遺構と判断した。

規模・形状：南北130cm、東西98cmの楕円形プランを呈する。底面はやや南側に傾斜し、土器上端から深さ約20cmである。中央からやや南に、深鉢形土器1個(図版37-66)を逆位に埋設し、口縁部は底面に接する。同一個体の破片が北壁前からも出土した。中央部の土器に重なって別個体(図版37-65)の破片が出土した。

埋土：炭化物を少量含む黒褐色シルトの1層が土器内部の、近似するシルトと黄褐色シルトが交互に堆積した2～4層が、土坑の埋土である。

遺物：土器は、6.698gが出土した。図版37-66は、4(6)類であり、4.220gを測る。図版37-65は、4(3)類と考える。ほかに5(2)a種、同d種が出土した。石器には石鎌、石鎌各1点がある。

時期：当初逆位埋壘と考えたが、墓壙に匹敵する規模・形状の土坑に埋設されているため、壘被葬で埋葬した土坑墓の可能性が高いと考える。

**SK 65** 図版5・27、PL 18 位置：2b-1区 IYC・D 05・06グリッド

経過：SK 125と同じ経過で検出した。重複部分にサブトレンチを設定して断面観察した。当初は西側のSK 125を切り、巨礫と埋設土器は本跡に伴うと考えたが、SK 125に切られていることが判明した。東側のSK 81には切られている。

規模・形状：平面形は、径136～132cmの円形で、深さ47cmを測る。底面は平坦ではなく、壁はやや急な傾斜である。

埋土：大部分が炭を多量に含む黒褐色シルト6層で、炭が少量の7層と2分層される。

遺物：土器は、5(2)a種1,718gを最多に、5(2)d種153g、4(4)類106g等が出土した(図版56-571～574)。石器では、打製石斧1点が出土した。

時期：出土した土器から、縄文中期末葉の土坑と考える。性格は明らかではない。

**SK 203** 図版2・28、PL 18 位置：3区 IXC・D 06グリッド

**経過**：Ⅴ層上面で遺構検出し、黄灰色シルトを埋土とする楕円形プランの土坑を確認した。短軸方向に半截して断面観察しながら掘り下げたところ、底面付近に土器が集中していたため、写真記録して取り上げた。

**規模・形状**：平面形は、100cm×78cmの不正な楕円形、深さ23cmを測る。南半部が一段低く掘り込まれ東・西壁に小ビットがある。

**埋土**：南半部の下層に2層のぶい橙色シルト、上層全体に1層の黄灰色シルトが堆積する。

**遺物**：1層下部から6（2）類の深鉢形土器（図版38-72）が、破片の状態で出土した。ほかに磨石1点がある。

**時期**：出土した土器から縄文後期初頭の土坑と考える。性格は明らかではない。

**SK 205** 図版4・28、PL 17 位置：3区 IXL 04・05グリッド

**経過**：Ⅴ層上面で遺構検出したところ、北壁に掛かって台付土器の脚部が現れた。周囲はⅤ層近似の土層が落ち込んでいたため、SKを付番し、土器にかけて断面線を設定し、半截して掘り方を確認した。

**規模・形状**：北側が調査区外となり、掘方の現存長は、南北45cm、東西47cmの不正円形か楕円形である。最深部は26cmを測り、南側に段がある。土器脚部は、接地面を上に向け、底部から脚部だけの破片を埋土上半部に逆位に埋置している。

**埋土**：黒褐色砂質シルトの単層である。炭化物をやや多く含む。

**遺物**：土器は脚部に透かしがあり、細い隆帯で文様描く。第3群に属す可能性がある。ほかに凹石1点がある。

**時期**：出土した土器の推定時期から、中期中葉の土坑と考える。

**SK 279** 図版4・28、PL 18 位置：3区 IXN 06・07グリッド

**経過**：小グリッド単位でⅤ層を5cmずつ掘り下げ、遺構検出を行ったところ、縄文施文土器の大形破片が集中する部分が見られた。土坑を想定して周囲を平面的に精査したが確認できず、土器分布の長軸となる南北にサブトレンチを開け、口縁部を下側に埋設されている状況を確認した。西側半分を掘り下げ、断面記録後全体を露出した。Ⅴ層を掘り込むため土坑と考えたが、上半部では土色の差がわずかなため、形状は不明瞭である。

**規模・形状**：上面の直径約50cmの円形、深さ約30cmの土坑に、胴下半部がない深鉢形土器を逆位に埋設する。断面形は緩く立上がり、斜面下方の南側は不明瞭である。

**埋土**：Ⅴ層と近似した褐色砂質シルトの単層である。

**遺物**：埋設土器（図版37-70）は、4（6）類4.110gである。非意匠土器は、5（2）a・c・d種各300g前後の破片が出土した。ほかに石鏃1点、軽石製品2点がある。

**時期**：埋設土器から縄文中期末葉である。酷似した土器を逆位埋設した土坑に、約17m東にSK8がある。

**SK 320** 図版3・29、PL 18 位置：3区 IXF 07グリッド

**経過**：Ⅴ層上面で、巨礫が入った暗褐色シルトを埋土とする楕円形プランの土坑を確認した。配石墓の可能性を考え、長軸方向に半截して断面観察し掘り下げると、皿状の土坑となった。礫を写真記録し、完掘した。

**規模・形状**：平面形は長径92cm、短径73cmの不整な隅丸方形であり、深さ14cmを測る。中央に長径約40cm大の板状の巨礫があり、小兒頭大や拳大の礫も確認した。巨礫下に数cmの埋土が介在して底面となる。

**埋土**：暗褐色シルトの単層である。

**遺物**：5（2）d種の土器が少量と、凹石1点が出土した。

時期：約2.5m南東に配石墓SH13があり、上面配石と近似する巨礫の存在から、同様の遺構となる可能性を考慮したが、浅すぎるため性格は明らかではない。平面的にはほぼ同位置の上層に、6(1)類を出土したSQ28があり、本跡の時期はそれ以前である。

**SK411** 図版4・29、PL18 位置：3区 IXK・L06グリッド

経過：V層上面で遺構検出し、黒褐色シルトを埋土とする楕円形プランの土坑を確認した。長軸方向に半截して断面観察しながら掘り下げたところ、底面から石棒が出土したため実測図、写真記録して取り上げた。規模・形状：平面形は、長さ71cm、短径60cmの不正な楕円形である。深さは18cmを測り、すり鉢状である。

埋土：V層に近似する黒褐色シルトの単層である。

遺物：中央部底面から小形有頭石棒の破片(図版73-146)が出土した。

時期：出土した石棒から縄文後期の土坑と考える。性格は明らかではない。

(4) その他の土坑

**SK156** 図版6・7・29、PL17 位置：2b-1区 IYI・J・K07グリッド

経過：V層下面の調査区南側で不整形な落込みを検出し、重複する竪穴建物跡を想定して、SB18・19と命名した。南北方向の断面線a-bを設定し、IYJ07グリッド北端から長さ約1.2m、断面線東側にサブトレンチを設定し、深さ1m掘り下げたが底面に達しないため、一旦中断した。a-b線の西側にc-d断面線も設定してサブトレンチを掘削し、乱れた黄褐色土を底面と判断して、写真撮影・断面実測を実施した。a-b線サブトレンチの掘削を再開し、遺構底面の一部を検出したところ、4(1)類土器(図版37-69)が出土した。

a-b線に沿って北側に底面を追い、トレンチを拡張して北壁を検出した。壁際では乱れた黄褐色土と黒褐色土の互層が堆積している。北壁下部で明黄褐色粘土層を検出し、粘土採掘坑の可能性が高いと考えた。また、c-dトレンチの底が掘削不足に気づき、土層観察ベルトを残して底・壁を確認したところ、a-bトレンチと同じ堆積状況となった。本跡を粘土採掘坑と判断し、SB18・19を欠番にして、1基の採掘坑SK156とした。さらにa-bトレンチ東側を拡張し、底・壁の立上りを確認した全体が調査区南壁に接しており、深度が地表下3m近くになるため、安全上からトレンチによる部分掘削で調査を終えた。規模・形状：東西5.4m、南北2.6mの広がりを持つが、南側は大きく調査区外に広がると推定する。少なくとも3回の掘削の単位があり、これをSK156-a・b・cと呼称する。さらに多くの単位が組み合わせ、全体として不整形の大きな凹地となったと推定する。2か所のトレンチ調査のため、詳細な図化記録はできなかった。深さは、検出面から約1~1.2mだが、本来はもっと深かったはずである。

埋土：a-b断面の堆積状況により、採掘・堆積層順序を推定する。1層は、採掘終了後に時間をかけて堆積したV層である。1層下面が、採掘直後の地表面となる。2~7層はSK156-aの埋土で、隣接部の斜面上部に向かって粘土層を掘り進んだ時の掘削土排土である。9~11層は、2~7層と同様に、156-bおよび隣接部の掘削排土と考える。掘削対象となった粘土は、6~8層の下層に堆積する粘土である。

遺物：土器は、2,642gが出土した。4(1)類が断然多いが、北側に接するSB16-Wは、柵倉式期の竪穴建物跡であり、ここから流入した可能性がある。これに次ぐ有文土器は、4(6)類196g、6(3)類141g、6(6)類103gがある。非意匠文では、5(2)a種が245g出土した。

時期：土器69はSK156-bに堆積する9層から検出された。1層には、多くの後期土器片が入るが、それより下層に後期土器片は含まれないため、柵倉式期以降の粘土採掘坑群と考える。

**SK253** 図版2・29、PL17 位置：3区 IXC・D06・07グリッド

経過：当該地点周辺に分布する土坑群の調査を、斜面上側の北から南に向かって進行した。南端は、V層



が厚く、VI層まで地表からの深さが約2.5mにおよぶ。本跡北壁付近がVI層との土色差で確認されたため、南北断面を残して東側を半截掘り下げてプラン確認した。垂直に近い壁線が明らかになり、規模・形態から貯蔵穴と推定した。埋土中位の土器(図版56-585)は、付番して取り上げたが、底面が深く掘りこいたため、断面実測後、全掘してVI層を掘り込む底面を確認した。底面周囲に巨礫がある状況であった。直接切り合う遺構はない。本跡確認面より上層に、V層が堆積していた。巨礫を取上げ、壁面精査したところ炭が混じったVI層主体の堆積層があり、袋状土坑の上部が崩落したものと推定した。南壁は、調査区外となった。

**規模・形状:** 平面形は、上面が東西約1.8m、南北方向もほぼ同規模と推定され、円形を呈する。北壁下で深さ約80cm、底面は平坦ながら、南側に傾斜する。断面形は、底面付近がわずかに広がる部分があり、袋状である。

**埋土:** 水平堆積し、3分層される。上部の1・2層は厚く、黒褐色砂質シルトで炭化物を少量含む。3層は底面直上に堆積し、崩落したVI層が主体である。底面北壁から東壁前に拳大から人頭大礫10数個が集まっていた。

**遺物:** 土器は、5,414g出土した。有文土器では、3(2)c種450g、4(0)類(図版56-584)200gが多く、4(3)類91g、4(7)類88gもある。非意匠土器では、5(2)a種(図版56-583)2,942g、同d種819gが断然多い。石器には石鏃1点、打製石斧7点、削器4点、磨石、台石、および軽石製品各1点がある。

**時期:** 当初、土坑中央部の1層下部から大形の王冠型土器の破片が出土したため、これを帰属時期の根拠と考えた。その他には大きな破片は含まれていなかったが、多量の5(2)a種は、縄文中期末葉とみてよく、また少量ながら同時期の有文土器も伴うため、縄文中期末葉に属す土坑と考える。

## 5 墓跡

### SH 13 図版25、P L 19 位置: 3区 I X G 08 グリッド

**経過:** 本跡がある調査区南端に、土坑は分布せず、V層上面に分布する遺物集中SQ 29、焼土・炭化物集中SF 29・33等の調査後、小グリッドごとに包含層を掘り下げた。V層上部で巨礫を用いた遺構が現れ、形状から配石墓か石棺墓と推定した。直接切り合う遺構はなく、本跡確認面より上位に、前記のSQ・SFが薄く堆積していた。礫平面の実測・写真撮影、礫上面の断面実測後、北端の立石から中心を通る長軸断面線と、両側壁の礫を通る直交方向の短軸断面線を設定した。上面配石の扁平巨礫2個をはずし、側面礫が落下しないように半截して掘り下げ、墓坑北寄りに逆位の小形鉢形土器を確認し、側壁状の礫が墓坑底より上部にあることから、配石墓と判断した。南端は調査不可能であった。断面実測後、側面礫内面と鉢形土器下部10cmまで全掘して実測・撮影し、礫除去後に掘方を確認した。底面は、VI層の黄褐色シルトに達しておらず、埋土と外部の黒色土との識別は、不明瞭であった。配石墓の墓坑は、配石より一回り大きい例を念頭に調査したが、やや広げすぎた懸念は否めない。

**規模・形状:** 上面礫の外法は、長軸方向の現存長が南北約1.2m、東西約0.73mで、側面礫の配置は、楕円形を呈する。北端に立石があり、棒状礫の頂部約10cmが地上に出る。上面配石の下から底面まで深さ約30cmを測り、底面はほぼ平坦らしい。側面礫は長さ15~45cm、幅約20~30cm大板状礫の幅方向を縦位に埋置する。上面礫は長径40~50cm大の扁平礫2個を密接し、隙間に小形礫を詰める。墓坑は、現存長軸・短軸とも約1.2mを測る。

**埋土:** 黒褐色砂質シルト1層の単層である。土器細片少量と炭化物を少量含む。埋土と外部の差は不明瞭で、わずかな土色差と炭粒の含有量から識別した。

**遺物**：北側の大形扁平礫下、底面付近から6（6）類の小形鉢形土器（図版38～74）が逆位で出土した。遺物洗浄時に骨粉が確認されたため、確実に甕被葬である。ほかに本跡に伴う遺物はない。埋土中から土器片1.941gが出土したが、混入と考える。

**時期**：甕被葬に用いられた鉢形土器は堀之内2式後半期と見る。本跡以外に、墓跡と断定できる確実な遺構はない。成人一人を屈葬で埋葬する墓坑の一般的な規格が、長径約106cm、短径約59cmと算出された安曇野市北村遺跡の事例（埋文センター1993）を基準に、底面が平坦の土坑を抽出すると、次の例がある。

S K 180（I W T 05）形状：不整長方形、長径：145cm、短径：80cm、遺物：削器1点、磨製石斧1点

S K 181（I W T 05）形状：不整長方形、長径：153cm、短径：現存95cm

S K 183（I W T・X A 04・05）形状：不整長方形、長径：135cm、短径：100cm、遺物：打製石斧1点、凹石1点

S K 190（I X A・B 05・06）形状：不整楕円形、長径：150cm、短径：125cm、遺物：敲石1点、磨製石斧1点

S K 190（I X E 06）形状：楕円形、長径：125cm、短径：68cm

遺物には石器をあげたが、土器破片はS K 180・183等から出土している。縄文中期末葉の4（3）類と、5（2）a・d種が多く、後期に属す6群はない。これらは、I X E グリッドより東にまとまり、集落の西端部に位置する。調査中に北側からの湧水で形状が乱れる等条件が悪く、墓跡と断定できないが、その可能性を指摘しておく。

## 6 配石遺構

**SH2** 図版5・25、P L 19 位置：2b-1区 I X R 05 グリッド

**経過**：V層上面に集中分布する複数の扁平礫を検出し、SH2とした。SB5の北壁を切る。本跡の礫下約5cmに黄褐色砂のラミナ堆積が見られ、その下層にSB5の埋土があるため、SB5の埋没後に洪水があり、その後しばらく土が堆積した後にSH2が構築されたかと判断できる。

**規模・形状**：概ね北西—南東128cm、直交方向85cmの範囲に礫14点が、まとまって分布する。礫は敷石住居跡等と同様の扁平亜円礫を主体とし、間に小型礫が入り込む。平坦な地点であり、礫も高さがそろっている。礫が焼けておらず炭や焼土もないため、炉や炉石の廃棄場ではないと考える。下部に土坑や骨もないことから、配石墓でもない。

**埋土**：礫の取上げ後に截割りしたが、掘り方等は確認できなかった。埋土に該当する土層が存在しない。

**遺物**：土器は、5（2）d種363gが最多で、同a種160gが次ぐ。有文土器では、6（6）類類33g、6（3）・（10）類各14gがある。

**時期**：縄文後期前葉に属すと考える。単独の配石遺構か、敷石住居跡の一部等か判断できない。

**SH10** 図版5、P L 19 位置：2b-1区 I X T・Y A 07・08 グリッド

**経過**：I X S 07 グリッド周辺のV層の厚さは、約30～40cmである。多くの礫は、V層上面から約30cmの深さに最下点があり、V層下部に載る状況で検出し、大形の礫は、V層上面に頭を出していた。小グリッドごとに全体を掘り下げたところ、直径約20cm、長さ約50cmの凝灰岩と思われる柱状礫が立っており、人為的に設置された立石と考え、平面記録した。掘り下げの過程で掘込み等が確認できなかったため、トレンチは設定せず、断面記録はない。西側の礫が疎な部分にS Q 1・4がある。V層上面から約5cm下位にS Q 1、そこから約15～20cm下位にS Q 4がある。SB7の東壁がSH10西端と接しているが、明確な切合いは認められない。SB10・15の埋土上にSH10の礫があるため、SB10・15埋没後に敷された配石ということになる。

**規模・形状：**東西約10m、南北約1.5mの範囲に礫が散漫に分布する状態で、全体を明瞭な配石遺構とはいえない。柱状礫と接合する破片を同遺構内で検出した。礫密度がやや高い部分が、この立石から東側約2.5mの間と、SQ1・4、SB7・10・13と平面的に一部が重なる西側約3mの間にある。立石東西の礫分布は、層位的には近く、東西方向の列石のようにも見えるが、遺物包含層中での検出のため、埋没に時間差も想定され、同時存在とは判断できない。

**埋土：**掘込み等がないため、埋土はなかった。

**遺物：**土器は、112gと少量で、確実に伴う遺物はないが、分布範囲の遺物包含層からは、多量の土器が出土している。

**時期：**IXR07グリッド付近のSQ1およびSQ4は、礫分布域の西端に一部重なっている。SQ1は層位的にレベルが高いが、SQ4はほぼ同レベルから土器が出土している。SQ1・4は、いずれも潰れた1個体の土器を中心とする遺物集中で、SQ1は、6(6)類、SQ4は、5(4)類が断然多い。両者とも堀之内2式期の深鉢であり、本跡の形成期を示唆すると考える。

**SH9、SQ5・6** 図版7・25、PL22 位置：2a区 IYK・L04・05グリッド

**経過：**地区全体の面的掘り下げ中に、V層上面から約10cm掘下げたレベルで、まとまった礫と土器を検出した。SQ5は、礫分布範囲の西側にある。SQ6は、礫と重複し、巨礫に接して出土した注口土器(図版46-159)もこの遺構に属す。複数の遺構名を付けたが、同一面、同一空間にあり、一体と考える。IYL04・05グリッド西辺に土層観察ベルトを残して掘り下げた。SQ6は、断面観察で上層・下層および周囲の土と違いが認められなかったため、一部写真記録してベルトも掘下げた。南側の中期竪穴建物跡SB16の埋土上に広がっている。

**規模・形状：**南北173cm、東西125cmの範囲に、礫および土器が散漫に分布する。礫の配置に規則性は認められない。焼土や炭の分布も周囲と変わらなかった。掘込み等も確認できない。

**埋土：**掘込みがないため、埋土はない。

**遺物：**注口土器159は、底部を欠損し、無文である。堀之内2式に属す。SQ5は、6(6)類795gが断然多い。SQ6は、5(2)d種(図版39-79)1.012gが最多で、有文土器は、6(6)類131gがある。

**時期：**堀之内2式期の遺構と考える。礫は平面的に分布するが、意図的に敷設された遺構とは判断できない。

**SH15** 図版5 位置：3区 IXQ・R06・07グリッド

**経過：**炉跡とした土坑で記したとおり、V層中で検出した、埋設土器を伴う石囲炉SH14の下部から、敷石状の平石を複数検出したため、SH15を付番した。SH14に切られる。平面図化のみ行った。

**規模・形状：**SH14の炉石外法は南北82cm、SB5上端までの東西現存長は、66cmを測る。SH15の敷石状平石の範囲は、SH14の南北におよび、南北186cm、東西85cmである。南側の平石は、最大長60cmと大きい。

**埋土：**V層下部にあり、埋土は識別されていない。

**遺物：**遺物は出土していない。

**時期：**炉跡SH14の埋設土器は、6(2)類の原山類型に属し、称名寺式新段階から堀之内1式古段階頃に現れるため、本跡は当該時期かそれ以前と考える。敷石住居跡とすれば本遺跡で最古の事例となるが、判断するには根拠が不足している。

## 7 遺物集中

1 個体あるいは複数個体と見られる土器が集中的に出土した部分に命名した。ほかに骨・炭化種実の集中部分に命名したものもある。遺物が主体であり、掘込みが認められない平面的な小範囲の分布状況のため、遺構埋土はない。遺物の分布範囲は、不整形を呈するものが多く、規模は、分布範囲を記載する。遺物の遺存状態、分類・時期等も同じ項目に記す。また、1つの小グリッド程度の範囲に複数個体群在するもの、1m内外の近距離に隣接するものは、遺構番号の順序に拘わらずまとめて記述する。

## SQ2 図版8 位置：2a区 IIUA 06グリッド

経過：IIUA 列付近から東は、V層の土色が淡く砂質に変わる。また、V層の上に層厚約20cmの灰黄褐色砂層が堆積し、その砂層上にV層とは別の、層厚約10~20cmの黒褐色砂質腐食土層がある。SQ2はV層より上の灰黄褐色砂層の下部で検出し、遺構の掘込みはなく、砂層中から土器を集中して検出した。規模・形状・遺物：遺物の出土は、長径44cm、短径37cmの範囲に広がる。土器は、913gが出土した。5(2)d種1個体の土器の一部が潰れた状態で面的に広がり、844gを測る。有文土器には、6(8)類(図版57-59)69gがある。

## SQ8 図版8 位置：2a区 IIUB 06・07グリッド

経過：約1m西側に位置するSQ2と同じく、V層より上の灰黄褐色砂層の下部で検出した。規模・形状・遺物：遺物の出土は、長径44cm、短径24cmの範囲に広がる。同一個体の土器破片と数点の礫が散在して分布する。礫は、石圍炉に用いるような棒状の礫が目立つが、人為的な配置は認められない。土器は、総重量66gと少ない。5(2)d種1個体の部分破片54gと、6(8)類12gがあるが、図示できる資料はない。

## SQ7 図版7、PL20 位置：2a区 IYL・M05・06グリッド

経過：V層上面から約20cm掘り下げた深さで、土器片群が面的に広がることを確認し、遺物集中とした。V層の中層にある遺物集中である。調査時には他の遺構との切合いは確認できなかったが、後に下層にSB16が存在することが判明した。縄文中期末葉に属するSB16-Eの埋土上に広がっている状況で、これより新しい。

規模・形状・遺物：遺物の出土は、長径172cm、短径61cmの範囲である。複数個体の土器が認められる。総重量は2,661gである。有文土器では、6(5)類733gが最多で、鉢形土器(図版38-76)がある。6(6)類665gがこれに次ぎ、深鉢形土器(図版57-606)がある。非意匠土器では5(4)類277g、5(2)d種220g等がある。4(4)類225gはSB16に帰属する可能性がある。

## SQ5・6 図版7 位置：2a・2b-1区 IYK・L04・05グリッド

経過：配石遺構SH9の調査経過で記したとおり、V層上面から掘り下げたところ、同じ深さで土器片群が集中して出土した。遺物包含層の中層に広がる遺物集中である。SQ5はIYK05グリッドを中心とし、約50cm東のL05側にSQ6が位置する。調査時には他の遺構との切合いは確認できなかったが、後に下層からSB16が検出された。SQ6は縄文中期末葉に属するSB16-Wの埋土上に広がり、これより新しい。規模・形状・遺物：遺物の出土は、SQ5が径90~89cm、SQ6が径82~65cmの範囲に広がる。SQ5の土器総重量は841gで、軽白胎土の6(6)類(図版57-605)795gが大部分を占める。SQ6の土器総重量は1,684gで、5(2)d種1、012gが断然多く、深鉢形土器(図版39-79)が復元できた。有文土器には、堀之内2式6(6)類131gがある。ほかに磨石1点がある。

## SQ11 図版6、PL20 位置：2b-1区 IYI07グリッド

経過：V層上面から約15cm掘り下げた深さで、1個体の土器が潰れた状態で出土した。粘土採掘坑SK156の北壁際埋土の上に位置し、SK156埋没後に本跡が残されたと考えられる。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、径70～72cmの範囲に広がる。関係する礫等は認められない。土器総重量は4,002gである。5(2)d種の同一個体(図版39-81)3,911gの破片が多数集中し、相当数が接合した。無文土器では最も高い遺存率である。有文土器では、6(6)類40gがあり、図版57-607を図示した。

**SQ10** 図版6 位置：2b-1区 IYG06グリッド

**経過：**S B 12東壁の埋土3層上面を掘削中に、土器片が集中する部分を確認した。S B 12を掘り込む土坑等のプランは確認できず、単独の遺物集中とした。S B 12埋土3層にある礫集中範囲に含まれるため、埋没過程で生じた窪みに礫と共に投棄された土器群と思われる。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、長径47cm、短径35cmの範囲に広がる。土器総重量は1,108gで、6(6)類846gが断然多く、図版39-80を図示した。ほかに6(4)類125g、5(2)d種122gがある。

**SQ9** 図版5、PL20 位置：2b-1区 IYA・B07グリッド

**経過：**敷石住居跡S B 1の敷石取り外し後、V層を精査したところ、最上面より約20～30cm下層の面で土器片の集中を確認した。土坑等のプランは同面で確認できず、単独の遺物集中として調査した。平面的にはS B 6南壁と接するが、S B 6埋土直上層から検出されているため、切合い関係はないと判断した。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、長径103cm、短径83cmの範囲に広がる。土器集中部分の東辺に人頭大の礫があるが、人為的な配置とは考えられない。土器総重量は976gで、5(2)d種366gが最多、5(4)類110gが次ぐ。有文土器では、6(7)類275gが最多で、図版38-77を図示した。

**SQ3** 図版5、PL20 位置：2b-1区 IXS05グリッド

**経過：**V層下面から約5cm上を中心に、土器片群を面的に検出したため、SQ3とした。土器片に伴って大形礫数点も伴って検出した。土器片が面的に広がるのみで、掘込み等は確認できなかった。土器片取り上げ後に、約5cm掘下げると、VI層となった。整理時に掘立柱建物跡S T 4の柱穴としたS K 1・2と平面的に重なるが、関連は明確ではない。縄文後期に属す堅穴建物跡S B 5・8と近接するが、本跡の上層を切る遺構であろう。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、長径167cm、短径42cmに広がる。1個体以上の土器を潰れた状態で検出した。土器総重量は3,688g、4(6)類3,311gが大部分を占め、深鉢形土器図版39-78を復元した。別個体の破片図版57-600～602もある。

**SQ1・4** 図版5 位置：2b-1区 IXR・S07グリッド

**経過：**本跡が位置する2区西端付近は、V層が約20～30cmと薄い。V層上面から全体的に約5cm掘り下げたところで、1個体の土器が潰れた状態で出土したため、SQ1として平面記録した。これを取り上げ後さらに掘削し、約10～20cm下層のV層下部から土器片の面的広がりを検出し、SQ4とした。周辺を精査したが、掘込みや床等が確認できなかったことから、ベルトを設けることなく遺物を取り上げた。

SQ1・4は分布範囲が平面的に半分以上重なる位置にあるが、深さの差が新旧関係を示す。さらにS B 7の東縁辺、S B 10・13の北縁辺が土器分布範囲に接するように位置するが、明確な切合いはない。S B 10・13の検出層位および掘込みは深く、SQ1が新しい。S B 7の床面のレベルはSQ1より約20～30cm深い。掘込み面が明確ではないことから、層位的な新旧関係は決められない。SQ4はS B 5の南縁と接する位置にある。斜面下部側の南縁は、もともと不明瞭であり、床面が失われている可能性があるため、新旧・同時期いずれの可能性もある。S B 7の床面と周囲のV層下面とのレベルがほぼ同じで、明確にプランが把握できたのは2区西壁と北縁付近だけである。SQ4と重なる部分の遺構境界は不明瞭であり、切合いが判然としない。S B 10はSQ4取り上げ後に検出された床面が深い遺構であり、S B

7に切られている。SQ4との関係は、層的にSB10が古い可能性が高い。SH10西側の礫分布範囲は、SQ4と重なっている。両者とも掘込みがないため、切合いの把握は難しい。決め手はないが、ほぼ同じレベルにあり、同時に形成された可能性がある。

**規模・形状・遺物**：遺物の出土は、SQ1が長径99cm、短径46cmの範囲に広がる。土器総重量は2,128g、6(6)類1,272gが最多であり、大形深鉢図版38-75を図示した。次いで5(2)d種682g、5(4)類140gがあり、図版57-597-598を図示した。SQ4は、長径112cm、短径84cmの範囲から複数個体の土器が潰れて出土した。土器総重量は、2,936gである。5(4)類1,681g、6(4)類108g、6(3)類100g等が出土し、図版57-603-604を図示した。

#### SQ16 図版4、PL20 位置：3区 I X N・O 06・07グリッド

**経過**：V層の上層で、複数個体の土器が潰れた状態で出土した。掘込みは見られず、平面記録して取り上げた。下層から堀之内I式期の竪穴建物跡SB26を検出したが、本跡は、これがほぼ埋没した後に残った窪みに投棄された土器群と推定する。出土土器にも明確な時期差がある。

**規模・形状・遺物**：遺物の出土は、長径173cm、短径138cmの範囲に広がる。土器の総重量4,382gを測る。5(2)d種1,140g、5(4)類930gが多い。有文土器では、6(6)類900g、軽白胎土の同類720gがあり、図版39-82を図示した。

#### SQ17・26 図版4 位置：3区 I X M 05-07・N 06グリッド

**経過**：V層上面から約10cm掘り下げた深さで、複数個体の土器が潰れた状態で集中的に出土したため、SQ17を付番した。この範囲から骨が数点まとまって出土した部分があり、SQ26とした。掘込みは確認できなかったため、平面記録して遺物を取り上げた。調査時には切り合う遺構は見えなかったが、下層から根固石がある土坑SK283-342等を検出し、整理時に掘立柱建物跡ST3を付番した。本跡が後出と考える。

**規模・形状・遺物**：遺物の出土は、SQ17が、長径246cm、短径187cmの範囲に広がる。土器総重量は、2,673gである。有文土器は、6(4)類500g、6(6)類546gが多く、図版40-86を図示した。ほかに石神文様を描く6(11)類の蓋形土器が伴うが、図版39-85は同類で最も遺存状態が良い。非意匠土器では、胴部無文5(2)d種525g、5(4)類400gが多い。SQ26は、径37~24cmの遺物出土範囲から、焼けていないと思われる骨片が出土した。土塊状態で取上げたが、遺存状態不良であった。

#### SQ27・32 図版 位置：3区 I X M 07・08グリッド

**経過**：V層上面から約10cm掘り下げた深さで、複数個体の土器が潰れた状態で集中的に出土したため、SQ27を付番した。隣接して同じ層位から、黄白色を呈する未焼成粘土塊の可能性のある土塊を検出したため、別にSQ32を付番した。掘込みはなく、調査時には切り合う遺構は確認できなかったが、下層から堀之内I式期に属す竪穴建物跡SB27を検出した。二つの遺物集中は、SB27の埋没後に残った窪みに投棄された遺物と推定する。SQ27との遺物の時期差も明らかである。

**規模・形状・遺物**：遺物の出土は、SQ27が径70~72cmの範囲に広がる。土器総重量は、1,864gであり、6(4)類429g、6(6)類184g、6(7)類140g等があり、図版39-83-84を図示した。非意匠土器では、5(2)d種296g、5(3)b種326g等が多い。凹石1点もある。SQ32とした粘土状遺物は、分析していない。

#### SQ12・13・14・15 図版4、PL20 位置：3区 I X K・L 05・06グリッド

**経過**：調査区の高所に位置する。V層上面から約5cm掘り下げた深さで、比較的狭い範囲に集中して炭化したトチノキ・クリ等の種実が現れた。形状を留めた種実が目立ったため、遺物集中として付番した。掘込みは確認できず、平面記録し土塊状態で種実を取り上げた。整理時に水洗して種実、炭化材、土器、石

器を採取した。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、S Q 12 が径 45～27cm、S Q 13 が径 38～39cm、S Q 14 が径 85～83cm、S Q 15 が径 104～103cm の範囲に広がる。関係する礫等はない。炭化種実主体の遺物集中のため、土器は少量で、総重量は、S Q 12 が 181 g、S Q 13 が 241 g、S Q 14 が 38 g、S Q 15 が 577 g である。いずれも 6 (4)・(6) 類、5 (2) d 種、5 (4) 類が多い。図示した有文土器は、S Q 13 が図版 57 - 608、S Q 14 が同 609、S Q 15 が同 610・611 である。いずれも 6 (7) 類に属す。S Q 12 から石鏃、S Q 13 から削器各 1 点も出土した。

種実・樹種同定の結果、S Q 12 からは、トチノキ多数とクリ少数の種実、クリ、オニグルミ、カツラ、ケンボナシの樹種が同定された。S Q 13 からは、トチノキ多数とオニグルミ、ササゲ属少数の種実、オニグルミ、クリ、フサザクラの樹種が同定された。

#### S Q 25 図版 3 位置：3区 I X J 04・05 グリッド

**経過：**調査区の高所に位置する。V層上面から約 10cm 掘り下げた深さで、小範囲に骨と炭化物が集中する部分 2 か所を検出した。骨と炭化物間に若干の距離があったが、一つの遺物集中として付番した。掘込みは見られず、平面記録して遺物を取り上げた。調査時に切り合う遺構は見られなかったが、下層から根固石をもつ土坑 S K 216・241・286・299 を検出し、整理時に掘立柱建物跡 S T 2 と認定した。本跡は、平面的にはこのプラン内に位置するが、これに伴うか後出かは明らかではない。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、骨出土部分が径 31～18cm の範囲に、炭化物出土部分が径 25～22cm の範囲に広がる。関係する礫等は認められない。土器は、6 (4) 類 5 g が全量である。

#### S Q 31 図版 3 位置：3区 I X I・J 08 グリッド

**経過：**V層上面から約 10～15cm 掘り下げた深さで、複数個体の土器が潰れた状態で出土した。調査区南壁にかかっていたため断面観察したが、掘込みは見えず平面記録して遺物を取り上げた。後に下層から堀之内 1 式期の竪穴建物跡 S B 28 を検出し、本跡が埋土上部に位置することが判明した。

**規模・形状・遺物：**遺物出土範囲は、東西 79cm、南北は不明である。拳大から人頭大の礫が散在するが、人為的な配置とは認められない。土器は総重量 552 g であり、5 (2) d 種 309 g、6 (4) 類 147 g 等があり、図版 57 - 621 を図示した。

#### S Q 30 図版 3 位置：3区 I X H 08 グリッド

**経過：**V層上面から約 10cm 掘り下げた深さで、1 個体の土器が潰れた状態で出土した。調査区南壁に掛かっていたため断面観察したが、掘込みは見えず平面記録して遺物を取り上げた。切り合う遺構はない。

**規模・形状・遺物：**遺物出土範囲は東西 46cm、南北は不明である。土器は、総重量 2,299 g である。6 (7) 類の大形深鉢が 2,084 g を占め、この個体を図示した (図版 40 - 87)。ほかに同類の図版 57 - 619、鉢形土器同 620 がある。

#### S Q 28 図版 3 位置：3区 I X F 07 グリッド

**経過：**V層上面から約 30～40cm 掘り下げた深さで、複数個体の土器破片が集中して出土した。掘込みは見られず、平面記録して遺物を取上げた。後に、VI層直上で巨礫が入った浅い土坑 S K 320 を検出した。整理時に本跡と平面的にはほぼ重なることを確認し、土坑の時期が、本跡出土土器と同時期か先行することが明らかとなった。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、径 81～73cm の範囲に広がる。拳大礫が数個散在するが、人為的な配置ではない。土器は、総重量 2,056 g である。4 (4) 類 1,609 g が最多、4 (7) 類 115 g、非意匠土器では、5 (2) 類で a 種 83 g、b 種 96 g、c 種 21 g、d 種 35 g の各種がそろそろ。図版 57 - 616・617 を図示した。4 (4) 類は、隆起線で渦巻文を描く大形の鉢形土器である。縄文後期初頭土器がまと

まっている。ほかに凹石1点がある。

**SQ 29 図版3 位置：3区 I X F・G 08 グリッド**

**経過：**調査区南壁近くに位置する。V層上面から約5cm掘り下げた深さで、複数個体の土器破片を集中して検出した。同レベルで配石墓SH13の上面配石を検出し、本跡が掘方の上部に広がっている。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、長径109cm、短径45cmの範囲に広がる。土器は、総重量1,196gである。非意匠文が多く、5(4)類360g、5(2)d種245g、5(3)b種223gがある。有文土器には、6(7)類150g、6(6)類85gがあり、図版57-618を図示した。

**SQ 20・21・22・23・24 図版3 位置：3区 I X C・D 05-07 グリッド**

**経過：**V層上面から約10cm掘り下げた深さで、1小グリッド程度の範囲に骨が散在していた。それぞれ約50-100cmの距離があったため、個別に付番した。掘込みはなく、平面記録して土塊状態で取り上げた。**規模・形状・遺物：**遺物の出土範囲は、SQ20の長径50cmを最大に、10cm弱までの広がりである。被熱によって白化したものは見当たらない。遺存状態は不良であった。SQ24以外に土器は含まれていない。SQ24出土土器は、総重量869gで、5(2)類a種272g、同d種252g、6(3)類35g、6(6)類36g等である。骨の帰属時期も縄文後期前葉と考える。

**SQ 19・33・34・35 図版2、PL21 位置：3区 I X A・B 07 グリッド**

**経過：**V層上面から約10cm掘り下げた深さで、複数個体の土器が潰れた状態で出土し、これをSQ19とした。平面記録して土器を取り上げ後、さらに掘削を進めたところ、各々2-3個体と見られる土器が潰れた状態で出土し、それぞれのままとまりにSQ33・34・35を付番した。SQ19から最下部のSQ34・35まで、約45cmのレベル差があり、土器の時期も全く異なる。切り合う遺構はない。

**規模・形状・遺物：**遺物の出土は、SQ19は径68-62cmの範囲に広がる。土器の総重量は1,424gである。6(6)類547g、6(4)類383gが多く、図版57-612・613を図示した。堀之内2式期に属す。SQ33の遺物は、径84-47cmの出土範囲に広がり、土器は総重量2,996gである。3(2)c種2,765gには、火焰型土器(図版40-88)と、胴部縄文の王冠型の土器(図版40-89)が含まれていた。ほかに削器1点がある。SQ34の遺物は、86-53cmの出土範囲に広がる。土器総重量は1,545gである。火焰型土器(図版40-91)と大木8b式土器(図版40-90)が含まれていた。SQ35の遺物は、136-72cmの出土範囲に広がる。土器総重量は330gと少なく、3(2)b種150g、3(2)c種50gであった。SQ33-35は縄文中期中葉後半から後葉初頭期に属す。

南・西側に隣接するIWT・IXA・B07・08グリッドでは、単体と見られる狭い分布範囲の土器出土状態であったため、遺物集中とせず付番取り上げた土器が多い。時期はSQ33-35と同時期である。調査区の低所に位置して傾斜が強く遺構がない地区であり、一連の廃棄場所と考える。

## 8 焼土・炭化物集中

調査区全体にわたって、遺物包含層V層には、通常の遺跡より多くの炭化物が含まれていたが、きわだつて炭化物あるいは焼土が集中する部分に命名した。遺物集中SQと同様に、掘込みが認められない平面的な小範囲の分布状況であり、焼土・炭化物の層厚は5cm前後と薄い。共通の調査手順として、サブトレンチにより層厚と掘込みがないことを確認し、炭化物等を採取しているため、原則記載は省略する。隣接して複数群在する遺構については、遺物集中と同様にまとめ、形状・規模の記載も遺物集中と同様とする。土器、石器等は極めて少なく、炭化物が主体であるため、分析鑑定委託した結果、樹種・種実が同定された遺構については、これを記す。

**SF5 図版7 位置：2a区 I Y L・M 06・07 グリッド**



**経過:** V層最上面から約10~20cm掘削し、焼土と炭化物が広がる範囲を確認した。周囲に竪穴建物跡のプランが確認できなかったため、炭化物・焼土集中とした。長軸を通るサブトレンチで断面観察したが、切合いは確認できなかった。本跡の調査後、約20cm下層で検出した縄文中期末葉に属すSB16-Eと平面的に重なるが、埋没後に本跡が形成されたと考える。

**規模・形状・遺物:**炭化物・焼土は、径104~56cmの範囲に広がる。埋土はV層と識別できず、焼土は薄く断続的である。土器は総重量468gであり、6(7)類355g、5(4)類70g等である。前者の図版40-92を図示した。この種の遺構出土土器として、唯一の復元個体である。ほかに6(5)類の図版57-623がある。

#### SF4 図版7 位置:2a区 IYK06グリッド

**経過:**V層上面から約10~20cmの深さまで掘り下げて焼土面を検出し、炭化物・焼土集中として記録した。V層の上部に当たり、周囲からは別の遺構を検出しなかった。約50cm下層で検出し、縄文中期末葉に属すSB16-Wと平面的に重なるが、埋没後に本跡が形成されたと考える。

**規模・形状・遺物:**薄い焼土面であり、径117~55cmの範囲に広がる。土器は総重量400gであり、6(6)類185gが最多である。図版57-626・627と、6(2)類の図版57-625を図示した。

#### SF27 図版4、PL21 位置:3区 IXM05グリッド

**経過:**V層上面から約10cm掘り下げた深さで、白化した骨片を交える炭化物と、約3~5cm大の焼土塊が集中して出土した。グリッド境界で断面観察し、掘込みがないことを確認して平面記録し、炭化物を採取した。更にグリッドを掘り下げ、VI層上面でSK317を検出した。根固石がある土坑SK256・265・283・311・342を柱穴とする掘立柱建物跡ST3の中央部に当たるが、本跡の検出面は上層にあり、関係は明らかではない。

**規模・形状・遺物:**炭化物・焼土は、径71~35cmの範囲に広がる。土器の総重量は247gで、5(2)d種166g、5(4)類35g、6(6)類30g等がある。

#### SF9 図版4 位置:3区 IXL04・05グリッド

**経過:**IV層を除去したV層上面で炭化物の集中部分を確認した。調査区北壁に掛かる高所にあり、排水溝を兼ねたサブトレンチで断面観察し、薄い炭化物層のみで掘込みがないことを確認し掘り下げた。下層からSK205・314等の土坑を検出したが、関連は明らかではない。

**規模・形状・遺物:**炭化物の広がる範囲は、東西径121cm、南北径108cm以上である。礫等は認められず、遺物は出土しなかった。

#### SF8 図版3・4 位置:3区 IXJ・K04・05グリッド

**経過:**SF9の約50cm西側、同じ検出レベルにあり、同様な経過で調査した。本跡の下層でVI層上面からSK300・389等の土坑と、掘立柱建物跡ST2の柱穴SK299等を検出したが、関連は明らかではない。

**規模・形状・遺物:**炭化物の広がる範囲は、東西128cm、南北170cm以上である。礫等はなく、遺物は出土しなかった。

#### SF16・17 図版4 位置:3区 IXX・L05・06グリッド

**経過:**調査区の平坦面から傾斜面に係る部分にある。IV層を除去したV層上面で炭化物の集中部分を確認し、断面観察後掘り下げた。トチノキ等の炭化種実を多出した炭化物集中SQ13・14とは、約5cmのレベル差で接近している。後に検出した敷石住居跡SB24の北壁付近に当たる。さらにVI層上面で、石棒が出土した土坑SK411等を検出したが、いずれとも関連は明らかではない。

**規模・形状・遺物:**炭化物が広がる範囲は、SF16が径66~53cm、SF17が径59~39cmである。関連する礫等は認められず、遺物は出土しなかった。

## SF 34 図版4 位置：3区 IXL06グリッド

経過：傾斜面に位置するV層上面で、炭化物の集中部分を確認し、断面観察で掘込みがないことを確認し、平面記録して掘り下げた。下層ではVI層上面で土坑SK396を検出したが、関連は明らかではない。

規模・形状・遺物：炭化物の広がる範囲は、径76～49cmである。関連する礫等はなく、遺物は出土しなかった。

## SF 15・28・32 図版3 位置：3区 IXJ・K05・06グリッド

経過：調査区の平坦面から傾斜面に係る部分にある。V層を約10cm掘り下げ、炭化物の集中部分を確認しSF15を付番した。断面観察で掘込みがないことを確認し、平面記録して掘り下げた。トチノキ等の炭化種実を多出した炭化物集中SQ12と隣接する。小グリッド掘り下げを進めたところ、約10cm下層でSF28、さらに約5cm下層でSF32を検出し、SF15と同様に調査した。掘立柱建物跡ST2の柱穴とした、根固石がある土坑SK322等の土坑をVI層上面で検出したが、いずれとも関連は明らかではない。

規模・形状・遺物：SF15の炭化物が広がる範囲は、径55～41cm、SF28は、径52～40cmで、いずれも遺物は出土しなかった。SF32の炭化物範囲は径58～52cm、土器は、総重量83gで、5(2)d種45g、6(3)・(6)類各10g等であった。

## SF 18・31・35・36 図版3 位置：3区 IXJ06・07グリッド

経過：V層の上面から約5cm掘り下げたところで、焼土と炭化物の集中部分を検出し、SF18を付番した。断面観察して掘り下げを進め、約50cm下層でSF31、さらに20cm前後下層のVI層上面付近でSF35・36を検出した。いずれも掘込みは見られず、平面記録した。下層から掘之内I1期の竪穴建物跡SB28を検出した。本跡は北東隅に位置するが、いずれもSB28の埋没後に、ほぼ同じ地点で時間差をもって形成されたものと推定する。

規模・形状・遺物：焼土・炭化物が広がる範囲は、SF18が径86～90cm、SF31が径38～23cm、SF35が径54～49cm、SF36が径84～45cmである。土器はSF18のみ出土し、総重量は300gで、5(2)d種166g、5(4)類40g、6(7)類83g等である。

## SF 23・24・25・26 図版3 位置：3区 IXI・J07・08グリッド

経過：調査区南側の低所に位置する。V層上面から約10cmの深さで群在する炭化物集中を検出した。断面観察で掘込みがないことを確認し、平面記録して炭化物を採取しながら掘り下げた。拳大から人頭大の礫が散在するが、人為的な配置とは認められない。本跡の下層から掘之内I1期の竪穴建物跡SB28を検出し、焼土・炭化物集中はいずれも埋土上部に分布する。最上部のSF23と最下部のSF26の間に約60cmのレベル差があり、SB28の埋没過程で残った窪地に、時間差をもって廃棄された炭化物と推定する。

規模・形状・遺物：炭化物が広がる範囲は、SF23が径105～61cm、SQ24が径53～49cm、SQ25が径139～91cm、SQ26が径173～84cmである。SF23の土器は総重量870gである。5(2)d種365gを最多に、同b種234g、5(4)類100g、有文土器は、6(6)類84g、6(4)類41g等が出土した。SF24・25からは10g未満、SF26からは出土しなかった。

## SF 10・11・12 図版3 位置：3区 IXH05・06グリッド

経過：平坦地から傾斜地に掛かる地点にある。V層上面から約10cm掘り下げた深さで検出した。断面観察で掘込みがないことを確認し、平面記録して掘り下げた。調査時には、切り合う遺構は見えなかったが、下層からSB30、そのプラン内にある土坑SK306・343等を検出した。本跡との関連は明らかではない。

規模・形状・遺物：炭化物が広がる範囲は、SF10が径94～44cm、SF11が径48～39cm、SF12が径53～56cmである。いずれも同一小グリッドにあるため、遺物は3遺構まとめて取り上げた。SF10・11・12の土器の総重量は324gである。5(2)d種135g、5(4)類50g、5(2)a種30g、

有文土器は、6(3)類 31g、6(6)類 20g等が出土した。

**S F 19・20** 図版3 位置：3区 I X H 06・07グリッド

経過：S F 23・25の西側約1mの位置にある。V層上面から約10cm掘り下げた深さで検出した。掘込みはなく、薄い炭化物層である。下層で検出した堅穴建物跡S B 28の北西隅に位置する。S F 35・36同様に形成された遺構の可能性がある。S B 31の範囲内にも当たるが、関係は明らかではない。

規模・形状・遺物：炭化物が広がる範囲は、S F 19が径61～40cm、S F 20が径61～47cmに広がる。S F 19から6(10)類が4g出土したのみである。

**S F 21・22・29・30** 図版3、P L 21 位置：3区 I X H・I 07・08グリッド

経過：調査区の斜面地低所に位置し、S F 25・26の西側に近接する。S B 28の埋土上部にあり、S F 25等と同様に形成された遺構と推定する。V層上面から約5cm掘り下げた深さで、密集する炭化物集中を検出した。S F 29は範囲が広く、多量の焼土も伴っている。礫が散在するが、人為的な配置はない。最上部のS F 21から最下部のS F 30間でレベル差は30cm前後と小さい。掘込みは見られず、平面記録後、多量の炭化物を含む掘削土を採取した。整理時に土壌を水洗して種実、炭化材、骨等を採取した。

規模・形状・遺物：炭化物・焼土が広がる範囲は、S F 21が径64～52cm、S F 22が径101～60cm、S F 29が径332～123cm、S F 30が径92～68cmである。S Q 29の土器総重量は685gである。5(2)d種 460gを最多に、有文土器は、6(7)類 86g、6(8)類 15g等がある。ほかに砥石1点が出土した。その他の遺構では、土器がわずかししか出土していない。

種実・樹種同定の結果、S F 21では、トチノキ多数とクリ・ササゲ属少数の種実、コナラ属コナラ節、オニグルミ、ヤナギ属、クリ、エノキ属、モクレン属、クスノキ科、ノリウツギの樹種が同定された。S F 29では、トチノキ・オニグルミ多数とクリ少数の種実、カエデ属の樹種が同定された。S F 30では、トチノキ・オニグルミ多数とササゲ属少数の種実が同定された。

**S F 33** 図版3、P L 21 位置：3区 I X F 08グリッド

経過：調査区低所の南壁に掛かり、V層上面で検出した。平面記録して遺物を取り上げた。配石墓S H 13に近接するが、切り合う遺構はない。

規模・形状・遺物：炭化物が広がる範囲は、南北40cm以上、東西107cmを測る。出土土器はわずかである。オニグルミ・クリ・トチノキ各少数の種実と、ブナ属が同定された。

**S F 13・14** 図版3 位置：3区 I X E 06グリッド

経過：斜面地上部に位置する。V層上面から約10cm掘り下げた深さで、炭化物集中を検出した。掘込みはなく、平面記録して掘り下げた。掘削時に切り合う遺構はなかったが、整理時に掘立柱建物跡S T 1の柱穴とした土坑S K 273・274を下層から検出した。当該遺構との関係は明らかではない。

規模・形状・遺物：炭化物が広がる範囲は、S F 13が径40～16cm、S F 14が径71～33cmである。遺物はS F 13・14あわせて取上げた。土器の総重量は634gである。5(2)d種 260g、同a種 135g、有文土器は、6(1)類 30g、6(3)類 20g等がある。ほかに石鏃、磨製石斧各1点が出土した。

## 第4節 遺物

### 1 概要

2か年の発掘調査によって出土した、本遺跡の各年度調査終了時点での遺物量は、2015年度は138箱、2016年度は123箱、合計261箱であった。本格整理時での、土器、土製品、石器、石製品の計量・計数の結果は、各遺物種別の報告冒頭に記した。

土器は縄文早期から後期にわたっている。各時期の内容は、早期は押型文土器、絡条体瓦痕文土器、前期は羽状縄文系土器、竹管文系土器、中期は仮称五丁歩式、馬高式、榎倉式、沖ノ原Ⅰ・Ⅱ式土器、加曾利EⅢ・Ⅳ式、後期は称名寺式、三十稲場式、南三十稲場式、堀之内Ⅰ・Ⅱ式、加曾利BⅠ式である。これらと同時期の、縄文・捺糸文・条線文・無文の、意匠がない土器も多量である。このうち、中期中葉から土器量が急増し、中期末葉から後期前半が圧倒的多数を占める。土器量の変化は、検出した竪穴建物跡、敷石住居跡の時期とも整合する。

土製品には、土製円板、ミニチュア土器、土偶、少数種の土製耳飾、土製垂飾、匙形土製品、貝輪形土製品、簪形土製品がある。

石器の器種には、剥片石器では未製品を含む石鏃、石槍、石錐、石匙、搔器、削器、打製石斧、磨製石斧がある。礫塊石器では磨石、特殊磨石、凹石、敲石、石皿、台石、多孔石、石錘、砥石、研磨礫、石器製作用ハンマーがある。多数を占める器種は、搔器・削器類、石鏃、打製石斧、磨石・凹石類である。

石製品には、軽石製品、石製垂飾、管玉、玦状耳飾、石棒、三角壊形石製品、立石、丸石、有孔石製品、異形礫がある。軽石製品は多数に上り、三角壊形石製品は希少である。

このほか、焼成粘土塊、骨角器、アスファルト塊がある。着柄部にアスファルトが付着した石鏃、磨製石斧もある。アスファルト関係資料は、長野県では希少である。

### 2 縄文土器

#### (1) 縄文土器の出土量と分類

縄文土器と土製円板、土偶、焼成粘土塊等の土製品は、総重量1,469,370 g、破片総点数108,580点が出土した。遺構出土分は、414,963 g、24,874点、遺物包含層出土分は、1,054,407 g、83,706点である(第11表)。このなかには、分類不可能、あるいは疑問の余地がある資料28,282 g、1,756点が含まれる。これと土製品5,042 gを除外した縄文土器の総重量は、1,436,046 gとなる。重量比によるこの内訳は、第1群：早期が8,402 g (0.6%)、第2群：前期が3,699 g (0.3%)、第3群：中期前・中葉が46,474 g (3.2%)、第4群：中期後葉の文様意匠がある土器が134,799 g (9.4%)、第5群：中期から後期の複数時期にわたる文様意匠がない土器が939,569 g (65.4%)、第6群：後期前半の文様意匠がある土器が303,101 g (21.1%)である。端数処理による2 gの差は無視する。

約3分の2を占める第5群土器のうち、2類a種：縄文、b種：捺糸文、c種：条線文土器の総重量は272,233 gで縄文土器全体の19.0%に上る。これらのうち、a種は新潟県では縄文中期中葉から後期前葉まで、文様意匠がない粗製土器として継続する。とくに中期末葉の第4群4類沖ノ原Ⅰ式、5類沖ノ原Ⅱ式の系統上にある中期最終末から後期初頭前半の三十稲場式前段階の土器、後期初頭後半の第6群2類三十稲場式には、a・b・c種とも地文部分にも、粗製土器としても盛んに用いられたことが明らかになっている。また、長野県では、第5群2類b種はほとんど存在せず、a・c種は、中期末葉の第4群3・4類から、後期初頭の第6群1類の称名寺式前半まで存続し、以後はd種の無文粗製土器が多量に用いら

第11表 遺構・遺物包含層出土器集計表

分類記号	分類名	50年代片数 全合計	50年代 全合計	SK-50 SF-50 片数 全合計	SK-50 SF-50 片数 全合計	遺構土器 破片数 全合計	遺構土器 重量 全合計	IV-DX 3区 破片数 全合計	IV-DX 3区 重量 全合計	IV-U 2区 破片数 全合計	IV-U 2区 重量 全合計	IV-D 2区 破片数 全合計	IV-D 2区 重量 全合計	IV-D 2区 破片数 全合計	IV-D 2区 重量 全合計	全体 破片数 合計 (片数)	全体 重量 合計 (g)	
111)	押型文	0	0	1	14	1	14	9	108	14	130	23	238	24	282			
121)	幾何文	78	984	46	346	124	1,330	146	2,152	274	4,668	420	6,820	544	8,150			
20)	滑石文	33	261	0	46	7	757	308	2,349	24	400	320	2,758	410	3,515			
22)	竹葉文	3	15	0	0	2	15	2	15	34	111	124	124	11	184			
3)		0	0	4	555	4	650	5	81	0	0	5	81	9	798			
30)	中期前葉	4	90	3	30	7	120	3	20	16	275	19	290	26	415			
302)	302)	165	2,174	34	510	199	2,684	610	8,063	211	3,574	481	11,837	1,020	14,281			
302a)	大木山系	5	116	0	0	5	116	48	1,237	0	0	88	1,237	93	1,263			
302b)	高野系	81	1,090	3	150	84	1,240	128	2,520	0	0	128	2,820	202	4,160			
322a)	北畑・玉垣系	49	2,266	14	4,439	133	8,705	376	19,941	2	215	379	16,156	922	22,883			
322b)	天神山系	2	74	0	0	2	74	9	314	0	0	9	314	11	388			
322c)	藤島系	0	0	0	0	0	0	2	15	0	0	2	15	2	15			
322f)	藤島系	9	489	0	0	9	489	45	1,439	12	295	57	1,724	64	2,223			
4)		4	58	776	17	163	75	938	36	547	247	3,885	263	4,412	358	5,581		
40)	大木山系	11	2,052	53	965	184	2,917	419	8,728	29	1,581	448	10,209	811	15,228			
41)	高野系	119	2,843	40	1,772	159	5,588	262	5,514	292	5,684	554	11,176	713	16,766			
42)	加賀利直直	51	1,364	84	2,245	115	3,608	33	1,570	213	8,581	288	8,151	461	11,738			
43)	加賀利直直	67	2,540	48	1,208	115	2,460	87	1,974	179	4,381	276	6,400	301	10,191			
44)	加賀利直直	109	2,891	57	2,798	166	5,689	160	2,560	225	8,149	385	8,709	651	14,897			
45)	沖ノ原Ⅰ	98	2,371	101	2,631	199	5,002	124	2,941	406	11,011	501	13,952	729	18,954			
46)	沖ノ原Ⅱ	80	3,453	182	13,169	282	17,131	210	3,923	174	6,907	384	10,830	640	27,961			
47)	加賀利直直	97	4,242	75	607	122	4,848	73	3,372	709	6,897	292	7,965	464	18,817			
48)	藤島系	11	664	0	0	11	664	194	2,326	10	155	204	2,481	215	3,281			
49)	藤島系	0	0	0	0	0	0	21	375	0	0	21	375	21	375			
4台付土器		2	87	0	0	2	87	0	0	0	0	0	0	0	2	87		
51)	51)	0	0	0	0	0	0	0	0	10	237	10	237	10	237			
51a)	口縁a帯文	359	5,495	90	1,018	449	6,513	1,001	12,516	545	8,272	1,548	20,788	1,996	27,301			
51a-L	51a-L	0	0	0	42	450	42	450	38	227	2	37	38	294	80	714		
51a-T	51a-T	0	0	0	0	0	0	1	35	0	0	1	35	1	35			
51b)	口縁a加飾帯	92	2,371	34	593	126	3,364	957	10,861	268	10,299	1,225	21,160	1,351	24,524			
51b-L	口縁a加飾	25	626	10	284	35	910	57	899	45	759	102	1,658	137	2,888			
51b-T	口縁a加飾	9	125	26	297	35	422	63	888	52	583	115	1,449	150	1,870			
52)	52)	0	0	0	0	0	0	2	16	1	17	3	32	3	32			
52-L	52-L	0	0	0	0	0	0	2	16	2	15	2	21	2	21			
52a)	胴部a帯文	2,354	42,240	1,854	20,003	3,468	62,844	5,714	83,406	4,398	79,843	10,112	163,246	13,202	226,052			
52a-T	52a-T	0	0	0	0	0	0	59	1,947	0	0	59	1,947	59	1,947			
52b)	胴部b帯文	164	3,398	80	1,111	244	4,509	573	7,342	266	5,722	839	13,064	1,083	17,573			
52b-L	52b-L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
52b-T	52b-T	237	3,695	129	2,215	388	5,910	694	9,599	588	10,759	1,260	20,358	1,628	26,388			
52c-T	52c-T	0	0	0	0	0	0	7	263	0	0	7	263	7	263			
52d)	52d)	652	92,665	2,183	24,307	8,890	117,272	18,802	194,193	11,888	127,548	30,760	329,123	39,480	559,172			
52d-T	52d-T	0	0	0	0	0	0	55	1,712	0	0	55	1,712	55	1,712			
52e-L	52e-L	60	570	2	14	62	584	3	123	0	0	3	123	66	707			
53)	53)	4	550	5	34	8	584	3	148	23	821	28	969	35	1,583			
53-L	53-L	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	1	10	1	10			
53a)	腹部a帯文	218	7,584	83	1,443	281	9,007	484	12,596	348	11,940	832	24,541	1,119	33,947			
53a-L	53a-L	0	0	0	0	0	0	0	0	187	4	185	10	372	10	372		
53b)	腹部b帯文	197	8,102	110	3,720	307	9,822	734	21,747	530	17,338	1,264	28,882	1,871	49,460			
53b-L	53b-L	5	30	7	267	12	297	23	653	9	402	32	1,055	44	1,350			
54-L	胴部土器	1,362	8,671	762	5,346	2,124	14,017	7,086	44,301	4,045	23,662	11,131	67,965	13,256	81,978			
5その他	5その他	1	15	0	0	1	15	0	0	0	0	0	0	0	1	15		
6)		6	45	445	13	77	58	522	150	580	73	585	223	1,185	281	1,467		
61)	61)	108	2,188	78	957	180	3,140	230	4,130	178	3,053	413	7,185	998	10,825			
62)	三十瓶壺	265	3,603	201	3,488	466	7,091	981	12,786	323	4,273	1,304	17,069	1,770	24,500			
63)	南五十瓶壺	1,005	16,978	255	3,422	1,260	20,400	1,889	24,068	975	16,268	2,844	40,334	4,104	60,793			
63-L	63-L	0	0	0	100	100	1,000	1	10	0	0	1	10	11	110			
64)	南五十瓶壺	301	3,995	138	2,044	439	6,039	851	10,049	490	4,489	1,341	14,518	1,780	20,267			
64-L	64-L	7	68	79	836	88	732	22	318	10	147	32	485	118	1,167			
65)	瓶之内1	600	17,466	105	3,211	705	20,707	729	32,444	389	8,206	1,118	21,655	1,623	42,387			
65-L	65-L	184	2,472	0	0	184	2,472	0	0	0	0	0	0	184	2,472			
66)	瓶之内2	1,070	22,206	583	7,880	1,653	30,086	3,354	35,503	1,419	17,395	4,772	52,889	6,242	82,895			
66-L	66-L	98	1,149	215	1,879	311	2,828	781	4,483	188	1,482	947	5,965	1,258	8,793			
67)	石神壺	178	1,907	189	3,372	387	5,278	1,345	9,834	559	3,700	1,904	13,394	2,871	18,873			
67-L	67-L	7	111	1	11	8	122	66	419	58	785	124	1,204	132	1,528			
68)	加賀利直直	39	836	13	216	52	1,055	121	1,484	352	5,952	476	7,436	590	8,490			
68-L	68-L	0	0	0	0	0	0	0	0	14	150	14	150	14	150			
69)	藤島系	30	344	23	300	53	644	104	1,643	72	1,877	176	3,320	229	5,983			
69-L	69-L	0	0	0	0	0	0	0	0	2	22	2	22	2	22			
69-T	69-T	293	3,834	43	302	336	4,188	441	3,928	585	6,294	1,028	10,222	1,383	14,406			
69-L-L	69-L-L	0	0	0	0	0	0	2	16	2	16	2	16	4	28			
69-L-T	69-L-T	8	130	21	75	29	205	22	272	3	184	41	456	70	681			
71)	1777土器	19	304	3	31	21	323	23	233	11	91	60	424	82	659			
72)	土瓶片	24	437	7	98	31	530	50	872	41	797	91	1,814	122	2,448			
7)		1	4	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	1	4		
土儀・土俵?		5	136	0	0	5	136	19	489	12	498	28	987	33	1,123			
発掘土器		3	87	2	56	5	143	0	0	1	3	1	3	0	146			
発掘土器片		3	28	1	7	4	30	3	11	5	63	8	74	12	100			
土器・土俵片		4	109	3	14	8	123	17	198	26	291	26	291	35	452			
不用品合計		17,191	285,098	7,358	122,738	24,459	407,831	50,913	594,778	31,652	438,481	82,361	1,033,271	106,824	1,441,088			
合計		292	4,717	123	2,415	415	7,132	788	11,945	555	9,205	1,241	21,150	1,756	28,898			
総合計		17,363	289,815	7,481	125,153	24,874	414,963	51,699	606,727	32,007	447,686	83,706	1,054,471	108,580	1,469,976			

\* (不用品)は、遺構・小規模などのため、分類できなかった資料である。

\* 分類記号Lは、胴部土器片を用いた資料、Tは、器厚20mm以上の厚手の資料である。いずれも一部のIV-DとIV-U資料のみを分類した。

れた。本遺跡では、第6群3類と5類が主体的に出土し、堀之内1式中・新段階に属すSB26・28で、第5群2類a種とc種が併存することが確認された。この事例から、堀之内1式期までを、便宜上第6群土器の前半期とする。第6群6類が主、4類が従といえる出土状況を示し、堀之内2式中段階に属すSB12では、第5群2類d種が圧倒的に多数であった。この事例により、堀之内2式から新潟県で在り土器型式が消滅する第8類加曾利B1式期を、第6群後半期とする。

少量の出土であった第3群を無視し、第5群2類a・b・c種の占有率19%の半分、9.5%ずつが第4群、および第6群の前半期1～3・5類のそれぞれに伴うものと仮定する。さらに、d種：無文土器441,821g、全体の30.8%が、第6群の後半期4・6～10類に伴うものと仮定する。この二つの仮定を前提として、第5群2類土器の比率を割り振る操作を行うと、第4群が18.9%、第6群が61.4%に補正され、第6群後半期土器は前半期の約2倍程度となる。このような土器の時期別比率は、遺構数・遺物出土状況とも整合的と考える。

2015年度出土遺物の整理作業は、2016年度発掘調査と並行して進めた。作業開始に当たっては、土器群全体を見通して分類する猶予がなかったため、縄文中期土器はSB16、後期土器はSB12を代表例として分類表を作成した。しかしながら、2016年度調査では、そこに含まれていなかった土器や未知の土器、極めて少数だった土器がまとまって出土するなど、分類表との齟齬が生じた。そのため当初分類の変更、再整理は避け、追加・細別した部分がある。ごく少量が出土した分類群には、図示できなかったものもある。

土器分類は、遺構・遺物の記述、一覧表の項目とも共通している。本項では、各分類群の概要を記す。資料が充実している中期中葉から後期中葉については、代表例を第12・13図に掲出し、一般的な特徴を説明する。早期・前期等に属す少数群・類は、代表例の掲載図版番号を例示する。73頁以降の個別資料説明に当たっては、個体の特徴的な事項を重視して記述した。(2)以降の個別資料の説明に当たっては、たとえば「第1群第2類」は「1(2)類」、「第5群第2類a種」は「5(2)a種」のように略記する。

#### 第1群 縄文早期土器

**第1類：押型文系土器** (図版58 - 628-634) 黒銘を含み山形文を間隔施文する沢式・樋沢式、格子目文を間隔施文する卯ノ木式 (小熊1997)、楕円押型文を密接施文する細久保式である。出土量は極めて少量で、IX区B・G・P列などに散在する。

**第2類：絡条体圧痕文系土器** (図版58 - 635-652) 早期後葉の条痕文系土器後半期の土器である。条痕文の原形は絡条体と推定するが、比較的太い撚糸を用いた条痕文を内外面に施す厚手のものが多い。後出とされる細い撚糸は少数である (小熊1989, 綿田2000)。口縁部には、横位・斜位・羽状の絡条体圧痕文を施す。確認できる器形は、上げ底気味の平底のみで、尖底は見当たらない。胎土に繊維を含み、色調が暗褐色のものと、明灰褐色の軽量なものがある。分布範囲はIX区A～T列におよび、南半部の斜面側05-07グリッドから出土した。IX区F・G・Q列などに多少のまとまりがある。

#### 第2群 縄文前期土器

**第1類：羽状縄文系土器** (図版58 - 653-672) 前期前半の花積下層式、関山式、塚田式、中道式、神ノ木式、新屋式がある (貫田2008)。地文には異原体による羽状縄文と、斜縄文とがある。原形には0段多糸縄文が多い。胎土に繊維を含む比較的薄手のものが大部分である。分布範囲は、第1群第2類とほとんど同じ。

**第2類：竹管文系土器** (図版58 - 673-678) 前期後半の繊維を含まない斜縄文土器、刈羽式と諸磯b式有孔浅鉢がある。出土量は極めて少量である。

#### 第3群 縄文中期前・中葉 (第12図-1～9)

**第1類：中期前葉土器** (図版51 - 398-400, P.L.48 - 748・749) 初頭段階の五領ヶ台式並行期土器、前

業の千石原式と推定する土器などがある。出土量は極めて少量である。

**第2類：中期中葉土器** 2015年度調査では少量の出土であったため、第3群を細分しなかったが、2016年度調査では多量に出土し、複数の系統が見られるため、a～f種に細分した。ただし、c種以外は出土量が少なく、正確に型式比定できない破片資料や、c種に属するものでも型式名称や「型」が未確定の資料を含むため、東北系、北陸系のような地域的系統、焼町系、勝坂系のような数段階の変遷過程を含む型式群のように扱った。後述する第4・6群の分類と比較して、不明確な部分を含んでいる。b種以降は、第12・13図中の番号を記す。

a種：東北系土器（P L 43 - 770～774） 大木8 a式新段階に属す土器で、少量である。縄文を施し、隆帯、半截竹管による沈線文を描く（中野 2008）。

b種：焼町系土器（4, P L 42 - 756～758） 曲線的な隆帯と半隆起線を密接に施文し、要所に眼鏡状突起を配す。縄文は施さない（寺内 2004）。赤褐色の胎土と、北信地方に見られる明灰色・軽量の胎土とがある。

c種：越後系土器（1～3・5～9） 火焰型土器、王冠型土器を代表とする馬高式土器と、この前段階に位置する仮称「五丁歩式」土器（3）である（新潟県教育委員会 1992、寺崎 2008）。b種同様縄文を施さないものが多く、隆帯（基隆線）と半隆起線で文様を描く。鶏頭冠突起、鋸歯状突起、短冊状突起など特徴的な部位は識別可能であるが、胴部破片では識別できない。丈が低い古段階の土器（1）、基隆線がある土器（5・6）、基隆線がない新段階の土器（7・8）、大形・中形・小形があり、時間幅と法量にバラエティがある。標準的とはいえない王冠型の土器（2・9）や、火焰型・王冠型以外の土器もある。黄白色の胎土が多い。第3群中で最多量を占める。c種と第4群0類の分布範囲は調査区西半部で、I W区T列～I X区G列に濃密に分布し、これ以东I X区P列まで散在する。

d種：北陸系土器（P L 42 - 750～753） 上山田・天神山式に比定できそうなものがある。台付土器を含む可能性が高い。

e種：勝坂系土器 蕪内式頃に比定できそうなものがある。極めて少量、小破片であり、掲載資料はない。

f種：浅鉢形土器（図版 59 - 680～682） 少数ながら北陸系が多数を占め、形態には口縁部内湾・口縁部屈曲がある（山岸 2014、綿田 2014）。

#### 第4群 縄文中期後葉（第12図10～36）

**第0類：大木8 b式土器（10～14）** 2015年度調査では第1類以降が出土し、本類は含まれていないものと考えた。2016年度調査では、まとまった量が出土したが、前年度付番した類別番号を変更しないために第0類とした。渦巻文など口縁部装飾に無調整隆帯を用いるものが多く、同式の古段階に属すものである。縄文は、右捻りRLを多用する。同様の文様を施す浅鉢（14）もある。この時期に新段階の火焰型土器が共存することが明らかである。新潟県では、火焰型土器が残存する時期を縄文中期中葉と扱うことが慣例であるが、本報告では大木8 b式土器から中期後葉とする。したがって、本類と第3群第2類c種の新段階は、共存することがある（寺崎 2013、綿田 2016）。

**第1類：柵倉式土器（16～19）** キャリパー形深鉢では、第0類の縄文地文から繊細な綾杉文、さらに太目の沈線地文へ変化する。口縁部装飾は、高い隆帯による渦巻文が瘤状に突出したものとなる。口縁部無文の筒形深鉢（16・17）も見られ、「小板型」と呼称する（十日町市教育委員会 1961）。地文が半隆起線文となる新段階の土器はきわめて少ない。

**第2類：加曾利EⅢ式古段階土器（20・21）** キャリパー形深鉢の口縁部に隆帯渦巻文、胴部に沈線区画による懸垂文を描く。第3類と共存するものが多いと推定する。



第12図 縄文中・後期土器分類配列図(1)

番号( )内は図版番号 第3群 2類b種:4、c種:1~3・5~9、第4群 0類:10~14、1類:16~19、2類:20・21、3類:22、4類:33、5類:25、6類:23・24・26・27・32・34、7類:28・30・31・35、8類:29、9類:15、第6群 1類:36・37・40・41、2類:39





第13図 縄文中・後期土器分類配列図(2)

番号脇( )内は図版番号 第5群 2類 a種: 48, d種: 49, 第6群 3類: 47・54, 4類: 55・56・64・69・70, 5類: 42・46・50・53, 6類: 57~63・66~68・71~75・87, 7類: 76~82, 8類: 88~92, 9類: 83・93, 10類: 65・84・85・94・95, 11類: 86

**第3類：加曾利EⅢ式新段階土器** (22) 口縁部文様帯がなく、U字・逆U字状意匠を交互に描くもの、低い隆帯で渦巻状などの意匠を描き、縄文充填するものなどである。

**第4類：加曾利EⅣ式土器** (33) 第3類の描線が細くなり、意匠の端部が尖ってW字状となったもの、口縁部に隆帯が巡り、湾曲がない胴部に細い隆帯が垂下する縦区画が縄文部・無文部交互になるものなどがある。後期初頭に下るいわゆる加曾利EⅤ式も含まれる可能性がある。第3類から本類には、両耳堂があり(33)、後期初頭にも残存する。図示例は小形品である。

**第5類：沖ノ原Ⅰ式土器** (25、図版59-683~685) 直立又は内湾気味の口縁部に刻みを施す隆帯が2条めぐり、渦巻文を配するもの、隆帯間に横長の乙字文や楕円文を描くものなどがある。胴部には縄文施文し、2・3状の沈線が垂下してパネル区画文を描く(佐藤2003、阿部2008)。第6類と明確に区別できないものもあるが、半分以下の出土量であり、古段階は特に少ない。第6類とともに、胎土に細塵を混入する特徴もある。

**第6類：沖ノ原Ⅱ式土器** (23・24・26・27・32・34) 渦巻文下端の隆帯が弧状に伸びるもの、乙字文・楕円文などが多段化するものなど、第5類より文様帯が幅広になる傾向がある。図化個体には入組みコの字文などを描く標準的なものが少なく、第2類の文様構成に近い折衷的なものが多い。横ハ字文部分のみの破片は第7類に含めた。

**第7類：短沈線文土器** (28・30・31・35) 長野県の唐草文系土器第4段階(吉川2008)に多用される、雨滴状沈線を地文とするもの、および横ハ字状の斜位沈線が長くなり、段ごとに方向を変えて「く」の字状に施文する土器である。

**第8類：細刺突文土器** (29) 地文に米粒程度の刺突を施す土器である。SB16出土の図化個体から分類群を設けたが、出土量は少ない。第7・8類は第3～6類並行期の土器に帰属する地文部破片と考える。

**第9類：浅鉢形土器** (15) 口縁部が肥厚する関東系浅鉢で、赤褐色を呈し赤彩するものがある。第0・1類に伴い、以降は後期初頭まで浅鉢は欠落する。

上記に含まれない少数例には、北陸の串田新Ⅱ式土器、長野県の坪井類型土器(綿田1999)、唐草文系土器などがある。

#### 第5群 縄文中期～後期前半非意匠文土器 (第13図48・49)

第4群から第6群に伴う地文のみおよび無文の土器である。有文土器の地文・無文部分の破片も含む。第1～3類は破片の部位、第1・2類の各種は装飾・文様等の種別とした。

##### 第1類：口縁部 a種 無文、b種 加飾隆帯、c種 隆帯、d種 沈線

a種は単純な口縁部、b種は円棒状工具による刻み・押圧等を施した隆帯が巡るもの、c種は単純な隆帯が巡るもの、d種は口端部・口縁部外面に1～3条程度の沈線が巡るものである。a種には、口縁部形態から第3群第2類の粗製土器の可能性が高いものも含む。

##### 第2類：胴部 a種 縄文(48)、b種 摺糸文、c種 条線文、d種 無文(49)

口縁部から胴部までの破片も本類の区分に含めた。b・c種の大部分は第4群第2～6類、第6群第1・2類に伴う粗製土器と推定する。「短条線文」も本類に含めた。SB26の事例(51・52)から、第6群第3・5類にはa種縄文・c種摺糸文土器の両者が併存し、SB12・20・21の事例から、第6群第4・6～8類には、主にd種無文土器に伴うものと推定する。

##### 第3類：底部 a種 無文、b種 網代痕

外底面の網代痕の有無で区分した。網代痕を消去した状態のものも見られるが、確認できたものはb種に含めた。稀に木葉痕がありa種に含めた。b種は第3群2類以降に見られる。

**第4類：軽白胎土器** 灰白色を呈し砂を含まないきわめて軽量胎土の、無文土器および有文土器の無文部破片である。水を吸収しやすく、拓本用の画仙紙が密着しにくい特徴もある。第2類d種の胴部無文破片は、褐色を呈し、砂・礫を含んで重量感があるもので、体感的に区分した。有文土器では、第6群第3～8類に同種の胎土があり、粗製土器としての無文土器も多い。本遺跡独特の土器である。

**第6群 縄文後期前半土器** (第12図-36～40、第13図41～95)

**第1類：称名寺式並行期土器** (36・37・40・41) 本来の称名寺式土器、および関沢類型(37)、茂沢類型(鈴木1999)などである。称名寺式土器は7段階編年(石井1992、鈴木2007)の3段階が最も古く(図版60-70)、4段階以降の資料が多い。36は第4群第6類の系統であり、第6群第2類に変遷する。頸部に波状沈線が巡り、以下が縄文地文となる原山類型(41、十日町市教育委員会2006)は、称名寺式後半から第5類堀之内1式前半に見られるが、本類に含めた。新潟県から北信地方に分布する。屈曲する口縁部に楕円文などを描き、4単位の波頂部に突起が付く浅鉢形土器40は第9類と識別できるので、本類とした。第5類の古い部分にも伴う。

**第2類：三十稲場式土器** (39) 称名寺式後半～堀之内1式古段階に並行する、新潟県の在地系土器である(石坂2008)。胴部に施す花卉状など数種の刺突文を特徴とし、頸部に4単位の橋状突起が付く鉢・深鉢形土器である。胴部の湾曲がなく、縦長で細かい刺突文を施す「内後・中島型」(十日町市教育委員会2006)も少なくない。地文には縄文もあり、貼瘤、削出し瘤が少数見られる。出土量は多く、新旧が認められるが、図化できた個体は少数である。

**第3類：南三十稲場1式** (47・54) 新潟県の在地系土器で、柏崎市十三本塚北遺跡には、第5類を含む良好な比較資料がある(柏崎市教育委員会2001、品田2002)。第6群第5類堀之内1式中・新段階並行を1式、第6群第6類堀之内2式並行段階を2式とする(金内2012)。胴部中位が緩くくびれ、肥厚する口縁部に沈線が巡り、渦巻文と斜位沈線を施す深鉢形土器である。太い2～3条の沈線によって、胴部のくびれ部で横位区画する大ぶりの米字状文を描き、縄文を充填する、「十三本塚北類型」(鈴木2018)が多い。出土量が多い割に、図化できた個体は少数である。

**第4類：南三十稲場2式** (55・56・64・69・70) 第3類の器形を継承するが、薄手・小形化する傾向がある。くびれ部が上位になり、口縁部の沈線文は密接した刻みとなる。描線の沈線は細く多条化し、くびれ部の横位区画上下に懸垂文を描く「元屋敷類型」(鈴木2018)が主体である。集合沈線文間に縄文を充填するものもある。網取Ⅱ式系の土器も稀に見られる(55)。

**第5類：堀之内1式並行期土器** (42～46・50～53) 外反する無文の頸部から肥厚する口縁部に沈線が巡り、小波頂部に凹点と括弧状意匠、斜位沈線を施し、丸みのある胴部に渦巻文などを描く鉢形土器である。42・43が標準的であり、渦巻文の上下が分離・変容、渦巻文を省略した44～46・52、やや器高が高い深鉢形46・51・52は新潟県に多い。描線は2～3条の太い沈線で、渦巻文間の区画に縄文を充填するものが一般的である。従来長野県に特徴的な土器と指摘してきたもので(綿田1985他)、「栗林類型」(鈴木2018)と呼称される。関東地方で主体を占める深鉢形諸類型は、ほとんど含まれない。後章で「ひんご1式」を提唱する。

**第6類：堀之内2式並行期土器** (57～63・66～68・71～75・87) 関東地方で主体をなす、朝顔形深鉢に類する土器が増加する(62・63・67・68・74・75)。口縁部に8字状貼付文と刻みを施す隆線文が巡り、胴上半部に充填縄文で三角文、菱形文、渦巻文などを描く(石井1984)。新段階には、宝珠状突起や内面文が発達する(74・75)。関東地方では底部の接地部が外側に張り出し、胴部がやや湾曲して口縁部が外反する器形(62)であるが、長野県では湾曲がないバケツ状の器形(63・67・68・75)が多い(鈴木2018)。本報告では、直胴形深鉢と呼称する。図化できる遺例はないが、胴上部に朝顔形深鉢とも共通する文様を描く、体部屈

曲鉢（鈴木2002）の器形に近く、胴下半部が丸みをもつ器形「林中原型」（鈴木2012）も多い（71）。57・72・73は、軽白胎土の有文土器であるが、他遺跡に類例が乏しく、当初第6群4類に含めたものもあった。整理作業の進捗によって南三十稲場式には認められないことが明らかになり、林中原型と器形が共通することから本類とした。本遺跡独特の土器でありながら、正確に集計できなかったことは残念である。第5類の鉢形土器「栗林類型」は継続するが（58～61・66）、描線が細くなり、刻みを施す隆線とくびれ部を横位区画し、頸部から口縁部間をY字状に結ぶもの（66）、胴部が無文となるもの（60・61）も多い。上半部が大きく開き、口縁部内面に横帯沈線を描くものもある（66）。

**第7類：石神類型土器**（76～82） 浅間山麓の群馬県側、長野県側から千曲川流域に分布中心があると考えられてきた、堀之内2式後半に現れる精製度が高い薄手の小形土器である（小諸市教育委員会1994、秋田1997）。器形には、口縁部が外反し胴下半部が丸みをもつ深鉢（A器形、76～78）と、バケツ形の深鉢（B器形、79～82）の2種がある。A器形は第6類の林中原型深鉢、B器形は直胴形深鉢を継承する。口端に上面8字状の小突起が付き、口縁部に多条の細隆線、集合沈線による横線帯、胴部に長方形、三角状、環状の意匠を連鎖状沈線と描く。口縁部に集合沈線を施す厚手・大形土器も少なくない。後章で第6・7類を合わせ、「ひんご2式」を提唱する。

**第8類：加曾利B1式土器**（88～92） 関東地方の同式土器と変わらない深鉢・鉢・浅鉢形土器が多い。口縁部に区切文がないもの（88）と、区切文を伴う帯縄文（89～92）を描き、内面文を施す。模倣により文様が変形したもの、製作が粗雑なもの（90）もある。

**第9類：浅鉢形土器**（83・93） 堀之内1・2式期（83）、加曾利B1式期（93）の鉢・浅鉢形土器である。破片では型式が不明の資料が多いため、口縁部形態や文様から判別できるものも本類に一括した。

**第10類：注口土器**（65・84・85・94・95） 堀之内1・2式期（65・84・85）、加曾利B1式期（94・95）の土瓶形注口土器である（長澤2015、綿田2015）。第9類と同じ理由により、一括して扱った。

**第11類：蓋形土器**（86） 称名寺式期、堀之内1・2式期の蓋形土器である。第9・10類同様一括した。三十稲場式に多出することが知られており、文様から同時期と推定できるものもある。本遺跡では、石神類型の文様を描き、頂部につまみが付く傘形の精製度が高い蓋形土器（86）が、三十稲場式の蓋形土器を上回って出土し、注目される。

## 第7群 その他

土製品のうち、次の2類は土器の分類過程で抽出したもので、土器破片の二次利用品と特殊土器ともいえるものであり、数も多く、縄文土器分類表に項目を設けた。個別資料の説明に当たっては、群・類名称は用いない。

**第1類：ミニチュア土器**（図版62-914-935） おおむね口径5cm・器高8cm以下で、輪積み法のほか、手づくねなど簡略な作りの土器を本類とした。文様が施文され型式比定できそうなものと、無文とがある。

**第2類：土製円板**（PL47-945-985） 土器破片の周囲を円形に打ち欠いたものが多く、全周を研磨したものもある。大きさは直径約2.5cmから8cm前後まで見られる。穿孔したものが少数ある（963・968・969）。

## （2）縄文土器の説明

### ① 竪穴建物跡・敷石住居跡出土土器

**S B 1**：図版30・PL23-1・2、図版47-165-183

1・177-180は6（7）類である。1・178は竪内埋設土器で、ともにA器形に属す。1は口縁部の横線帯と胴部文様には縄文を充填し、178には縄文がない。177・179・180はB器形である。168は6（4）類、169-172は6（6）類の深鉢である。170は文様帯の幅が狭い。171には口縁部に隆線がなく、172

は沈線表現である。173は同類の体部屈曲鉢、174・175は鉢である。176・181は6(9)類で、内面文様がある。2・182・183は6(10)類である。2は胴上半部の三角形区画の間に縄文を施し、6(6)類の前半段階に属す。183は球状の胴部に、連鎖状沈線文と歯状工具による渦巻文を描く。165は4(6)類、166は北信地方に少数見られる4(7)類、167は6(1)類新段階である。

**SB2**：図版47-184-188

184-186は6(6)類で、185は軽白胎土である。187・188は6(7)類である。

**SB3**：図版45・P L 23-139、図版47-189-194

139・192は6(8)類である。139は3単位波状口縁部の深鉢で、外面の縄文帯、内面の沈線帯とも区切文がない。口唇部に細かい刻みを施し、内面の突帯はシャープである。192は薄手で縄文帯には区切文がある。189は6(5)類、190は6(6)類の深鉢、191は同類の鉢、193は5(2)d種である。194は6(10)類で、加曾利B1式期である。

**SB4**：図版47-195-196

195・196は6(7)類である。196は沈線が太い。

**SB5**：図版30・P L 23-3・4、図版47-197-202

3・4は6(6)類の鉢である。3は、口縁部に沈線文が巡り、6単位の波頂部に縦位の短沈線を配す。胴部には5単位の渦巻文を描く。4は地床炉埋設土器である。くびれ部から強く外反して開き、器高が低い。無文の口縁部には3単位の小突起がある。胴部には並行する3段の帯縄文を描く。3より後出である。198は6(3)類であろう。201は6(5)類の鉢、199・200・202は6(6)類で、199・200は軽白胎土である。197は5(1)a種である。

**SB6**：図版30・P L 23-5・6、図版47-203-217、図版48-218-222

5は類例がないが、端部が平坦となる口縁部の突起に描かれた曲線文から、6(4)類と考える。6・205は6(6)類である。6は軽白胎土を用い、口縁部の沈線文から下は無文で、入念にヘラミガキする。204は6(3)類で、口縁部に凹点が巡る。206は6(4)類と考える。207-219は6(6)類で、212・213・216は体部屈曲鉢である。217-219は鉢で、219は胴部に集合沈線文で懸垂文を描く。この類は前半期に属すものにまともまっている。220-222は5(1)a種で、220は端部に刻みを施す。203は4(4)類である。

**SB7**：図版30・P L 23-7

7は6(6)類の中段階に属す。上面観は楕円形を呈し一対の波頂部がある。

**SB8 (SF2)**：図版30・P L 23-8、図版57-622-624

8はSF2と命名された地床炉に埋設された、6(6)類深鉢の胴下部である。624は6(7)類としたが、三角形の突起と小波状の口縁部は本類には見られない。沈線帯の円形刺突文は、6(6)類の8字状貼付文の痕跡であろう。622は6(3)類である。

**SB9**：図版30・P L 23-9-13、図版48-223-260

252は5(1)a種で、軽白胎土である。10・11は5(2)d種で、10は平縁、11は小突起がある。内外面を工具で横ナデする。242は11と似る。223は4(3)類と思われる。口縁部に楕円区画文を描くが、渦巻文は省略されている。225・226・233は4(4)類である。225は隆帯、226は沈線で意匠を描く。233は縦に穴が通ずる把手が付く壺形土器である。沈線で文様を描き、赤彩する。6(1)類に伴う可能性もある。227は4(5)類の口縁部横位区画文であろう。12・13・224は4(6)類である。12は波状口縁に半円状の区画を有する土器と推定され、胴上部に3条の沈線で入組十字文風の意匠を描く。13は刻みを施す3条の隆帯が口縁部を巡る。いずれも胴下半部を沈線で縦区画する。229は4(7)類である。

230・231は5(1)b種、228は同類c種、232は5(2)a種、234・235は同類b種、236は同類c種である。237~239は6(1)類中段階、240・241は同(2)類である。243は6(3)類、244~247・249・250は6(4)類である。251・253~259は6(6)類で、255~259は鉢、251・257は軽白胎土である。9は、6(6)類の鉢の口縁部であろう。直線的にかなり開き、刻みを施す隆線が巡る。260は、6(10)類で、6(4)類に伴うものでであろう。本跡からは、中期末葉の4(3)類から6(6)類前半期までの土器が出土しているが、遺構の形状と、6(6)類中段階のSB12に切られることから、6(1)類から6(6)類の間に帰属するものと推定する。

**SB10**：図版30・PL24-14、図版49-261~277

261は、6(1)類の深鉢、263は同類の浅鉢である。265~270は6(2)類で、花卉状刺突文266、細長い鋭利な刺突痕268、縦長の繊細な刺突痕270、間隔をあけた269などバラエティーがある。14・273・275・276は6(3)類である。14は、縦構成の文様を描く小形土器である。275は、口縁部文様がない。264・272・274・277は6(5)類である。271は、外反口縁の内面に大ぶりの同心円状意匠を描く。

**SB12**：図版31・PL24-15~26、図版49-278~313、図版50-314~338

15・16・301~309は6(4)類である。15は口縁部に短沈線を刻み、以下は縦位の集合沈線文である。309も似る。16は、沈線間に列点を入れ、隣接する懸垂文間に縄文を施す。301・306・307は同様である。17~24・311~328・331~336は6(6)類である。19~22は朝顔形深鉢であるが、20は直線的なバケツ形である。19・20・22は菱形文を重ね、21は乱れた三角文に沈線を充填する。314~320・323も同種の文様で、314には、紡錘文が加わる。321は、幅狭の弧状文、324・326は、渦巻文・同心円文、322・325は、縦位構成の意匠らしい。17・18・23・24は鉢である。17は一对の波頂部があり、文様は6(4)類に通ずる。間隔が狭い2条沈線で胴部を横位区画する。18は、器高が低いと推定され、胴部に貼付文と同心円文がある。23は、内面に幅狭の横帯文が巡る。24は、口縁部以外無文となり、小突起の文様は単位ごとに異なる。331は、6(5)類の可能性もあるが、大ぶりの口縁部裝飾は6(4)類に見られる。328は口縁部を指頭幅程度内側へ折り曲げる。327は321と同種の文様を描く、内湾する器形である。25・26・310・337・338は6(10)類の注口土器である。同心円文などを描き、25・26は大形である。310は6(4)類に伴う。炉内に埋設された21・24~26から、本跡の時期は堀之内2式中段階前半期であることが明確である。6(4)類・6(6)類に属す土器の大部分は一括性が高く、本遺跡において6(6)類の基準資料となる。

278は、4(3)類、279~283は、4(4)類、284・285は、4(6)類、286は、5(1)b種、296~300は、6(3)類、329・330は、6(5)類の鉢である。289は、6(11)類で、南三十稲場1式に伴うものでであろう。292~295は5(1)a種である。287・288・290・291は6群であろうが、時期は明らかではない。

**SB12-B**：図版50-339~351

339・340は、6(2)類である。339は、貼り瘤、340は縦位条線文の後、円形刺突文を施文する。ともに類例は少数である。341は、波頂部外面に沈線を重ねて鋸歯状文を描き、内面は、渦巻文に沿って同様に施文する。6(4)類と推定するが、6(9)類の可能性もある。342は6(4)類である。343~346は6(6)類で、343~345は深鉢、346は鉢である。347~349は6(7)類で、347は沈線帯の間に細かい刺突を施し、349は、軽白胎土を用いたやや厚いものである。351は、口縁部が内湾気味で、半截竹管と思われる斜位条痕がある。時期・系統は明らかではない。350は6(10)類である。ほかに、張出部から出土したアスファルト塊に含まれた、多数の6(4)類破片がある。SB12の埋土上部に構築された敷石住居跡であるから、アスファルト塊含有土器と本園の6(6)・(7)類が時期を示唆する資料で

あろう。

**SB 13:** 図版 50 - 352~356、図版 51 - 357~374

353 は 4 (7) 類、352 は、第 4 群その他の北信地方の坪井類型土器である。354 は、5 (2) b 種で、口縁部を沈線区画する。355・356 は 5 (2) d 種である。357~359 は 6 (2) 類、360~365 は 6 (3) 類、366~368 は 6 (4) 類、369・371 は 6 (5) 類、370・372~374 は 6 (6) 類である。6 (3) 類が比較的多いが、最も新しい時期に属す 6 (6) 類中段階が本跡の時期となる。

**SB 14:** 図版 51 - 375~386

375・376 は 6 (5) 類、377~383 は 6 (6) 類である。383 は、口縁部に縄文帯があり、一般的ではない。384・385 は、6 (7) 類である。386 は 6 (8) 類で、沈線帯を段落によって区切る。

**SB 15:** 図版 51 - 387~397

388 は 4 (2) 類、387・389 は 4 (4) 類である。390 は 5 (1) d 種で、沈線に刺突を施す。391 は 4 (7) 類で、口縁部に刻み隆帯が廻り縄文を施す。396 は 4 (7) 類、392 は 4 (8) 類、393・394 は 5 (1) b 種、395 は 5 (2) a 種、397 は 5 (2) b 種である。土器は縄文中期末葉から後期初頭にまとまる。

**SB 16:** 図版 32・P L 25 - 27~34、図版 51 - 398~408、図版 52・P L 25 - 409~423

398~400 は 3 (1) 類である。中期初頭の泉 A 式に近似する沈線文系土器である。27~29・401~404 は 4 (1) 類である。27 は、キャリパー形深鉢で、口縁部に中空の大形把手が立ち上がる。両端が熊手状となる腕骨文風の装飾を貼り付け、稜線が明瞭な仕上げである。401 も同種である。28・29 は小坂類型である。小形の 28 は、平縁で隆帯装飾がない。大形の 29 は、波状口縁で、腕骨文が横・縦を区画する。402・403 は同種の胴部、404 は橋状突起である。僅かに赤彩が残る大形の 4 (9) 類 405 は同時期であろう。これらは SB 16W に伴う土器と考える。4 (1) 類の遺構一括出土土器としては唯一の資料である。

406~408 は 4 (2) 類である。406 は縦位区画間にまばらな縄文、408 は曲折する条線文を施す。30・409・410 は 4 (3) 類である。30 は、口縁部から胴上部に 2 条の沈線で波状の意匠を描き、波頭下に蛇行沈線文が垂下する。409 は沈線による幅狭の懸垂文、410 は低い隆帯文がある。414・416 は 4 (5) 類と考える。416 は上下 2 段の渦巻文間に細かい刺突文を伴う隆沈線で弧状文を描く。32・411・415 は 4 (6) 類である。411 は、口縁部下に三日月状の区画を構成する、Y 字状の加飾隆帯である。415 は磨滅するが、口縁部の 2 条の隆帯に接して 2 段の渦巻文があり、隆帯間に 1 列の円形刺突文を施す。胴部には、渦巻文下に懸垂文がある。32 は 415 と共通の文様構成であるが、器形は直線的で渦巻文は S 字状である。31・34・412・421 は 4 (7) 類である。31・34 は内湾気味の口縁部に、2 条の刻み隆帯が渦巻文間に弧状の区画を作り、31 は横ハ字状、34 は雨滴状刺突文の地文を全面に施す。34 は胴中位の 1 か所に沈線で曲線意匠を描く。421 は、先端が M 字状の工具で縦位沈線を施す。33 は 4 (8) 類である。4 単位と推定した橋状把手間に円文を配し、隆沈線で弧状に区画する。把手と円文下を懸垂文で縦位区画し、米粒大の刺突文を施す。413・420・422 は 5 (2) c 種である。413 は短条線、422 は 408 と似る。420 は、口縁部に 2 列の刺突文が廻り、胴部は縦位密接の条線文である。417~419 は 5 (2) a 種である。417・418 は、4 (6) 類に伴うものであろう。419 は羽状縄文である。423 は 6 (3) 類である。

**SB 17:** 図版 52 - 424~431

424 は 3 (2) f 種に属す小形の浅鉢である。明瞭に煤が付着する。425~427・430 は、4 (6) 類で、背割隆帯や入組コ字文を描く。4 (7) 類 428、5 (1) b 種 429、5 (2) a 種 431 も同時期であろう。

**SB 20:** 図版 33・P L 26 - 35~37

35 は類例がない土器であるが、6 (6) 類とした。口縁部に 1 単位の突起があり、体部屈曲鉢と推定

する。3条の沈線で6単位に縦位区画し、2・3条の沈線で横位の紡錘形・三角形意匠を交互に描く。器形と文様が古段階の堀之内2式に由来するものと考えた。36・37は5(2)d種である。36は丸みのある胴下部から口縁部に向かって広がる器形で、内外面を横ヘラミガキで平滑に調整する。37は、法量がわかる無文土器としては最大である。丸みのある胴部がくびれて口縁部が広がる。内外面とも横・斜めにヘラケズリし、まばらにナデを施して器面に凹凸が残る調整である。底部は赤変し、口縁部内面にはオコゲの痕跡がある。

**S B 21:** 図版33・P L 26 - 38、図版52・P L 26 - 432~441

432・433・436は6(6)類である。432は三角文を描くが、上部は分離して縄文を欠き、斜線は3条と乱れる。436は軽白胎土である。434・435・438・440は6(7)類である。437・438・440は器形Bである。435以外、6(6)類の意匠が残存するか、横線帯に縄文を施す古手のものである。440は本類としては大形で、方形区画文は本来無文部だった部分が反転したのであろう。38は5(2)d種で、ナデ調整する。439は小形で粗製のな6(9)類、441は6(10)類である。

**S B 22:** 図版53 - 442~445

442は4(6)類、443は6(7)類である。444は、やや粗製のな6(8)類、445は同時期の6(9)類である。

**S B 23:** 図版53 - 446~452

446は4(4)類、447は5(1)b種である。448・450・452は6(5)類で、452の非対称形突起内面にはC字状の意匠を描く。449は6(6)類としたが、内面が肥厚する。451は、5(4)類で、斜めヘラミガキが顕著である。

**S B 24:** 図版33・P L 26 - 39・40、図版53 - 453~474、P L 27 - 727

39・453~460・462・463・466・727は、6(6)類である。453~459・462は、朝顔形深鉢であるが、文様意匠が明らかなのはない。462は、内面に同心円文と長方形区画文を描く。455は類例のない意匠である。454は刻み隆線1条のみの、粗製のな土器の可能性が有る。39・460・463は鉢である。39は炉内に埋設されていた。胴部は浅く、半円文を描く。463は、内面に渦巻文がある口縁部である。460は底部付近で、開放された懸垂文下端が見える。466は林中原型深鉢であろう。727は同じ器形で、無文化している。40・464・465・467~469は6(7)類である。40は器形Aで、胴中位に沈線を絡ませた菱形の意匠を描く。467・468は横線帯の沈線が太く、端部を止めて粘土を隆起させ、縦位隆線文を形成する。ともに軽白胎土である。461・470~474は6(10)類である。473・474は、40と同種の文様を描く。全体に6(6)類新段階の土器が多くを占めている。

**S B 26:** 図版34・P L 27・28 - 41~49、図版35・P L 28 - 50~52、図版53・P L 27 - 475~477、  
図版54 - 478~510

41・42・486~488・491~499は6(3)類である。41は大ぶりの米字状文を、くびれ部の横帯文で半単位ずらした意匠と推定する。42は横帯文に代わって、刺突文を充填した楕円区画文となる。486・487は同種の意匠を描く。494~496・499は、縄文がなく、沈線の条数を増やして意匠を描出する。493・497・498は、縦位沈線区画の間に斜沈線を充填し、葉脈状である。488・491は曲線的な意匠である。43~49・489・490・500~506は6(5)類である。43・44は、胴部に4単位配した渦巻文を連係し、斜線の上下の三角形の区画を描く。506は同種である。45は渦巻文がなく、波頂下の凹点で区画し、三角形の意匠を描く。口縁部の波頂部内面に、外面と近似した文様を大きく描く。505は同種と推定する。46~49は器高がやや高い。46は、波頂下のくびれ部に配した上部開放の同心円文を起点に、胴部にU字状の意匠を描き、単位の間では横位区画線から別の意匠が懸垂する。47~49は横位区画線がなく、胴部



文様は「火」字状を呈するようである。47の文様は46と似る。49は縄文がなく、口縁部に左右非対称形の突起があり、内面に外面同様の文様がある。489・490・500～503は口縁部であるが、489・490は6(3)類の可能性もある。50・51・507・508は、5(2)a種である。丸みのある胴部から口縁部が外反して開く。縄文の施文方向は不ぞろいである。52・509・510は、5(2)d種である。器形は5(2)a種と共通である。52は内面に文様があり、45などの文様を転写したものであろう。509は口縁端部に刻みを施すが、503などの口縁部文様に由来するものであろう。前節で記したとおり、これらは一括性が高く、堀之内Ⅰ式並行期の6(5)類中段階の基準資料と考える。

上記に先行する土器には、4(0)類の476・477、4(1)類の475、5(1)b種の478・479、5(2)c種の480、6(2)類の481～485がある。485などが6(3)・(5)類に伴出するか、明らかではない。

#### SB 27：図版35・P L 28 - 53、図版55 - 511～535

511・512は5(2)a種である。513は無節縄文施文後、摺糸文を重ねた5(2)b種である。514は5(2)c種である。515・516は5(1)a種で、516は口縁端部を刻む。517～519は6(1)類の中段階である。53は原山類型であり、6(1)類の新段階から6(5)類前半に伴出することが知られている。鋸歯状の沈線が巡る口縁部は直立に近く、縄文は横回転である。520～524は6(2)類の新段階である。525～528は6(3)類、529は同(4)類である。530～534は6(5)類、535は6(6)類である。本跡の帰属時期の根拠となる土器は53と考えるが、伴出する資料は520～524の可能性が高い。

#### SB 28：図版35・P L 28・29 - 54～57、図版36・P L 29・30 - 58～62、図版37・P L 28 - 63、図版55 - 536～561、P L 29 - 728

55・62・546～548・553は6(3)類である。62は、唯一器形がわかる。口縁波頂部に渦巻文と括弧状意匠を描き、1条の沈線と列点が巡る。口縁部下から胴部最大径に、上下交互に縦長の三角形意匠を描き、図化した面のみ横帯部の下に三日月状の意匠を描く。部分的ながら太い条が縦走する縄文とともに、気屋式土器の影響と推定する。55は、直線的に開く深鉢である。縦位の列点文で縦区画し、胴中位の渦巻文を中心に水字状の意匠を描く。器形・文様とも本遺跡に類例がない。図左側の破片は、SB 26から出土した。56～61・549～552・554～557は、6(5)類である。58は器高が高い大形の鉢である。口縁部の円形刺突文4点とくびれ部の1点は、それぞれ5単位配されるらしい。胴部は沈線4条で上下交互に三角形意匠を描く。59は、胴部上半部を3・4条の沈線で横位区画し、よく巻き込んだ渦巻文を4単位描く。60はSB 26の46と近似した文様で、くびれ部の上部開放の同心円文は変形・大形化している。61は胴部の渦巻文下端が二つの弧状に分離し、小形の渦巻文が付随する。59～61は軽白胎土である。56・57・549～552は口縁部である。56は非対称形の突起、551は内面文様がある。57はSB 26出土破片と接合した。554～557は胴部である。558は、同類の無文頸部を省略した鉢である。559・560は5(1)a種で、口縁部端部に刻みを施す。P L 29 - 728は5(2)a種である。561は、口縁端部に刻みを施す同種であろう。前節のとおり、58～61・728は炉に付属する土器であり、一括性が高い。SB 26に後続する、堀之内Ⅰ式並行期の6(5)類新段階の基準資料と考える。

536・537は3(1)類、538・539は3(2)類、540・541は4(0)類、542は4(1)類、543は4(2)類である。63は3(2)c種であり、本跡から破片の一部が出土したが、大部分はIXF 08グリッド出土のため、遺物包含層出土土器の項で説明する。544は6(1)類、545・54は同類に属す浅鉢である。54は小形であり、肩部に縄文がないため、6(5)類の古段階に伴出する可能性が高い。

#### SB 30 (SK 222)：図版37・P L 30 - 64

64は、炉跡SK 222の埋設土器である。6(5)類に属し、比較的器高が高い。この類に通有の渦巻

文は見当たらず、弧線を多用し、幅狭の無文部で意匠を描出するものと推定する。

**S B 31 (S K 254)** : 図版 56・P L 30 - 565

565 は炉跡 S K 254 の埋設土器である。6 (2) 類の比較的小形の鉢で、垂直刺突による縦長の刺突文を施す。

**S B 32** : 図版 55 - 562~564

発掘時に遺物が特定できなかったため、遺構の時期確認を目的に本跡所在グリッドの出土遺物を抽出した。562 は 6 (2) 類の新段階、563 は 6 (3) 類、564 は 6 (6) 類である。したがって、縄文後期前葉に帰属するものと推定する。

②土坑 (含炉跡) 出土縄文土器 図版 37・P L 30・31 - 65~70、図版 38・P L 31 - 71~73、図版 56・P L 33・42 - 566~596、P L 30 - 729

前節で取り上げた土坑に付属する土器を前半で説明し、類例少数の土坑出土土器等を後半で説明する。

**S H 14** : 図版 56 - 566 石囲炉内に埋設された土器である。6 (1) 類に属す、原山類型である。丸みのある胴部から、外反する短い口縁部が立ち上がる、小形の鉢と推定する。頸部に波状文が巡り、胴部に横回転で縄文を施す。破片数は多いが被熱のため赤変して細かく割れ、灰が付着する。

**S Q 18** : 図版 56・P L 33 - 567 石囲炉に 2 個埋設された土器の一つである。標準的な 4 (2) 類に属し、胴部のみが全周する。他の個体は図示できなかったが、5 (2) a 種である。

**S K 8** : 図版 37・P L 30 - 65・66 65 は 4 (2) 類または (3) 類である。口縁部に配した渦巻文は平板化し、下端区画が消失し、本来胴部に垂下する獣手文と一体化する。66 は 4 (6) 類である。口縁部に 5 単位と推定する小突起があり、2 条の刻目隆帯間の渦巻文と長方形区画文を描く。胴部の地文は、縦位に間隔施文した縄文である。

**S K 65** : 図版 56 - 571~574 571・572 は 4 (4) 類である。571 は隆起線で文様を描く、小形の壺形土器であろう。573・574 は 5 (2) a 種である。571 と同時期と考える。

**S K 111** : 図版 37・P L 30 - 68 底部を欠損し、正位埋設された深鉢である。厚手の作りである。波状口縁に沿って刻目隆帯が巡り、波頂部に渦巻懸垂文を配す。波底部にも垂下隆帯がある。地文は施さない。

**S K 125** : 図版 37・P L 30 - 67 正位に埋設され、器体の半分ほどを覆って扁平な巨礫が置かれていた。6 (6) 類の鉢で、口頸部破片は出土しなかった。くびれ部付近の凹点を基準に、胴部に三角形の意匠を描く。

**S K 156** : 図版 37・P L 30 - 69 粘土採掘坑の埋土下部から出土した。隣接する S B 16 - W から流入した可能性がある。4 (1) 類の深鉢下半部である。腕骨文で 4 単位に縦位区画し、この間にも同種の文様を配する。S B 16 - W の同類土器と比較して、腕骨文端部の渦巻文は大ぶりとなり、地文の綾杉文も粗大化し、後出の様相が見える。

**S K 202** : 図版 38・P L 31 - 71 胴下半を欠損し、正位埋設された深鉢である。4 (5) 類に属す。口縁部に刺突文を伴う横線文を描き、胴部は縦位条線文である。粘土帯を外削状に接合する。

**S K 203** : 図版 38・P L 31 - 72 6 (2) 類の大形深鉢である。橋状把手はやや小ぶり、円形刺突と縦位沈線を施し、本類の後半期に属すものと推定する。地文は横回転施文した縄文である。

**S K 253** : 図版 56・P L 42 - 583~585 585 は 3 (2) c 種の王冠型土器である。比較的大形で、口縁波底部に袋状突起が付く。584 は 4 (0) 類である。583 は 5 (2) a 種である。この種は、本跡出土土器の最多量を占め、6 群土器がほとんど混じらないことから、本跡の帰属時期を縄文中期末葉と推定する。

**SK 279**: 図版 37・P L 31 - 70 底部を欠損し、逆位埋納された4(6)類の深鉢である。刻目隆帯の横位区画に8単位と推定する渦巻文を配し、区画に地文を施す。胴部は縦位間隔施文の縄文である。SK 8の66と似ており、口縁部文様は4(2)類と折衷したものであろう。

**SK 305**: 図版 38・P L 31 - 73 4(2)類である。渦巻文と楕円区画文を組み合わせた、本類として標準的な口縁部文様を有する。渦巻文をつなぐ刻目隆帯と、幅狭の縦位無文部は、4(5)類の要素である。

**SK 313**: 図版 56 - 587・588 崩れた石罫炉と見られる石組みから出土した。5(2)a種が多く、有文土器を図示した。587・588とも4(5)類と考える。

以下は、本遺跡で出土量が少数の土器等を、群・類別にまとめて記述する。すべて図版 56 に掲載している。

SK 12 出土の 569、SK 51 出土の 570 は4(1)類である。綾杉文地文の 569 は、SK 156 出土の 69 と近似する。太い沈線地文の 570 は、4(1)類の新段階に属すと考えられ、出土量はきわめて少ない。SK 3 出土の 568 は、2条の刻目隆帯に渦巻文あるいは円文が伴う4(5)類である。SK 299 出土の 591 は、口縁部に瘤状の隆帯が巡る希少例である。SK 267 出土の 581 は、細い沈線で横八字文を描く。ともに4(6)類であり、581は縄文後期初頭に下る新段階に属す。

SK 224 出土の 586 は5(1)d種である。口縁部の横位区画沈線文に縦位短沈線4条を刻む。本遺跡独特の土器である。SK 379 出土の 593 は、5(2)b種である。条の間隔が均等の、端正な捻糸文である。595 は586と同じ文様が施され、同種である。SK 283 出土の 592 は、刻目隆帯の交差部に、刺突を施した円形貼付文がある。後期初頭頃と推定するが、類例がない。

SK 10 出土の 580、SK 178 出土の 576、SK 200 出土の 582、SK 396 出土の 594 は、6(2)類である。576は刺突した粘土を押えた典型例、580は垂直の円形刺突、594は縦長の鋭い刺突痕、582は縄文地文である。橋状把手は、標準的な板状の576、小形化してほとんど孔がない580があり、同類の中で時期差がある。

SK 177 出土の 579 は6(3)類である。くびれ部の横帯文がなく、3条の沈線による縦区画に水字状の意匠を描くものであろうか。SK 343 出土の 596 は、同類の大形深鉢の胴下部である。縄文地文に縦位の蛇行沈線文を描く。SK 260 出土の 589 は6(4)類である。体部屈曲鉢に近い形態で、数条の沈線による懸垂文・楕円文で縦位区画する。網取Ⅱ式的な文様構成の少数例である。

SK 5 出土の 575 は、6(6)類に属す無文の小形鉢である。丸みのある胴部から短い外反口縁が立ち上がり、端部を内側へ折り曲げる。SK 322 出土の 590、SK 118 出土の PL30 - 729 は、6(10)類である。590は、三角形の把手基部幅が約9cmの大形品である。729は入念に磨いた球形胴に隆帯装飾がある。590は、6(6)類前半期、729は後半期に伴出する。

SK 159 出土の 578 は、変形した入組文風の文様を細い沈線で描く、壺形土器か注口土器であろう。縄文後期後半の東北系土器の可能性が大きい。推定が正しければ、本遺跡出土縄文土器で最新時期に当るものである。

### ③墓跡出土土器 図版 38・P L 31 - 74

**SH 13**: 配石墓から、逆位埋納された状態で出土した。完形品で、内部から骨粉を検出した。6(6)類の後半期に属す、器高が低い無文の小形鉢である。内外面を入念に横へらミガキし、光沢を帯びる。口縁部の4か所を小さく内側へ折り曲げ、内面に沈線1条の狭い文様を施す。網底で、胴下半部に薄く煤が付着する。

### ④遺物集中出土土器 図版 38・P L 31・32 - 75~77、図版 39・P L 32・33 - 78~85、図版 40・P L

33・34 - 86~91、図版57・P L 46 - 597~621

**SQ 1**：図版38・P L 32 - 75、図版57 - 597・598 75は6(6)類に属す、大形の林中原型深鉢である。幅が狭い文様帯に斜行文をつないだ渦巻文を8~10単位程度描く。口縁部内面は、波頂部に同心円文、波頂間に集合沈線で鋸歯文を描く。597は5(2)d種で、口縁部内面に沈線1条が巡る。598は6(6)類とした。集合沈線で同心円状の意匠を描く、軽白胎土の土器である。

**SQ 2**：図版57 - 599 599は6(8)類であるが、精製度は低い。口縁部内外面に、4条の沈線が巡る。

**SQ 3**：図版39・P L 32 - 78、図版57 - 600~602 78は4(6)類と考える。湾曲のない深鉢で、口縁部の隆帯に付着する推定6単位の渦巻文が巡り、地文に短条線文を施す。601・602は4(6)類である。602は刻目隆帯の渦巻文下に無文部が垂下する。601は隆帯の楕円区画に短沈線を充填する。600は4(7)類としたが、601と地文が共通である。

**SQ 4**：図版57・P L 46 - 603・604 6(6)類とした、軽白胎土の深鉢である。僅かに肥厚する口縁部をめぐる沈線文下に斜めの刻みが沿い、以下は無文である

**SQ 5**：図版57・P L 32 - 605 605は6(6)類に属す、軽白胎土の鉢である。外面が無文の口縁部の突起内面に渦巻文、突起間に平行沈線文が巡る。

**SQ 6**：図版39・P L 32 - 79 79は5(2)d種である。口径とほぼ同じ同中位がわずかに膨らみ、口縁端部が小さく内屈する、中形の無文深鉢である。外面は横ヘラミガキし、内面はナデ調整する。図化できなかった有文土器は6(6)類であり、本例の時期を示唆するものであろう。

**SQ 7**：図版38・P L 31 - 76、図版57・P L 46 - 606 76は6(5)類の鉢である。やや器高が高く、厚手の作りである。ヘソのある円形刺突文を、口縁部外面とくびれ部の横区画区画沈線文、および口頸部に6単位配した縦区画区画沈線文と、その下部に位置する胴部の懸垂文間に施す。さらに細かい8個前後の刺突文を、口縁端部3か所に施す。縦区画区画文の両脇には、沈線を磨り消した痕跡が見える。606は6(6)類とした軽白胎土の深鉢である。小突起を起点に、数条の沈線による波状文が口縁部を巡る。

**SQ 9**：図版38・P L 32 - 77 77は6(7)類のA器形である。上面が8字状の突起があり、横線帯の上下に連鎖状沈線が沿う。胴部文様は、小ぶりの環状意匠を起点に菱形・三角形の意匠が展開するものと推定する。

**SQ 10**：図版39・P L 33 - 80 80は6(6)類中段階の深鉢である。残存部の器形は湾曲が乏しく、直立に近い。4単位の渦巻文と斜行文を3条1組の沈線で描き、縄文を充填する。

**SQ 11**：図版39・P L 33 - 81、図版57・P L 46 - 607 81は軽白胎土の5(2)d種である。底部を欠損するが、全体の約80%が遺存する。底部から直線的に聞き、胴最大径から内湾して口縁部に至る。この器形が確認された唯一例である。内外面とも入念にヘラミガキし、胴上半部は横、下半部は縦・斜めに研磨する。607は軽白胎土の6(6)類である。

**SQ 13**：図版57 - 608 608は6(10)類の胴部破片で、6(7)類と同種の文様を描く。

**SQ 14**：図版57 - 609 609は6(7)類で、菱形・三角形の意匠を描く。

**SQ 15**：図版57 - 610・611 610は軽白胎土の6(7)類である。横線帯の沈線はやや太い。611は6(6)類深鉢の鋸歯状口縁部と考える。内面に沈線帯が巡る。

**SQ 16**：図版39・P L 32 - 82 82は軽白胎土の6(6)類である。林中原型深鉢の器形と共通する。軽白胎土を用いた土器で、上半部の器形復元ができた希少例である。幅が狭い文様帯の突起下に同心円文を描き、両側に台形状の意匠が見える。胴部は横・斜めに入念なヘラミガキを施す。

**SQ 17**：図版39・P L 33 - 85、図版40・P L 33 - 86 85は6(11)類である。全体に薄手で傘形

を呈し、頂部に捻転した8字状意匠が付く。文様は6(7)類と共通し、捻転状意匠が伴う連鎖状沈線と渦巻文が連結する。内外面ともミガキ調整され、精製度が高い。86は6(6)類の林中原型深鉢である。小円環を組み合わせた立体突起が6単位程度付き、2条の刻み隆線には8字状貼付文と通ずる刺突を加える。幅狭の縄文部で渦巻文を描く。

**SQ 19:** 図版57-612・613 612は6(4)類である。上面・正面に孔がある突起間に太い沈線が巡る。頸部には縦位の多条沈線を描く。613は6(6)類で、杵状文を細い沈線であいまいに描く。

**SQ 27:** 図版39・P L 32-83・84、図版57・P L 41-614・615 83は6(9)類である。口縁端部に縄文を施し、内面に沈線1条が巡る。外面は口縁部下の沈線を基準に、6(7)類通有の連鎖状沈線を描く。84は6(7)類の器形Bである。口縁端部に刻みを施し、単沈線で横線帯を描く。614・615は6(6)類である。614は林中原型深鉢で、三角文を描く。615は軽白胎土で、82と近似の意匠を描く。

**SQ 28:** 図版57・P L 33-616・617 617は4(7)類である。内湾する口縁部下をめぐる隆帯に橋状把手が付く。胴部は横位沈線の上下で方向をたがえた横八字文を細い沈線で施す。6(2)類の粗形となる鉢あるいは深鉢である。616は6(1)類としたが、4(4)類と似た低い隆帯が巡る口縁部に注目が付く。地文は摺糸文である。縄文後期初頭の数少ない伴出例である。

**SQ 29:** 図版57-618 618は、6(6)類の深鉢である。内面に沈線帯が巡る。

**SQ 30:** 図版40・P L 33-87、図版57-619・620 87・619は6(7)類である。単沈線の横線帯下に縄文帯が巡る。横ナア調整し、精製度は高くない。619は、3山1組の低い突起が2cm間隔で並ぶ。横線帯に沿う連鎖状沈線は、間延びした描き方である。620は、6(9)類とした碗形の無文鉢である。

**SQ 31:** 図版57-621 621は、6(4)類で、大ぶりの有孔突起があり、集合沈線で同心円文、懸垂文を描く。

**SQ 33:** 図版40・P L 34-88・89 88・89は3(2)c種である。88は火焔型土器で、鶏頭冠突起は左向きである。眼鏡状突起下部から基隆線文が垂下する。89は口縁部形態が王冠型土器と似るが、短冊形突起と異なって突起頂部の幅は狭く、口縁部文様は隆帯でS字状、J字状の意匠を配し、左右非対称である。空白部には三叉文を刻む。頸部で横位区画し、胴部は縄文施文する。砂を多く含む褐色を呈するが、軽い胎土である。大木8a式並行期でもやや古く、胴部全面に縄文施文するものは、新潟県でも少数である。

**SQ 34:** 図版40・P L 34-90・91 90は4(0)類である。隆帯で横位区画した口縁部に、小ぶりの渦巻文から伸びた横向きの剣先文がある。隆帯の圧着が弱い剥落し、先に施文した縄文がのぞく。91は3(2)c種の火焔型土器である。袋状突起をまたぐ位置にある鶏頭冠突起は、左向きである。突起下の隆帯装飾は斜行し、王冠型土器に似る。突起と隆帯の突出部に刻みを施す。胴部には基隆線が垂下する。

**SQ 35:** PL.33-730・731 730は口縁部に横S字状の突起があり、3(2)a種である。731は3(2)b種である。コイル状突起があり、軽い胎土である。焼町土器終末段階に属す。

⑤炭化物・焼土集中出土土器 図版40・P L 34-92、図版57-622-627

**SF 4:** 図版57-625-627 625は6(2)類の橋状把手で、頂部にボタン状貼付文が付く。626は5(1)d種としたが、粗製のな6(8)類の可能性もある。627は6(6)類で、3条の隆線の刻みは横長である。

**SF 5:** 図版40・P L 34-92、図版57-623 92は6(7)類の器形Aである。口縁端部に刻みを施し、突起下の横線帯に縦位刺突文がある。胴部は、横位3帯の連鎖状沈線文を縦位6~8単位に長方形

区画し、要所に十字形の捻紐部を配す。623は6（5）類である。

#### ⑥遺物包含層出土土器

第1群：図版58・P.L 41上-628～652・746・747、図版59・P.L 37-679

##### 1類：図版58・P.L 41上-628～634

628～631は山形押型文土器である。628～630は黒鉛を含んで暗灰色を呈し、沢式である。628・631は口縁端部に施文し、629は横位・縦位に帯状施文する。628には補修孔がある。631は樋沢式である。632・633は格子目文を横位帯状施文する、卯ノ木式古段階である。634は楕円押型文を横位密接施文する、細久保式である。

##### 2類：図版58・P.L 41上-635～652・746・747、図版59・P.L 37-679

口縁部から胴上部の絡条体圧痕文は、635・636・644が横位多段、637・643が斜位、638・640～642は羽状に施文する。645・646は横位と斜位、639・647は横位と弧状の組み合わせである。645は口縁内面にも外面同様の文様を施す。このうち、638・639・645～647は節の太さが1mm程度の細い原体、その他はそれ以上の太い原体である。大部分が絡条体原体の可能性が高い。内外面の横位・斜位条痕文もおおむねこれに対応する。648は口縁部、637と同一個体の可能性がある649は胴下部で、内外面に条痕文を施す。649には補修孔がある。650～652は平底の底部で、底面内外に条痕を施す。652は上げ底気味である。第2類のなかで、太い原体を用いるものは古段階、細い原体は新段階と考えられている。古段階に属す637・641～644・648・649、652の底部は軽白胎土を用いる。

679は大形深鉢である。外反気味の口縁部に、半載竹管で横線と弧線による連弧状の意匠を描く。胴部は密に縦へラミガキし、粘土帯の凹凸を平滑に調整する。内面は口縁部から胴上部まで、貝殻原体と思われる横位条痕を施す。内外面に条痕を施すため1（2）類としたが、胎土に繊維を含まず、器面調整・焼成からも第4・5・6群土器との差異は見えない。時期・系統が不明の土器である。

第2群：図版58・P.L 41下-653～678

##### 1類：図版58・P.L 41下-653～661・665～672

長野県の塚田・中道・神ノ木式、関東地方の花積下層・関山式、新潟県の新屋式など、系統が異なる複数の土器型式が認められるため、各地方の型式ごとに記述する。

塚田・中道・神ノ木式：653・654・657・658・660・666～669 653・654は斜位の刻みを施す低降帯が口縁部を巡る。653の胴部は、0段多条の異原体を用いた、斜構成横位羽状縄文である。内面に縦位の擦痕がある。666・667・669も同種の胴部破片で、いずれも長い原体である。668は末端処理部分が2条口縁下を巡る。これらは塚田式である。658は口縁波頂部が垂下肥厚部となる。671は尖底部内面に焼成前穿孔中途の痕跡がある。この2点は中道式である。657は波状口縁の波頂部に垂下降帯があり、東の縄文を施す。660は節菌状工具による連続刺突文を施す。この2点は神ノ木式である。

新屋式他：672 672は底部破片である。接合部の状況から、丸底を形成した後粘土を接着して、台状の底部を作り出したものと推定する。外面に斜縄文、上げ底気味の外面に羽状縄文を施文し、外周に刻みを施す。659は短く外反する口縁肥厚部に2列の爪形文を施し、頸部にも同種文様が巡る。胴部が膨らむ器形と推定され、東海地方の木島式新段階、富山県の南太閤山遺跡（富山県教育委員会1986）に近似した器形がある。

花積下層・関山式：655・656・661・665・670 656は、肥厚した口縁部にL・R2本ぞろえの撚糸文を施し、以下は、縦走する条が縦に菱形を構成する縄文である。655は口縁部の横位降帯が巖手状となり、側面圧痕に沿う。661は円形竹管文を施す。656は花積下層I式、655・661は同III式である。665は、0段多条の異原体で横位羽状または菱形を構成する縄文を施す。670は斜縄文で、末端処理が見える。いず

れも軽白胎土を用いる。関山Ⅱ式である。

これらの型式の並行関係は、塚田式と花積下層Ⅰ式、中道式と同Ⅲ式、神ノ木式と関山Ⅱ式・新屋式・木島式新段階がそれぞれ並行関係にあり、縄文前期前半は3時期に断続的な活動期があったことがわかる。有尾式・黒浜式は空白期となり、次の2類土器の時期に至る。

**2類**：図版58・P L 41下 - 662~664・673~678

2類は胎土に繊維を含まない。662~664は単節縄文を施文した口縁部である。662は異原体による縦位羽状、その他は斜縄文である。673は上部に無文部があり、口縁部のやや下であろう。諸磯a式に比定される。

674は横位沈線にヘツがある円形刺突文を施す。675は短沈線でやや乱れた格子目文を描く。いずれも羽状であろう。676・677は、諸磯b式の有孔浅鉢口縁部である。678は横位・斜位に施した条線文で、諸磯c式であろう。

**第3群**：図版37・P L 28 - 63、図版41・P L 35 - 93~97、図版42・P L 34・35・36 - 98~102・108、図版59・P L 42 - 680~682

**2類**：図版37・P L 28・34・35 - 63・93~102・108、P L 42上 - 748~759、P L 42下 - 761~769、P L 43上 - 770~774

a種：770~774は大木8a式新段階土器の口頸部破片である。縄文地文があり、半截竹管による沈線文を多用する。770には押圧隆帯、771には小突起と結節沈線、772には横S字状隆帯がある。

b種：93・756~758 93は、口縁部の橋状把手から立ち上がる突起が4単位付き、バケツ形の胴部に至る、やや器高が低い深鉢である。把手で楕円区画する口縁部文様帯に沈線を施す。胴部を斜行する隆帯で縦位区画し、太い沈線に沿う隆帯で半円・楕円形などに区画し、要所に眼鏡状突起を配す。地文がない区画が多い。胎土は砂を多く含み、赤褐色を呈する。焼町土器の比較的古い段階と考える。758は焼町土器古段階、756は中段階、757は新段階であろう。756は白色粗粒を含む軽量の胎土である。

c種：63・94~102・748~755・759・761~769 748・749は、口縁部に並行する半隆起線に、爪形文、短い蓮華文が伴う。中期中葉でも古期の千石原式である。94・95・750~755・759は、火焔型土器などに先行する土器と考える。94は内湾する4単位の波状口縁から、バケツ形の胴部に至る。頸部に小ぶりの環状把手が付く。波頂に接して巴状の渦巻文を配し、これを中心に隆帯で弧状に区画し、平坦な空間に三叉文を彫去する。胴上部に同種の渦巻文を配し、以下は半隆起線による懸垂文となるらしい。全体にきわめてシャープな作りである。95は幅狭い口縁部に低い横長突起があり、口頸部に94と近似した装飾を施し、胴部は全面に無節縄文を施す。

63・96~98は火焔型土器である。63は古段階に属す。器高が低い鉢形器の可能性が高く、右向きの低い鶏頭冠突起が立ち上がる。円窓の縁と突起頂部には細い粘土紐を貼付し、外面には細かい刻みを施す。口縁部は隆帯区画内に弧線文や玉抱三叉文を描き、橋状把手が剥落する。胴部にS字状文を配し、下部に縦位沈線を施す。96は小形である。鶏頭冠突起は欠損し、基部に配した袋状突起を挟んでS字状文・渦巻文を描く。胴部は袋状突起下に逆U字状の基隆線文が垂下し、頸部に接する渦巻文以下は轆が出る縦位半隆起線文である。97は現存高約51cmの大形品で、新潟県でも少数の法量である。胴部が長いプローションである。右向きの鶏頭冠突起が1個残存し、ハート形下部に眼鏡状突起、鋸歯状突起の中間に袋状突起を配す。眼鏡状突起下のS字状装飾は王冠型土器に似る。口頸部に対向する渦巻文、基隆線がない胴部にはS字状文、以下は轆が出る逆U字状文を描く。横S字状文は、長岡市馬高遺跡出土の、「A式1号」土器と共通する。器厚は1.5~2.0cmと厚い。剥落部の観察から、芯となる内側半分程度を製作し、乾燥後に外側半分を貼り付け、半截竹管あるいはヘラ状工具で器壁半ばまで沈刺施文したものと推定する。

施文のために器厚を倍増させていると見ることもできる。底面に磨り消された網代痕が残る。98は中形の口頸部破片で、楕円刻目文がある。P L 42 - 761も同様である。同762・763は鶏頭冠突起破片である。

100は中形の王冠型土器である。短冊状突起が1単位残り、波頂下の突起を挟んで渦巻文を配す。頸部が明瞭で、基隆線がない胴部に渦巻文と逆U字状文を描く。99はバケツ形の深鉢で、橋状把手を伴う円頭状突起が4単位付く。口縁部に、連続する渦巻文・S字状文を配し、隆帯頂部に細かい刻みを施す。頸部・胴部を区画する隆帯がない、現在数例のみの少数種である。突起下に基隆線が垂下し、逆U字状文を描く。764・766・768・769は、突起・口頸部破片である。101・102は、火焰型・王冠型土器の胴部であるが、識別できない。102は、眼鏡状突起下に基隆線が垂下し、101にはない。765・767は、102と同種の破片である。

f種：108・680～682・760 108は、口縁部がやや肥厚し、胴上部から内面に赤彩がまばらに残る。関東系の小形鉢である。上越地方に多く見られ、津南町・十日町市域では少ない。680・681は内湾する口縁部に2・3条の沈線が巡り、681は口端部にも沈線がある。682、P L 42 - 760は内屈する口縁の肩部に、682は渦巻状の隆帯と三叉状の陰刻、760は半隆起線を充填した楕円区画文を描く。いずれも北陸系浅鉢の模倣品である。

**第4群**：図版42・P L 36 - 103～107・109、図版43・P L 36・37 - 110～115、図版59・P L 43下 - 683～700、図版60 - 709 P L 36 - 733・734、P L 37 - 736、P L 43上 - 775～784、P L 43下 - 787～793

**O類**：図版42・P L 36 - 103～107、P L 43上 - 775～778・781・783

これらは縄文施文後に、隆帯・沈線で装飾し、R L縄文を多用する特徴がある。103は、上下を隆線帯で区画した口縁部に横S字状文、頸部に沈線帯、胴部の区画内に渦巻文・波状沈線文を描く。胴部の懸垂文が波状を呈するものは、例がない。大木8 a式の様相を残す土器である。104は、波頂部上面観が馬蹄形の突起があり、これに接して長尾渦巻文が口縁部を巡る。105は、口縁部に4単位の正面観X字状の橋状把手があり、長尾渦巻文が巡る。107は、同種の文様がある浅鉢で、無調整隆帯の剥落が著しい。縄文は縦位回転である。775～778・783は、同種の文様がある深鉢口縁部である。775は、文様帯下部に瘤状突起がある。106は球胴形の小型深鉢である。口端部に沈線を刻み、無文部を挟んで頸部に波状文を伴う沈線帯が巡る。口縁部内外に赤彩の痕跡がある。781は、外反する無文の口縁端部に106と同種の装飾を施す。

**1類**：図版42 - 109、図版59 - 686、P L 36 - 733・734、P L 43上 - 779・780・782・784～786

779・782は、口縁部の地文が沈線で、渦巻文はO類より大ぶりとなり、隆帯は高い。779の渦巻文は巻貝状に突出する。733・734は、胴部を4単位の区画する腕骨文間に、長方形の隆帯意匠を配し、地文に線彩文を充填する。109は口縁部に立体突起と鋸歯状突起がある、頸部無文の大形深鉢である。楕円区画文に横羽状沈線を施す。785・786は、角頭状の中空大形突起である。きわめて装飾的な、中越地方でも少数の土器である。686・784は唐草文系土器である。ごく少数のため、同時期の本類に含めた。784は、頂部の窪みに渦巻文を施す大形の突起で、外面に腕骨文状の渦巻文を貼り付ける。686は釣手土器の釣手基部と考える。鉢部に渦巻文があり、釣手断面は側縁が肥厚する板状である。内外面に煤が付着する。中野市千田遺跡（埋文センター2013）の約30km下流の、長野県最北端の例となる。

**2類**：図版43・P L 37 - 110

標準的なキャリパー形深鉢である。口縁部の渦巻文上部は、板状の小突起と上面観楕円形の2種一対の突起となる。胴部文様は単純な懸垂文と、U字・逆U字対向意匠を交互に配す。

**4類**：図版59 - 700、P L 37 - 736



736は低隆帯で無文部を画した波状口縁に橋状突起が立ち上がり、上面観がアーモンド形の杯状を呈する。胴部には太い沈線でU字状の意匠を描く。700は小形の両耳壺である。橋状把手間に細線で長方形意匠を描く。

**5類**：図版59・P.L.43下-683~685・787

口縁部に渦巻文がある。684は、2条の隆帯間に縦位沈線を充填し、以下は縄文となる沖ノ原Ⅰ式古段階である。683は、背割り隆帯と瘤状突起、685は、溝底刺突沈線を多用し、区画内には上下に圧縮したコ字文を描く。787は横線文を施す。これらは同式新段階である。

**6類**：図版43・P.L.36・37-111~113・115、P.L.36-735、P.L.43下-788~793

735・788は、縦位の背割り隆帯区画に、溝底刺突沈線で入組コ字文を描く。793は円文がある小突起に刺突列が沿う。789・790は、瘤状突起を交えた背割り隆帯区画に、入組コ字文を描く。791は、刻目隆帯下に密接する横八字文、792は、沈線下区画にまばらな横八字文を施す。111は、波状口縁部に2条の刻目隆帯が沿い、波頂部から垂下して縦位区画する。隆帯に沿って沈線2条が胴中位で無文部を画して上下2段に方形区画する。無文部のみ沈線端部に円形刺突文を施す。区画内は縄文を縦位に間隔施文する。112は、口縁部の渦巻文間に、上下に圧縮されたコ字文を描き、渦巻文下部の懸垂沈線文間とともに円形刺突文を施す。胴部に節が大きい縦走縄文を施す。113は、口縁部をめぐる2条の刻目隆帯間に円文を配し、楕円区画内に縦位・斜位の細い沈線を充填する。胴部は縦位区画し、太い沈線でピッチが長い横八字文を施す。115は、細めの沈線で縦位区画し、横八字文を充填する。沖ノ原Ⅱ式新段階に属す。111~113は、信濃川上流域に分布する標準的な沖ノ原Ⅱ式土器ではない。

**7類**：図版43・P.L.36・43下-114・687・688・690

114は、4(3)・(4)類と器形が共通の、口縁部が内湾する小形深鉢である。口縁部を巡る幅狭い平行沈線間に刻みを施し、ここから対称沈線文が垂下する。前面に方向が乱れた縦位短沈線を施す。687・688は刻目隆帯で口縁部に楕円区画文を配し、688は太い横八字状沈線を充填する。687は、隆帯に円棒状工具の先端で押し引きした、結節状の刻みを施す。690は、刻目隆帯が口縁部下を巡り、全面に雨滴状刺突文を施す。

**その他**：図版59・P.L.43下-689・691~699・709

689は、胴上部を幅広く沈線で横位区画し、3・4条の沈線を重ねた端正な方形意匠が並ぶ。5類に並行する藤塚式とも似るが、同式の文様は底部まで沈線が伸び、下端開放する縦位コ字文であり、本例とは異なる。691~693は、北信地方から上越地方に分布し、圧痕隆帯文を特徴とする坪井類型である。693は、1条の隆帯が口縁部を巡り、以下は縄文を縦位間隔施文する。691は、外反口縁に上向きの渦巻文があり、隆帯が2条横走する。692は、隆帯が横走部から屈曲して垂下し、沈線が沿う。693は、4(2)類中段階、691・692は新段階並行と推定する。千曲川沿岸では、中野市柳沢遺跡(埋文センター2012)から約25km下った、最下流地点の例となる。694は、強く内屈した無文口縁部に刻目隆帯が巡る。695は、口縁の一部を内側へ短く折り曲げる。この2点は4(3)・(4)類に並行する、北信地方の在地的な少数土器である。696~699は、波状口縁に刻目隆帯が沿い、胴部に縄文を施す。697は胴縁が厚い双頭波状口縁である。北陸地方の申田Ⅱ式土器の模倣品である。709は、細沈線で胴上部に連弧状意匠、下部に懸垂文を描く。中期末葉と考えるが、類例は乏しい。

**第5群**：図版43・P.L.34・37-116~119、図版60-704~707

**1類 d種**：116・704~707 116は、わずかに内湾する無文の口縁部下に横位沈線が1条巡り、間隔をあけて3本一組の縦位短沈線を横位沈線上に刻む。胴部は斜位回転で間隔施文した条が横走する縄文である。704~706も同種の文様を施し、704・705は残存部に地文はない。706は特に沈線が細い。707はナ

デ調整したやや薄手の無文土器である。口縁端部から2cmほどの範囲に、太さ1mm未満の細線で横位の楕円形、あるいは紡錘形の意匠を描き、左上がりの斜線沈線を刻む。この種の文様、描出方法は通常の土器にはなく、絵画土器の可能性もある。

**2類 a種**：117・118 117は、外反気味の胴部が、口縁部で直立する小形深鉢である。無節縄文を施す。118は頸部でくびれ、口縁部が内湾する大形深鉢である。単節縄文RLを施す。いずれも3群から4(0)類に伴出する粗製の土器と推定する。

d種：119 胴中位まで外傾し、上部が直立する深鉢で、口縁部は楕円形気味である。外面は指頭かヘラ状工具か識別できないが、横ナデに縦ナデを交え、凹凸が残る。内面はヘラ状工具で横ナデする。粘土のこびりつきが顕著であり、乾燥が進まない時機に器面調整したものである。4(5)・(6)類に伴出すると推定する。

**第6群**：図版44・PL 37・38 - 120~132、図版45・PL 38~40 - 133~146、図版46・PL 38~40 - 147~164、図版60・PL 37・45上・下 - 701~703・708・710~726、PL 44上 - 794~809、PL 44下 - 810~835、PL 45 - 836~869

**1類**：図版44・PL 37 - 120、図版60 - 701~703、PL 44上 - 794~809

701は小形の深鉢で、中段連結がある古段階前期、702・794~798は中段階である。703は、意匠内に沈線を施す称名寺2式の文様表現であるが、口縁部の沈線から5類に下る可能性が高い。120・799・800・804は、関沢類型である。120は胴部に無文部で4単位の楕円文を描出する。被熱して変色していることから、煮埋設土器の可能性もある。799・800・804は、口縁部の貼付文である。801は、1類末期の茂沢類型である。802・803は、本類に伴出する両耳壺で、隆帯と把手に列点を施す。805~809は、1類後半に現れる浅鉢である。4単位の波頂部に、C字状貼付文などをあしらう突起が付き、屈曲する肩部に文様を描くものもある。

**2類**：図版60・PL 37 - 708、PL 44下 - 810~835

708は深鉢である。沈線で口縁無文部を画し、胴部に刺突文を施す。810~821は、橋状把手が付く深鉢・鉢の口縁部、822~828は胴部で、小形品(813~818)もある。810・813~816には、把手に円形刺突文や瘤の裝飾がある。818・819は、橋状把手内面が委縮し、820・821は貼付文に変化する。地文は典型的な刺突文のほか、円形刺突文(811)、細長い鋭利な刺突痕(816~818・822)、方向を変えた刺突文(823)、細密な刺突文(824)、貼付瘤(825・826)、削り出し瘤(827・828)、縄文(819)、沈線文を加えた縄文(820)がある。829~835は蓋である。830は環状摘みがあり、829・834・835は2個一対の孔がある。文様は無文(829・834・835)、沈線文(830・831)、刺突文(832・833)がある。

**4類**：図版44・PL 38 - 123~126

124は、元屋敷類型に属し、口頸部縦位区画線とくびれ部区画線に刺突文を施す。125は、縦位の集合沈線文間に渦巻文を配す。126は、体部屈曲鉢に近似の器形で、孔を同心円文が囲む大ぶりの双頭波頂部が3単位付く。4条一組の沈線で胴部を大きく区画し、蕨手状の意匠を描き、まばらに縄文を充填する。123は、波頂部下にV字・逆V字状の意匠を配して縦位区画し、集合沈線で半円状・扇状の意匠を描く。

**5類**：図版44・PL 37 - 121・122、図版60 - 710

121は、茂沢類型の特徴を留め、5類初頭に位置する。頸部に立体的な8字状文を貼り付け、これを起点に無文部で4単位のJ字状文を描き、斜行文でつなぐ。122は、121の文様構成を継承する標準的な栗林類型の鉢で、5類中段階の代表的個体である。710は、深鉢で、口縁端部、頸部・縦位区画線に列点を施し、胴部に文様意匠がない。5類新段階と推定する。

**6類**：図版44・PL 38 - 127~132、図版45・PL 38・39・40 - 133・140・142・146、図版46・PL

38・40 - 147・149・158、図版60 - 711~715、P L 39 - 737~739、P L 45上 - 870~882、P L 45下 - 883~894

127~131・133・140・149は、朝顔形深鉢と呼ばれるが、129・140のように外傾が乏しいバケツ形の器形が多い。意匠文様は、127・131が渦巻文、128・130・149、軽白胎土の891が三角文、129が菱形文、133が帯状縄文である。127は図版39 - 80と同じく、3条の沈線帯で意匠を描く。3単位の突起が付き、文様帯幅が狭い131と、波状口縁内面に沈線帯と雲形意匠を描く133は、6類新段階、その他は中段階に属す。140は、口縁部に刻み隆線がなく、幅狭い4段の縄文帯が巡り、内面に沈線帯がある。146は、緩い波状口縁で、2段の縄文帯が巡る。この2点は6類終末段階に位置する。132は林中原型深鉢であろう。曲線化した菱形文を描き、内面に130と共通の狭い沈線文が巡る。

147・711~715・737・738、軽白胎土の900は栗林類型の鉢である。口縁部が幅広く肥厚し、内面または内外面に条数が多い渦巻文を描く。738の胴部には、磨消縄文による意匠、147には、Y字状隆線がある。739は近似した器形と推定するが、口縁部内外面に同種の文様が巡る。711・712は器高が低い。713~715は、口径10cm前後の小形品である。713・715は、口縁端部を小さく内屈させる。

142は、軽白胎土を用いた土器で、図版30 - 6、図版39 - 82とともに器形が推定できる希少例である。波頂部を扶んで集合沈線文が櫛状に交差し、胴上部に刻みを施す幅狭い平行沈線文が横走る。口縁部に縦位の弧線文を施す。892~894は同種の文様である。6と同種の口縁部沈線と列点のみの文様には、870~876がある。872~876は波頂部に渦巻文による渦巻文・半円文の意匠を描くものには、877・878~884・887~889と、多くの資料がある。分類が本類以外となる軽白胎土の土器には、無文土器885・886があり、胴部破片890はナデの後に施したヘラミガキが顕著である。

**7類**：図版45・P L 39・40 - 134~138・143、P L 39 - 740~743、P L 45上 - 836~845、P L 46下 - 895~899

134~138は器形Bで、底部が大きい。143は口頸部が短い、器形Aである。134・136・137・143・836~838・843・844は、刻み隆線、文様に縄文を施すなど、6類の特徴を残す古手の個体である。横線帯と連鎖状沈線は、134・135・841・897は櫛歯状工具、その他は単沈線帯で施文する。連鎖状沈線が粗大な741・845、横線帯と結合し、縦位区切り文のように施文された842、浅鉢に付く突起がある840など、変異した個体もある。134・741・895~899は軽白胎土である。134・138の横線帯と並走する沈線間列点文は、6類の刻み隆線を転写・移動した文様と推定する。

**8類**：図版45・P L 40 - 141・144・145、図版46・P L 40 - 148・150・155・156、P L 45上 - 847~852

141は波状口縁、150は平縁端部に刻みを施す。内外面に沈線帯が巡り、外面に区切り縦線文を加える。この2点は加曾利B1式本来の特徴を備える。144は双頭の小さな突起が付き、横線帯を構成する細い沈線帯を絡めて区切り文を描く。145は平縁の小形深鉢である。横線帯は太い沈線4条で、斜位の区切り文を加える。148は軽白胎土を用いる小形深鉢で、横帯文に羽状沈線帯を充填する。144・145・148は模倣のため乱れた文様である。155・156は小形の鉢である。155は3単位波状で内面に横帯文を描く。156は平縁で、狭い横帯文に凹点を加える。847~851は、深鉢・鉢の破片で、時間差がうかがえる。852は7類の器形Aを継承する。

**9類**：図版46・P L 40 - 151~154・157・158

158は、内湾器形で、集合沈線文による弧線文を描く。6類古段階の時期である。151は外反気味の口縁部に宝珠状突起が3単位付き、内面に沈線帯が巡る。6類新段階の時期である。152は、口縁端部内面

に沈刻を施し、幅広の沈線帯が巡る。8類の時期である。153・154・157は無文の鉢である。153は内湾気味で、無文の碗状器形としては大形である。154は内湾口縁の小形鉢、157は直線的に開く器形である。

**10類**：図版46・P L 40 - 159～164、図版60 - 716～719、P L 45下 - 853～869

159は、無文の大形注口土器である。160・161は、把手頂部の円板状部に渦巻文を施す。6類前半の時期である。163・717は球形胴、162・716は隅丸方形、718は方形の胴部に、7類に特徴的な連鎖状沈線、捻紐状意匠、櫛歯状工具による渦状文などを描く。718は、外面に煤が厚く付着し、使用法が目目される。6類終末から8類初頭の時期である。719は、肩部で屈折する厚手の破片で、飯山市東原遺跡出土の異形注口土器（飯山市教育委員会1998）の類例となる可能性がある。853～858・860～864は把手部破片である。858は土製の弦部である。853・854は5類、855～857・859・860は6類前半、858・861～864は6類後半の時期である。859・865～869は注口部破片である。

**11類**：図版60・P L 45上 - 720～726・846

720は2類の蓋と近似の形態で、一対の孔がある。721～726・846は、図版39 - 85と同じ傘形の形態で、頂部に摘みが付く。7類と共通の文様を施し、縄文を施す722、注口土器に散見される鋸歯状沈線文723もある。

## 3 土製品

**土 偶**：口絵7、図版61～901～913

土偶は、その可能性があるものを含めて総数29点出土している。ただし909は、同一個体だが接合しない左腕部破片があるため、土偶数としては28点となる。そのうち、形態や文様等に特徴のある13点を口絵7と図版61に掲載した。完形品はなく、いずれも破片資料である。

部位別にみると、頭部が5点（902・907・910・912ほか）、胴部上半7点（901・903～905ほか）、胴部中央1点（906）、胴部下半3点（908ほか）、腕部5点（909ほか）、脚部6

点（911～913ほか）、不明2点である。第14図のとおり、土偶の端部に当たる腕部や脚部の破片資料がそれぞれ20%前後なのに対して、中央部に当たる頭部から胴部は全体の50%を超えている。

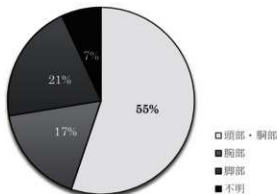
第15図のとおり、ほぼすべての土偶が遺構外から出土しており、たまたま竪穴建物跡または敷石住居跡の埋土中から出土した資料が5点（901・902ほか）ある。土偶の所属時期を捨象して分布を見ると、IX区のA列からM列、IX区T列からIY区N列に二つのまとまりがあり、IX区のN列からS列の間やIY区のO列から東では出土していない。なお、IY区B08から出土した右腕部909と同一個体の左腕部は、IY区M07から出土しており、その間22m離れている。

図示した資料のうち902～905・912は、中期後葉の土偶である。912は、縦長ハート形に顔面部を隆線で縁取り、沈線や刺突で目・鼻孔・口を表現したユーモラスな顔立ちをしている。額部分に2本1組の刻目を施し、頭頂部は皿状に窪んでいる。902も、顔面部をハート形に縁取っているが、目・鼻・口の表現は省略されている。頭頂部は浅く皿状に窪み、後頭部から頸部後方へ垂直に貫通する孔が3本空いている。903は、顔面部を3つの刺突で表現し、頭頂部は、やはり皿状に窪んでいる。後頭部は欠損しているものの、頸部に向けて貫通孔がある。904の文様は、先端がかなり鋭利な施文具で描かれ、焼き締りがよい。905は、正中線の部分で左右が剥がれ、左上半部だけが出土した。

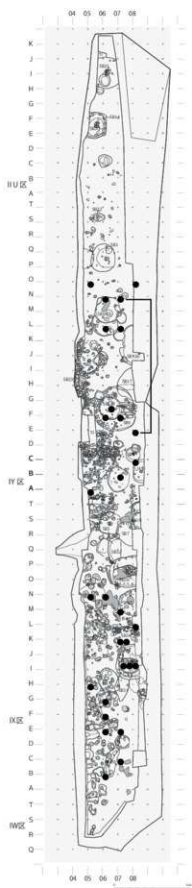
906～911・913は、後期前葉の土偶である。907は、顔面上部の雷文を残し、以下を欠損している。頭部は丸くヘルメット状で、平行した沈線の間を半隆起伏にして十字を浮き立たせ交点に刺突を打つ表現は、茅野市中ツ原遺跡（茅野市教育委員会2003）から出土した国宝の「仮面の女神」をはじめとする大型中空の有脚立像土偶に共通している。908は、焼き締りの良い板状土偶で、胴部を緩やかにくびらせ、ヘソを刺突で表現している。909は、背面に多重沈線で菱形文を施した右腕部で、一見黒漆を塗布したかのように光沢を放っている。赤外線分光分析を行ったところ、「無機化していたため同定はできなかったが、一部の吸収位置はアスファルトと同じである」との報告があった（第3章第5節7）。910は、裏面の剝離痕跡から判断して、筒形土偶の顔面部かもしれない。911の左脚部は、つま先にわずかな刻目で指を表現し、外側面に連鎖状沈線が縦に施されている。912は脚を踏ん張る大型中空土偶の左脚部である。内側面の前方下に幅10mm程度の擦痕が横方向に見え、それを切って、脚の上方から下方へ幅4mm程度の擦痕がある。原体は不明だが、比較的柔らかな素材だろう。整形の痕跡と考えられる。また、足裏にある長径6mm、短径4mmの凹みは、種子圧痕の可能性もある。

**ミニチュア土器**：口絵8、図版62・P.L.49～914～935

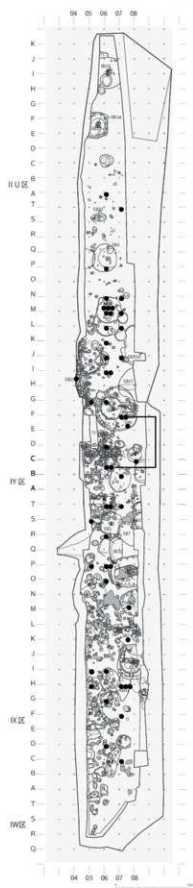
ミニチュア土器は、総数62点出土しているが、形態や文様等に特徴のある22点を口絵8と図版62、P.L.49に掲載した。930は耳飾、931は注口土器の口縁部から胴部の破片かもしれない。ほかにもミニ



第14図 出土土偶の部位別の割合



第15図 土器出土分布図



第16図 ミニチュア土器出土分布図

ユア土器かどうか疑わしい資料が12点ある。完形品は917~919の3点のみで、ほかはすべて破片である。

形態は、口縁が外傾した鉢形(921・923・925・932・933ほか)、口縁が内傾した鉢形(914・915・917・919・920・922・929ほか)、筒形(916・918・935ほか)等多様である。917や919は、手づくねで成形しており、作りが稚拙である。

確実にミニチュア土器といえる48点の出土場所は、37点が遺構外で、竪穴建物跡や敷石住居跡9点、配石1点、遺物集中1点の計11点が何らかの形で遺構と関わっている。時期を捨象して分布を見ると、第16図のとおりI X区のN列からS列にまとまりがある点は土偶と異なるが、ほかは土偶と似たような分布を示す。ただし、I Y区のH列からM列の密度は高い。なお、S B 1から出土した914と920は、いずれも約4m離れたI Y区E 06から出土した2点とそれぞれ接合している。

図示した資料を個別に見ると、916・925・927・928・932の5点は、中期後葉のミニチュア土器である。925は、口辺部に沈線を2本巡らせて、その下に上下交互の刺突が施されている。928の胴部には、無節の縄文を転がし、932は、口縁部に横長の楕円状に爪形刺突を巡らせて胴部には無節の縄文を転がしている。

914・915・918~922・924・929~931・933~935の14点は、形態や文様、出土場所から判断して後期のミニチュア土器としてよいだろう。915は、ほぼ完形だが、口縁部を打ち欠いてある。918・922・935は、内外面ともにヨコナデにより丁寧に整形していて、全体に薄い作りである。917の胴部には、縦方向に指頭によると思われる凹線が、919は、先端の鋭い工具による沈線文が描かれているが、いずれも稚拙な成形と施文である。920は、軽白胎土で、外面には軽くヘラミガキされている。921は、3単位波状口縁の波頂端部に刻目を付け、内面に2条の平行沈線を巡らせた後期中葉の鉢形土器のミニチュアである。924は焼成が強すぎたためか、形がねじれている。934の刺突文は、先端がササクレだった棒で施されている。

そのほか、口縁部から単節縄文を施している926は、内外面に赤色顔料の塗彩がみられる。

#### 土製円板：P L 47

土製円板は、土器片の割れ口のすべて、もしくは一部を打ち欠いたり研磨しているもの、穿孔しているものから155点抽出している。そのうち、形態や大きさの違い、文様等に特徴のある41点をP L 47に掲載した。

形態は、土器片の割れ口の全周が研磨されてほぼ円形になっているもの(962・964・966・978・979ほか)は少なく、割れ口を打ち欠いたままか、一部の研磨に留まっているため多角形で、「円板」という呼称が適切であるか疑わしいものが多い(949・953・959・965・970ほか)。円板を穿孔(945・963・968・969・980ほか)もしくは穿孔途中(973)のものがある。穿孔は必ずしも円板の中央にないが、著しく縁辺に片寄っているわけでもない。

割れ口の研磨の状況と現存長径との関係を見たグラフは、第17図のとおりである。全体として長径30mmから50mmの範囲に収まるものがほとんどである。打ち欠いたまま研磨痕がないものと、割れ口に一部研磨痕があるものは長径22mmから73mmの間にバラつきがあるが、研磨痕が全周するものは概ね42mm以下で30mm以下のものもある。また、円板の重さは第18図のとおりで、5g前後から20g前後のものが多い。

出土場所は114点が遺構外で、竪穴建物跡や敷石住居跡29点、土坑6点、遺物集中1点の計36点が何らかの形で遺構に関わっている。分布は第19図のとおり、I X区のF列からO列S B 26までと、I Y区F列のS B 9・12からN列までが、それぞれ54点と密度が高い。ちなみに、後者の分布範囲には粘土採掘坑S K 156がある。それ以外は散漫に出土している。

図示した資料を個別にみると、953・960・961・971・976・979・983・985の8点は中期後葉から末葉の土製円板である。S B 28出土の958も中期後葉の可能性はある。ただし、960・979・983は、後期初頭に下るかもしれない。これら3点は、割れ口の研磨が全周しているものの、角が取れていないため多角形







## 6 石器

### (1) 器種組成と分布状況

本調査で出土した石器は、石核・剥片・碎片等の剥片類を除いた道具が1,255点に上る。竪穴建物・敷石住居跡出土が194点、15.5%を占め、土坑・遺物集中等その他の遺構出土が111点、8.8%、遺物包含層出土が950点、75.7%であった。住居跡から多出した事例としては、SB 26:36点、SB 28:26点、SB 24:21点、SB 1:19点、SB 9:17点、SB 16:16点がある。

調査区短軸方向の、南北列4グリッド8m前後の区画を、東西列の2mグリッドごとに集計した石器点数が、東西に連続して20点を越える地区は、西側から①I W区T列からI X区B列までの3列6mで89点、1列当たり平均29.7点、②I X区E列からI X区P列までの12列24mで415点、1列平均34.6点、③I Y区E列からG列まで3列6mで109点、1列平均36.3点、④I Y区J列からM列までの4列8mで142点、平均35.5点の、4か所の石器集中区がある。特に②は広範囲にわたる集中区である。当該地区は遺構が密集し、特に遺物集中SQと焼土・炭化物集中SFが多い。

器種の内訳は、第21図、第12表の通りである。器種別点数で上位を占めるものは、200点超の削器から、打製石斧、石鎌他、凹石、石錐、磨石、70点以上の磨製石斧である。削器、石錐、磨製石斧の多さは、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体とする、他の遺跡と比較して異色である。石鎌未製品・台石・多孔石は図示していない。

### (2) 器種別説明

#### 石核・剥片類：P L 57 - 151~169

道具としての器種と同様に、原石、石核、剥片、碎片を剥片類としてまとめ、分布状況と石材について記す。楔形石器、二次加工ある剥片、微細刻離ある剥片、打製石斧調整剥片などもこれに含めた。これらの総重量は201,795.93 gに上る。竪穴建物跡・敷石住居跡出土が27,802.64 g、13.8%、土坑・遺物集中その他の遺構出土が18,349.13 g、9.1%、遺物包含層出土が155,644.16 g、約77.1%である（以下、小数点第一位を四捨五入する）。剥片類を多出した竪穴建物跡・敷石住居跡には、SB 26:6,281 g、SB 28:3,772 g、SB 9:2,603 g、SB 1:2,348 g、SB 24:2,271 g、SB 12:1,869 g、SB 16:1,625 gがある。

石器点数と同様に、南北列4グリッド8m前後の区画を、東西列の2mグリッドごとに集計した剥片類重量が、連続して2kgを越える地区は、①I W区T列からI X区Q列までの36m、②I Y区D列からN列まで22mの2か所がある。①では、I X区A列5,751 gを最多に約3,500 g超のI W区T列～I X区C列、I X区G列8,279 gを最多に約3,500 g超のI X区F～J列、I X区N列5,684 gを最多に約3,500 g超のI X区L～I X区Oの、各小集中地点が認められる。②ではI Y区G列以東で1列約3,500 g以上が出土した。竪穴建物跡・敷石住居跡、遺物包含層とも、道具としての石器多出遺構・地点と重複する。

石材は、無斑晶質安山岩160,025 gを最多に、凝灰岩26,966 g、チャート5,585 g、安山岩4,173 g、以下は1,000 gを下回り、ホルンフェルス793 g、黒曜石782 g、軽石644 g、泥岩489 g、凝灰岩454 g、珪質頁岩385 g、頁岩318 g、砂岩315 gがあり、その他は150 g以下である（第13表）。P L 57に掲載した石核は、151~161が無斑晶質安山岩、162~165が凝灰岩、166~169がチャートである。チャートは長径5cm未満の小形円礫である。無斑晶質安山岩は、最大長径15cm、重量100 g前後から2,000 gを超えるものまで見られる。

#### 石鎌・未製品：図版63・P L 50 - 1~22

204点出土し、石材は無斑晶質安山岩106点、チャート64点、黒曜石22点、その他は4~1点である。形態は大部分が凹基無茎鎌である。正三角形に近いものよりやや長身の形態が主体であり、側縁が直線的で腸状りが浅いものが多い。平基鎌は少数で（6・11・15）、凹基鎌はさらに少ない（2）。鋸歯縁状に加工



したものが少数ある(19)。アスファルトが付着したものが12点見られる(2・6・8~12・15・17・18・20・22)。遺存状態が良い2・9・15・22は、先端と側縁を除き、ほぼ全面に付着する。図示していないが、石鏃の未製品は53点が無斑晶質安山岩、6点がチャート、3点が黒曜石である。製品と未製品の比率が、無斑晶質安山岩が2:1であるのに対して、チャート・黒曜石は10倍前後の差があるため、無斑晶質安山岩製は在地産、他の石材2種の大部分は製品が搬入された可能性がある。

#### 石 槍：図版63・P L 50 - 32

6点出土し、無斑晶質安山岩5点、チャート1点である。32は最大幅が先端側にあり、この部分から基部側の側縁に剥離を施す。着柄を目的とした加工と推定する。基部と先端は第一次剥離面を残す。

#### 石 錐：図版63・P L 50 - 23~31

93点出土し、78点を無斑晶質安山岩が占め、チャート9点などがある。両面から剥離して全体を細身に仕上げ上げる24・29、角柱状剥片の先端を利用する23・28・30、三角形の幅広い剥片の尖頭部を機能部分とする25~27・31の形態・加工が認められる。

#### 石 匙：図版63・P L 50 - 35

1点出土した。無斑晶質安山岩製の横型石匙である。両面加工し、前期後半に多い形態である。

#### 搔 器：図版63・P L 50 - 33・34

13点出土し、11点が無斑晶質安山岩である。33は自然面がある厚手大形剥片の1側縁と端部に急角度の剥離を施す。34は小形剥片の全周を急角度に剥離し、楕円形を呈する。

#### 削 器：図版64・P L 51 - 36~48、図版65 - 49・50

272点出土し、249点が無斑晶質安山岩、ほかに凝灰岩9点、チャート8点などがある。図化個体最小の39はチャートで、1側縁に細かい剥離を施す。他は無斑晶質安山岩である。量は長さ3~10cm前後の範囲にあり、平面形態には共通性が見いだせない。刃部調整剥離を施す部位は、36~38・45が直線的な1側縁、41・46・48・50が長辺に相当する2側縁、40・43・44・49が外周全体から半周程度である。42・47には明瞭な刃部調整が観察できず、鋭利な側縁を利用するものであろう。

#### 打製石斧：図版65・P L 52 - 51~65、図版66 - 66~73

241点出土し、127点が無斑晶質安山岩、106点が凝灰岩である。掲載個体の石材は、51~53・55~59・63・69が凝灰岩、その他が無斑晶質安山岩である。形態には、側縁が平行する短冊形52・58・59・62と、その他が属す刃部側が幅広い撥形が見られるが、判然としにくいものも少なくない。側面形は、凝灰岩は板状に剥離しやすいため、薄手で厚さが均一なものが多い。加工も側縁のみ剥離を施し、第一次剥離面を広く残すものが多い傾向がある。磨耗痕を認める個体は少ないが、刃部(51)、胴部(63)、基部(53)などの例がある。71~73は胴部が分厚く幅が狭い、断面形が台形を呈するものである。裏面全面に第一次剥離面を残し、側縁を急角度に剥離し、71・72の刃部は無加工である。この種の形態は27点出土し、すべて無斑晶質安山岩である。

#### 磨製石斧：図版66・P L 53 - 74~85

74点出土し、石材は透閃石岩42点、凝灰岩・緑色岩各7点、蛇紋岩6点、輝石安山岩・砂岩各3点などがある。形態は定角式が多いが、側縁が丸みをもつ78・82のようなものもある。量は長さ2cm前後の小形品(74・75)から、15cm前後(84)まで、大小様々なものがある。幅が狭い74・81には接切痕がある。80は頁岩の扁平円礫を研磨した、未製品である。82は胴部全面にアスファルトが付着する。

#### 砥 石：図版67・P L 53 - 86、図版69 - 114

有溝も含めて13点出土した。石材は、砂岩8点が最多を占めるが、遺存状態が悪い。86は幅61mm、厚さ6mmを測る薄板状の凝灰岩に長軸方向の研磨痕があり、溝状の機能部分もある。114は、長さ約269mm、

厚さ約142mm、重量約11.4kgの安山岩である。表・裏の平坦面が顕著に磨耗し、溝状の痕跡が多数重なる。

**石 錘**：図版67・P L 53 - 87

4点出土し、安山岩3点、砂岩1点である。87は節理で割れた安山岩扁平礫が水磨を受けたもので、周縁の対向する位置に浅い打ち欠きがある。

**敲石・ハンマー**：図版67・P L 53 - 88~90

片手で握れる程度の棒状、またはやや扁平な安山岩礫の端部に剥離痕がある石器を、敲石と呼称した。堅果類の処理などの用途を想定する。無斑品質安山岩など硬質の礫に広く敲打痕がある石器をハンマーと呼称した。石器製作の用途を想定する。敲石は23点出土し、砂岩8点、輝石安山岩および安山岩8点などがある。88は扁平円礫の1端が剥離する。90は途中で欠損した棒状礫の端部に敲打痕がある。ハンマーは5点と少ない。89は自然面がある礫の広範囲に敲打痕がある。加撃により角が取れて丸みを帯びる。

**凹 石**：図版67・P L 54 - 91~96、図版68 - 97~103

116点出土し、石材は輝石安山岩79点、その他の安山岩28点などである。平面形状は円形、楕円形とやや不整形の扁平円礫である。表・裏両面に1~3か所前後のくぼみやあばた状痕を有する。1面のみのもの(99・100)、側面にもあるもの(93・101)も見られる。103は棒状礫に5か所程度のくぼみがある。磨痕を併せもつものが多く、102は表裏面とも広範囲に及ぶ。

**特殊磨石**：図版68・P L 55 - 104

3点出土し、石材は磨石と同じ。104は断面三角形の礫の稜線を2か所磨面とし、わずかに剥離痕がある。S B 26の敷石に転用されていた。

**磨 石**：図版68・P L 55 - 104~107、図版69 - 108~113

85点出土した。石材は輝石安山岩61点、その他の安山岩17点などである。平面形状は円形が多く、楕円形礫でも凹石と比較して長軸が長いものは少ない。断面形は表裏面とも凸面となる、球状に近いものが多く、大部分が両面に磨面がある。磨面が特徴的な器種であるが、ごく浅いくぼみやあばた状痕を併せもつものも見られる(108・109・111)。

**石 皿**：図版70・P L 55・56 - 115~118、図版71 - 119~122

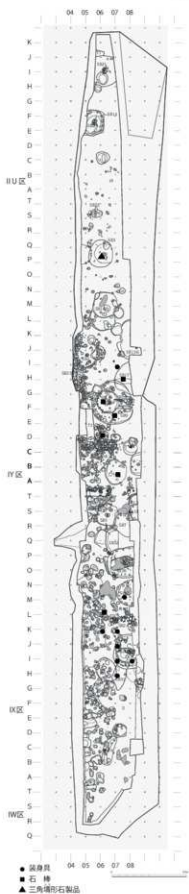
21点出土し、比較的軟質の輝石安山岩が19点を占める。116~118・120は脚付石皿で、整った楕円形に成形され、明瞭な縁を作り出す。116・117・120は、掃出し口側の縁の端部を凸基状に整形する。119・121・122は扁平楕円形の無脚石皿である。119は凹み面が深い。121・122は比較的硬質の安山岩を用い、凹み面が浅く縁が不明瞭である。115は不整形の小形品で、広い凹みがある。凹石の1種の可能性もある。

## 7 石製品

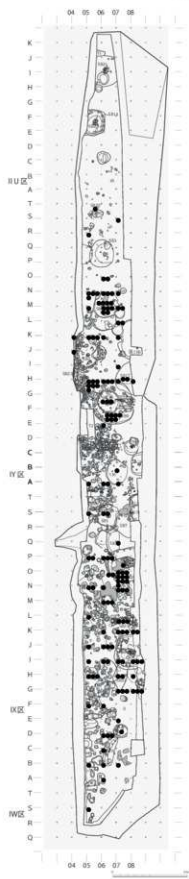
球状耳飾1点、管玉1点、石製垂飾6点、軽石製品149点、三角塔形石製品1点、石棒8点、立石1点、丸石2点、有孔石製品・異形礫各1点がある。軽石の産出地と推定される浅間山から、直線で60km以上離れた多道跡で、多数の軽石製品が出土したことは注目される。球状耳飾は小破片、立石・丸石・有孔石製品・異形礫は、加工しない自然礫を利用したものであり、図示していない。

**管玉・石製垂飾**：図版58・P L 72 - 123~128

123は滑石製の管玉である。長さ約21mm、楕円形断面は幅約13mmを測り、太く短い形態である。上下端から穿孔する。球状耳飾とともに、2群土器に伴う可能性が高い。124~128は有孔の石製垂飾である。124は透閃石岩で、小形磨製石斧の転用品の可能性もある。125~127は滑石製である。長さ20mm未満で楕円形を呈する。126は側面に長軸方向の沈線を刻む。128は緑色岩で、長さ約46mmと大形である。球状円礫の隙間を孔に利用し、研磨して整形したものと推定する。124はS B 27、125はI X G 07、126はI X



第22図 装身具ほか石製品出土分布図



第23図 軽石製品出土分布図

H 07、127は I X H 08、128は I X J 06から出土した。少数遺物が、I X 区G～M列に集中する傾向が注意を引く。

**軽石製品**：図版72・P L 58 - 129～143

149点出土し、142点は出土遺構・グリッドが特定できる。I W 区R列～I Y 区R列に分布するが、空白地区を挟んで、遺構出土品を併せるとI X 区から80点、I Y 区から60点が出土した。特に集中する地区は、①I X 区F～J列：30点、②I X 区L～P列：30点、③I Y 区G～J列：32点、④I Y 区K～N列：24点である。2mグリッドでは、I X N 07：10点、I Y G 05：7点、I Y L 06：5点、I Y M 05：4点、遺構別では、S B 9：7点、S B 16：4点、S B 12・24：各3点が多い。

全体形がうかがえる資料は4分の1程度である。形態的には垂飾状と石皿状に2大別できる。

垂飾状製品の平面形には長方形(129・130・133)、円形あるいは楕円形(131・132・134～136・138～140)の2種があり、129・130・132～134は板状である。129・131・132以外は有孔であり、130・133・136は側面から短軸方向に孔が通ずる。その他は中央あるいは上端寄りに孔がある。140は唯一沈線文を施す。

石皿状製品は、137・141～143で、長さ約125mmの137が完形最大例、長さ約34は最小に近い。

**三角塔形石製品**：図版73・P L 58 - 144

I Y P 06出土であるが、このグリッドの大部分は6(8)類土器を出土したS B 3が所在する。原形の断面が二等辺三角形に近い、砂岩礫の稜を敲打整形し研磨を加えた、やや不整形の製品である。長さ約75mm、高さ約85mmを測る。縄文晩期土器が出土していないため、当該期の「石冠」ではない。長野県で三角塔形石製品は非常に少なく、確実な例としては中野市千田遺跡に次ぐ2例目である。

**石 棒**：図版73・P L 58 - 145～150

8点出土し、147は石材不明、掲載外の1点は閃緑岩、その他は結晶片岩である。出土地点はS B 5、S B 6(147)、S B 9(145)、S B 12(149)、S B 17(150)、S K 65(148)、S K 411(146)、I X N 04であり、時期が特定できるものが多い。出土遺構の多くは、I Y 区A～H列にまとまる。145～147は小形、148～150は大形で、いずれも欠損する。146・149・150は有頭石棒で、146は頭部を3段に成形する。

## 8 アスファルト

**アスファルト塊**：口絵8、P L 49

S B 12 - Bの張出部敷石上から出土した。発掘時には、土器片を含んだ地山VI層の黄褐色シルト塊と誤認した。2017年2月、寺崎裕助氏からアスファルトの可能性が高いとの指導を受け、同年度に赤外分光スペクトル分析を委託し、アスファルトと確定した(第3章第5節7)。当初は形状を保っていたが、指導時には乾燥のため剥落が進んでいた。長径20cm前後の塊状で、同一個体と推定する6(5)類土器の破片を多数含む。法量が大きく、時期が特定できる希少な資料である。

**アスファルト付着製品**：口絵8

石器では、付着物がある磨製石斧(図版66-82)、石鎌(図版63-22)各1点、土器では注口土器2点(第3章第5節7写真)を赤外分光スペクトル分析し、アスファルトとの結果を得た。この結果から、図示した石鎌11点(図版63-2・6・8～12・15・17・18・20)も肉眼観察により、着柄のためアスファルトを接着材に用いたものと認めた。

## 第5節 自然科学分析

### 1 概要

2015・2016・2017各年度に実施した自然科学分析には、次の種類がある。

2015年度：放射性炭素年代測定、樹種同定、漆・有機物分析

2016年度：放射性炭素年代測定

2017年度：放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定、動物骨同定、漆・有機物分析、土器胎土分析、黒曜石産地推定

本節では分析種類ごとにまとめて、結果の概要を記述する。分析方法、作業工程、使用した機器・薬品、比較データ、引用文献等の詳細については、分析報告書全文を取録した添付DVDを参照いただきたい。

### 2 放射性炭素年代測定

炭化物を試料とした年代測定は、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定である。試料は発掘中に採取し、埋文センターで洗浄・抽出した炭化物を用い、年代測定と樹種同定を兼ねた場合がある。また、土器付着物を対象に、当該土器型式の年代、および付着部位による年代差の確認を目的に実施した場合がある。この分析は発掘調査および整理作業の3か年にわたって実施した。この結果概要を、「放射性炭素年代測定（1）」とする。測定結果は、年度別・分析番号順に一覧表にまとめた。ここでは考古学的に推定した試料の帰属時期と、年代の整合性に着目したい。土器型式が帰属する年代について、2015・2016年度は（小林2008）、2017年度は（小林2017）との比較から、従来知られていた年代より古い、新しい、整合的などの記述が行われている。これについては、混乱を避けるため報告原文のままとした。ただし、年代測定後に土器分類を変更したものについては、変更後の土器型式の年代観に立って記述した。

これとは別に、2017年度に行った、土器付着物を試料とした年代測定は、中央大学文学部小林謙一を研究代表者とする、日本学術振興会科学研究費助成事業の研究成果である。このため業務委託分とは別に、「放射性炭素年代測定（2）」として結果の概要を記述する。

#### 放射性炭素年代測定（1）

2015年度の試料は、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡や土坑から出土した炭化材11点、骨片1点、土器に付着した炭化物11点の計23点である。竪穴建物跡SB5では炭化材4点、SB6では炭化材1点、SB16では炭化材1点と骨片1点、根固め石がある土坑SK81では炭化材1点、同SK83では炭化材4点を採取した。土器付着炭化物については、内外両面の比較を意図して試料を採取した。竪穴住居跡SB3出土の№1土器（加曾利B1式、図版45-139）からは、口縁部外面、胴部外面・内面の3か所に付着した炭化物を採取した。SB5出土の№9土器（堀之内2式、図版30-3）からは、口縁部外面と胴部内面の2か所に付着した炭化物を採取した。土坑SK8出土の№2土器（縄文中期末葉、図版37-66）からは、口縁部外面と胴部内面の2か所に付着した炭化物を採取した。SK8出土の№1土器（縄文中期末葉、図版37-65）からは、口縁部外面の1か所に付着した炭化物を採取した。敷石住居跡SB12出土の炉内土器№2（堀之内2式、図版32-24）からは口縁部外面、胴部外面、胴下部～底部内面の3か所に付着した炭化物を採取した。

結果は第14表にまとめた。これについて、以下の通り考察する。 $^{14}\text{C}$ 年代と $2\sigma$ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、遺構ごと、土器ごとに結果を整理する。縄文土器編年と $^{14}\text{C}$ 年代、あるいは暦年代範囲との対応関係については、工藤（2012）と小林（2008）を参照した。



S B 5 出土の炭化材 4 点 (試料No 1~4 : PLD - 30902~30905) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3670 \pm 20 \sim 3625 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 2136~1919 cal BC であった。これらの年代は縄文後期前葉に相当する。S B 6 出土の炭化材 (試料No 5 : PLD - 30906) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3855 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 2458~2209 cal BC であった。この年代は縄文後期初頭に相当する。S B 16 出土の炭化材 (試料No 6 : PLD - 30907) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $4370 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 3082~2914 cal BC であった。この年代は縄文中期後葉に相当する。一方、同じ S B 16 出土の骨片 (試料No 7 : PLD - 30908) については、コラーゲン抽出と焼骨としての処理を両方試みたが、測定可能な炭素量を回収できなかった。

S K 81 出土の炭化材 (試料No 8 : PLD - 30909) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3645 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 2126~1947 cal BC であった。この年代は縄文後期前葉に相当する。S K 83 出土の炭化材 4 点 (試料No 9~12 : PLD - 30910~30913) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3760 \pm 25 \sim 3655 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 2281~1948 cal BC であった。これらの年代は縄文後期前葉に相当する。

土器付着炭化物のうち、S B 3 出土のNo 1 土器 (加曽利 B 1 式) に付着した炭化物は、口縁部外面 (試料No 13 : PLD - 30914) が  $3585 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、胴部外面 (試料No 14 : PLD - 30915) が  $3550 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、胴部内面 (試料No 15 : PLD - 30916) が  $3560 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP であった。付着部位による  $^{14}\text{C}$  年代の差は見られなかった。従来知られている加曽利 B 1 式の年代よりやや新しい。

S B 5 出土のNo 9 土器 (堀之内 2 式) に付着した炭化物は、口縁部外面 (試料No 16 : PLD - 30917) が  $3860 \pm 70$   $^{14}\text{C}$  BP、胴部内面 (試料No 17 : PLD - 30918) が  $4720 \pm 120$   $^{14}\text{C}$  BP であった。外面付着炭化物は従来知られている堀之内 2 式の  $^{14}\text{C}$  年代よりやや古く、縄文後期初頭相当であった。一方、内面付着炭化物は外面に比べて 860  $^{14}\text{C}$  years ほど古く、縄文前期末葉相当の年代であった。No 9 土器は、土器自体が黒色であった。No 9 土器は外面も内面も付着炭化物が微量であるため、外面は採取時に器壁も削ってしまっており、内面も器壁を削ってしまった可能性がある。土器胎土に由来する古い炭素が付着炭化物に混入してしまった可能性がある。

S K 8 出土のNo 2 土器 (縄文中期末葉) に付着した炭化物は、口縁部外面 (試料No 18 : PLD - 30919) が  $4115 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、胴部内面 (試料No 19 : PLD - 30920) が  $4200 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP であった。内面付着炭化物はやや古い  $^{14}\text{C}$  年代を示した。内外面にやや年代差があるものの、いずれも従来知られている縄文時代中期末の年代と整合的である。S K 8 出土のNo 1 土器 (縄文中期末葉) の、口縁部外面付着炭化物 (試料No 20 : PLD - 30921) は  $4180 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP であった。従来知られている縄文中期末の年代と整合的である。

S B 12 出土の炉内土器No 2 (堀之内 2 式) に付着した炭化物は、口縁部外面 (試料No 21 : PLD - 30922) が  $3705 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、胴部外面 (試料No 22 : PLD - 30923) が  $3650 \pm 70$   $^{14}\text{C}$  BP、胴下部~底部内面 (試料No 23 : PLD - 30924) が  $4035 \pm 40$   $^{14}\text{C}$  BP であった。外面付着炭化物 2 点は、従来知られている堀之内 2 式の年代と整合的であったが、内面付着炭化物は、外面付着炭化物に対して 300~400  $^{14}\text{C}$  years 程度古い年代を示した。内面付着炭化物には、古い炭素年代を持つ物質が含まれていたと考えられる。

土器付着炭化物のうち、S B 5 のNo 9 土器、S K 8 のNo 2 土器、S B 12 の炉内土器No 2 は、外面に対して内面が古い  $^{14}\text{C}$  年代を示した。 $^{14}\text{C}$  年代の差は、内外面で起源物質が異なる可能性を示唆する。たとえば、海産物は同時代の陸産物に比べて古い  $^{14}\text{C}$  年代を示すことが知られており、海洋リザーバー効果と呼ばれる。S K 8 のNo 2 土器と S B 12 の炉内土器No 2 は、土器内で海産物が煮炊きされた可能性も考えられる。ただし、S B 5 のNo 9 土器は、海洋リザーバー効果で説明しきれないほど  $^{14}\text{C}$  年代差が大きく、土器胎土に由来する炭素の混入が疑われる。いずれにせよ、S B 5 のNo 9 土器、S K 8 のNo 2 土器、S B 12 の炉内土器No 2 の内面付着炭化物については、炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、窒素同位体比 ( $\delta^{15}\text{N}$ )、炭素窒素比 (C/N) や、その他有効な指標を使って起源物質を追求することが、煮炊きされた食物を明らかにする上で有効で

あろう。

2016年度の試料は、土器付着炭化物7点、炭化材が2点、炭化種実が5点の、計14点である。

土器付着炭化物は、グリッドI X B 08から出土した火焔型土器（遺物No 10010：取上No 97-2）の、胴部内面付着物（試料No 1：PLD-33649）、I X B 08から出土した火焔型土器（遺物No 10011：取上No 97-1・2）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 2：PLD-33650）、I X C 07から出土した大木8 b式土器古段階の土器（遺物No 10005：取上No 77）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 3：PLD-33651）、土坑S K 279から出土した沖ノ原Ⅱ式並行と考えられる土器（遺物No 10001：取上No 1）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 4：PLD-33652）、I X I 06・M 06から出土した南三十稲場式土器新段階の土器（遺物No 10008：取上No 37）の、胴部外面付着炭化物（試料No 5：PLD-33653）、S B 26から出土した堀之内1式土器（如埋設No 5：遺物No 423-16）の、胴部外面付着炭化物（試料No 6：PLD-33654）、S B 28から出土した堀之内1式土器（如埋設No 106：遺物No 419-8）の、胴部外面付着炭化物（試料No 7：PLD-33655）である。

炭化材は、S B 26 炉内の2層直上から採取された炭化材（試料No 8：PLD-33656）、S B 28 炉下部の炭層から採取された炭化材（試料No 10：PLD-33658）の2点である。いずれも最終形成年輪が残っていた。発掘調査所見では、いずれも縄文後期の遺構と考えられている。

炭化種実は、遺物集中S Q 13、S Q 12、焼土・炭化物集中S F 29、S F 23、S F 33から採取した炭化種実計5点（試料No 9・11-14：PLD-33657・33659-33662）である。発掘調査所見では、いずれも縄文後期の遺構と考えている。

結果は第14表に記載した。以下、測定試料の種類ごとに結果を整理し、考察する。

土器付着炭化物では、I X B 08から出土した火焔型土器の口縁部内面付着物（試料No 1：PLD-33649）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $4530 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲（確率95.4%）で、3360-3264 cal BC（30.5%）、および3241-3104 cal BC（64.9%）であった。I X B 08から出土した火焔型土器（遺物No 10011：取上No 97-1・2）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 2：PLD-33650）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $4360 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で3080-3071 cal BC（2.2%）、および3025-2908 cal BC（93.2%）であった。この2点の火焔型土器の測定結果は、寺崎（2008）に集成されている測定例を参照すると、火焔土器に伴う年代の範囲で捉えられる年代である。

I X C 07から出土した大木8 b式土器古段階（遺物No 10005：取上No 77）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 3：PLD-33651）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $4400 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で3091-2924 cal BC（95.4%）であった。これは、中野（2008）に集成されている測定例を参照すると、大木8 b式土器古段階の範囲で捉えられる年代である。

S K 279から出土した沖ノ原Ⅱ式並行と考える土器（遺物No 10001：取上No 1）の、口縁部外面付着炭化物（試料No 4：PLD-33652）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $4115 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で2863-2807 cal BC（25.6%）、2759-2717 cal BC（14.2%）、2708-2579 cal BC（55.6%）であった。これは、阿部（2008）に集成されている測定例を参照すると、沖ノ原式土器の範囲で捉えられる年代である。

I X I 06・M 06から出土した、南三十稲場式新段階の土器（遺物No 10008：取上No 37）の、胴部外面付着炭化物（試料No 5：PLD-33653）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $3775 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で2287-2136 cal BC（95.4%）であった。これは、石坂（2008）に集成されている測定例を参照すると、三十稲場式土器の範囲で捉えられる年代である。S B 26から出土した堀之内1式土器（如埋設No 5：遺物No 423-16）の、胴部外面付着炭化物（試料No 6：PLD-33654）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $3870 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で2464-2286 cal BC（95.4%）となった。S B 28から出土した堀之内1式土器（如埋設No 106：遺物No 419-8）の、胴部外面付着炭化物（試料No 7：PLD-33655）は、 $^{14}\text{C}$ 年代で $3985 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲で2570-2514

cal BC (55.7%)、および 2502 - 2467 cal BC (39.7%) であった。S B 26、S B 28 が埋設土器の測定結果は、加納 (2008) に集成された測定例を参照すると、堀之内 1 式土器の範囲で捉えられる年代である。

炭化材では、S B 26 炉内の 2 層直上から採取された試料 No 8 (PLD - 33656) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3740 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 2266 - 2261 cal BC (0.6%)、2206 - 2120 cal BC (70.6%)、2095 - 2041 cal BC (24.1%) となった。これは、加納 (2008) を参照すると、縄文後期前葉に相当する。試料は最終形成年輪を測定しており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示している。S B 28 炉下部の炭層から採取された試料 No 10 (PLD - 33658) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3770 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 2286 - 2247 cal BC (16.5%)、2235 - 2133 cal BC (76.3%)、2079 - 2061 cal BC (2.6%) となった。これは、加納 (2008) を参照すると、縄文後期前葉に相当する。試料は最終形成年輪を測定しており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示している。発掘調査所見によれば、S B 26・28 は、ともに縄文後期の遺構と考えられており、測定結果は現場所見に対して整合的である。

S B 26 炉内には試料 No 6 (PLD - 33654) が、S B 28 炉内には試料 No 7 (PLD - 33655) が、それぞれ埋設されていたが、いずれも炉跡出土炭化物よりも、土器附着炭化物の方が古い暦年代を示した。土器内面附着炭化物の場合、附着物の起源物質に海産物が含まれていると、海洋リザーバー効果を受け、実際よりも古い  $^{14}\text{C}$  年代が得られる。ただし試料 No 6 (PLD - 33654)、および試料 No 7 (PLD - 33655) は、胴部外面附着炭化物であり、海洋リザーバー効果の影響を受けていた可能性は低い。S B 26 および S B 28 の炉で使用する以前に、煮炊きなどで土器が使用され、その際に形成された土器附着炭化物を測定していた可能性がある。

炭化種実では、S Q 13 から採取された試料 No 9 (PLD - 33657) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3550 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 1962 - 1870 cal BC (78.0%)、1846 - 1811 cal BC (10.5%)、1804 - 1777 cal BC (6.9%) であった。S Q 12 から採取した試料 No 11 (PLD - 33659) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3520 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 1923 - 1766 cal BC (95.4%) であった。これは、加納 (2008) および秋田 (2008) を参照すると、縄文後期前葉～中葉に相当する。試料は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。発掘調査所見によれば、S Q 12、S Q 13 はいずれも縄文後期の遺構と考えており、測定結果は現場所見に対して整合的である。

S F 29 から採取した試料 No 12 (PLD - 33660) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3565 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 2011 - 2000 cal BC (1.4%)、1977 - 1877 cal BC (88.2%)、1842 - 1821 cal BC (3.8%)、1796 - 1782 cal BC (2.0%) であった。S F 23 から採取した試料 No 13 (PLD - 33661) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3555 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 1972 - 1872 cal BC (82.8%)、1845 - 1813 cal BC (7.8%)、1801 - 1778 cal BC (4.9%) となった。S F 33 から採取した試料 No 14 (PLD - 33662) は、 $^{14}\text{C}$  年代で  $3535 \pm 25$   $^{14}\text{C}$  BP、2  $\sigma$  暦年代範囲で 1943 - 1862 cal BC (53.0%) および 1852 - 1772 cal BC (42.4%) となった。S F 29、S F 23、S F 33 出土試料の測定結果は、加納 (2008) および秋田 (2008) を参照すると、縄文後期前葉～中葉に相当する。試料は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。発掘調査所見によれば、この 3 遺構とも縄文後期の遺構と考えており、測定結果は現場所見に対して整合的である。

2017 年度は、縄文時代の遺構から出土した炭化材を対象として、年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を検討するための樹種同定を実施した。ここでは年代測定結果を記載する。

試料は、炭化材 10 試料 (試料遺物 No 39-44・46・49・62・66) である。いずれも複数の破片があり、多い試料では 100 片を越える。測定試料は、破片の中から最大片を抽出した (第 14 表)。樹種同定は、年代測定と同じ破片を用いるが、念のために他の破片についても観察し、異なる種類がある場合には記録した。

炭化材の放射性炭素年代測定、および暦年代正結果を第 14 表に示す。同位体効果の補正を実施した補

正年代は、試料No 39 が  $3,435 \pm 25$ BP、試料No 40 が  $3,495 \pm 20$ BP、試料No 41 が  $3,510 \pm 20$ BP、試料No 42 が  $3,480 \pm 20$ BP、試料No 43 が  $3,475 \pm 25$ BP、試料No 44 が  $3,475 \pm 25$ BP、試料No 46 が  $3,440 \pm 25$ BP、試料No 49 が  $3,440 \pm 25$ BP、試料No 62 が  $3,610 \pm 25$ BP、試料No 66 が  $3,640 \pm 25$ BP である。

また、 $2\sigma$  暦年代範囲は、試料No 39 が 1876 - 1841 cal BC (10.7%)、1820 - 1797 cal BC (4.0%)、1781 - 1663 cal BC (80.6%)、試料No 40 が 1866 - 1750 cal BC (95.4%)、試料No 41 が 1899 - 1755 cal BC (95.4%)、試料No 42 が 1883 - 1743 cal BC (95.4%)、試料No 43 が 1881 - 1741 cal BC (91.7%)、1711 - 1700 cal BC (3.7%)、試料No 44 が 1882 - 1742 cal BC (92.9%)、1710 - 1701 cal BC (2.5%)、試料No 46 が 1877 - 1840 cal BC (14.4%)、1822 - 1796 cal BC (5.7%)、1782 - 1686 cal BC (75.3%)、試料No 49 が 1876 - 1841 cal BC (11.6%)、1820 - 1797 cal BC (4.2%)、1781 - 1682 cal BC (78.8%)、1674 - 1666 cal BC (0.8%)、試料No 62 が 2031 - 1902 cal BC (95.4%)、試料No 66 が 2128 - 2089 cal BC (11.8%)、2045 - 1939 cal BC (83.6%) である。

上記の試料 10 点の放射性炭素年代測定、および暦年較正結果をみると、補正年代が  $3,435 \pm 25$ BP ~  $3,510 \pm 20$ BP のグループ (試料No 39 ~ 44・46・49) と、 $3,610 \pm 25$  ~  $3,640 \pm 25$ BP のグループ (試料No 62・66) に分けられる。この 2 グループは、暦年較正結果をみても年代範囲が重ならない。これらの測定結果を、関東地方を中心とした土器型式編年と年代測定結果の研究結果 (小林 2017) と比較すると、試料No 39 ~ 44・46・49 は縄文後期の加曾利 B 1 ~ B 2 式、試料No 62・66 は縄文後期の堀之内 2 式の年代範囲に含まれる。試料No 62・66 は堀之内 1 式期の竪穴建物跡、試料No 39 ~ 44・46・49 は、土器を伴わない遺構が多いが、検出深度や切合い関係から、堀之内 2 式から加曾利 B 1 式期に帰属すると推定する。加曾利 B 2 式は出土していない。前述の新旧 2 群の測定結果は、相対的に整合しているが、現在知られている土器型式の暦年代より、ほぼ 1 型式分新しい。この原因の検証が望まれる。

第3章 調査の方法と成果

第14表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号 試料番号	出土遺構・地点	試料種別 (樹種)	図版番号 (整理番号)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代 ( $\text{yrBP} \pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-30902 SB5 試料No. 1	SB5	炭化材 (カエデ属)		-28.23 ± 0.19	3625 ± 20	2022-1991 cal BC (33.3%) 1984-1952 cal BC (34.9%)	2035-1919 cal BC (95.4%)
PLD-30903 SB5 試料No. 2	SB5	炭化材 (クリ)		-27.30 ± 0.24	3670 ± 20	2129-2088 cal BC (39.8%) 2047-2022 cal BC (24.0%) 1991-1984 cal BC (4.5%)	2136-2069 cal BC (84.0%) 2093-1977 cal BC (11.4%)
PLD-30904 SB5 試料No. 3	SB5	炭化材 (カエデ属)		-28.11 ± 0.24	3645 ± 20	2034-1966 cal BC (68.2%)	2125-2091 cal BC (12.7%) 2044-1945 cal BC (92.7%)
PLD-30905 SB5 試料No. 4	SB5	炭化材 (クリ)		-26.27 ± 0.22	3655 ± 20	2117-2098 cal BC (14.5%) 2039-2010 cal BC (30.1%) 2001-1977 cal BC (23.6%)	2131-2087 cal BC (23.9%) 2051-1951 cal BC (71.5%)
PLD-30906 SB6 試料No. 5	SB6	炭化材 (不明)		-27.61 ± 0.20	3855 ± 20	2401-2382 cal BC (9.5%) 2348-2284 cal BC (52.0%) 2248-2234 cal BC (6.2%)	2458-2417 cal BC (10.9%) 2409-2273 cal BC (71.2%) 2244-2209 cal BC (13.3%)
PLD-30907 SB16 試料No. 6	SB16 床直上	炭化材 (クリ)		-32.31 ± 0.28	4370 ± 20	3011-2978 cal BC (29.3%) 2971-2925 cal BC (38.9%)	3082-3068 cal BC (4.3%) 3026-2914 cal BC (91.1%)
PLD-30908 SB16 試料No. 7	SB16 床直上	骨		—	—	—	—
PLD-30909 SK81 試料No. 8	SK81 柱痕内	炭化材 (クリ)		-25.71 ± 0.22	3645 ± 20	2035-1966 cal BC (68.2%)	2126-2091 cal BC (14.1%) 2044-1947 cal BC (91.3%)
PLD-30910 SK83 試料No. 9	SK83 3層	炭化材 (クリ?)		-23.90 ± 0.30	3750 ± 20	2201-2139 cal BC (68.2%)	2270-2254 cal BC (4.7%) 2227-2223 cal BC (6.3%) 2210-2126 cal BC (77.4%) 2090-2045 cal BC (12.9%)
PLD-30911 SK83 試料No. 10	SK83 3層	炭化材 (クリ)		-27.85 ± 0.32	3760 ± 25	2206-2261 cal BC (2.2%) 2206-2137 cal BC (96.0%)	2281-2249 cal BC (9.8%) 2231-2127 cal BC (75.2%) 2089-2046 cal BC (10.4%)
PLD-30912 SK83 試料No. 11	SK83 4層	炭化材 (クリ)		-27.65 ± 0.31	3655 ± 25	2120-2096 cal BC (16.6%) 2041-1976 cal BC (51.6%)	2133-2083 cal BC (25.6%) 2056-1948 cal BC (69.8%)
PLD-30913 SK83 試料No. 12	SK83 5層	炭化材 (クリ)		-26.24 ± 0.21	3675 ± 20	2131-2086 cal BC (44.5%) 2051-2025 cal BC (23.7%)	2137-2013 cal BC (87.8%) 1999-1979 cal BC (7.6%)
PLD-30914 試料No. 13 SB3 No. 1土器	SB3	土器付着物口 縁部外面	45 - 139 (534)	-26.81 ± 0.20	3585 ± 20	1967-1897 cal BC (68.2%)	2016-1996 cal BC (7.8%) 1981-1886 cal BC (87.6%)
PLD-30915 試料No. 14 SB3 No. 1土器	SB3	土器付着物胴 部外面	45 - 139 (534)	-26.50 ± 0.21	3550 ± 20	1932-1881 cal BC (68.2%)	1951-1872 cal BC (78.0%) 1845-1813 cal BC (10.7%) 1801-1778 cal BC (6.7%)
PLD-30916 試料No. 15 SB3 No. 1土器	SB3	土器付着物胴 部内面	45 - 139 (534)	-24.65 ± 0.19	3560 ± 20	1935-1890 cal BC (68.2%)	1972-1877 cal BC (91.6%) 1841-1825 cal BC (2.6%) 1793-1784 cal BC (1.1%)
PLD-30917 試料No. 16 SB5 No. 9土器	SB5	土器付着物口 縁部外面	30 - 3 (5078)	-40.86 ± 0.38	3860 ± 70	2439-2281 cal BC (61.8%) 2249-2232 cal BC (5.4%) 2218-2214 cal BC (1.1%)	2547-2541 cal BC (6.3%) 2489-2139 cal BC (95.1%)
PLD-30918 試料No. 17 SB5 No. 9土器	SB5	土器付着物口 縁部外面	30 - 3 (5078)	-44.62 ± 0.90	4720 ± 120	3637-3485 cal BC (40.7%) 3474-3371 cal BC (12.5%)	3765-3723 cal BC (1.6%) 3710-2863 cal BC (85.7%) 3244-3101 cal BC (8.1%)
PLD-30919 試料No. 18 SK8 No. 2土器	SK8	土器付着物口 縁部外面	37 - 66 (5077)	-25.10 ± 0.24	4115 ± 25	2851-2813 cal BC (20.7%) 2742-2728 cal BC (4.3%) 2695-2622 cal BC (41.2%)	2861-2807 cal BC (25.9%) 2730-2718 cal BC (13.3%) 2706-2579 cal BC (56.4%)
PLD-30920 試料No. 19 SK8 No. 2土器	SK8	土器付着物胴 部内面	37 - 66 (5077)	-20.53 ± 0.24	4200 ± 20	2883-2864 cal BC (20.7%) 2806-2760 cal BC (47.5%)	2891-2853 cal BC (27.6%) 2813-2744 cal BC (54.8%) 2727-2696 cal BC (13.0%)
PLD-30921 試料No. 20 SK8 No. 1土器	SK8	土器付着物口 縁部外面	37 - 66(5077)	-23.92 ± 0.22	4180 ± 20	2876-2861 cal BC (12.8%) 2808-2757 cal BC (44.1%) 2719-2705 cal BC (11.2%)	2882-2841 cal BC (19.3%) 2814-2678 cal BC (75.9%)
PLD-30922 試料No. 21 SB12 9 <sup>号</sup> No. 2土器	SB12	土器付着物口 縁部外面	31 - 24 (4989)	-26.83 ± 0.25	3705 ± 20	2138-2130 cal BC (15.8%) 2095-2041 cal BC (52.4%)	2195-2176 cal BC (6.0%) 2145-2031 cal BC (89.4%)

測定番号 試料番号	出土遺 構・地点	試料種別 (附 種)	図取番号 (整理番号)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代 ( $\text{yrBP} \pm 1\sigma$ )	$^{13}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-30923 試料No. 22 SB12 9No. 2土器	SB12	土器付着物銅 部外面	31 - 24 (4989)	-40.44 $\pm$ 0.52	3650 $\pm$ 70	2134-2078 cal BC (20.5%) 2063-1941 cal BC (47.7%)	2271-2259 cal BC ( 0.8%) 2207-1878 cal BC (93.9%) 1840-1827 cal BC ( 0.6%) 1793-1784 cal BC ( 0.4%)
PLD-30924 試料No. 23 SB12 9No. 2土器	SB12	土器付着物銅 底部内面	31 - 24 (4989)	-32.81 $\pm$ 0.23	4035 $\pm$ 40	2617-2610 cal BC ( 3.5%) 2382-2487 cal BC (64.7%)	2836-2816 cal BC ( 3.5%) 2670-2468 cal BC (91.9%)
PLD-33649 試料No. 1 火燭型土器	I XB08	土器付着物口 縁部内面	41 - 96 (10010)	-25.43 $\pm$ 0.27	4530 $\pm$ 25	3354-3326 cal BC (16.2%) 3230-3225 cal BC ( 2.0%) 3220-3174 cal BC (26.3%) 3161-3119 cal BC (23.6%)	3360-3264 cal BC (30.5%) 3241-3104 cal BC (64.9%)
PLD-33650 試料No. 2 火燭型土器	I XB08	土器付着物口 縁部外面	41 - 97 (10011)	-24.18 $\pm$ 0.18	4360 $\pm$ 25	3011-2977 cal BC (29.8%) 2970-2949 cal BC (15.9%) 2944-2918 cal BC (22.5%)	3090-3071 cal BC ( 2.2%) 3029-2908 cal BC (93.2%)
PLD-33651 試料No. 3 大木8b式古	I XC07	土器付着物口 縁部外面	42 - 105 (10005)	-23.49 $\pm$ 0.22	4400 $\pm$ 25	3065-3063 cal BC (15.5%) 3029-3006 cal BC (15.7%) 2989-2931 cal BC (37.0%)	3091-2924 cal BC (95.4%)
PLD-33652 試料No. 4 沖ノ原Ⅱ式並行	SK279	土器付着物口 縁部外面	37 - 70 (10001)	-23.12 $\pm$ 0.26	4115 $\pm$ 25	2853-2813 cal BC (20.4%) 2744-2726 cal BC ( 7.9%) 2696-2622 cal BC (39.9%)	2863-2807 cal BC (25.6%) 2759-2717 cal BC (14.2%) 2708-2579 cal BC (55.6%)
PLD-33653 試料No. 5 南三ノ輪場式新	I X106- M06	土器付着物銅 部外面	44 - 126 (10008)	-24.06 $\pm$ 0.19	3775 $\pm$ 25	2274-2257 cal BC (12.3%) 2309-2190 cal BC (16.5%) 2182-2142 cal BC (39.4%)	2287-2136 cal BC (95.4%)
PLD-33654 試料No. 6 堀之内Ⅰ式	SB26伊理 設No. 5	土器付着物銅 部外面	34 - 44 (10437)	-22.71 $\pm$ 0.21	3870 $\pm$ 25	2451-2420 cal BC (17.4%) 2405-2378 cal BC (16.9%) 2330-2296 cal BC (33.9%)	2464-2286 cal BC (95.4%)
PLD-33655 試料No. 7 堀之内Ⅰ式	SB28伊壁 No. 106	土器付着物銅 部外面	36 - 58 (10422)	-21.43 $\pm$ 0.18	3985 $\pm$ 25	2363-2334 cal BC (37.8%) 2493-2472 cal BC (30.4%)	2570-2514 cal BC (55.7%) 2502-2467 cal BC (39.7%)
PLD-33656 試料No. 8 SB26伊内	SB26伊内 2層直上	炭化材		-23.51 $\pm$ 0.18	3740 $\pm$ 20	2200-2159 cal BC (42.5%) 2154-2135 cal BC (18.6%) 2077-2064 cal BC ( 7.1%)	2206-2261 cal BC ( 0.6%) 2206-2120 cal BC (70.6%) 2095-2041 cal BC (24.1%)
PLD-33657 試料No. 9 SQ13遺物集中	SQ13	炭化種実		-19.69 $\pm$ 0.21	3550 $\pm$ 25	1939-1881 cal BC (68.2%)	1962-1870 cal BC (78.0%) 1846-1811 cal BC (16.5%) 1804-1777 cal BC ( 6.9%)
PLD-33658 試料No. 10 SB28伊下部	SB28伊下 部炭層	炭化材		-21.92 $\pm$ 0.21	3770 $\pm$ 25	2267-2261 cal BC ( 4.4%) 2206-2141 cal BC (63.8%)	2286-2247 cal BC (16.3%) 2235-2133 cal BC (76.3%) 2079-2061 cal BC ( 2.6%)
PLD-33659 試料No. 11 SQ12遺物集中	SQ12	炭化種実		-23.45 $\pm$ 0.22	3520 $\pm$ 25	1894-1871 cal BC (18.8%) 1846-1811 cal BC (27.7%) 1804-1776 cal BC (21.7%)	1923-1766 cal BC (95.4%)
PLD-33660 試料No. 12 SF29炭化物集中	SF29	炭化種実		-26.02 $\pm$ 0.18	3565 $\pm$ 25	1940-1887 cal BC (68.2%)	2011-2000 cal BC ( 1.4%) 1977-1877 cal BC (88.2%) 1842-1821 cal BC ( 3.8%) 1796-1782 cal BC ( 2.0%)
PLD-33661 試料No. 13 SF23炭化物集中	SF23	炭化種実		-21.92 $\pm$ 0.18	3555 $\pm$ 25	1938-1884 cal BC (68.2%)	1972-1872 cal BC (92.8%) 1845-1813 cal BC ( 7.8%) 1801-1778 cal BC ( 4.9%)
PLD-33662 試料No. 14 SF33炭化物集中	SF33	炭化種実		-26.02 $\pm$ 0.23	3535 $\pm$ 25	1921-1876 cal BC (41.1%) 1842-1820 cal BC (16.1%) 1797-1781 cal BC (11.0%)	1943-1862 cal BC (53.0%) 1852-1772 cal BC (42.4%)
pa1-11062 YU-7212 試料No. 39	SQ12	炭化材 (タリ)		-26.24 $\pm$ 0.51	3435 $\pm$ 25	1766-1691 cal BC (68.2%)	1876-1841 cal BC (10.7%) 1820-1797 cal BC ( 4.0%) 1781-1663 cal BC (80.6%)
pa1-11063 YU-7213 試料No. 40	SQ13	炭化材 (タリ)		-30.36 $\pm$ 0.45	3495 $\pm$ 20	1880-1863 cal BC (12.0%) 1851-1772 cal BC (56.2%)	1866-1750 cal BC (95.4%)
pa1-11064 YU-7214 試料No. 41	SF20	炭化材 (コナラ類)		-30.06 $\pm$ 0.49	3510 $\pm$ 20	1886-1870 cal BC (12.8%) 1846-1810 cal BC (30.6%) 1805-1776 cal BC (24.8%)	1899-1755 cal BC (95.4%)
pa1-11065 YU-7215 試料No. 42	SF23	炭化材 (カエデ属)		-30.31 $\pm$ 0.45	3480 $\pm$ 20	1877-1841 cal BC (27.7%) 1821-1796 cal BC (18.5%) 1782-1752 cal BC (22.1%)	1880-1743 cal BC (95.4%)

第3章 調査の方法と成果

測定番号 試料番号	出土遺 構・地点	試料種別 (樹 種)	図版番号 (整理番号)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代 ( $\text{yrBP} \pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
po1-11066 YU-7216 試料No. 43	SF21	炭化材 (コナラ節)		$-29.61 \pm$ 0.47	3475 $\pm$ 25	1876-1842 cal BC (26.1%) 1820-1797 cal BC (15.6%) 1781-1747 cal BC (28.5%)	1881-1741 cal BC (91.7%) 1711-1700 cal BC ( 3.7%)
po1-11067 YU-7217 試料No. 44	SF33	炭化材 (ブナ属)		$-28.73 \pm$ 0.45	3475 $\pm$ 25	1876-1842 cal BC (26.7%) 1820-1797 cal BC (16.6%) 1781-1749 cal BC (24.9%)	1882-1742 cal BC (92.9%) 1710-1701 cal BC ( 2.5%)
po1-11068 YU-7218 試料No. 46	SF29	炭化材 (カエデ属)		$-33.24 \pm$ 0.43	3440 $\pm$ 25	1861-1853 cal BC ( 4.8%) 1772-1731 cal BC (35.8%) 1721-1693 cal BC (27.5%)	1877-1840 cal BC (14.4%) 1822-1796 cal BC ( 5.7%) 1782-1686 cal BC (75.3%)
po1-11069 YU-7219 試料No. 49	SF24	炭化材 (クリ)		$-36.66 \pm$ 0.45	3440 $\pm$ 25	1768-1692 cal BC (68.2%)	1876-1841 cal BC (11.6%) 1820-1797 cal BC ( 4.2%) 1781-1682 cal BC (78.8%) 1674-1666 cal BC ( 0.8%)
po1-11070 YU-7220 試料No. 62	SB26	炭化材 (ニレ属)		$-28.10 \pm$ 0.46	3610 $\pm$ 25	2019-1994 cal BC (23.6%) 1982-1939 cal BC (44.6%)	2031-1902 cal BC (95.4%)
po1-11071 YU-7221 試料No. 66	SB26	炭化材 (クリ)		$-27.84 \pm$ 0.33	3640 $\pm$ 25	2032-1964 cal BC (68.2%)	2128-2089 cal BC (11.8%) 2045-1939 cal BC (93.6%)

## 放射性炭素年代測定(2)

第15表に掲載した、測定ID19098~19102・19121・19162~19172の、縄文中・後期土器13個体17件についての、AMS炭素14年代測定、およびIRMS安定同位体比測定は、科研費基盤B(小林謙一:18H00744)による、小林と東京大学総合研究博物館年代測定室との共同研究成果である。試料採取は、小林が埋文センターにおいて採取した。前処理は国立歴史民俗博物館年代測定実験室において小林が行った。グラフアイト化およびAMS・IRMS測定は東京大学総合研究博物館年代測定室が行った。採取試料は、51点の土器個体から採取を試みた。今回は第15表掲載の、13点の土器個体の土器内外付着物について、AMSおよびIRMSの分析結果を報告する。本項では、土器型式別に検討された、年代的考察について抜粋する。これまでの測定から推定した暦年は、旧稿(小林2017)による。

NNMBH-10455(図版37-63)は、火焰型土器古期に比定される土器の内面付着物である。原報告表3では、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-23.5\%$ と重く、海洋リザーバー効果が疑われる値であるが、 $\delta^{15}\text{N}$ 値は $0.9\%$ と小さく、C/N比も35.2と大きいことから植物性の由来が想定され、海藻などの海産物か $\text{C}_4$ 植物が混在した、調理物のお焦げの可能性も考えられる。年代的には3341~3089cal BCに92.8%の確率で含まれ、これまでの中期中葉頃の年代(小林2017)と比較すると、火焰型土器に対応する、南関東地方勝飯3a式期(新地平編年9a期)の推定年代3150~3080cal BCが含まれ、中期中葉の年代として矛盾はない。海藻等の可能性を含めた海産物の調理によるお焦げの可能性が残り、海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性は完全には否定できないが、アワ・ヒエなどの雑穀類が含まれた調理物の煮炊きのお焦げの可能性を指摘しておきたい。

NNMBH-10216-b(図版57-617)は、後期初頭とされる土器の外外面付着物である。3966 $\pm$ 27 $^{14}\text{C}$  BP、較正年代で2572~2512cal BC(41.1%)、2505~2451cal BC(48.9%)、2420~2405cal BC(2.0%)、2378~2350cal BC(3.4%)の年代である。関東地方の中期末葉加曾利E4式(新地平13期)は、2590~2540cal BCと推定(ただし、後期に残る加曾利E系土器との弁別が問題となり、測定例も後期の土器付着物を含んでいる可能性がある)、後期初頭新地平14期(称名寺式期)は、2540~2285cal BCと推定している。NNMBH-10216-bは、今村營爾の称名寺1c式期に相当する年代に対比され、後期初頭との位置づけと年代の上でも合致すると考える。

NNMBH-10520-b(図版35-53)は、後期初頭に位置づけられる原山類型の土器外外面付着物である。2567~2523cal BC(17.4%)、2498~2393cal BC(63.6%)、2386~2346cal BC(14.5%)、小林2017での推定年代と比較すると、称名寺2式(2330~2285cal BC)~堀之内1式古段階(2285~2220cal BC)におおよそ相当する。

NNMBH-10030(図版38-72)は、後期初頭三十稲場式土器外外面付着物である。2576 cal BC~2399cal BC(88.3%)の較正年代で、後期初頭の年代に比べると、称名寺1式の年代(2540~2330cal BC)にはほぼ重なる結果である。

NNMBH-10447-ab(図版34-49)は、後期前葉堀之内1式土器内(a)・外(b)面付着物である。堀之内1式土器の推定年代(2285~2100 cal BC)と比べると、内面付着物のaは明らかに古く、2580cal BC~2471 cal BC(95.4%)、外面付着物のbは、2461~2273cal BC(80.3%)、2257~2208cal BC(15.1%)の較正年代である。外面付着物が土器使用時の年代を反映すると捉えると、称名寺2式(2330~2285cal BC)から堀之内1式古段階~中段頃の年代(2285~2130cal BC)におおよそ合致する。内面付着物(a)は、IRMSによる $\delta^{13}\text{C}$ 値では $-24.2\%$ と、通常の陸性の植物に多く見られる $-26\%$ に比べるとやや重い、これまでの経験則から、海洋リザーバー効果の影響により古い年代を示す場合が多いとしてきた、 $-20\sim-23.9\%$ の範囲からは外れるため、検討が必要であるが、C/N比が8.7と小さく窒素が多いことや、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が



11.3%と比較的大きいことから、動物性由来の可能性が大きく、魚類などの調理物が混ざっている可能性が考えられる。

NNMBH-10435-ab (図版 35 - 56) は、後期堀之内 1 式土器外面 (b)、および内面付着物 (a) である。内面付着物の 10435-a は、2233cal BC ~ 2032cal BC (88.0%)、外面付着物の 10435-b は、2293cal BC ~ 2141cal BC (95.4%) の較正年代である。内面付着の 10435-a は堀之内 1 式の年代、外面付着の 10435-b は、おおよそ堀之内 1 式新段階 (2130 ~ 2100cal BC) から 2 式の年代に相当しよう。

NNMBH-3256-b (図版 44 - 124) は、後期前葉南三十稲場式土器外面付着物である。外面付着の 3256-b は、IRMS の測定値から通常の陸生の植物由来と考えられ、燃料材由来の煤であろう。較正年代は、2350cal BC ~ 2140cal BC (90.8%) に含まれる年代である。

NNMBH-4246 (図版 44 - 131)、および 4994 (図版 45 - 133) は、後期前葉堀之内 2 式土器外面付着物である。外面付着の 4246 は、IRMS の測定から陸生の植物質由来と考えられ、燃料材由来の煤で土器使用時の年代を反映する。2121 ~ 2094cal BC (5.3%)、2042 ~ 1907cal BC (90.1%) の較正年代であり、堀之内 2 式の推定年代とおおむね矛盾ない。外面付着の 4994 は、1984cal BC ~ 1883cal BC (85.2%)、または 2021cal BC ~ 1992cal BC (10.2%) の較正年代である。堀之内 2 式の推定年代 (2100 ~ 1950cal BC) と 4246 は概ね含まれるが、4994 は新しい年代の可能性が高く示されている。ただし、10% とやや低い確率となっているが、2020 ~ 1990cal BC 頃の年代幅も示されており、その年代に含まれると考えれば矛盾はない。

NNMBH-4133-ab (図版 45 - 138)・4771-b (図版 40 - 92)・5016-ab (図版 45 - 138) は、後期前葉石神類型の土器内面 (a)・外面 (b) 付着物である。土器外面付着の 4133-b および 4771-b は、IRMS の測定で陸生の植物質由来と考えられ、燃料材由来の煤で土器使用時の年代を反映する。5016-ab は、ともに  $\delta^{13}\text{C}$  値は -25.2‰、-26‰と、植物質由来の値と考えられるが、C/N 比は 9.9、26.8 で、内面付着物が N の比率が多く、外面付着が C の比率が相対的に多い。外面付着物は燃料材由来の煤と考えられ、内面付着物は動物性由来の調理物が混在している可能性が考えられる。

年代を考えると、石神類型は、堀之内 2 式終末期 (2100 ~ 1950cal BC と推定) に位置づけられている。内面付着物の 4133-a は 2206BC ~ 2016BC (93.1%)、外面付着物の 4133-b は 2150BC ~ 2026BC (85.8%) と、内面付着物がやや古い年代を含むもの、おおよそ一致しており、堀之内 1 式新段階から堀之内 2 式の年代幅に収まる年代で、おおむね整合的である。外面付着物の 4771-b は、1953BC ~ 1764BC (95.4%) の較正年代で、堀之内 2 式直後の加曾利 B 1 式 (1950 ~ 1800cal BC と推定) に比定される年代である。内面付着物の 5016-a は、2259BC ~ 2132BC (92.4%) または 2083BC ~ 2059BC (3.0%) と明らかに古い年代値で、外面付着物の 5016-b は、2136cal BC ~ 1959 cal BC (95.4%) であり、外面付着物が土器使用時の年代を反映すると考えると、堀之内 2 式期に近いと捉えられる。

NNMBH-97 (図版 45 - 141) は、後期中葉加曾利 B 1 式土器の内面付着物である。較正年代を見ると 2134 ~ 2081cal BC (21.0%)、2060 ~ 1940cal BC (74.4%) と、小林 2017 による加曾利 B 1 式に比定される時期 (1950 ~ 1800cal BC) に比べ、明らかに古い年代値である。炭化物の状態は良好であり、前処理時や精製時の回収率も良好で、不純物の混在は認められず、土壌などからの汚染の影響は除去されていると考えられる。前述のように、安定同位体比からは  $\delta^{13}\text{C}$  値が -26.1‰と、陸性由来の試料に良く見られる値であり、海洋リザーバー効果の影響は認められない。一方で  $\delta^{15}\text{N}$  値が 7.1‰と大きく C/N 比が 9.6 と小さいことから、動物質である可能性が高い。外面付着物であるが、口唇近くに垂れこぼれるように付着しており、調理の噴きこぼれである可能性が考えられる。異常値としては考えられず、何を調理したかなど、今後検討を重ねていく中で、年代値について再考していく必要があるが、ここでは魚類などの魚貝物の調理による、海洋リザーバー効果の影響も含めて、年代としては予想される年代よりも、数十年ほど古い結果

であることを指摘しておくにとどめる。

以上、中期後半～後期前半の年代値として、概ね連続的な測定値を得ることができた。火炎系土器や堀之内1・2式土器などの年代推定は、おおむねこれまでの年代的位置づけと整合的であり、南三十稲場式、原山類型や石神類型の年代的位置づけについて、事例の蓄積を得ることができた。内外面付着物を測定した例では、5016や10447などは内面付着物が明らかに古い年代を示し、海産物の調理など海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性がある。ただし、 $\delta^{13}\text{C}$ 値では、これまで指摘してきた $-20\sim-23.9\%$ の範囲を示す場合に、海洋リザーバー効果の影響が疑われるとした場合(小林2017)に比べて、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は $-240\%$ よりも小さく検討を要する結果となった。一方で、中期のNNMBH-10455は、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-23.5\%$ と大きい年代値は整合的で、海洋リザーバー効果の影響は少ないように感じられ、植物質の由来である可能性が高いことから、 $\text{C}_4$ 植物が関与する可能性が考えられ、やはり検討を要する結果となった。内容物の由来を見ていく上で示唆に富む結果である。今後とも検討を重ねていきたい。

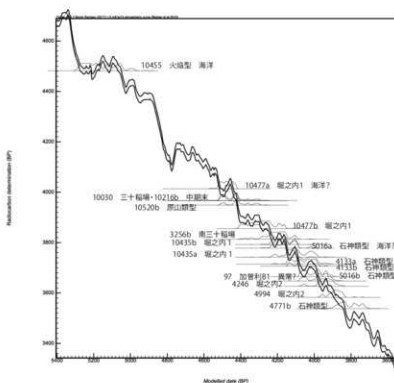
第15表 推定される校正年代と注記 (BC/AD 表記)

\*左端「資料名」末尾の「97」等の数字が整理番号、\*項目中の「原表」は添付DVD収録報告書中の表番号

測定 ID ・資料名	遺構・地点 図版番号	推定型式 (外・内面)	$\delta^{13}\text{C}$ C/N 比 (原表 3)	$^{14}\text{C}$ 年代 (原表 6)	校正年代(1SD) (原表 8)	校正年代(2SD) (原表 8)
TKA-19162 NNMBH-97	IIUF06 45-141	加曾利 B1 (内 面)	-26.1 ‰ 9.6	3648 ± 27 BP	2113BC(7.7%)2101BC 2037BC(60.5%)1964BC	2134BC(21.0%)2081BC 2060BC(74.4%)1940BC
TKA-19098 NNMBH-3256-b	I YK05 44-124	南三十稲場 (外 面)	-25.1 ‰ 14.6	3813 ± 34 BP	2299BC(66.0%)2199BC 2160BC(2.2%)2154BC	2436BC(1.4%)2420BC 2405BC(3.3%)2378BC 2350BC(90.8%)2140BC
TKA-19099 NNMBH-4133-a	I YA07 45-138	石神類型 (内 面)		3714 ± 37 BP	2194BC(8.8%)2177BC 2144BC(18.4%)2112BC 2102BC(41.0%)2036BC	2266BC(0.4%)2261BC 2206BC(93.1%)2016BC 1997BC(1.9%)1980BC
TKA-19163 NNMBH-4133-b	I YA07 45-138	石神類型 (外 面)	-26.1 ‰ 22.0	3706 ± 26 BP	2139BC(17.7%)2116BC 2099BC(50.5%)2038BC	2198BC(9.6%)2166BC 2150BC(85.8%)2026BC
TKA-19164 NNMBH-4246	I YA07 44-131	堀之内 2 (外 面)	-26.4 ‰ 48.9	3627 ± 27 BP	2026BC(68.2%)1951BC	2121BC(5.3%)2094BC 2042BC(90.1%)1907BC
TKA-19100 NNMBH-4771-b	SF5 40-92	石神類型 (外 面)		3538 ± 31 BP	1928BC(40.8%)1875BC 1843BC(16.0%)1818BC 1798BC(11.4%)1780BC	1953BC(95.4%)1764BC
TKA-19121 NNMBH-4994	I YC07 45-133	堀之内 2 (外 面)		3583 ± 25 BP	1960BC(68.2%)1893BC	2021BC(10.2%)1992BC 1984BC(85.2%)1883BC
TKA-19165 NNMBH-5016-a	I YA06 45-135	石神類型 (内 面)	-25.2 ‰ 9.9	3778 ± 30 BP	2279BC(19.1%)2251BC 2229BC(4.9%)2221BC 2211BC(14.7%)2191BC 2181BC(29.6%)2142BC	2295BC(92.4%)2132BC 2083BC(3.0%)2059BC
TKA-19166 NNMBH-5016-b	I YA06 45-235	石神類型 (外 面)	-26.0 ‰ 26.8	3665 ± 26 BP	2128BC(31.7%)2089BC 2046BC(24.9%)2015BC 1997BC(11.6%)1980BC	2136BC(95.4%)1959BC
TKA-19101 NNMBH-10030	SK203 38-72	三十稲場 (外 面)		3967 ± 36 BP	2567BC(34.2%)2521BC 2498BC(34.0%)2461BC	2576BC(88.3%)2399BC 2383BC(7.1%)2347BC
TKA-19167 NNMBH-10216-b	SQ28 57-617	後期初頭 (外 面)		3966 ± 27 BP	2560BC(26.9%)2536BC 2492BC(41.3%)2465BC	2572BC(41.1%)2512BC 2505BC(48.9%)2451BC 2420BC(2.0%)2405BC 2378BC(3.4%)2350BC
TKA-19102 NNMBH-10435-a	SB28 35-56	堀之内 1 (内 面)	-25.4 ‰ 16.0	3742 ± 38 BP	2203BC(47.5%)2129BC 2088BC(20.7%)2048BC	2283BC(7.4%)2248BC 2233BC(88.0%)2032BC

測定 ID ・資料名	遺構・地点 図版番号	推定型式 (外・内面)	$\delta^{13}\text{C}$ C/N 比 (原表 3)	$^{14}\text{C}$ 年代 (原表 6)	較正年代(1SD) (原表 8)	較正年代(2SD) (原表 8)
TKA-19168 NNMBH-10435- b	SB28 35-56	堀之内 1 (外 面)		3792 ± 25 BP	2283BC(30.0%)2248BC 2233BC(27.5%)2198BC 2166BC(10.7%)2151BC	2293BC(95.4%)2141BC
TKA-19169 NNMBH-10447- a	SB26 34-49	堀之内 1 (内 面)	-24.2 ‰ 8.7	4013 ± 27 BP	2570BC(55.2%)2515BC 2502BC(13.0%)2489BC	2580BC(95.4%)2471BC
TKA-19170 NNMBH-10447- b	SB26 34-49	堀之内 1 (外 面)		3856 ± 31 BP	2451BC(11.9%)2420BC 2405BC(12.3%)2378BC 2350BC(38.1%)2283BC 2248BC( 5.9%)2233BC	2461BC(80.3%)2273BC 2257BC(15.1%)2208BC
TKA-19171 NNMBH-10455	SB28 37-63	火輪型古 (内 面)	-23.5 ‰ 35.2	4482 ± 28 BP	3329BC(30.6%)3262BC 3255BC(16.8%)3216BC 3182BC( 9.8%)3158BC 3124BC(11.1%)3098BC	3341BC(92.8%)3089BC 3053BC( 2.6%)3034BC
TKA-19172 NNMBH-10520- b	SB27 35-53	原山類型 (外 面)		3949 ± 27 BP	2559BC(12.3%)2536BC 2491BC(42.7%)2454BC 2418BC( 5.4%)2408BC 2375BC( 7.8%)2352BC	2567BC(17.4%)2523BC 2498BC(63.6%)2393BC 2386BC(14.5%)2346BC

較正年代の算出には、OxCAL4.2 (Bronk Ramsey, 2009) を使用し、較正データには IntCal13 (Reimer et al. 2013) を用いた。



第24図 ひんご遺跡  $^{14}\text{C}$  測定値と較正曲線 (IntCal13)

### 3 樹種同定

2015年度、2017年度とも、同一試料で樹種同定と年代測定を兼ねて分析を行った。前項表に年代測定結果を記したので、本稿には樹種同定結果のみ記載する。

2015年度実施した樹種同定の試料は、堅穴建物跡や土坑から出土した炭化材11点である。調査担当者が抽出した各分析番号につき、各1点である。後期前葉塚之内2式期の堅穴建物跡SB5では炭化材4点、ほぼ同時期のSB6では炭化材1点、中期末葉沖ノ原I・II式期のSB16では炭化材1点、根固め石がある柱穴SK81では炭化材1点、同種のSK83では炭化材4点が採取された。12点の試料の分析結果は、カエデ属2点、不明1点、その他8点は、「？」付を含めてクリであった。

SB5出土の炭化材はクリとカエデ属、SB6出土の炭化材は、同定できず不明であった。SK81出土の炭化材はクリ、SK83出土の炭化材はクリ(クリ?を含む)であった。いずれも用途は不明であるが、クリとカエデ属は重硬な材である。

長野県では、縄文中期～後期の遺跡出土炭化材はクリを主体として、クルミ属やカエデ属、トネリコ属などの落葉広葉樹がみられる(伊東・山田2012)。今回の分析結果も同様の傾向であり、周辺地域の木材利用傾向とも一致する。

2017年度実施した樹種同定試料は、土塊を洗浄して採取した炭化材から、調査担当者が各遺構につき相対的に大形の試料複数抽出した10試料である。受託者はこれを樹種同定したうえで、年代測定に最適な試料を選定し、同定されたすべての樹種を報告した。対象とした遺構は、縄文後期前葉塚之内1式期の堅穴建物跡SB26の炉内出土試料2点、種実が目立つ炭化物主体の遺物集中SQ12・13、および炭化物・焼土集中SF20・21・23・24・29・33の各遺構各1点である。第16表に示す分析№1～5・8の6点については、それぞれ3～8種類が認められた。分析№6・7・9・10の4点は、複数片の炭化材があるが、確認した範囲では単一の種類のみで構成され、複数種類が確認されなかった。これらの炭化材は、広葉樹針葉樹1分類群(マツ属複雑管束亜属)と、広葉樹17分類群(オニグルミ・ヤナギ属・ブナ属・コナラ属コナラ節・クリ・エノキ属・ニレ属・モクレン属・クスノキ科・フサザクラ・カツラ・ノリウツギ・キハダ・カエデ属・ケンボナシ属・ハリギリ・ツツジ属)に同定された。

これらの樹種について木材利用のありかたを考察する。10試料には、合計で18種類が認められた。各種類の材質等についてみると、針葉樹のマツ属複雑管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。広葉樹のオニグルミ、コナラ節、クリ、ニレ属、ノリウツギ、カエデ属、ツツジ属は、比較的重硬で強度が高い部類に入る。一方、ヤナギ属、モクレン属、カツラ、キハダ、ハリギリは軽軟で強度は低い。エノキ属やケンボナシ属は、強度は中程度とされる。クスノキ科は、長野県では落葉性の種類(クロモジ属など)と考えられる。小径木が多く、強度等の詳細は不明である。フサザクラはやや重硬な部類に入り、割れにくいが脆いとされる。

分析№9・10は、SB26の炉から出土した炭化材であり、ニレ属とクリが認められた。この結果から、燃料材等に少なくとも2種類の広葉樹が利用されたと考えられる。ニレ属は河畔、クリは二次林等に生育していたと考えられる。

クリと共に生育することがあるコナラ節が4試料で認められる。一方、山地に生育するブナ属も3試料で確認される。炭化材に認められた各種類の生態性から、遺跡周辺の植生について検討すると、山地にはブナ属を温帯性主体とする、冷落葉広葉樹林が見られたと考えられる。遺跡周辺の台地上にはマツ属複雑管束亜属、コナラ節、クリ、カエデ属等の生育する二次林、台地斜面にはフサザクラ、河畔にはオニグルミ、ヤナギ属、エノキ属、モクレン属、カツラ、キハダ、ケンボナシ属等が生育していたことが推定される。炭化材の種類構成は、遺跡周辺の様々な環境から集められた木材を利用した結果と考えられる。

第16表 樹種同定結果一覧

分析No.	試料No.	遺構名	地点、層位・深さ、取上げ名称等	形状	樹種	年代測定No.
2015年度						
1	1	SB5	炭サンプルA	丸木?	カエデ属	PLD-30902
2	2	SB5	炭サンプルB	不明	クリ	PLD-30903
3	3	SB5	炭サンプルC	不明	カエデ属	PLD-30904
4	4	SB5	炭サンプルD	不明	クリ	PLD-30905
5	5	SB6	炭No. 1	不明	不明	PLD-30906
6	6	SB16	セクションAの炭サンプルA床直上	不明	クリ	PLD-30907
8	8	SK81	柱痕内炭サンプル	不明	クリ	PLD-30909
9	9	SK83	3層	不明	クリ?	PLD-30910
10	10	SK83	3層 (北西縁下部)	不明	クリ	PLD-30911
11	11	SK83	4層	不明	クリ	PLD-30912
12	12	SK83	5層	不明	クリ	PLD-30913
2017年度						
1	39	SQ12		板目状	クリ	pal-11062 YU-7212
				分割状	オニグルミ カツラ ケンボナシ属	
2	40	SQ13		分割状	オニグルミ クリ フサザクラ	pal-11063 YU-7213
3	41	SF20	I XI07	分割状	ブナ属 コナラ属コナラ節 フサザクラ キハダ ハリギリ ツツジ属	pal-11064 YU-7214
4	42	SF23	I XJ07 0-5	分割状	カエデ属 ブナ属 コナラ属コナラ節 クリ エノキ属 クスノキ科	pal-11065 YU-7215
5	43	SF21	I XJ07	分割状	コナラ属コナラ節 オニグルミ ヤナギ属 クリ エノキ属 モクレン属 クスノキ科 ノリウツギ	pal-11066 YU-7216
6	44	SF33	I XI-608	ミカン割状	ブナ属	pal-11067 YU-7217
7	46	SF29	I XI07・08E 0-5	分割状	カエデ属	pal-11068 YU-7218
8	49	SF24	I XJ07 0-5	分割状	マツ属複雑管束亜属 オニグルミ コナラ属コナラ節 クリ モクレン属 ノリウツギ	pal-11069 YU-7219
9	62	SB26	炉底	ミカン割状	ニレ属	pal-11070 YU-7220
10	66	SB26	炉東	板目状	クリ	pal-11071 YU-7221

## 4 種実同定

本遺跡では、縄文中・後期の竪穴建物・敷石住居跡の炉、および焼土・炭化物集中から、多量の炭化物や焼けた骨が出土した。土壌ごと取り上げて水洗・選別したところ、種実、魚骨を含む動物骨と種実を検出した。これらについて、本項では種実同定結果を記し、縄文時代の食糧資源および食生活の復原を行う。

種実同定の試料は、1mm網目の篩を用いて水洗・選別した種実である(第17表)。種実同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

同定された分類群は、樹木3、草本1の計4分類群である。和名および個数を第17表に示し、主要な分類群を写真に示す(添付DVD収録)。同定された種実は、クルミ科オニグルミの核(破片)、ブナ科クリの子葉(完形・破片)・果皮(破片)、トチノキ科トチノキの種子(完形・破片)・種皮(破片)である。草本は、マメ科ササゲ属の子葉(完形・半形)で、種皮が脱落しており、へその詳細な形態はわからない。

その他には、タール状物質がある。ある程度脂質を含む植物質が煮沸され、液状になったものが炭化したとみられる。観察の結果、エゴマのタール状物質のような細胞壁またはその残骸は認められず、デンプン質のみが煮沸され液状になったものが炭化したとみられる。

同定された試料個々の内容は、第17表に記載した。以下に遺構ごとに、検出した種実群集の特徴を記す。

S B 24: 樹木種実のオニグルミ破片2、トチノキ種子破片14が同定された。

S B 26: 樹木種実のオニグルミ破片37、クリ破片6、トチノキ種子破片17、同種皮破片158が同定された。

S B 27: 樹木種実のトチノキ種皮破片1が同定された。

S B 28: 樹木種実のオニグルミ破片8、トチノキ種子破片29が同定された。

S F 19: 樹木種実のオニグルミ破片9が同定された。

S F 21: 樹木種実のオニグルミ破片8、トチノキ種皮破片40、草本種実のササゲ属1が同定された。

S F 23: 樹木種実のオニグルミ破片31、クリ破片1、トチノキ種皮破片21、同種子破片37、同細片520、同極細片(+)が同定された。

S F 24: 樹木種実のオニグルミ破片15、トチノキ種皮破片17が同定された。

S F 25: 樹木種実のオニグルミ破片10、トチノキ種皮破片14、種子破片8が同定された。

S F 26: 樹木種実のオニグルミ破片6、同極細片(+), クリ破片2、トチノキ種皮破片22、同極細片(+ )が同定された。

S F 29: 樹木種実のオニグルミ破片281、クリ破片3、トチノキ種皮破片56、同種子破片2が同定された。

S F 30: 樹木種実のオニグルミ破片19、トチノキ種皮破片36、草本種実のササゲ属1が同定された。

S F 33: 樹木種実のオニグルミ破片2、クリ破片2、トチノキ種皮破片2が同定された。

S H 13: 草本種実のササゲ属半形1が同定された。

S Q 12: 樹木種実のクリ9、トチノキ種子69、同種子破片127、同種皮破片289が同定された。

S Q 13: 樹木種実のオニグルミ破片8、トチノキ種皮破片262、同種子半分以上残存10、同種子破片92、草本種実のササゲ属1、同半形1が同定された。

I Y A 06・I X M 08: 種実はなく、タール状物質が検出された。

I X J 07: 樹木種実のオニグルミ破片2、トチノキ種皮破片8、同種子破片1が同定された。

これらを考察すると、種実同定の結果、竪穴建物・敷石住居跡の炉、および炭化物集中から出土した炭化物は、樹木種実のオニグルミ核破片438、クリ子葉9、同破片10、同果皮4、トチノキ種子ほぼ完形69、同半分以上残存10、同破片327(642)、同細片520、同極細片(+), 同種皮破片926(604)、草本種

実のササゲ属子葉5、同半形2であった。いずれの種実も破片が多い。トチノキが極めて多く、次いでオニグルミが多い。これらトチノキとオニグルミで遺体群のほとんどを占める。なお、クリは少ないが、乾燥した子葉が炭化しており、果皮片はほとんどなく様相が異なる。トチノキとオニグルミは破片が多く、種皮または核を除去した残滓が炭化したとみられる。熱による発泡や亀裂があまりなく、やや低温で炭化している。クリやササゲ属は少なく、本遺体群では主要とならない。他に炭化材が多く、炉内に落ちたものが炭化したと考えられるが、トチノキはあく抜きに灰汁や煮沸を伴うことから、炉の近くで作業されたとみられる。タール状物質は、煮沸され液状化した脂質を含むデンプン質などの植物質が炭化したものと考えられた。炭化種実類ではトチノキを主にオニグルミ、クリ、ササゲ属が同定され、植物ではトチノキとオニグルミが主要であるといえる。

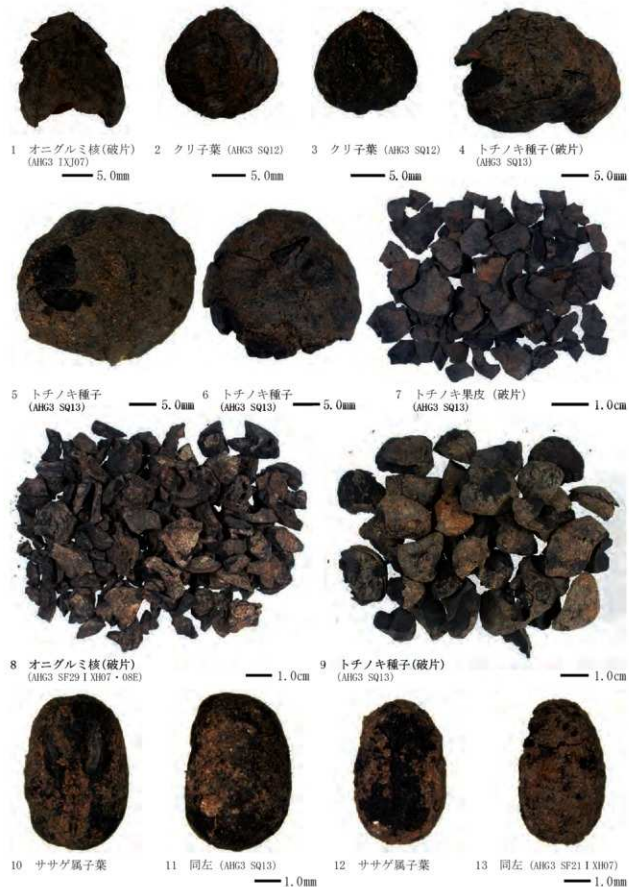


第3章 調査の方法と成果

第17表 炭化種実同定結果（種実検出試料のみ抜粋）

箱番号	遺物No.	遺構・グリッド	出土位置	出土層位	分類群名	部位	個数	備考
1	152	ABG3 1XJ07		15-30	オニグルミ	核(破片)	1	
	153	ABG3 1XJ07		10-15	オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	1 8	
3	64	ABG3 SR26+7a	伊底		クリ トチノキ	子葉(破片) 種皮(破片)	2 84	
	151	ABG3 SR26	No.3		オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	4 4	
4	61	ABG3 SR26+	伊内	2層上部炭化物層	オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	5 13	
	62	ABG3 SR26+7a	伊底		トチノキ	種皮(破片)	1	
	63	ABG3 SR26+7a	伊底		トチノキ	種子(破片)	1	
5	57	ABG3 SR26+ 3・47成土・灰層	伊内	3・4層成土・灰層	オニグルミ クリ トチノキ	核(破片) 果実(破片) 種皮(破片)	27 4 41	
	51	ABG3 SF19 1XJ07			オニグルミ	核(破片)	9	
	52	ABG3 SF25			オニグルミ トチノキ	核(破片) 種子(破片) 種皮(破片)	8 8 12	
7	53	ABG3 SF26			オニグルミ クリ トチノキ	核(破片) 子葉(破片) (稀細片) 種皮(破片)	6 2 (+) 22	
	41	ABG3 SF20 1XJ07			ササグ属	子葉(破片)	1	
	42	ABG3 SF23 1XJ07 0-5			オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	24 21	
8	45	ABG3 SF23			オニグルミ トチノキ	核(破片) 種子(破片) (細片) (稀細片)	4 17 208 (+)	
	55	ABG3 SF23 1XJ07			ササグ属	子葉	1	
					オニグルミ クリ トチノキ	核(破片) 子葉(破片) 種子(破片) (細片) (稀細片)	3 1 20 312 (-)	
					オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	8 40	
9	43	ABG3 SF21 1XJ07			オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	8 40	
	49	ABG3 SF24 1XJ07		0-5	オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	15 17	
	48	ABG3 SF25 1XJ05		0-5	オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	2 2	
10	44	ABG3 SF33 1XJ・G08			オニグルミ クリ トチノキ	核(破片) 子葉(破片) 種皮(破片)	2 2 2	
	46	ABG3 SF29 1XJ07・G08E	東	0-5	オニグルミ クリ トチノキ	核(破片) 子葉(破片) 種皮(破片)	178 2 8	
	47	ABG3 SF29 1XJ07・G08F	西	0-5	オニグルミ クリ トチノキ トチノキ	核(破片) 子葉(破片) 種子(破片) 種皮(破片)	103 1 2 48	
	50	ABG3 SF30 1XJ08		0-5	オニグルミ トチノキ	核(破片) 種皮(破片)	19 36	
					ササグ属	子葉	1	
	68	ABG3 SH13			ササグ属	子葉(半形)	1	

品番号	遺物No.	遺構・グリッド	出土位置	出土層位	分類群 和名	部 位	個 数	備 考
11	40	ABG3 SQ13			オニグルミ トチノキ	核 (破片) 種子(半分以上残存)	8 10	種皮付有
						種子(破片)	92	
						種皮(破片)	362	
					ササグ属	子葉 子葉(半煎)	1 1	
12	30	ABG3 SQ12			クリ トチノキ	子葉 種子	9 69	種皮付有
						種子(破片)	127	
						種皮(破片)	289	
13	208-17	ABG_1YA06_30-15_17		10-15			1	タール状物質
	328-11	ABG_SR24NS14/PN_10-15	南北トレンチ北	10-15	トチノキ	種子(破片)	5	
	348-10	ABG SR24 1X06 17			トチノキ	種子(破片)	4	
	351-11	ABG_3_SR24NE_1X06_10-15		10-15	トチノキ	種子(破片)	5	
	362-10	ABG SR24 SW 49	南西		オニグルミ	核 (破片)	2	
	366-1	ABG SR26 No.1			オニグルミ	核 (破片)	1	
	369-2	ABG SR26 NS14W 2	南北トレンチ北		トチノキ	種子(破片)	3	
	373-4	ABG SR26 EW1E 19	東西トレンチ東		トチノキ	種子(破片)	1	
	373-9	ABG SR26 EW1W 24	東西トレンチ西		トチノキ	種子(破片)	1	
	373-10	ABG SR26 EW1W 25	東西トレンチ西		トチノキ	種子(破片)	2	
	379-4	ABG SR26 NE 48	北東		不明炭化物	(破片)	2	
	380-38	ABG SR26 SW 63	北西		トチノキ	種子(破片)	4	
	382-9	ABG SR26 NE3' 68	北東外縁		トチノキ	種子(破片)	1	
	382-17	ABG SR26 No.3			トチノキ	種皮(破片)	7	
	382-18	ABG SR26 No.3			トチノキ	種皮(破片)	4	
	384-6	ABG SR26 NW 81	北西		トチノキ	種子(破片)	1	
	386-12	ABG SR28 NE 2' 8	北東		トチノキ	種子(破片)	4	
	387-24	ABG SR28 NE 2' 18	北東		トチノキ	種子(破片)	10	
	390-16	ABG 1X107 30-40 18		30-40	トチノキ	種子(破片)	1	
	394-5	ABG SR27 NW 17	北西		トチノキ	種皮(破片)	1	
	395-17	ABG SR28 NE 1' 37	北東	1層	オニグルミ	核 (破片)	5	
	395-18	ABG SR28 NE 2' 38	北東	2層	トチノキ	種子(破片)	2	
	396-17	ABG SR28 NE 1' 42	北東	1層	トチノキ	種子(破片)	10	
	401-13	ABG 1X008 10-20 4		10-20	タール状物質		1	
	403-1	ABG SR28 NE 3' 60	北東	3層	オニグルミ	核 (破片)	3	
	403-2	ABG SR28 NE3' 4' 61	北東外縁	4層	トチノキ	種子(破片)	1	
	403-4	ABG_3_SR28NS'41.2'	南北ベルト	2層	トチノキ	種子(破片)	1	
	403-7	ABG_3_SR28NS'41.4'	南北ベルト	4層	トチノキ	種子(破片)	1	
	411-15	ABG SR26 SW 101	南西		トチノキ	種子(破片)	1	
	417-2	ABG SR26 SW 116	南西		トチノキ	種子(破片)	2	
	423-16	ABG SR26 No.5			トチノキ	種皮(破片)	4	



第25図 ひんご遺跡の種実

※ ( ) 内は検出箇所

## 5 動物遺存体同定

樹種・種実同定の項に記したとおり、本遺跡では多量の炭化物や焼けた骨が出土した。水洗・選別したところ、種実、魚骨を含む動物骨などを検出した。検出した種実、魚骨を含む動物骨を同定し、縄文時代の食糧資源および食生活を復原するため、本項では動物遺存体同定の結果概要を記載する。試料は、1mm網目の篩を用いて水洗・選別された動物遺存体である(第18表)。

同定は、試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を比較して行った。結果は、軟骨魚綱、硬骨魚綱、爬虫綱、鳥綱、哺乳綱の5分類群が同定された。

**軟骨魚綱** IXC06 10-15からサメ類の歯が1点出土している。被熱している可能性がある。

**硬骨魚綱** サケ科とコイ科の2種類を同定した。サケ科は椎骨と遊離歯が計67点出土している。出土地点別には、SK111から1点、SB26から38点、SB28から27点、SH13から1点を数える。SK111では遊離歯が1点のみである。SB26では、炉内2層上部炭化物層から椎骨が14点、3・4層から椎骨が7点、5層下部炭化物層から椎骨が1点、灰埋設土器底部付近から遊離歯が2点出土している。また、SB28では、炉下部炭層から椎骨5点、炉下部黄褐色層から椎骨22点が出土している。SH13では椎骨が1点のみである。コイ科はSB26から椎骨が計4点を数え、炉内2層から3点、炉内3・4層焼土・灰層から1点が出土している。その他、硬骨魚綱と思われる部位不明の骨片が、SB26やSB28の炉跡から多数出土している。いずれも被熱して白色を呈する。

**爬虫綱** SB28炉下部炭層からヘビ類の椎骨が1点出土しており、被熱して白色を呈する。

**鳥綱** IYN04・05から科不明の脛足根骨が1点出土しており、被熱して白色を呈する。

**哺乳綱** ヒト、イノシシの2種類を同定した。SB16から部位不明の骨片が多数出土している。いずれも被熱しており、人骨と思われるものすべてを採集した結果50点を数える。人骨には、収縮による亀裂が見られる。イノシシは計3点を数え、IYG05 50-60 7から指骨1点、IYN06 0-10 2から機骨(右)1点、IXL06 10-15から指骨1点が出土している。その他、イヌと思われるもの、イノシシと思われるもの、イノシシやニホンジカ程度の大きさの大型野生哺乳類、中型ないし小型の野生哺乳類が出土しているが、いずれも被熱して種同定には至らない。

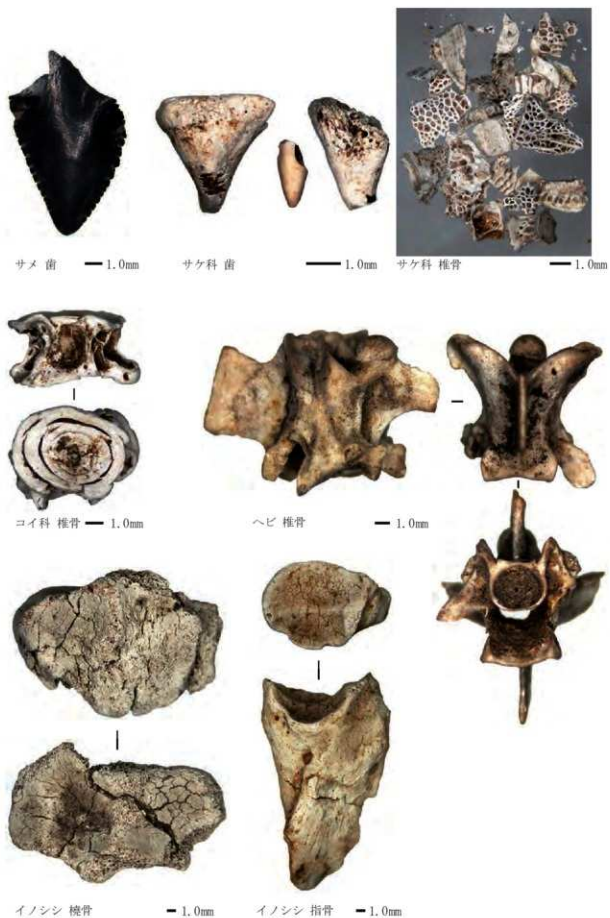
これらを考察すると、同定された動物種は、魚類のサメ類、サケ科、コイ科、爬虫類のヘビ類、哺乳類のイノシシである。サメ類は歯の出土であり、装身具の素材としての利用が考えられる。その他は、食用となったものであろう。出土した動物遺存体は、被熱して白色を呈するものが大部分である。これは高熱に長時間晒されたためと推測され、建物の炉跡から焼骨が多数出土していることから、食用にしたのちに炉内に投棄したものと考えられる。また、遺構外からの出土は、そのような炉内に投棄したものが散乱した結果と推定されるが、出土分布の精査により、意図的に焼骨を使用した可能性も考えられる。なお、人骨には収縮による亀裂が見られた点から、肉などの軟質部が付着した状態で高温に曝された可能性がある。つまり、ヒト遺体が火葬された痕跡の可能性もある。

まとめると、ひんご遺跡の堅穴建物・敷石住居跡の炉、および炭化物の集中箇所から出土した動物遺存体の同定を行った。動物遺存体では魚類のサメ類、サケ科、コイ科、爬虫類のヘビ類、哺乳類のイノシシが同定された。これらの魚類、爬虫類、哺乳類と多様なタンパク源が食料となっていた。また、火葬された可能性のある人骨が確認された。桁倉式古段階に属すこのSB16の焼人骨は、長野県では最古に近い事例である。

第18表 動物遺存体同定結果

箱番号	遺物№	遺構・グリッド(注記)	出土位置	出土層位・-cm	分類群	分類群2	部位	個数	左右	備考
1	24	AHG 2b-1 SB9113FS (シナ)	トレンチ南石下	-30						骨角器(1)
1	25	AHG 2b-1 SK111			硬骨魚綱	サケ科	歯	1		
2	14	AHG2a SB16NW	北西	10-30	哺乳綱	ヒト	不明	50		
4	50	AHG3 SB26	伊内	5層下部炭化物層	硬骨魚綱	サケ科	椎骨	1		
4	61	AHG3 SB26	伊内	2層上部炭化物層	硬骨魚綱	コイ科	椎骨	3		
4	62	AHG3 SB26	伊底		硬骨魚綱	サケ科	椎骨	14		
4	63	AHG3 SB26	伊底		硬骨魚綱	サケ科	椎骨	4		
					硬骨魚綱	サケ科	椎骨	10		
5	57	AHG3 SB26	伊内	3・4層焼土・灰層	硬骨魚綱	コイ科	椎骨	1		
					硬骨魚綱	サケ科	椎骨	7		
5	58	AHG3 SB26	伊埋設土器底部付近		硬骨魚綱	サケ科	歯	2		
6	60	AHG3 SB28	伊下部	炭層	硬骨魚綱	サケ科	椎骨	5		
					爬虫類	ヘビ類	椎骨	1		
6	65	AHG3 SB28	伊下部	黄褐色層	硬骨魚綱	サケ科	椎骨	22		
10	68	AHG3 SH13			硬骨魚綱	サケ科	椎骨	1		
14	320-15	AHG_LXC06_10-15		10-15	軟骨魚綱	サメ類	歯	1		歯根無し、焼け?
14	3-7	AHG_SB3_0-0_Z		0-0	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	1		
14	3-13	AHG_SB6_1YA07_34	床		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	2		
14	10-1	AHG_SB12_2#	伊西		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	不明	1		
14	11-26	AHG_SB1_1YA04_Z			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	距骨	1		
14	12-6	AHG_SB3_3	伊		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	腕骨	1	左	
14	12-19	AHG_SB5_349#2	床下		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	1		
14	14-6	AHG_SB9_SW_26	南西		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	手骨or足根骨?	1		
14	17-6	AHG_SB10_Z6			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	1		
14	19-16	AHG_SB12S4v_272	南トレンチ	2層	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	脛骨	1		
14	20-8	AHG_SB13_NW_28	北西		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	中手骨	1		
14	207-8	AHG_1XT07_5-10-8		5-10	哺乳綱(中型)		椎骨	1		
14	207-12	AHG_1XT07_20-25_12		20-25	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	1		
14	208-7	AHG_1YA05_5-10_7		5-10	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	中手骨or中足骨	1		
14	209-15	AHG_1YA07_20-25_15		20-25	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	腕骨	1	左	未適合
14	218-18	AHG_1YG05_10-20_18		10-20	哺乳綱	イヌ?	中手骨or中足骨	1		
14	219-7	AHG_1YG05_50-60_7		50-60	哺乳綱	イノシシ	指骨	1		
14	233-2	AHG_1YN06_0-10_2		0-10	哺乳綱	イノシシ	腕骨	1	右	
14	234-5	AHG_1YP05_Z_5			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	1		
14	250-7	AHG_1YB06_Z_7-2			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	踵骨	1		
14	255-2	AHG_1YH07_Z_2			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	不明	3		
					哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	脛骨	1		
14	317-17	AHG_1XK05_5-10		5-10	哺乳綱	イノシシ?	膝蓋骨	1		
14	318-7	AHG_SQ17_1XM06_			哺乳綱	イノシシ?	中手骨or中足骨?	1		
14	318-11	AHG_1XN06_5-10		5-10	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	上腕骨	1		
14	324-3	AHG_1XL06_5-10		5-10	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	1		
14	328-13	AHG_1XL06_10-15		10-15	哺乳綱	イノシシ	指骨	1		
14	334-2	AHG_1XM05_10-15		10-15	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	手根骨or足根骨	1		
14	339-26	AHG_1XN05_10-15		10-15	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	1		
14	342-16	AHG_1XN06_15-20-12		15-20	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	1		
14	358-16	AHG_1XN04_05			鳥綱	不明	脛骨足根	1		
14	382-5	AHG_1XL07_Z_15			哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	大腿骨	1		

箱番号	遺物 No.	遺構・グリッド(注 記)	出土位置	出土層位・cm	分類群	分類群2	部位	個数	左右	備考
14	390-17	ARG_1XJ07_40-50		40-50	哺乳綱	イノシシ?	脛骨?	1		
14	391-3	ARG_1XL06_20-25		20-25	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	尺骨	1	右?	
14	401-14	ARG_1XM08_20-25.5		20-25	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	1		
14	411-16	ARG_SB26_SW_102	南西		哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	指骨	1		
14	419-37	ARG_SB28_+HW_88	伊壁西		哺乳綱(小型)		中手骨or中足骨	1		骨片(+)



第26図 ひんご遺跡の動物遺存体

## 6 縄文土器の胎土分析

本遺跡から出土した縄文時代後期前半の土器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、比較、検討した。分析対象は、堀之内1式、堀之内2式、石神類型、および無文の縄文土器計10点である(第19表)。分析対象の元素は、ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、マグネシウム(MgO)、アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ケイ素(SiO<sub>2</sub>)、リン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、カリウム(K<sub>2</sub>O)、カルシウム(CaO)、チタン(TiO<sub>2</sub>)、マンガン(MnO)、鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)である。第20表に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

これを考察すると、今回分析した土器の中には、通常の土器よりも極めて軽く、比較的白っぽい胎土の、「軽白胎土」と呼称した、ひんご遺跡独特の土器があり、蛍光X線分析においても、黒っぽく重い他の土器とは異なる化学組成を示した。ここでは、前者の土器をA群(試料番号1・3・7~10)、後者の土器をB群(試料番号2・4~6)と分類する。第1図に各元素の分布図を分類群ごとに示す。

第20表をみると、A群とした、軽くて比較的白っぽい土器は、アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、チタン(TiO<sub>2</sub>)、マンガン(MnO)、鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が少なく、ケイ素(SiO<sub>2</sub>)が多い傾向がみられた。これらは、胎土材料の違いによると考えられる。

以上、土器胎土の蛍光X線分析により、「軽白胎土」土器に化学組成上の差異が認められた。土器胎土の薄片観察を行えば、胎土中の鉱物や微化石、テフラなどの混和物の観察により、胎土材料の違いをより詳細に検討できると考えられる。本遺跡から出土した縄文時代後期前半の土器について、胎土の蛍光X線分析を行った結果、軽く白っぽい「軽白胎土」土器は、アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、チタン(TiO<sub>2</sub>)、マンガン(MnO)、鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が少なく、ケイ素(SiO<sub>2</sub>)が多い傾向がみられ、材料的な違いが認められた。

第19表 胎土分析対象土器

分析番号	整理番号	図版番号	遺構・地点	層位 (cm)・位置	型式	器種	部位	色調	原試料破片数	原試料重量(g)	備考
1	10492	36-59	SB28	No 107 他	堀之内1式	鉢	胴上部	灰白	109	1640	SE26と遺構間接合
2	10422	36-58	SB28	No 106~108 他	堀之内1式	鉢	胴上部	黒黒	226	5840	
3	1149		SB12	NE2 層	無文	深鉢	底部	暗灰	7	165	
4	1301	31-20	SB12	N トレ Z2	堀之内2式	深鉢	胴部	黒黒	13	524	
5	10594	53-468	SB24	EW ヘルト W5-10	石神類型	深鉢	口縁部	黄灰	3	377	
6	10596	53-465	SB24	SED-10 他	石神類型	深鉢	胴部	黒黒	15	755	
7	1743	30-6	SB6	No 4	堀之内2式	深鉢	口縁部	灰白	18	193	
8	10203	39-82	SQ16	2	堀之内2式	深鉢	胴部	灰白	10	79	
9	1469	45-135	I YE06 2b-1Z	0-0	石神類型	深鉢	口縁部	暗灰	8	196	
10	2714	45-142	I YH06	42865	堀之内2式	深鉢	口縁部	灰白	20	176	

第20表 蛍光X線分析結果 (mass%)

分析番号	Na <sub>2</sub> O (%)	MgO (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	SiO <sub>2</sub> (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	K <sub>2</sub> O (%)	CaO (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	MnO (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	0.53	1.76	19.7	70.7	1.713	2.25	0.92	0.14	0.014	3.78	101.5	72	141	25	154
2	1.28	0.57	23.6	63.6	2.255	1.80	0.84	0.91	0.032	4.51	99.4	80	96	24	151
3	0.48	1.72	16.6	77.4	0.496	0.54	0.92	0.17	0.010	2.89	101.2	21	112	26	144
4	1.34	1.12	22.4	61.7	2.615	1.89	1.19	1.10	0.044	5.45	98.8	78	121	25	177
5	0.53	0.80	22.3	66.7	1.612	1.70	0.74	0.93	0.035	4.73	100.1	59	89	34	184
6	1.11	0.76	22.0	65.6	0.456	1.41	0.91	0.81	0.020	7.61	100.7	83	102	23	158
7	0.57	1.63	16.3	77.3	0.454	0.61	1.34	0.20	0.018	3.01	101.4	23	103	26	152
8	0.70	1.75	17.4	75.2	0.329	0.62	1.20	0.20	0.015	3.35	100.8	24	120	22	163
9	0.84	1.00	18.7	75.4	0.285	0.54	0.74	0.17	0.007	2.97	100.7	16	129	39	156
10	0.68	0.94	16.4	77.5	0.706	0.52	0.97	0.15	0.008	2.80	100.7	14	194	27	129
最小	0.48	0.57	16.3	61.7	0.285	0.52	0.74	0.14	0.007	2.80	98.8	14	89	22	129
最大	1.34	1.76	23.6	77.5	2.615	2.25	1.34	1.10	0.044	7.61	101.5	83	194	39	184



## 7 漆・有機物分析

本遺跡から出土した、黒色物が付着した土器・土製品・石器と、アスファルトの可能性のある塊状物について、付着する黒色付着物等の赤外分光分析を行い、材質について検討した。2015年度分析を実施した試料は、黒色物が付着した磨製石斧、石鎌、土偶の各1点、分析番号は、No 1・2・3である（第21表、第27図）。2017年度分析を実施した試料は、注口土器破片の付着物2点、塊状物1点、分析番号は、No 11・12・13である（第21表、第28・29図）。吸収スペクトルに示した数字は主なアスファルトおよび生漆の赤外吸収位置を示す（第22表）。

### 分析No.1 磨製石斧の着柄部（第27図、図版62-82、P.L 53-82、口絵8）

付着物は、淡褐色の土塊状付着物で、メスで押し撫でると艶色光沢を呈す。赤外分光分析では、石油などの主成分であるC-H基に由来する2950.55 (cm<sup>-1</sup>)、2923.56 (cm<sup>-1</sup>)の吸収が僅かに見られ、アスファルトに見られるNa 6やNa 10、Na 11などの吸収が見られた。また、明瞭な吸収ではないが、Na 9やNa 13の吸収に相当する変換点も確認された。以上の赤外分光分析の結果、付着物はアスファルトと考えられる。

### 分析No.2 石鎌の着柄部（第27図、図版63-22、P.L 50-22、口絵8）

付着物は、黒褐色の塊状付着物である。赤外分光分析では、石油などの主成分であるC-H基に由来する2950.55 (cm<sup>-1</sup>)、2923.56 (cm<sup>-1</sup>)の吸収が僅かに見られ、アスファルトに見られる主な吸収が明瞭に見られた。以上の赤外分光分析の結果、黒褐色付着物はアスファルトと同定される。

### 分析No.3 土偶の腕（第27図、図版61-909、口絵7）

付着物は、腕のほぼ全面にわたって見られる光沢のある黒色物である。赤外分光分析では、石油などの主成分であるC-H基に由来する2950.55 (cm<sup>-1</sup>)、2923.56 (cm<sup>-1</sup>)の吸収は全く見られなかった。また、生漆のウルシオール吸収（生漆のNa 6～8）も見られなかった。ただし、アスファルトの吸収Na 10やNa 11などの位置とは吸収が一致していた。以上の赤外分光分析の結果、黒色付着物は、本来、漆やアスファルトのように有機化合物であったとみられるが、劣化あるいは変質により無機化合物に変化していたため同定ができなかった。なお、一部の吸収位置はアスファルトと同じであった。

Na 1～3の結果をまとめると、磨製石斧の着柄部に付着する暗灰黄色の土塊状付着物は、アスファルトの可能性が考えられた。石鎌の着柄部に付着する黒褐色の塊状付着物は、アスファルトと同定された。土偶腕の黒色付着物は、無機化していたため同定はできなかったが、一部の吸収位置はアスファルトと同じであった。

### 分析No.11 土器付着物（第28・29図、整理No.2394）

付着物は、表面に黒色薄層が見られ、内部にはぶい黄褐色（10YR 4/3）の厚さ2mm弱の肥厚した付着物である（第28図1a・1b）。なお、赤外分光分析において押しつぶすと、黒色で粘性質であった。クロロホルム溶融試験では、容易に黄褐色に溶融した。さらに赤外分光分析では、天ヶ沢産の天然アスファルトの吸収と一致した。以上の結果から、この黒色付着物はアスファルトと同定される。

### 分析No.12 土器付着物（第28・29図、整理No.11773）

付着物は、表面に光沢のある黒色薄層が部分的に見られ、内部では暗褐色（10YR 3/3）の厚さ1mm以下の薄い付着物である（第28図-2a・2b）。なお、赤外分光分析において押しつぶすと、黒色で粘性質であった。上記と同じクロロホルム溶融試験、赤外分光分析の結果から、この黒色付着物はアスファルトと同定される。

### 分析No.13 塊状物（第28・29図、P.L 49-1013、口絵8、整理No.19-15）

塊状物は、全体的に灰黄褐色（10YR 4/2）を呈し、黄色の塊状に黒色部が脈状に分布する（第28図3a・3b）。なお、赤外分光分析において押しつぶすと、黒色で粘性質であった。上記と同じクロロホルム

溶融試験、赤外分光分析の結果から、この黒色付着物はアスファルトと同定される。

№11～13の結果について、次のように考察する。注口土器の付着物と塊状物について、クロロホルム溶融試験と赤外分光分析を行った結果、いずれもアスファルトと同定された。

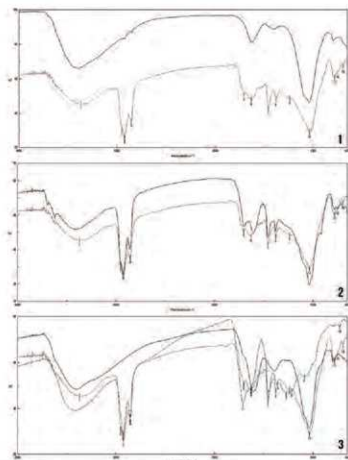
長野県内では、長野市浅川に位置する何去真光寺原油（浅川油田）が知られ（加藤ほか2014）、アスファルトが産出すると思われる。近接地における天然アスファルトの産出地は、新潟市の新津油田、長岡市の東山油田、刈羽村・柏崎市・出雲崎町の西山油田、上越市の頸城油田、胎内市の黒川油田が知られている。本遺跡は、何去真光寺原油からも、西山油田からも40～50kmの距離に位置する。長野県の縄文時代のアスファルト資料は、飯山市東原遺跡（飯山市教育委員会1998）の塊状物、長野市宮崎遺跡（永峯1955）の土器内蔵物のみである。一方、新潟県には多数の資料がある。このような状況から、新潟県産アスファルトの可能性が高い。

表21 漆・有機物分析試料とその詳細

分析No	国取番号 (整理番号)	遺物	出土地点・層位(～)	分析部位	付着物の特徴	備考
2015年度						
1	66-82 (622)	磨製石斧	2b-1区 IYG06 グリッド	着柄部	暗灰黄色土塊状	押しぬぐると藍色光沢を呈す
2	63-22 (141)	石鏃	2b-1区包含層上面	着柄部	黒褐色塊状	破断面光沢
3	61-909 (5092)	土偶	2b-1区 №15	腕	黒色	光沢
2017年度						
11	(2394)	土器付着物	I YG06 0-5	注口土器胴部 (注口接合部)	表面黒色薄層	瓶之内2式
12	(11773)	土器付着物	I XL05 15-20	注口土器注口部	表面黒色薄層	瓶之内2式
13	PL49-1013 (19-15)	塊状物	SB12 トレンチ 32層		全体的に灰黄褐色	南三十稲場式土器片混入

表22 アスファルト・生漆の赤外吸収位置とその強度

No	アスファルト		生漆		
	位置	強度	位置	強度	特徴的な成分
1	3369.03	45.4487	2925.48	28.5337	
2	2950.55	30.8847	2854.13	36.2174	
3	2923.56	25.7928	1710.55	42.0346	
4	2854.13	35.1479	1627.63	48.8465	
5	1702.84	50.5148	1454.06	47.1946	
6	1629.55	47.7936	1353.78	50.7910	ウルシオール
7	1457.92	43.1519	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1376.93	47.1470	1216.86	47.5500	ウルシオール
9	1236.15	48.4504	1087.66	53.8428	
10	1035.59	28.8476	727.03	75.3890	
11	779.10	60.3892			
12	750.17	63.5501			
13	694.25	66.5366			



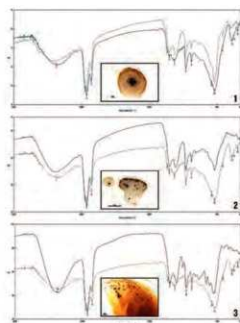
第27図 黒色付着物の赤外吸収スペクトル図（縦軸が透過率(%T)、横軸が波数(Wavenumber (cm<sup>-1</sup>)), 点線は主なアスファルト、二点鎖線は主な生漆の吸収を示す(表2)

1. 磨製石斧着柄部(分析No.1)、2. 石鏃着柄部(分析No.2)、  
3. 土偶碗(分析No.3)



第28図 土器・遺物と付着物の実体顕微鏡写真

- 1a・1b. 分析No.11(注口土器の黒色付着物)  
2a・2b. 分析No.12(注口土器の黒色付着物)  
3a・3b. 分析No.13(黒色塊状物)



第29図 土器付着物・塊状物の赤外分光スペクトル図  
(写真はクロロホルム溶解試験写真)

- (実践:付着物、点線:アスファルト、数字:新潟県天然産天然アスファルトの吸収位置)  
1. 分析No.11(注口土器の黒色付着物)  
2. 分析No.12(注口土器の黒色付着物)  
3. 分析No.13(黒色塊状物)

## 8 黒曜石産地推定

本遺跡から出土した縄文時代後期前半の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。分析対象は、縄文時代後期前半に帰属すると考える竪穴建物跡、敷石住居跡から出土した、黒曜石製石器 20 点である（第 23 表）。

分析結果は第 23 表に示した。2 点が鷹山群（長野県、和田エリア）、2 点が小深沢群（長野県、和田エリア）、5 点が鷹山群と小深沢群の重複域、1 点が土屋橋 1 群（長野県、和田エリア）、1 点が高松沢群（長野県、和田エリア）、8 点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。残り 1 点は、合致する判別群がなく、産地不明であった。第 24 表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。産地不明の 1 点を除いて、いずれも信州産で、和田エリア産が 11 点、諏訪エリア産 8 点だった。

まとめると、ひんご遺跡から出土した縄文時代後期前半の黒曜石製石器 20 点について、蛍光 X 線分析による産地推定を行った結果、11 点が和田エリア、8 点が諏訪エリア産の黒曜石と推定された。残り 1 点は産地不明だった。

本遺跡の約 30km 上流に位置する、中野市千田遺跡 8 区の縄文中期中・後葉の集落跡と、1～5 区の中期末葉から後期前半の廃棄場出土の黒曜石を産地推定した結果は、87% は諏訪エリア、その他の大部分は和田エリアが産地であった。今回は分析数が少なく、時期差もあるが、結果は著しく異なるものとなった。周辺では、黒曜石産地推定事例が少ないため、事例の積み上げを待って、この背景を推定したい。

第 23 表 分析対象となる黒曜石製石器

分析番号	整理番号	遺構・地点	層位（～cm）・遺物№等	器種	重量（g）	注記内容	備考
1	11-35	SB1	セイソウ	剥片	9.59	AHG SB1 セイソウ Z35	
2	443	SB1	セイソウ	楔形石器	6.28	AHG SB1 セイソウ Z38	
3	584	SB1_セクベ	5-10	原石	8.95	AHG SB1 セクベ 31	
4	583	SB1_セクベ	5-10	原石	19.16	AHG SB1 セクベ 31	
5	324	SB2	0-5	剥片	1.46	AHG SB2 0-5 24	
6	3-1	SB2_1Y05	5-5	剥片	2.27	AHG SB2 1Y05 5-5	
7	3-7	SB3	0-0 Z	剥片	0.94	AHG SB3 0-0 Z	
8	13-17	SB6	Z	剥片	0.99	AHG SB6 Z	
9	13-27	SB8	ユカシタ	剥片	1.74	AHG SB8 ユカシタ	
10	14-2	SB9_NW	Z	剥片	4.22	AHG SB9 NW Z2	
11	15-21	SB9_Wトレ	0-10	剥片	2.27	AHG SB9 Wトレ 0-10 21	
12	10-5	SB12	ハリダ	剥片	2.31	AHG SB12 ハリダ 3	
13	20-17	SB14_II UD・E05	Z	剥片	1.50	AHG SB14 II UD・E05 Z17	
14	21-3	SB15	Z	剥片	3.27	AHG SB15 Z3	SK41
15	24-26	SB22	セイソウ	剥片	2.56	AHG SB22 セイソウ 1	SH11
16	3-18	SB23_1YG-J04	IV	剥片	2.03	AHG SB23 1YG-J04	
17	2036	SB23	0-0	楔形石器	1.59	AHG SB23 0-0 1	
18	330-4	SB24_NSトレ	Z	剥片	1.31	AHG SB24 NSトレ Z4	
19	1740	SB26_NW	検出面 20-30	楔形石器	0.46	AHG SB26 NW 65	
20	2044	SB28	砂	楔形石器?	2.75	AHG SB28 081	

第24表 測定値および産地推定結果

分析 番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	333.1	131.1	1246.9	786.4	298.9	387.4	751.3	35.36	10.51	13.44	0.57	星ヶ台	諏訪
2	319.6	156.2	1275.4	1540.9	98.4	643.9	828.6	49.52	12.25	3.16	0.60	鷹山 or 小深沢	和田
3	318.4	155.8	1380.4	1524.0	100.1	631.9	849.5	49.07	11.28	3.22	0.64	小深沢	和田
4	315.0	129.0	1465.1	1165.9	222.5	481.8	898.1	42.12	8.80	8.04	0.67	土塚橋 1	和田
5	205.5	103.5	841.4	1055.0	68.9	444.3	617.3	48.27	12.30	3.15	0.61	鷹山 or 小深沢	和田
6	228.0	113.6	947.9	1103.7	70.9	459.6	632.0	48.70	11.98	3.13	0.62	鷹山 or 小深沢	和田
7	222.3	88.9	836.7	577.2	221.2	295.1	578.9	34.51	10.62	13.23	0.58	星ヶ台	諏訪
8	158.1	77.9	2470.3	393.8	459.9	345.2	1248.1	16.09	3.15	18.80	1.19	?	不明
9	205.3	79.2	795.9	477.0	176.7	232.5	444.7	35.84	9.96	13.28	0.59	星ヶ台	諏訪
10	264.8	104.3	979.9	668.4	253.6	342.1	699.5	34.75	10.64	13.18	0.57	星ヶ台	諏訪
11	341.2	136.6	1266.4	819.3	309.6	406.4	791.2	35.21	10.79	13.31	0.57	星ヶ台	諏訪
12	304.6	142.4	1118.1	1416.4	89.7	601.5	783.3	49.00	12.73	3.10	0.56	鷹山	和田
13	341.2	121.6	1087.5	953.3	353.8	396.7	957.8	35.82	7.20	13.29	0.69	高松沢	和田
14	256.8	122.2	995.8	1192.3	78.4	497.2	653.1	49.25	12.27	3.24	0.59	鷹山 or 小深沢	和田
15	199.3	78.3	733.5	510.5	193.6	262.9	512.8	34.50	10.68	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪
16	248.2	116.9	1004.2	1141.7	94.9	488.9	695.1	47.17	11.64	3.92	0.61	小深沢	和田
17	291.9	144.2	1173.2	1438.4	89.6	600.3	795.8	49.19	12.29	3.07	0.60	鷹山	和田
18	287.8	143.9	1210.2	1438.0	91.9	602.2	811.4	48.85	11.89	3.12	0.62	鷹山 or 小深沢	和田
19	253.0	102.1	995.8	659.2	244.4	325.3	629.0	35.48	10.25	13.16	0.58	星ヶ台	諏訪
20	218.1	85.5	794.4	576.0	222.9	298.9	580.5	34.32	10.76	13.28	0.56	星ヶ台	諏訪

## 第4章 総括

1 縄文土器の様相 ひんご遺跡最古の縄文土器は、沢式、樋沢式、卯ノ木式古段階、次いで細久保式の早期押型土器諸型式である。極めて少量ながら、遺跡範囲が生活の適地として環境が整った時期を推定する上で、看過できない資料である。これに次いで、早期末葉の絡条体疋痕土器がある。野尻湖周辺を除けば本遺跡の出土量は多量といえる。絡条体原体の差から、新旧2時期を推定する。底部形態は、長野県に一般的な尖底はなく、平底のみを確認したことから、新潟県に分布する当該期土器である。

前期前半期土器は、多少まとまって出土したが、①塚田式、花積下層Ⅰ式期、②中道式、花積下層Ⅲ式期、③神ノ木式、関山Ⅱ式、新屋式の3時期に細分される。有尾式、黒浜式の空白期を挟んで、前期後半にはごく少量の出土量ながら、諸磯a・b・c式、羽羽式など、断続的な活動期があった。

中期初頭期を含む前葉土器は少量であり、千石原式や北陸系と推定する土器を散見するにとどまる。中葉期には遺物量が多量となる。火焔型・王冠型土器に代表される馬高式土器と、その前段階に位置する仮称五丁歩式土器である。これら以外の大木8a式、焼町土器、上山田・天神山式、勝坂式土器は少量である。本遺跡では、ほぼ馬高式が席卷する様相を見せ、新旧の時期差、分量のバリエーションを認めることは前章で記した。中葉期の浅鉢は、北陸系土器の模倣品(図版59-680-682)が主体となり、千田遺跡の状況と共通する。後葉初期には大木8b式古段階の土器が、馬高式新段階の土器とともに安定して存在する。本遺跡を、馬高式土器の文化領域に属すとみなすのが妥当であろうが、三角形土偶(三角形土版)は皆無であった。

中期後葉土器は、枌倉式後半から沖ノ原Ⅰ式古段階まで出土量は少ないながら、新潟県側土器が主体の様相は継続する。沖ノ原Ⅰ式新段階からⅡ式期には遺物量が増加し、SB16にまとまった資料がある。長野県側から伝わった、加曾利Ⅲ式新段階からⅣ式土器は従属的なありかたを示すが、新潟県域より比率は高い。津南町域の標準的な沖ノ原Ⅰ・Ⅱ式と比較して、口縁部文様が加曾利Ⅲ式に近似するもの(図版37-66・70、39-78)、および短沈線文土器とした、唐草文系土器由来の地文を施す土器(図版32-31・34)が多く存在する。

中期終末期から後期初頭前半期、新潟県側では沖ノ原Ⅱ式新段階の土器から、三十稲場式が成立する。第5群2類とした、燃糸文・条線文地文土器の多くは、この時期に帰属するものと推定する。唐草文系土器第4段階に多用される沈線地文(図版43-113)と、三十稲場式土器成立前の沈線地文(図版57-617)との関連性は、検討課題である。後期初頭後半期に盛行する、三十稲場式土器の変遷過程は、堀之内Ⅰ式古段階と推定する時期まで、新潟県と差異なく変遷している。口縁部をめぐる沈線に、3・4条の縦位短沈線を刻む独特の土器(図版43-116、60-704-706)は、5個体以上出土したが、長野県側で類似は確認できない。唯一、関山山地を越えて約22km北西に位置する、上越市顕聖寺遺跡(浦川原村教育委員会1959)に1例を見出し、直接的な伝播を推定する。

2 「ひんご1・2式土器」 後期前葉堀之内Ⅰ式期には、SB26・28の第6群3・5類の復元個体を多数含む、一括性が高い土器群が標準資料となるため、再度編年位置を確認する。SB26の有文土器の一つは、胴部の主文様に渦巻文を描く鉢形土器、長野県を中心に分布する栗林類型である。渦巻文を斜行文で連結する標準的な種(図版34-43・44)と、三角文のみ(図版34-45)、文様下部がU字状に分断したもの(図版34-46・47)もある。栗林類型に類するが、頸部の区画線が欠いて胴部文様の上部が開放し、「火」字文を描く深鉢形(図版34-48・49)もある。もう一つは、口縁部直下から胴部に米字形の意匠を描いた深鉢形土器、南三十稲場Ⅰ式を代表する十三本塚北類型である。SB28の有文土器量は、栗林類

型が主、十三本塚北類型が従である。胴部文様は沈線が3・4条となり、磨消縄文に代わって多条沈線風に意匠描出する(図版36-58・59)。SB26と比較すると、頸部区画線の一部、および胴部渦巻文の下端が開放する差異がある。粗製土器には、縄文施文土器と無文土器が併存する。従前の研究成果から、SB26は堀之内1式中段階、SB28は新段階並行期に位置する。

堀之内2式期には、SB12に一括資料がある。朝顔形深鉢と近似する、口縁部の外傾が乏しい直胴形深鉢が多い。幅広い文様帯に菱形文・三角文を描く(図版31-19~22)。栗林類型には、口縁部文様の狭小化・消失、口頸部の拡大、胴部の無文化(図版31-17・18・23・24)がうかがえる。これらに、南三十稲場2式の元屋敷類型が共存する。粗製土器は無文土器が多数を占めるが、長野県側からの影響であろう。堀之内2式中段階前半に位置する標準資料と考える。

SB12以前の、古段階の様相を示す遺構一括資料はない。図化個体は少数であるが、栗林類型と体部屈曲鉢を主体に南三十稲場式が伴い、朝顔形・直胴形深鉢は比較的少数と推定する。中段階後半期には、朝顔形・直胴形と林中原型が深鉢を構成する。関東ではこの時期に三角文が主流となるが、長野県では渦巻文が多い。

新段階には、栗林類型は浅鉢に近い形態になり、無文も多い(図版30-4、38-74)。深鉢は文様帯幅が狭まり、口縁部の3単位突起と内面文様が発達する(図版44-131、45-133・140)。中段階後半に粗形が現れた石神類型は、新段階に発達し、堀之内2式的な土器を上回って有文土器の主流を占める。この類型には、林中原型深鉢の器形を受け継ぐA器形と、直胴形深鉢からのB器形がある。薄手で精製度が高い小形土器が主流であるが、本遺跡には中・大形深鉢(図版40-87)もある。この時期には、内面文様が発達した浅鉢と、石神類型と共通の文様を描く注口土器と蓋形土器が多出する。同種の蓋形土器は、長野県内では3遺跡各1点が知られるにすぎない。従来石神類型は、浅間山麓が分布の中核地域と考えられてきたが、本遺跡ほど法量・器種が多様で、有文土器の占有率が高い遺跡は例がない。

後期中葉期は、加曾利B1式土器が有文土器を占める。深鉢、鉢、浅鉢、注口土器の精製器種がそろった。深鉢形土器には、関東地方と差異がない個体(図版45-139・141)と、成形・施文が乱れた模倣品(図版45-144・145)とがある。この時期に長野県・新潟県とも、地域的な土器型式は確認できない。

「軽白胎土」と呼称した土器(PL46)は、本遺跡独特である。SB28出土の堀之内1式新段階が古く、加曾利B1式にも見られ、堀之内2式期が最盛期と推定する。口縁部文様のみで胴部は無文(図版30-6)、口縁下に集合沈線で半円文などを描くもの(図版39-82、45-142)、無文粗製土器(図版39-81)がある。堀之内2式、石神類型の少数にもこの胎土がある。蛍光X線分析の結果、一般的な土器胎土とは化学組成上の違いを認めた。軽白胎土と近似した胎土は、早期末葉、および前期前半の繊維土器にもある。極めて明確な特徴をもつ土器だけに、類例の追跡により土器の流通範囲に注目したい。

これまで記したように、本遺跡の縄文土器に関して多くの新知見があるが、特に後期前葉期に関する成果は大きい。長野県の堀之内1・2式並行期土器は、30数年前から関東地方とは異なることを指摘しながら(綿田1985・1990・2002)、型式内の地域差として、堀之内1・2式に比定して語ってきた。すなわち、深鉢形諸類型中心の関東地方に対して、小仙塚類型と称された鉢形土器が長野県の当該期土器の主体であった。様相の違いは明瞭であったが、標準となる一括資料を出土した遺跡に恵まれず、型式命名を控えてきた。堀之内1式期には、栗林類型を主体に十三本塚北類型が共存し、多量の無文粗製土器と組成する状況が、少なくとも諏訪地方以北の広範囲にわたって看取される。同2式期には、土器の地域差が薄らぐといわれるが、栗林類型の多さは継続する。従来堀之内2式の朝顔形深鉢として扱われてきた直胴形深鉢は、長野県の隣接地域を離れると、関東地方には少なく、識別が可能である。また、石神類型の分布中核は、浅間山麓から本遺跡に至ることが判明し、変遷過程も見通せる。今回の成果に基づき、堀之内1式期はS

B 26・28、同 2 式期は S B 12 出土土器を標準として、長野県の堀之内 1 式並行期土器を「ひんご 1 式」、同 2 式並行期土器を「ひんご 2 式」と型式命名したい（鈴木 2018）。

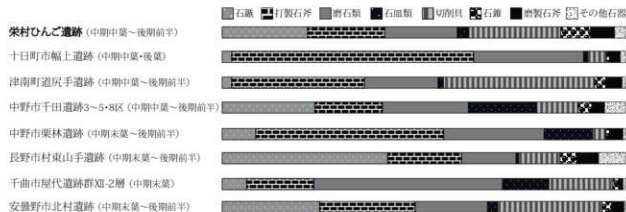
**3 石器の器種組成** 本遺跡から出土した、道具としての石器は 1,257 点、石製品は 171 点を数える。この内容を遺跡間で比較するため、少数器種は「その他石器」にまとめ、一定数が普遍的に出土する器種の占有率で組成を示す。比較に当たっては、①石鎌には未製品を含め、②磨石・凹石・敲石は統合して「磨石類」、③搔器・削器類は統合して「切削具」、④台石、多孔石は石皿と統合し「石皿類」、⑤ピエス・エスキューは除外する。この区分により、石器器種の占有率を、小数点第一位を四捨五入して示すと、第 30 図のとおりとなる。

本遺跡の特徴は、上位 4 種が 20%前後で大差ない占有率を示すことである。この器種組成を、千曲川・信濃川沿岸に立地する、縄文中・後期を中心として道具が 1,000 点以上出土した、既調査の 6 遺跡と比較してみる。これらを瞥見すると、器種組成は遺跡ごとにきわめてばらつきが大きく、標準型を見出せない。最高占有器種は、打製石斧が突出するのが栗林遺跡、幅上遺跡（十日町市教育委員会 2007）、打製石斧と切削具が突出するのが、津南町道尻手遺跡（津南町教育委員会 2005）である。磨石類が突出するのが屋代遺跡群（埋文センター 2000）、石鎌が突出するのが長野市村東山手遺跡（埋文センター 1999）である。千田遺跡は石鎌が最高占有率を示すが、磨石類、打製石斧とは大差がない。本遺跡はいずれの事例にも合致しない、ほぼ均等な組成を示す。

あえて本遺跡の類例を探すと、地域は離れるが千曲川水系に連なる、安曇野市北村遺跡（埋文センター 1993）に近い占有率である。北村遺跡は厚川段丘に立地し、チャート素材に石鎌、切削具を製作している。千田遺跡でも、千曲川で採取した拳大のチャート原石・石核が多量に出土し、全国的に希少な石皿製作遺跡でもある。本遺跡では、無斑晶質安山岩を素材とする、石鎌、切削具、打製石斧製作が明らかである。千曲川・信濃川に隣接して立地する集落遺跡は、原石の採取が容易であり、石器製作工房の役割を備えていたことは確実であろう。

上記の遺跡で漁労活動が盛んであったことは、屋代遺跡群と本遺跡から出土したサケ科魚骨が証明している。漁具といわれている石鎌は、千田遺跡 76 点、村東山手遺跡 38 点が多数例となり、他遺跡では 5 点以下である。いずれも大きなもので掌程度の、打欠き石鎌である。千曲川沿岸の遺跡から出土する石鎌の点数は、漁労活動の比重に整合的とは考えにくい。逆に、石鎌を用いない漁法を推定すべきであろう。

軽石製品は、浅間山麓では小諸市郷土遺跡 172 点、八ヶ岳山麓では棚畑遺跡 52 点を最多に、この地域以外ではまれな遺物である。石器組成で取り上げた上記遺跡でも、屋代遺跡群の 92 点を除けば、3 点以下である。本遺跡の軽石製品は 149 点で、板状（図版 72 - 129~134）と、石皿状（図版 72 - 137・141~143）の



第 30 図 千曲川・信濃川沿岸の縄文中・後期遺跡石器器種組成



形態が多く、この形態は一般的に見られる。軽石製品の多さは、遺跡独特の嗜好であろうか。

地域性がある器種に触れておく。打製石斧と分類した石器の中に、胴部が分厚く、側縁に急角度の剥離を施して断面が台形を呈し、片刃状の無斑晶質安山岩素材のものが一定量含まれる（図版66-71~73）。このような加工・形態の石器は長野県ではまれである。栄村村木遺跡からは多量に採集され、木工具としての用途が推定されている（望月2018）。分布状況と出現時期は現在把握していないが、注目したい。新潟県特有の石器である、三脚石器と板状石器に留意したが、確認できなかった。

**4 集落の変遷と構成** 本遺跡で最初に生活痕跡が残るのは、縄文早期である。以後、中期前葉まで断続的に少数の遺物を認めるが、本格的な集落形成は、遺物量が急増する中期中葉からと推定する。この時期に帰属する遺構は確認できず、3区西西部の斜面側から集中的に出土したため、この地点が廃棄場であったと考える。この時期の居住域は、同地点の平地地から調査区外にあるものと推定する。中期後葉から後期中葉以降の竪穴建物跡、敷石住居跡の帰属時期を列挙すると、以下のとおりである。なお、単独の屋外炉はないので、炉跡・埋設土器のみの遺構も含める。

- ①期 枋倉式：(古段階) S B 16 (W)
- ②期 加曾利EⅢ・Ⅳ式、沖ノ原Ⅱ式：S B 15・16-E・17、S K 111・202・313、S Q 18
- ③期 称名寺式：土器図版44-120灰付着土器（以下、下線は敷石住居跡）
- ④期 堀之内1式：(前半) S B 27・30、(古段階) S B 31、S H 14、(中段階) S B 26、(新段階) S B 10・13・28
- ⑤期 堀之内2式：(古段階) S B 6・20、(中段階) S B 7・8・12、(新段階) S B 1・5・12-B・21・24、(細別不明) S B 2・4・22。

**⑥期 加曾利B1式：S B 3・23**

時期不詳：S B 9（後期初頭～堀之内2式前半）、S B 14（堀之内2式後半～加曾利B1式）、S B 29（堀之内1・2式）、S B 32（不明）

竪穴建物跡の痕跡らしい遺構まで含めると、上記のとおり36軒を数える。時期別には、①期1軒、②期7軒、③期1軒、④期8軒、⑤期13軒、⑥期2軒と変遷する。遺構数が多い②・④・⑤期の分布状況は、②・⑤期は東側2区に多く、④期のみ西側3区が多数となる。敷石住居跡は、北信地方では加曾利EⅢ式新段階に出現し、同Ⅳ式以降竪穴建物跡に代わり、加曾利B1式まで継続する。洪水による流出等を無視し、遺構の遺存状態どおりとすれば、本遺跡では敷石住居の出現は堀之内1式期と遅く、同2式期にも半数弱である。これらの多くが調査区南西部に立地するのに対して、6棟の掘立柱建物跡は、北西部の平地地に立地する。全体形をうかがえる例はないが、長方形、方形、円形の形態が含まれる可能性がある。新潟県では中期、後期とも構築され、後期には竪穴建物跡にとって代わる。時期不明のため確信はないが、平地地に掘立柱建物跡、斜面に竪穴建物跡、敷石住居跡が立地するなら、分布域を異にして信越両地域の建物が居住域を構成する集落となる。確実な墓跡は⑤期の1基のみで、墓域を含む集落構成は、調査区のみでは把握できない。柱穴規模の土坑群が北側に広がり、遺物集中と焼土・炭化物集中の大部分は、⑤・⑥期に属するため、この時期に集落が高密度に広く展開していたと推定する。

**5 まとめ** 本遺跡は、縄文中期には新潟県側の文化領域に属していたと見られ、後期には徐々に長野県側の要素が強くなる。この状況は、土器様相では馬高式、枋倉式、沖ノ原式の席巻状況から、三斗桶場式を経てひんご1・2式の優勢、加曾利B1式の占有状況への変遷から見て取れる。遺構について、敷石住居の出現は、土器様相と整合的である。掘立柱建物跡と竪穴建物跡、敷石住居跡の併存状況が事実であれば、信越国境地域独特の集落といえよう。信州産黒曜石と、越後産アスファルトの利用も、盛んな信越交流の一端を物語る事例である。一方、新潟県側の土偶、石器の一部が欠如し、長野県側の釣手土器と坪井類型土器が新潟県におよんでいない事実から、縄文中期後葉前後の時期には、本遺跡から約5km下流にあ

る現在の県境あたりに、文化的な領域の境界が存在した可能性がある。

発掘調査から、整理作業を経て本書を作成するまで、足掛け4年を要した。この間、事業者である長野県北信建設事務所、遺跡所在地の栄村および同教育委員会、地元平滝区等の関係諸機関、作業員として参加された、栄村・野沢温泉村・飯山市・中野市の皆様からは、深い御理解と御協力をいただいた。また、指導を依頼した寺崎裕助、鈴木徳雄、石坂圭介の3氏からは、絶大な御助言を得た。多くの皆様に深く謝意を表するとともに、記録保存事業の成果品である本書が、地域の歴史・考古学研究に、広く永く活用されることを願って執筆する。

### 第3・4章 参考文献

第2章に掲出した文献は省略した

#### 1 論文、研究会資料集等

- 秋田かな子 1997「石神類型」覚え書き」〔東海大学校地内遺跡調査団報告書〕7
- 秋田かな子 2008「加曾利B式土器」〔総覧縄文土器〕アム・プロモーション
- 阿部昭典 2008「沖ノ原式土器」〔総覧縄文土器〕アム・プロモーション
- 新井達哉 2017「アスファルトの流通とそのルート（南東北）」シンポジウム「えっ！アスファルト？～縄文の生産と流通～東北日本のアスファルト～」発表資料
- 石井 寛 1984「堀之内2式土器の研究（予察）」〔調査研究集録〕5 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」〔調査研究集録〕9 横浜市ふるさと歴史財団
- 石坂圭介 2007「新潟県中越地方の縄文時代中期末から後期の前葉の土器様相」〔第20回縄文セミナー〕・「同 記録集」
- 石坂圭介 2008「三十稲場式土器」〔総覧縄文土器〕アム・プロモーション
- 伊藤隆夫・山田昌久編 2012「木の考古学－出土木製品用材データベース－」海青社
- 今村啓爾 1977「称名寺式土器の研究（上）（下）」〔考古学雑誌〕63-1 日本考古学会
- 鶴岡幸雄 1994「ハッ岳山麓における縄文中期の軽石製品」〔中部高地の考古学Ⅳ〕長野県考古学会
- 小熊博史 1989「縄文時代早期終末における絡条体瓦痕文の一樣相—新潟県中魚沼地方を中心に—」〔信濃〕Ⅲ 41-4
- 小熊博史 1997「卯ノ木遺跡出土土器の研究Ⅰ—押型土器の再検討—」〔長岡市立科学博物館研究報告〕32
- 加藤 進・西山英毅・岩野裕維 2014「長野県北部フォッサマグナ地域における原油・天然ガスの地球化学」〔石油技術協会誌〕79-3
- 金内 元 2012「新潟県の後期前葉土器群の展望」〔第25回縄文セミナー〕
- 加納 実 2008「堀之内式土器」〔総覧縄文土器〕アム・プロモーション
- 工藤雄一郎 2012「旧石器・縄文時代の環境文化史」新泉社
- 御所野縄文博物館 2017「縄文時代のアスファルト利用Ⅰ」
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」〔シンポジウム縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』（発表要旨・資料）縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」〔縄文時代の考古学2〕同成社
- 小林謙一 2008「縄文土器の年代（東日本）」〔総覧縄文土器〕アム・プロモーション
- 小林謙一 2017「縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—」
- 佐藤雅一 2003「沖ノ原式土器について」〔第16回縄文セミナー〕・「同 記録集」
- 品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉期の土器群」〔第15回縄文セミナー〕・「同 記録集」
- 鈴木徳雄 1999「称名寺式間沢類型の後裔」〔縄文土器論集〕縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2002「北関東における堀之内式の様相」〔第15回縄文セミナー〕・「同 記録集」
- 鈴木徳雄 2007「称名寺式土器の諸問題」〔第20回縄文セミナー〕・「同 記録集」
- 鈴木徳雄 2012「堀之内式土器研究の諸問題」〔第25回縄文セミナー〕
- 鈴木徳雄 2018「縄文後期前半における土器型式の存立構造—関東信越地域の「型式」と諸「類型」」〔地域考古学〕3

- 田中耕作 2002 「新潟県における縄文時代後期前葉の土器群」『第15回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 寺内隆夫 2004 「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』120
- 寺崎裕助 2003 「新潟県における串田新式土器」『第16回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 寺崎裕助 2008 「火炎土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 寺崎裕助 2013 「新潟県における中期中葉後半の様相―斬倉式を中心に―」『第26回縄文セミナー』
- 津南町教育委員会 2006 『津南学叢書第4輯 火焔土器の時代―その文化を探る―』
- 津南町教育委員会 2012 『津南学叢書第18輯 三十桶場式土器文化の世界』
- 津南町教育委員会 2014 『津南学叢書第23輯 魚沼地方の先史文化』
- 津南町教育委員会 2014 『津南学叢書第24輯 沖ノ原式期の文化様相―縄文時代中期末葉の越後を探る―』
- 中村耕作 2006 「縄文時代後期前半期の土器被覆葬」『國學院大学史学研究集録』31
- 中村孝三郎 1978 『越後の石器』学生社
- 長澤展生 2015 「新潟県の後期注口土器について」『第28回縄文セミナー』
- 中野幸大 2008 「大木7a~8b式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 永峯光一 1955 「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて」『石器時代』1
- 新潟県考古学会 1999 『新潟県の考古学』高志書院
- 新潟県立歴史博物館 2004 「火炎土器の研究」同成社
- 新潟県立歴史博物館 2011 「にいがたの土偶 発掘された新潟の歴史 2011 展示図録』
- 数田 明 2008 「塚田式・中道式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 宮下健司 1992 「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37 土偶とその情報
- 山岸洋一 2014 「新潟県上越以西における縄文中期浅鉢形土器の様相」『第27回縄文セミナー』
- 山本暉久 2002 「敷石住居址の研究」六一書房
- 吉川金利 2008 「唐草文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 米澤義光 2008 「気屋式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 綿田弘実 1985 「小県郡東部町和中原遺跡出土の後期縄文土器」『上小考古』18
- 綿田弘実 1990 「長野県の後期前葉縄文土器群」『第4回縄文セミナー』
- 綿田弘実 1999 「千曲川水系における縄文中期末葉土器群」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 綿田弘実 2000 「長野県の縄文早期末葉土器群」『第13回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 綿田弘実 2002 「長野県の後期前葉縄文土器群Ⅱ」『第15回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 綿田弘実 2002 「縄文中期の釣手土器―長野県の事例―」『土器からさぐる縄文社会』山梨県考古学協会
- 綿田弘実 2003 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 綿田弘実 2007 「中部高地における縄文中期末から後期初頭の在地系土器について」『第20回縄文セミナー』・『同 記録集』
- 綿田弘実 2008 「郷土式・圧痕隆帯文土器・大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 綿田弘実 2011 「北信濃縄文中期後半の圧痕隆帯文土器」『土曜考古』34
- 綿田弘実 2014 「長野県における縄文時代中期浅鉢形土器の様相」『第27回縄文セミナー』
- 綿田弘実 2015 「長野県における縄文時代後期注口土器の様相」『第28回縄文セミナー』
- 綿田弘実 2016 「千曲川下流域における縄文時代中期後葉土器群」『考古学の諸相Ⅳ』
- 2 発掘調査報告書、地誌
- 飯綱町教育委員会 2008 「小玉遺跡」
- 飯綱町教育委員会 2012 「小野遺跡」
- 飯山市教育委員会 1998 「東原遺跡」
- 蒲川原村教育委員会 1959 「顕聖寺遺跡」
- 柏崎市教育委員会 2001 「十三木塚北」

- 塩沢町教育委員会 1988 『万條寺林遺跡』
- 小諸市教育委員会 1994 『石神遺跡群 石神』
- 茅野市教育委員会 2003 『中ツ原遺跡』
- 十日町市教育委員会 1961 『小坂遺跡』
- 十日町市教育委員会 2006 『中島遺跡発掘調査報告書』
- 十日町市教育委員会 2006 『内後遺跡発掘調査報告書』
- 十日町市教育委員会 2007 『幅上遺跡発掘調査報告書』
- 富山県教育委員会 1986 『都市計画道路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（4）南太閤山Ⅰ遺跡』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物』
- 長野県埋蔵文化財センター1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター1994 『県道中野豊野線バイパス埋蔵文化財発掘調査 栗林遺跡・七瀬遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴市内その3—更埴桑里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—縄文時代編—』
- 長野県埋蔵文化財センター2012 『中野市柳沢遺跡 千曲川・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その3—』
- 長野県埋蔵文化財センター2013 『中野市千田沢遺跡 千曲川・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その1—』
- 長野原町教育委員会 2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』
- 新潟県教育委員会 1991 『関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』
- 新潟県教育委員会 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』
- 野沢温泉村教育委員会 1985 『関ノ峯』
- 丸子町教育委員会 1992 『潤ノ上遺跡Ⅱ』

## 付表 遺構一覧表

\*この表は、遺構記号別に遺構の所在地、法量、記号・番号の変更等を記載した。遺構記号は、付番後に想定していた遺構とは異なる遺構となる場合があり、第3章第3節では推定できる遺構の性格に従って記述した。このような場合は、その旨を備考欄に記述した。

## 1 聖火種神跡、数石住居跡 (SD)

遺構 番号	位置		間数	PL	基壇 (cm)			平面形状	1階	基礎・石造遺物	切り合い	備考	
	地目*	アリアー			高さ (cm)	幅	長さ						高さ
SB1	2b-1	1YA01-06.D01-07.C04-07, D04-07.D04-06	284.79	3-10	1100/2	630	360	円形	N4° W	礎之内2段高、 ミニチュア土 器、漆器不 明	見出し 109、168- 172	見出し 数石住居跡	
SB2	2b-1	1Y04-06.D04-05	284.79	6-11	1100/3-9	590	375	円形	N16° E	礎之内2段高	見出し ▼SB23	見出し-6 数石住居跡	
SB3	2a	1Y03-06.F03-06.Q03-06	284.59	7-11	3	330	371	円形	N37° E	加戸利直1式	見出し SK33、37、 63、69		
SB4	2b-1	1Y307-06.C07-08	284.05	5-11	3	300	197	円形	N2° E	礎之内2段		見出し	
SB5	2b-1	1X205-07.S03-07	284.29	3-12	4	580	304	円形	N8° E	礎之内2段、石 柱	見出し SB57、 SB29、11、 ST4	見出し	
SB6	2b-1	1XT06-07, YA06-07.S06-07	284.30	5-12	3	690	348	円形		礎之内2段高、 ミニチュア土 器、数石住居 跡			
SB7	2b-1	1YQ06-07.R06-08.S07	283.92	1-12	3	650	360	円形		礎之内2段	見出し ▼SB30、32 ▼SB3		
SB8	2b-1	1XSD0-06.T03-06	284.63	5-15	4	590		円形		礎之内2段	見出し ▼SB35、ST4		
SB9	2b-1	1Y205-06.F03-08.C03-07	284.27	6-13-14 5-6	4/5 5-6	549	594	円形		加戸利直-1 型、数石住居 跡	見出し ▼SB12、 SK112、113	見出し-5SK114-14 115から変更	
SB10	2b-1	1X307-08.S07-08	283.51	3-13	4	320	393	四角方形		礎之内1段高	見出し ▼SB17		
SB11												見出し-3SK114同	
SB12	2b-1	1Y205-07.F03-06.G03-07	283.28	6-13-14 5-6	4/5 5-6	546	318	90	円形	礎之内2段中、 土製、型/土製 土、石柱	見出し ▼SB9、 SK113 ▼SK111	数石住居跡	
SB12B	2b-1	1YF06-07		6-13	5					礎之内1段高、 アスファルト	見出し ▼SB2	数石住居跡	
SB13	2b-1	1X307-08.S07-08.T08	283.00	3-15	6	330	337	四角方形		礎之内1段高	見出し ▼SB10		
SB14	2a	1J104-06, E03-06, F03-06	284.37	5-9-16	7	420	337	四角方形	N2° E	礎之内2段、 明瓦	見出し ▼SB20		
SB15	2b-1	1YAK8.S08, C08	283.09	5-16	7	350	315	48	四角方形	N1° E	加戸利直1式	SK114から変更	
SB16B	2a	1YLG5-07.M03-07	283.84	7-17	7	336	335	30	円形	加戸利直1式、 ミニチュア土 器、数石住居 跡	見出し ▼SB12B	遺物14SB16-1採取 上げ	
SB16W	2a	1YK07-07.L03-07	283.86	7-17	7	351	638	180	円形	加戸利直1式、 数石住居跡	見出し ▼SK130 SB12E		
SB17	2b-1	1YF18.G06-08.H06-08.S07	283.28	6-17	7	620	490	390	円形	不明 数石住居跡、石柱			
SB18												見出し-3SK126(1) 採取後へ	
SB19												見出し-3SK136(1) 採取後へ	
SB20	2a	1J104-06, E03-06, F03-06	283.65	8-9-16	7-8	420	336	40	四角方形	N6° W	礎之内2段高	見出し ▼SB1	SK26から変更
SB21	2a	1J105-07, I06.J06	283.70	9-18	8	490	480	420	円形	N3° W	礎之内2段高、 アスファルト	見出し ▼SK32、68	SB12Bから変更
SB22	2a	1YF06-06	284.89	8-18	8					礎之内2段高、 数石住居跡		SB11から変更	
SB23	2b-1	1Y04.D01-06, I04-05, I04, J04	283.33	6-19	4/5 9	388				加戸利直1式、 ミニチュア土 器	見出し ▼SB5	SB14から変更 数石住居跡	
SB24	3	1XJ08、1XK06-06, 1XL07-08	284.28	4-19	10				円形	N7° W	礎之内1段高、 ミニチュア土 器、数石住居 跡	数石住居跡	



付表 遺構一覧表

3 十把 (SK)

\* 高立柱建物跡ピット、埋跡、須置石がある位置を含む。

遺構番号	層位	号	面積 (㎡)	形状	FL	風圧 (mm)			下風面状況	側風面状況	土間	埋跡・物品遺物	埋り方	備考
						長	幅	厚						
SK1	2b-1	1X552	284.70	3		63	37	30	不整面土方面	不整面	181'E	△SK2		ST4
SK2	2b-1	1X560	284.62	3		123	37	31	不整面土方面	不整面	181'E	▼SK1		
SK3	2b-1	1X505、T08	284.70	3		93	83	77	不整面	不整面	180'E	▼SK6		ST4
SK4	2b-1	1X700	284.84	3		101	30	43	埋跡	クライ状	134'E			
SK5	2b-1	1X708-06、YA05-06	284.72	3		106	61	39	埋跡	不整面	150'E			
SK6	2b-1	1X503	284.96	3		132	64	90	不整面	不整面	180'E			欠番+埋跡ではない
SK7														
SK8	2b-1	1X708-07、09b-07	284.89	3・2b	18	132	37	26	埋跡	不整面	N・E	△SK5		土間のみ土境
SK9	2b-1	1X506	284.86	3		86	73	41	不整面	クライ状	135'E	△SK1		ST5の下
SK10	2b-1	1X309-090	284.19	3		45	41	44	不整面	不整面	162'E	▼SK5		ST4、ST5の下
SK11	2b-1	1X306-095-06	284.36	3		170	83	28	埋跡	クライ状		△SK5、SK9-33		ST5の下
SK12	2b-1	1X505	284.57	3		63	46	28	不整面	不整面	170'E	▼SK6、SK14		
SK13	2b-1	1X503-06	284.53	3		86	50	56	不整面	クライ状	154'E	△SK11		ST4
SK14	2b-1	1X582	284.52	3		37	38	20	不整面	埋跡	156'E	△SK12		
SK15	2b-1	1X506	284.43	3		39	122	22	不整面(11)	不整面	156'E	△SK9		
SK16	2b-1	1X306	284.32	3		75	63	44	不整面	不整面	162'E	▼SK16		ST4
SK17	2b-1	1X703-03	284.47	3		60	37	27	不整面(11)	不整面	181'E	▼SK6		ST4
SK18	2b-1	1X506	284.32	3		107	31	24	不整面	不整面	162'E	△SK19		
SK19	2b-1	1X506	284.41	3		68	125	23	埋跡	クライ状		▼SK6、SK10-8		
SK20	2b-1	1X706	284.33	3		30	30	20	埋跡	クライ状		△SK21		
SK21	2b-1	1X706	284.35	3		128	34	28	埋跡	クライ状	162'E	▼SK20		
SK22	2b-1	1X700	284.47	3		36	33	42	埋跡	埋跡	184'E	△SK12		ST4
SK23	2b-1	1X706	284.44	3		24	180	47	不整面	埋跡	152'E	▼SK22		
SK24	2b-1	1X703	284.48	3		26	111	15	不整面	クライ状	151'E	▼SK22		
SK25	2b-1	1X700	284.47	3		33	28	24	不整面(11)	クライ状	154'E			
SK26	2b-1	1X503	284.63	3		30	19	17	埋跡	クライ状				
SK27	2b-1	1X503	284.63	3		25	18	19	埋跡	クライ状	162'E			
SK28	2b-1	1X706	284.32	3		43	199	28	埋跡	不整面		△SK20		ST4
SK29	2b-1	1X706	284.33	3		43	199	40	不整面	埋跡	167'E	▼SK28		ST4
SK30	2b-1	1X703	284.48	3		48	40	43	埋跡	クライ状	152'E			ST4
SK31	2b-1	1X700	284.43	3		16	15	4	埋跡	クライ状	162'E			
SK32	2b-1	1X706	284.35	3		150	31	38	埋跡	埋跡	182'E			
SK33	2b-1	1X501-06	284.54	3		36	47	64	不整面	不整面	155'E	△SK11		ST4
SK34	2b-1	1X706	284.30	3		35	31	20	不整面	埋跡	167'E			
SK35	2b-1	1X703-03	284.42	3		34	33	11	不整面(11)	埋跡	167'E	▼SK6		
SK36	2b-1	1X706	284.53	3		32	32	36	埋跡	クライ状		▼SK6		
SK37	2b-1	1X700	284.46	3		30	19	8	埋跡	クライ状				
SK38	2b-1	1X503	284.74	3		150	115	33	不整面	埋跡	168'E			
SK39														欠番
SK40	2a	1X703-06、09-06	284.33	8		182	170	82	不整面	クライ状	181'E	△SK11		欠番+埋跡(北東)
SK41														
SK42	2a	1X703-06、105-06	284.29	9		102	93	35	不整面	クライ状	156'E	△SK11		
SK43														欠番
SK44	2a	1X703-06	284.74	8		100	107	44	不整面	クライ状	0'			欠番
SK45														欠番
SK46														
SK47	2a	1X703	284.84	8		36	22	19	不整面	埋跡	181'E			ST4(16)中
SK48	2b-1	1X708	282.87	6		20	18	7	埋跡	クライ状				山敷から成コンクリート
SK49	2a	1X703	284.63	8		28	24	15	不整面	クライ状	181'E			
SK50	2a	1X706	284.25	8		29	23	13	埋跡	クライ状	167'E			
SK51	2b-1	1X703-08、098	283.82	5		123	110	43	不整面	埋跡	N・E	▼SK4		
SK52	2a	1X707	283.75	7		31	26	23	不整面土方面	埋跡	166'E			
SK53	2a	1X705	284.68	7		20	18	9	不整面	クライ状		▼SK3		ST5
SK54	2a	1X703-Q08	284.75	7		18	15	14	不整面	埋跡	181'E			ST5
SK55	2a	1X706	284.85	7		35	28	20	不整面(11)	クライ状	184'E			
SK56	2a	1X706	284.22	7		29	25	16	不整面	クライ状	162'E			
SK57	2a	1X706	283.93	7		18	12	11	不整面土方面	クライ状	158'E	▼SK3		
SK58	2a	1X706-Q08	284.20	7		104	81	81	不整面	クライ状	181'E	▼SK3		
SK59	2a	1X706	284.82	7		23	20	15	不整面土方面	クライ状	154'E			ST5
SK60	2a	1X704	284.83	8		37	33	18	埋跡	クライ状	181'E			
SK61	2a	1X703	284.78	8		79	50	31	不整面	クライ状	167'E			

遺構番号	地区	位置 座標 (m)	N/E	PL	幅員 (cm)			平面形状	開口形状	土種	同等・近隣遺構	取り囲み	備考		
					1軸	2軸	溝深								
SR02	2a	B1100	28399	8		21	20	16	円形	半円状					
SR03	2a	F1109	28464	7		18	15	7	不規則	半円状	N10° E	▼SR5	ST5		
SR04															
SR05	2b-1	F1107b-06, 10b-06	28442	5・22		136	132	47	円形	不規則		武文堂遺跡、右隣	▼SR8-125	大形	
SR06															
SR07	2a	B1105	28402	9		34	30	10	楕円形	楕円	N10° E		SR06の南西		
SR08	2a	B1106-08	28400	9		<147>	<130>	50	楕円形	不規則	N77° E	△SR15	SR12の母体に由来		
SR09	2a	F1105	28471	7		28	20	14	不規則	半円状	0°	▼SR3	ST5		
SR10	2a	F1106-05	28479	7		24	21	14	不規則	半円状			ST5		
SR11	2a	F1105	28472	7		42	30	22	楕円形	半円状	N2° W				
SR12	2a	F1105	28440	7		18	16	9	不規則	半円状					
SR13	2a	F1105	28419	7		16	15	9	円形	半円状					
SR14	2a	F1106	28312	7		34	17	16	不規則	楕円	N10° E				
SR15	2a	F1106a,106	28401	7		47	26	20	不規則	不規則	N15° W				
SR16	2a	F1106	28453	7		34	21	5	不規則	丸長方形	楕円	0°			
SR17	2a	F1107-07	28378	7		80	56	32	不規則	半円状	N2° W				
SR18	2a	F1107,107	28360	7		82	78	36	不規則	楕円					
SR19	2a	F1107,107	28367	7		38	37	36	不規則	半円状	N7° E				
SR20	2a														
SR21	2b-1	F1107b-06 F1107c, 1A05	28442	6・27	16	103	98	40	楕円形	テラコ	N7° E	△SR05-165	取石がある巨大		
SR22	2b-1		28470	5		61	46	59	不規則	円形	N2° E				
SR23	2b-1	F1107b-06, 20b-06	28455	5・25	16	120	118	80	不規則	テラコ		武文堂遺跡	取石がある巨		
SR24	2b-1	F1106	28437	5		58	56	24	不規則	丸長方形	テラコ	△SR28-160 △SR36			
SR25	2b-1	F1106	28431	5		36	27	27	楕円形	不規則	N20° W				
SR26	2b-1	F1106	28441	5		56	44	32	楕円形	半円状	N17° W	▼SR38-64 ▼SR38-85			
SR27	2b-1	F1106	28440	5		27	25	22	不規則	テラコ					
SR28	2b-1	F1106	28437	5		20	17	17	不規則	半円状					
SR29	2b-1	F1106	28444	5		43	28	23	楕円形	半円状	N22° E	△SR30			
SR30	2b-1	F1106c,106	28447	5		44	27	44	不規則	円形	N10° W	▼SR30			
SR31	2b-1	F1106	28440	5		31	21	30	楕円形	半円状	N20° E				
SR32	2b-1	F1107-07	28439	5		35	34	30	不規則	半円状					
SR33	2b-1	F1107,107	28431	5		23	20	13	円形	半円状	N20° W				
SR34	2b-1	F1106	28446	5		44	32	33	不規則	丸長方形	テラコ	N43° W			
SR35	2b-1	F1106	28456	5		39	35	35	不規則	円形					
SR36	2b-1	F1105	28472	5		28	26	15	不規則	半円状		△SR36-177			
SR37	2b-1	F1105	28471	5		32	24	16	楕円形	半円状	N20° E				
SR38	2b-1	F1105,105	28472	5		51	30	31	不規則	楕円	N27° E	▼SR36			
SR39	2b-1	F1105	28472	5		43	23	23	楕円形	テラコ	N25° E	▼SR100			
SR100	2b-1	F1105,105	28469	5		28	25	32	楕円形	楕円	N4° E	△SR59			
SR101	2b-1	F1106,106	28456	5		33	26	31	楕円形	円形	N3° W				
SR102	2b-1	F1105	28468	5		30	26	31	楕円形	円形	N20° W				
SR103	2b-1	F1105,105	28475	5		44	41	28	円形	テラコ					
SR104	2b-1	F1106	28457	5		21	17	12	楕円形	楕円	N32° W				
SR105	2b-1	F1106	28457	5		31	19	30	楕円形	円形	N8° E				
SR106	2b-1	F1106	28457	5		28	17	22	楕円形	半円状	N3° W				
SR107	2b-1	F1105	28457	5		44	<36>	12	不規則	楕円	N85° W	▼SR108			
SR108	2b-1	F1105	28465	5		33	28	29	楕円形	半円状	N8° E	△SR102			
SR109	2b-1	F1107b-05	28469	5・28	16	55	53	62	円形	円形			取石がある巨		
SR110	2b-1	F1106c,106	28460	5		38	27	29	楕円形	半円状	N43° E				
SR111	2b-1	F1106	28399	6・26・17・18	18	85	77	11	不規則	楕円	N22° E	溝ノ原遺跡、武文堂	△SR8 ▼SR12	1軸1階部分 2軸母体に由来	
SR112	2b-1	F1106	28409	6		45	42	22	不規則	楕円		△SR8			
SR113	2b-1	F1106-06	28422	6		104	112	41	不規則	テラコ	N10° E	△SR6 ▼SR12			
SR114	2b-1	F1106,106	28470	5		36	35	25	円形	半円状	N1° E				
SR115	2b-1	F1106	28470	5		18	15	10	楕円形	楕円	N1° E				
SR116	2b-1	F1106a,106	28469	5		31	21	14	楕円形	半円状	N22° E				
SR117	2b-1	F1106	28469	5		15	14	8	円形	半円状					
SR118	2b-1	F1106	28471	5		39	26	40	円形	円形					
SR119	2b-1	F1106	28478	5		50	35	46	不規則	丸長方形	円形	N27° E			
SR120	2b-1	F1107-05	28464	5		41	30	22	楕円形	楕円	N17° W	△SR172			
SR121	2b-1	F1107	28456	5		58	46	30	不規則	楕円	N27° W				
SR122	2b-1	F1107c,107	28451	5		52	35	24	不規則	楕円	N22° W				
SR123	2b-1	F1107	28446	5		25	21	21	円形	半円状					
SR124	2b-1	F1107	28446	5		48	42	30	不規則	不規則	N20° W				
SR125	2b-1	F1107c-06	28446	5・27・18	18	142	90	60	不規則	丸長方形	楕円	N80° E	溝ノ原遺跡、武文堂	△SR66 ▼SR123	取石がある巨
SR126	2a・2b-1	F1107,107	28476	6		123	106	47	不規則	半円状	N60° E		SR107		
SR127	2a	F1107a	28476	6		30	27	11	楕円形	テラコ	N20° E				
SR128	2b-1	F1107a	28480	6		21	15	4	楕円形	楕円	N10° E				



付表 遺構一覧表

遺構 番号	地区	号数	面積 (㎡)	FL	基礎 (cm)			土留形状	基礎形状	土留	埋戻し・特注遺物	遺り内容	備考
					柱間	壁厚	高さ						
SK129	20-2-1	1 Y304-004	284.62	6		38	35	33	不整形片	門留状	3567 乙		
SK130	20-1	1 Y304	284.73	6		32	29	8	片材	既設			
SK131	20-1	1 Y304-05	284.33	6		36	42	31	不整形片材	土留状	N25 甲		
SK132	20-1	1 Y304-04	284.60	6		336	40	140	不整形片	土留状	N12 甲		
SK133	20	1 Y306	284.18	6		38	22	17	埋戻し	不整形片	N39 甲		
SK134	20-1	1 Y306	283.99	6		37	33	12	片材	土留状			
SK135	20-1	1 Y306	283.98	6		38	30	14	埋戻し	既設	N10 甲		
SK136	20-1	1 Y36	283.84	6		27	17	12	埋戻し	不整形片	N52 乙		
SK137	20-1												欠番
SK138	20-1	1 Y305	284.26	6		49	36	33	不整形片材	土留状	N32 乙		
SK139	20-1	1 Y305	284.19	6		32	33	32	不整形片材	土留状	N52 甲		
SK140	20-1	1 Y304	284.46	6		36	36	17	不整形片	既設	N30 乙		
SK141	20-1	1 Y304	284.49	6		36	19	12	埋戻し	不整形片	N72 甲		
SK142	20-1	1 Y306	284.23	6		44	27	16	埋戻し	不整形片	N38 乙		
SK143	20-1	1 Y306	284.11	6		45	36	16	埋戻し	不整形片	N34 甲		
SK144	20-1												欠番
SK145	20	1 Y301	284.50	7		38	25	34	片材	門留状			
SK146	20	1 Y306-05, L04-05	284.49	7		61	46	28	不整形片材	不整形片	N26 甲		
SK147	20	1 Y305	284.42	7		50	40	44	不整形片材	土留状	N26 甲		
SK148	20	1 Y305-N05	284.46	7		40	36	15	片材	既設			
SK149	20-1	1 Y307	283.64	6		38	34	15	片材	既設			
SK150	20-1	1 Y307	283.36	6		21	21	9	片材	既設			△ SK136
SK151	20-1	1 Y306	283.80	7		23	22	6	片材	既設			SK150埋没
SK152	20-1	1 Y305-06, M0-06	284.26	6		200	163	53	不整形片	不整形片	N10 甲		
SK153	20-1	1 Y305	284.16	6		27	21	6	埋戻し	既設	N7 甲		
SK154	20-1	1 Y304-03	284.30	6		48	39	42	不整形片	土留状	N26 甲		△ SK135
SK155	20-1	1 Y304-03	284.28	6		<37>	35	32	片材	不整形片			▼ SK134
SK156	20-2-1	08-0305-08, L06-08	283.73	6 7 17		340	260	134	不整形片	不整形片	N88 甲	考古学	BKS10-10,瓦土埋没 溝
SK157	20-1	1 Y305-03b	284.36	5		27	26	18	片材	既設			
SK158	20-1	1 Y306	284.48	5		32	31	25	不整形片	埋戻し			
SK159	20-1	1 Y304	284.51	6		41	33	25	埋戻し	不整形片	オライイ		SK158埋没
SK160	20-1	1 Y304-03, 06-05	284.47	6		45	29	23	埋戻し	土留状	N2 甲		
SK161	20-1	1 Y303-G03	284.44	6		48	46	21	不整形片	既設			欠番
SK162													欠番
SK163													欠番
SK164	20-1	1 Y305	284.33	5		47	45	20	片材	オライイ			△ SK105
SK165	20-1	1 Y306	284.31	6		37	45	18	片材	オライイ			▼ SK147-184
SK166	20-1	1 Y306	284.33	5		53	45	27	埋戻し	不整形片	N26 甲		
SK167	20-1	1 Y306	284.27	5		36	44	10	埋戻し	既設	N2 甲		
SK168	20-1	1 Y304	284.93	5		32	47	40	不整形片材	門留状	N12 甲		▼ SK1
SK169	20-1	1 Y301-H04	284.84	5		330	45	32	不整形片材	既設	N7 乙		▼ SK1
SK170	20-1	1 Y304-G04	284.92	5		77	33	62	埋戻し	不整形片	N67 甲		▼ SK1
SK171	20-1	1 Y304	284.92	5		78	27	68	不整形片	不整形片	N67 甲		▼ SK1
SK172	20-1	1 Y304-05, D04	284.92	5-27	16	127	103	27	埋戻し	門留状	N30 乙	縄文時代遺構	▼ SK1, SK129
SK173	20-1	1 Y303-06	284.45	5-27	16	44	36	49	不整形片	埋戻し	N31 乙	縄文時代遺構	埋戻し土留あり
SK174	20-1	1 Y304-05	284.74	5		44	24	14	不整形片材	不整形片	N85 乙		▼ SK106
SK175	3	1 Y303-F03	284.24	3		62	53	52	不整形片	埋戻し	N29 甲		ST1
SK176	3	1 Y305-G05	284.43	2-4		53	42	26	不整形片	土留状	N77 甲		
SK177	3	1 Y305	284.43	2		47	43	39	不整形片	オライイ	3567 乙		
SK178	3	1 Y305	284.36	2		88	<75>	16	不整形片	既設	N56 甲		4-6 SK175
SK179	3	1 Y305	284.45	2		94	42	24	不整形片材	既設	N63 甲		4-6 SK178
SK180	3	1 Y304-05	284.25	2	18	(18)	83	49	不整形片	土留状	N12 甲	埋戻し (No.24)	4-6 SK180
SK181	3	1 Y305-05	284.43	2		132	83	20	不整形片	不整形片	N1 甲		4-6 SK180
SK182	3	1 Y305	284.28	2		31	26	27	不整形片材	既設	N37 乙		
SK183	3	1 Y305-04, N05-06	284.26	2		138	103	38	不整形片	不整形片	N58 乙		△ SK129
SK184	3	1 Y305-08, S05-08	284.22	2		75	66	57	不整形片材	土留状	N57 甲		
SK185	3	1 Y305-08	284.50	2		63	38	29	不整形片材	不整形片	N69 甲		
SK186	3	1 Y305	284.42	2		115	51	22	不整形片	土留状	N30 乙		
SK187	3	1 Y305	284.31	2		32	50	26	不整形片材	埋戻し	N30 乙	礎	
SK188	3	1 Y305-D05	284.22	2		64	74	28	不整形片	不整形片	N4 甲		△ SK100
SK189	3	1 Y305	284.51	2		63	57	20	埋戻し片材	オライイ	N6 甲	礎	
SK190	3	1 Y305-06, R05-06	284.40	2		135	126	29	不整形片	オライイ	N1 甲		▼ SK129, SK188, SK189
SK191	3	1 Y303-05	284.19	2		39	30	34	不整形片材	埋戻し	3567 乙		
SK192													欠番
SK193													欠番
SK194	3	1 Y304-03	284.46	2		33	130	(16)	不整形片	既設	N4 甲		△ SK105



付表 遺構一覧表

遺構番号	地区	写真	写真番号	調査年	FL	規模 (cm)			平土形状	跡土形状	土層	埋没・特出遺物	その他	備考
						柱幅	柱高	長さ						
SK201	3	1 X004	28462	4		530	29	26	不整形土板状部	横状	N.07 土			
SK202	3	1 X001-03	28460	4		(49)	38	26	隅切部	隅切部	N.07 土	▼ SK203		
SK203	3	1 X005-03, 004-05	28460	4		90	80	27	平形部(28)	トラスイ鉄	N.07 土	△ SK202		
SK204	3	1 X004	28448	4		620	<42>	26	隅切部	隅切部	6F SK205	西 5SK229, 東 5SK224		
SK205	3	1 X006	28450	4		60	47	60	隅切部	隅切部	N.07 土	△ SK206 ~ 208	ST3	
SK206	3	1 X005-00	28437	4		68	132	21	平形部(11)	トラスイ鉄	N.07 土	△ SK205 ▼ SK205		
SK207													欠番	
SK208	3	1 X001-03	28460	4		30	40	50	隅切部	隅切部	N.07 土	△ SK211	ST3	
SK209	3	1 X004	28465	4				12	跡			北東 SK210		
SK220	3	1 X003-06	28415	3		36	28	42	隅切部	隅切部	N.07 土		ST1	
SK221	3	1 X006	28467	3		30	27	25	不整形部	横状	N.07 土	▼ SK222	ST1	
SK222	3	1 X006	28412	3		63	48	42	隅切部	隅切部	N.07 土		ST1	
SK223	3	1 X003	28390	3		169	50	38	不整形部	隅切部	N.07 土	6F SK215		
SK224	3	1 X006-01	28375	3		30	47	28	平形部	平形部	N.07 土	▼ SK216		
SK225	3	1 X006, D06	28376	3		48	39	34	小形部	横状	N.07 土			
SK226	3	1 X006, D06	28400	3		85	70	72	不整形部	石段状	N.07 土			
SK227	3	1 X006	28430	3		30	26	27	平形部	平形部	N.07 土			
SK228	3	1 X003, D05	28460	4		110	67	67	不整形部	隅切部	N.07 土	△ SK212		
SK229	3	1 X006-07	28430	4	28	18	53	49	027			江戸時代土器埋蔵品 土器, 磁器片	土器埋蔵品	
SK280	3	1 X005, N05	28438	4		38	26	19	不整形部(1)	平段状	N.07 土			
SK281	3	1 X005	28444	4		145	53	25	隅切部	トラスイ鉄	N.07 土	▼ SK282		
SK282	3	1 X005-00	28440	4		76	55	65	不整形部(方形)	石段状	N.07 土			
SK283	3	1 X005-06	28432	4		75	61	68	小形部	隅切部	N.07 土		ST3	
SK284	3	1 X003	28414	2		629	24	30	隅切部	隅切部	N.07 土	△ SK230 6F SK206 △ SK210	5F埋蔵品	
SK285	3	1 X005-06, 005-06	28412	2		53	44	18	不整形部(1)	隅切部	N.07 土	6F SK204	5F埋蔵品	
SK286	3	1 X005, 205	28440	3		52	<49>	36	不整形部	横状	N.07 土	▼ SK207 ST3		
SK287	3	1 X006, 006	28430	3		86	61	58	不整形部(1)	不整形部	N.07 土	△ SK298 ~ 298	ST2	
SK288	3	1 X005, 205	28439	3		<60>	58	81	不整形部	隅切部	N.07 土	▼ SK207	ST2	
SK289	3	1 X001-05	28452	3		28	22	12	不整形部(1)	平形部	N.07 土			
SK290	3	1 X003	28433	3		28	26	21	隅切部	隅切部	N.07 土			
SK291	3	1 X003	28427	3		65	47	37	不整形部	石段状	N.07 土			
SK292	3	1 X001-03	28436	3		36	27	21	不整形部(方形)	石段状	N.07 土			
SK293	3	1 X003	28412	3		43	38	38	不整形部	石段状	N.07 土		ST6	
SK294	3	1 X003, G03	28414	3		38	33	32	隅切部	隅切部	N.07 土		ST1	
SK295	3	1 X006	28408	2				30	不整形部					
SK296	3	1 X006	28424	3		66	32	46	不整形部(1)	不整形部	N.07 土	▼ SK207	ST2	
SK297	3	1 X006, J06	28414	3		60	40	44	不整形部	石段状	N.07 土	△ SK206	ST2	
SK298	3	1 X005	28392	3		49	37	30	不整形部(方形)	平形部	N.07 土			
SK299	3	1 X004, 004, E04-05	28440	3		60	40	29	不整形部(方形)	平段状	N.07 土			
SK300	3	1 X004	28448	4		134	<50>	29	隅切部	石段状	N.07 土			
SK301	3	1 X003	28415	3		53	44	28	平形部	トラスイ鉄	N.07 土		ST1	
SK302	3	1 X003-06	28409	3		38	34	10	不整形部(1)	跡	N.07 土			
SK303	3	1 X005	28444	4		122	90	60	不整形部	石段状	N.07 土			
SK304	3	1 X006-03, 004-05	28465	4		90	78	48	不整形部	石段状	N.07 土			
SK305	3	1 X006	28375	3		70	58	26	四人柱(方形)	隅切部	N.07 土			
SK306	3	1 X006, 206	28412	3		64	60	40	不整形部	石段状	N.07 土	△ SK300	ST6	
SK307	3	1 X006	28400	3		20	36	34	隅切部	平段状	N.07 土	△ SK300		
SK308	3	1 X006	28396	3		43	41	24	隅切部	トラスイ鉄	N.07 土	△ SK301		
SK309	3	1 X003	28424	3		<63>	57	48	不整形部	石段状	N.07 土	▼ SK224	ST1	
SK310	3	1 X001	28436	4		43	33	18	隅切部	トラスイ鉄	N.07 土	6F SK203		
SK311	3	1 X003, 005	28450	4		67	35	48	不整形部(1)	平段状	N.07 土	△ SK206 ~ 202		
SK312	3	1 X003, 005	28436	4		86	65	54	不整形部	石段状	N.07 土	△ SK311		
SK313	3	1 X004-03, 006-06	28438	3	29	12	321	78	18	跡	N.07 土	真土型木鼻	9F埋	
SK314	3	1 X005	28440	4		57	31	24	不整形部(1)	トラスイ鉄	N.07 土			
SK315	3	1 X005	28460	4		28	24	20	不整形部	平形部	N.07 土			
SK316	3	1 X005	28442	4		61	26	50	不整形部(1)	平段状	N.07 土			
SK317	3	1 X005	28444	4		51	<44>	26	不整形部	石段状	N.07 土			
SK318	3	1 X006-07	28390	4		40	35	44	不整形部	隅切部	N.07 土			
SK319	3	1 X006	28424	4		44	40	50	不整形部	隅切部	N.07 土			
SK320	3	1 X007	28325	3	29	18	92	73	14	不整形部(1)	跡	N.07 土	埋蔵品埋蔵品, 土器 埋蔵品	埋蔵品埋蔵品
SK321	3	1 X006	28465	3		33	24	20	隅切部	トラスイ鉄	N.07 土		ST1	
SK322	3	1 X006	28424	3		61	52	50	不整形部(1)	平形部	N.07 土	△ SK210	ST2	
SK323													欠番	
SK324	3	1 X006	28419	3		151	24	23	不整形部(1)	トラスイ鉄	N.07 土	▼ SK205		

付表 遺構一覧表

遺構 番号	地区	位置 アトリノマ	面積 (㎡)	N/E	PL	幅尺 (cm)			平置材	開口部材	土種	同等・近隣遺構	取り囲み	備考
						10幅	10幅	溝深						
SK225	3	1XJ06	28400	3		53	40	64	木彫柱	白漆柱	N10° E		△ SK201 ▼ SK232	ST2
SK226	3	1XJ06-06, 006	28435	4		80	67	73	木彫彫刻	白漆柱	180° W		▼ SK205・206	SK206:取り囲み
SK227	3	1XJ06-09, 005-06	28420	2		54	53	39	不彫彫刻		N0° E			
SK228	3	1XJ06-006	28382	2		17	16	22	木彫門扉				△ SK229	小彫
SK229	3	1XJ06	28371	2		19	16	18	木彫門扉				△ SK229	小彫
SK230	3	1XJ06	28362	2		18	17	16	木彫門扉				△ SK229	小彫
SK231	3	1XJ06-06	28414	2		50	34	20	木彫門扉		S37° W			
SK232	3	1XJ06	28382	2		16	15	52	木彫門扉				△ SK229	小彫
SK233	3	1XJ06-L16	28448	4		528	158	30	木彫門扉	サリ漆柱			▼ SK232	
SK234	3	1XJ06-L16	28440	4		459	142	51	木彫門扉	サリ漆柱			▼ SK232	
SK235	3	1XJ06	28437	4		61	118	28	不彫柱	サリ漆柱	N48° E		▼ SK232	不明 SK232
SK236	3	1XJ06-06, L16-06	28420	4		66	32	58	不彫柱	白漆柱	N62° E		▼ SK232	
SK237	3	1XJ06	28430	4		124	56	26	木彫柱	白漆柱	N40° E		△ SK236 不明 SK236	
SK238	3	1XJ06	28426	4		51	123	40	木彫彫	門扉柱	N48° E	延長部分	△ SK238・203	
SK239	3	1XJ06	28426	4		74	63	28	木彫門扉	サリ漆柱	0°		△ SK238・203	
SK240	3	1XJ06	28426	4		60	56	44	木彫彫刻					
SK241	3	1XJ06	28395	4		47	43	26	木彫門扉	白漆柱				
SK242	3	1XJ06	28420	4		89	47	30	木彫柱	白漆柱	N57° W			ST3
SK243	3	1XJ06	28390	3		65	45	18	木彫彫刻	サリ漆柱	N10° W		▼ SK200	
SK244	3	1XJ06	28444	4		14	14	11	門扉	サリ漆柱			▼ SK235	
SK245	3	1XJ06	28438	4		123	23	25	門扉	白漆柱			▼ SK244	
SK246	3	1XJ06	28442	4		33	27	60	木彫門扉	門扉柱	N12° E			
SK247	3	1XJ06	28420	3		48	32	15	木彫門扉	白漆柱	N20° W			白書=SK201と4
SK248														
SK249	3	1XJ06-L16	28430	3		191	71	26	木彫彫	白漆柱	N42° E		▼ SK235	
SK250	3	1XJ06	28413	3				5	門扉					
SK251	3	1XJ06	28406	3		54	19	25	木彫門扉	白漆柱	N37° W			
SK252	3	1XJ06	-	3				18	木彫彫					
SK253	3	1XJ06	28392	3		68	52	44	木彫柱	白漆柱	N27° E		▼ SK200	
SK254	3	1XJ06	28390	3				16	サリ漆柱					
SK255	3	1XJ06	28384	3		31	29	37	門扉	門扉柱			▼ SK200	
SK256														白書
SK257	3	1XJ06	28392	3		17	17	16	木彫門扉	サリ漆柱	N13° W		▼ SK200	
SK258														白書
SK259														白書
SK260														白書
SK261														白書
SK262														白書
SK263														白書
SK264														白書
SK265														白書
SK266	3	1XN06	28456	4		77	107	22	木彫柱	サリ漆柱	N42° W			
SK267	3	1XJ07-L107	28330	2		45		7	門扉					土器遺構
SK268	3	1XJ07-06	28365	2				13	木彫柱					土器遺構
SK269														白書
SK270	3	1XJ06	28403	3		36	30	12	木彫門扉	白漆柱	N68° E		▼ SK200	
SK271	3	1XJ06	28386	3		34	32	22	木彫門扉	白漆柱				
SK272	3	1XJ06		3		46	33		木彫彫刻		N30° W		△ SK235	
SK273	3	1XJ06-07, 106-07	28384	3		76	66	70	木彫彫刻		N36° W			
SK274	3	1XJ06-07	28365	3		191	30	48	門扉	白漆柱			▼ SK206	
SK275	3	1XJ06-05	28436	3		83	53	58	木彫柱	白漆柱	N31° W			ST5 白書
SK276														
SK277	3	1XJ06-05	28444	3				22	木彫柱					白書
SK278														
SK279	3	1XJ06	28460	4		89	70	29	木彫柱	白漆柱	S37° W			
SK280	3	1XJ06-05	28468	4		149	121	50	柱・門扉	白漆柱	N10° W			
SK281	3	1XJ06	28407	2		76	65	30	木彫彫刻	白漆柱	N48° E			
SK282	3	1XJ07	28333	4		38	33	30	門扉	白漆柱				
SK283	3	1XJ07	28356	4		23	19	28	木彫柱	白漆柱	N10° W			
SK284	3	1XJ06-07	28364	3		19	17	22	門扉	白漆柱				
SK285	3	1XJ06	28418	3		25	19		木彫彫刻	白漆柱	N10° E			不明 SK130
SK286	3	1XJ06	28431	3		50	40	55	木彫柱	白漆柱	S39° W		不明 SK130	
SK287	3	1XJ06	28427	3		25	20	15	木彫門扉	門扉柱	N50° E		不明 SK130	
SK288	3	1XJ06	28450	3		122	36		木彫門扉		N12° W			
SK289	3	1XJ06-05	28448	3		35	35		木彫柱					
SK290	3	1XJ06	28445	3	<57>	25	28	28	門扉	白漆柱	N04° E			
SK291	3	1XJ06	28440	4		35	28	11	木彫門扉	サリ漆柱	N48° E		△ SK208	
SK292	3	1XJ06	28444	4		30	25	12	木彫門扉	サリ漆柱	N12° W			
SK293	3	1XJ06	28434	4		74	<64>	34	木彫柱	サリ漆柱	N18° W		△ SK248・207	

付表 遺構一覧表

遺構 番号	位置		四角 FL	規模 (cm)			平面的形状	断面的形状	土層	埋没・特出遺物	取り合い	備考
	地区	アグリッド		標高 (m)	長	幅						
SR394	3	1XL06	293.97	4	28	24	16	不整形瓦	円筒状	RF1 Ⅱ		
SR395	3	1XL07	293.74	4	40	24	25	埴土器	字立鉢	S8F Ⅱ	▼SR395	
SR396	3	1XL06-07	293.93	4	96	66	62	埴土器	土師器	S3E Ⅱ	△SR396	
SR397	3	1XL07	293.57	4	36	30	34	不整形瓦	円筒状	N7F Ⅱ		
SR398	3	1XL08	293.46	4	32	21	26	平形瓦	平筒状			
SR399	3	1XL07	293.72	4	44	37	26	埴土器	クワイ鉢	S2F Ⅱ		
SR400	3	1XL06	294.00	4	59	32	84	埴土器	円筒状	S3E Ⅱ		
SR401	3	1XL06	293.92	4	31	21	22	平形瓦	円筒状	N6F Ⅱ		
SR402	3	1XL06-06, Q05-06	294.59	4	216	112	40	不整形瓦片方形	クワイ鉢	N6F Ⅱ	△SR402 ▼SR402	
SR403	3	1XL06	293.92	4	65	56	79	不整形瓦		N4 Ⅱ	△SR403	
SR404	3	1XL06-07	293.82	4	34	69	40	円筒瓦片方形	円筒状	N8 Ⅱ	小形 SR405	
SR405	3	1XL06-07	293.80	4	25	28	47	埴土器	円筒状	N6F Ⅱ	小形 SR404	
SR406	3	1XL07	293.55	4	<30>	26	10	埴土器	クワイ鉢	N6F Ⅱ		
SR407	3	1XL06-10	293.26	4	28	21	20	平形瓦片方形	円筒状	S9F Ⅱ		
SR408	3	1XL08	294.37	4	20	112	34	平形瓦	円筒状	S5F Ⅱ	▼SR408 △SR409	S429, 土ハコ
SR409												土室
SR410	3	1XL05-06	294.20	4	98	60	40	不整形瓦片方形	円筒状	N3F Ⅱ	▼SR410 S72	
SR411	3	1XL06-10	294.18	4・29	71	60	18	不整形瓦片方形	クワイ鉢	N4F Ⅱ	小石石溝	石溝埋土坑
SR412	3	1XL05-06	294.54	4	65	50	21	不整形瓦片	クワイ鉢	N3F Ⅱ	▼SR412	
SR413	3	1XL07	294.57	4	25	27	10		円筒状			S73
SR414	3	1XL06	294.38	4	30	28	11	不整形瓦片方形	クワイ鉢	N6F Ⅱ	小形 SR410	
SR415	3	1XL05	294.25	4	25	21	13	不整形瓦片	クワイ鉢	S5F Ⅱ		
SR416	3	1XL05-06	294.14	3	66	75	21	不整形瓦	クワイ鉢	N2F Ⅱ	▼SR416-122	SR368から発見 SR289から発見
SR417	3	1XL06	294.45	4	47	44	26	不整形瓦	クワイ鉢			SR368から発見
SR418	3	1XL06	294.27	4	26	22	12	不整形瓦	円筒状	N1 Ⅱ		SR440から発見 SR408 土ハコ
SR419	3	1XL06	294.18	4	54	32	25	不整形瓦片		N4F Ⅱ	▼SR419	SR408から発見 SR283 土ハコ
SR420	3	1XL08	294.30	4	60	63	30	平形瓦	クワイ鉢	N7F Ⅱ	▼SR420 △SR420	SR408から発見 土ハコ S430から発見 土ハコ →SR299と併用
SR421												

●番号については、埋没時の地高値をあらわした。埋没の深さ、(赤) (土として発見) の場合である。

●尺貫法において、埋没時は「1」の単位は必ず「>」を付した。

●埋没部については、△はその遺構を知る、▼はその遺構に知られる。

## 4 遺跡 (SD)

遺跡 番号	位置		四角 FL	規模 (cm)			平面的形状	土層	遺物	取り合い	備考
	地区	グリッド		標高 (m)	長	幅					
SD1	2b-1	1YF06-07	294.08	6	204	11-15	15		N, S Ⅱ	△SD12	

## 5 配石遺構、基跡 (SH)

発見 番号	位置	位置		間隔	FL	規模 (cm)			平面形状	方向	時期・付随遺物	埋り合い	備考
		グリッド	標高 (m)			長	幅	深さ					
SH1	2b-1												欠番→SH1に変更
SH2	2b-1	1X106	284.28	b+2a	19	128	85			N60° W	1ニイムアト古	△ SH5、 SK26・27	欠番→SH10に訂正 か
SH3	2b-1												欠番→SH10に訂正 か
SH4	2b-1												欠番→SH20に変更
SH5	2b-1												欠番→SH10に変更
SH6	2b-1												欠番→SH20に変更
SH7	2b-1												欠番→SH10に変更
SH8	2b-1	1YF07-08	284.15	6+23		139	125			N2° E		△ SH12、SD1	
SH9	2a	1YK01-05、L01-05	284.75	7+23	22	173	125			N22° E	堀の内2穴跡、 井口1層	△ SH16	
SH10	2b-1	1XT07-08、 YA07-08	284.11	5	19	600	162			N6° W		△ SH10・15	
SH11	2a												欠番→SH20に変更
SH12	2a												欠番→SH20に変更
SH13	3	1XG06	282.98	3+23	19	上階部分: (100)	1階部分: 72	厚さ: 40	楕円形	N14° W	堀の内2穴跡、 井口1層		穴跡、遺物 埋まり確認
SH14	3	1XQ06、R06	284.28	c+26	19	82	66	22		N13° W	SH10跡(9、10)跡1層	△ SH3・30	欠番か
SH15	3	1XQ06-97、 R06-07	284.15	4		186	85			N17° W		△ SH3・7・32	

●規模において、括弧内は( )、赤字は&lt;&gt;を付した

●埋り合いにおいて、△はその遺構を切る、▼はその遺構に埋られる

付表 遺構一覧表

## 6 遺物集( SQ)

遺構 番号	地区	位置		図版	PL	規模 (cm)			平面形状	土構	時期・層記遺物	備考
		グリッド	標高 (m)			長軸	短軸	深さ				
SQ1	2b-1	I XR07_S07	283.38	5		146	99		不整楕円形		堀之内2式	
SQ2	2a	II UA06	285.50	8		44	37		不整形		加曽利B式	
SQ3	2b-1	I XS05_06	285.85	5	20	167	40		不整形		沖ノ原B式	
SQ4	2b-1	I XR07_S07	285.29	5		112	84		不整楕丸長方形		堀之内2式?、ミニ チュア土器	
SQ5	2b-1	I YR01-05	284.71	7		81	48		不整形		堀之内2式	
SQ6	2a	I YL06	284.44	7	25						堀之内2式、無文土器	
SQ7	2a	I YL05-06、 M05-06	284.96	7	20	175	58		不整楕円形		堀之内1式	
SQ8	2a	II UD06-07	284.01	8							縄文後期前葉?	
SQ9	2b-1	I YA07_B07	284.15	5	20				不整形		堀之内2式新	
SQ10	2b-1	I YG06	284.28	6		47	35		不整形		堀之内2式	
SQ11	2b-1	I Y107	284.04	6	20	72	70		不整楕丸方形		堀之内2式、無文土器	
SQ12	3	I XR03	284.60	4	20	45	27		不整楕円形		縄文後期前葉、 トチノキ・オクリ種実	
SQ13	3	I XR03_L05	284.59	4	20	44	36		不整円形		堀之内2式前、 トチノキ・オニダ ルミ・ササゲ属種実、イ ノシシ?	
SQ14	3	I XR06_L06	284.46	4		94	76		不整円形		堀之内2式新	
SQ15	3	I XR06_L06	284.35	4		104	103		不整円形		堀之内2式新	
SQ16	3	I XN06-07、 O06-07	284.20	4	20	173	138		不整形		堀之内2式、軒白粘土	
SQ17	3	I XM05-07、 N06	284.43	4		246	194		不整形		堀之内2式新、土器	
SQ18	3	I XP06	284.18	4	26	20	73	46			加曽利E2式	下壁したり跡
SQ19	3	I XR07	283.88	2		72	62		不整円形		堀之内2式	
SQ20	3	I XD05	284.24	3							縄文後期前葉、骨片	
SQ21	3	I XD06	284.21	3							縄文後期前葉?、骨 片	
SQ22	3	I XD06	284.09	3							縄文後期前葉?、骨 片	
SQ23	3	I XD06	283.96	3							縄文後期前葉?、骨 片	
SQ24	3	I XC06	284.21	2							縄文後期前葉?、骨 片	
SQ25	3	I XJ04-05	284.65	3		長 31 幅 25	奥18 幅 22		不整円形 不整楕円形		堀之内2式?、 炭化物、骨片	
SQ26	3	I XM06	284.45	4		37	24		不整楕円形		堀之内2式新、骨片	
SQ27	3	I XM07-08		4		72	70		不整円形		堀之内2式新	
SQ28	3	I XP07	283.44	3		78	66		不整楕丸方形		後期初葉	
SQ29	3	I XP08_G08	283.41	3		109	45		不整形		堀之内2式新	
SQ30	3	I XH08	283.39	3		(36)	46		不整楕丸長方形		堀之内2式新	
SQ31	3	I XD08_J08	283.30	3		81	(26)		不整楕円形		堀之内2式	
SQ32	3	I XM07	283.91	4		51	37		不整楕丸長方形		粘土状	
SQ33	3	I XJ07	283.71	2	21	84	47		不整形		縄文中期中華	
SQ34	3	I XB07	283.40	2	21	86	53		不整楕丸長方形		縄文中期中・後葉	
SQ35	3	I XA07_D07	283.42	2		136	72		不整形		縄文中期中葉	

●規模において、残存値は<、消失値は<->を付した

## 7 焼土・炭化物集中 (SF)

遺構 番号	位置			間隔	PL	規模 (cm)			平面形状	土軸	時期・特記遺物	備考
	地区	グリッド	標高 (m)			長軸	短軸	深さ				
SF1	2b-1	I YF06	284.38	6		89	71	-	小竪楕円形			欠番、SF12形態圏
SF2	2b-1	I XS06-06、T05-06	285.80	5	21	131	57	26	楕円形	堀之内2式		SF8の内 欠番→SF5に室更 SF3→SF6の炭化 物範囲
SF3	2b-1											
SF4	2a	I YK06	284.52	7		117	60		小竪形	堀之内2式		
SF5	2a	I YL06-07、M06-07	284.30	7		104	56		小竪楕円形	堀之内2式新		
SF6												欠番、SF12の埋土
SF7	2a											欠番
SF8	3	I XJ04-05、K04-06	283.57	3		(128)	170		不整形丸長方形			
SF9	3	I XL01-05	283.64	4		(106)	(150)		小竪楕円形			
SF10	3	I XH05-06	284.39	3		94	44		小竪形	縄文後期前葉		
SF11	3	I XH06、J06	284.36	3		(81)	(80)		楕円形	縄文後期前葉		
SF12	3	I XH06	284.32	3		54	52		円形	縄文後期前葉		
SF13	3	I XE06	284.12	3		40	16		小竪形	縄文後期前葉		
SF14	3	I XE06	283.95	3		71	33		小竪形	縄文後期前葉		
SF15	3	I XE05-06	284.55	4		35	41		楕円形			
SF16	3	I XE05-06、L05-06	284.53	4		66	53		小竪円形			
SF17	3	I YL06	284.53	4		59	39		楕丸長方形			
SF18	3	I XJ06-07	284.62	3		86	70		小竪楕円形	縄文後期前葉		
SF19	3	I XH07	284.00	3		61	40		小竪楕円形	縄文後期前葉		
SF20	3	I XH06-07	284.03	3		61	47		小竪楕円形			
SF21	3	I XH07	283.91	3		64	52		小竪円形			トチノキ・クリ・ササ ゲ属燻炭
SF22	3	I XJ07	283.78	3		101	60		不整形			
SF23	3	I XJ07	284.12	3	21	105	61		不整形	堀之内2式		
SF24	3	I XJ07	283.86	3		53	49		不整形			
SF25	3	I XJ07	283.83	3	21	(139)	91		不整形楕円形?			
SF26	3	I XJ07-08、J07-08	283.66	3	21	173	84		不整形			
SF27	3	I XJ05	284.71	4	21	71	35		小竪形	堀之内2式?		
SF28	3	I XJ05	284.45	3		52	40		小竪円形			
SF29	3	I XG07-08、H07-08、I07-08	283.56	3	21	(332)	116		小竪形			縄文後期前葉、トチ ノキ・オニグルミ・ク リ燻炭
SF30	3	I XJ08	283.60	3		92	(68)		楕円形			トチノキ・オニグル ミ・ササゲ属燻炭
SF31	3	I XJ07	284.01	3		38	23		小竪楕円形			
SF32	3	I XJ05-06	284.41	3		58	52		不整形丸長方形	縄文後期前葉		
SF33	3	I XF08	283.24	3	21	107	(54)		小竪形			トチノキ・オニグル ミ・クリ燻炭
SF34	3	I XL06	284.09	4		76	49		楕円形			
SF35	3	I XJ07	283.78	3		54	49		不整形			
SF36	3	I XJ07	283.72	3		84	45		不整形楕円形			

\*規模において、残存は&lt;、推定は&lt;&gt;を付した

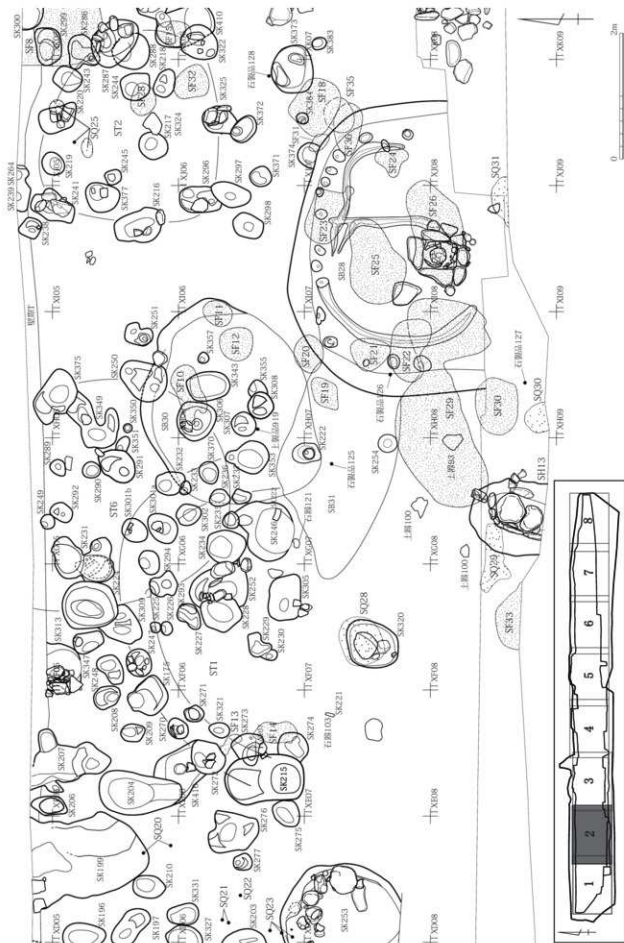






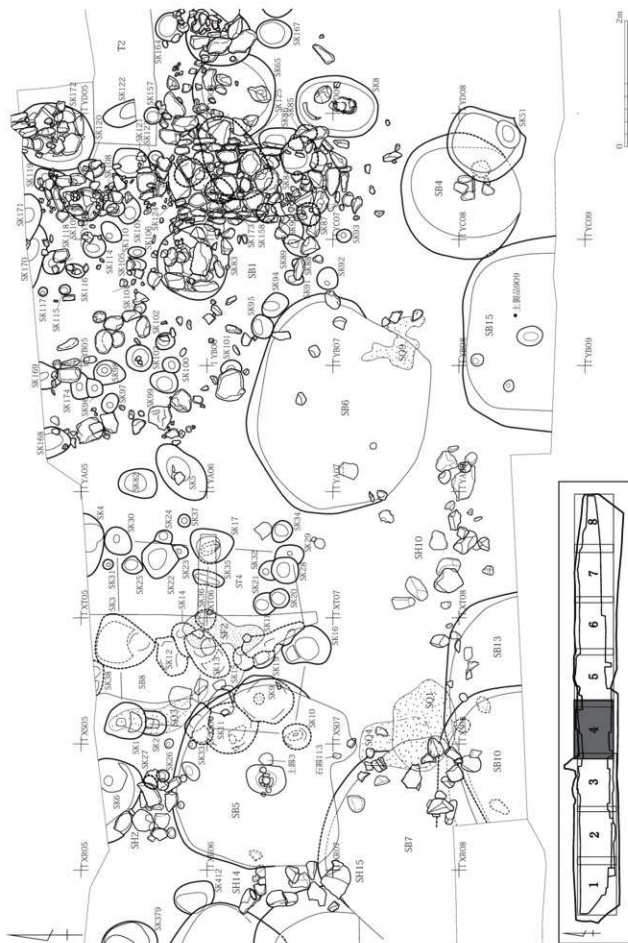


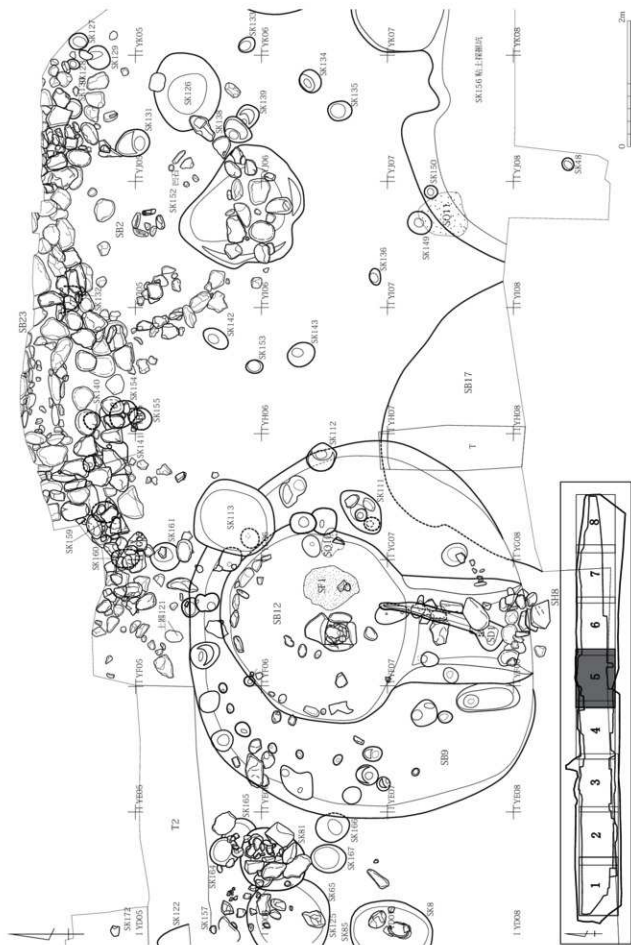
図版3 遺構剖付図2 (IXD05~IXJ05)



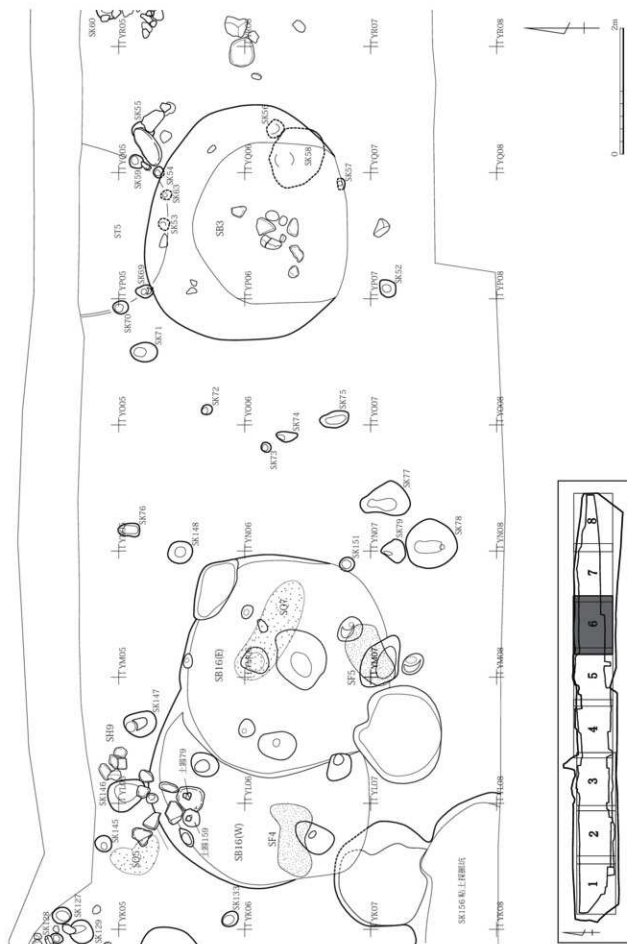


図版5 遺構剖切図4 (IXR 05~IYD 05)

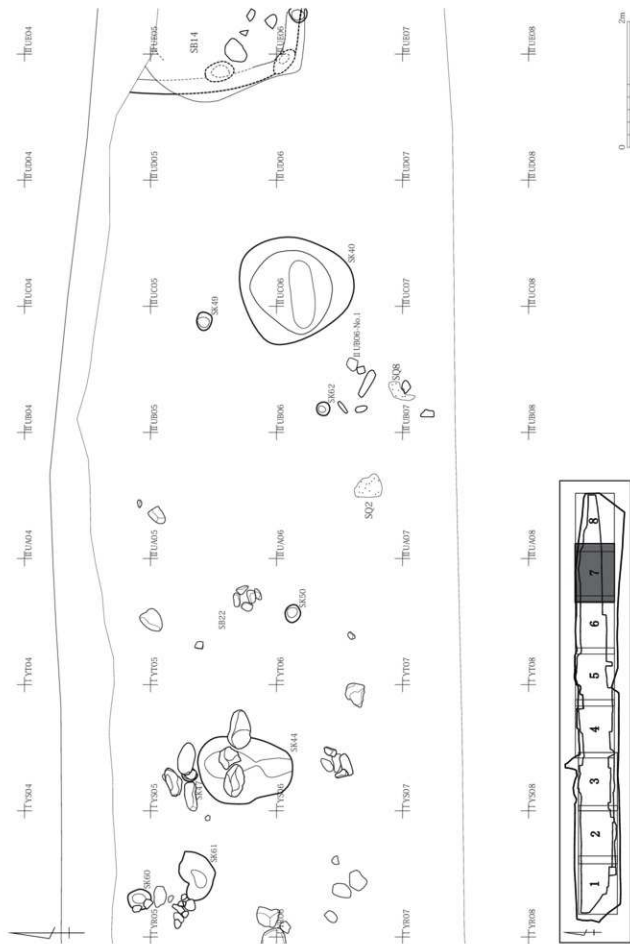




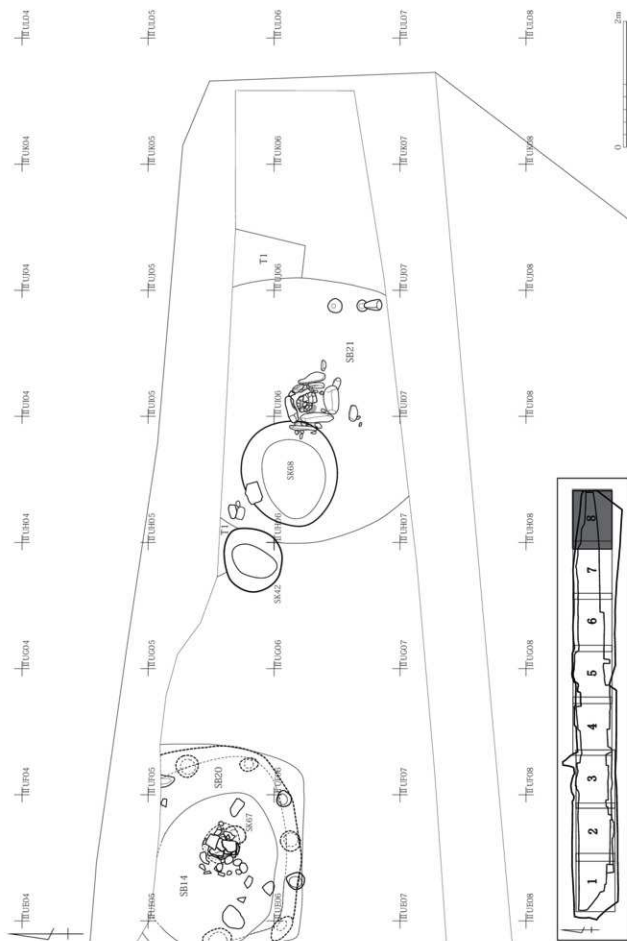
図版7 遺構剖付図6 (IYK 05~IYR 05)

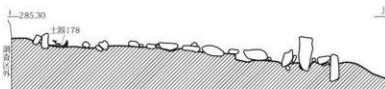
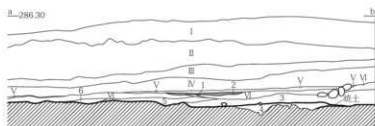
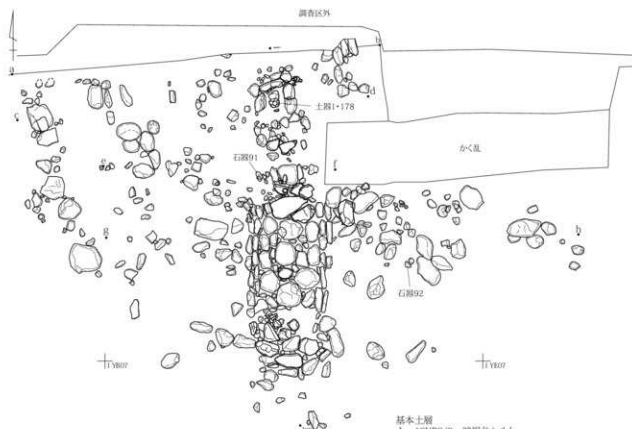






図版9 遺構剖付図8 (ⅡUE 05～ⅡUK 05)





## 基本土層

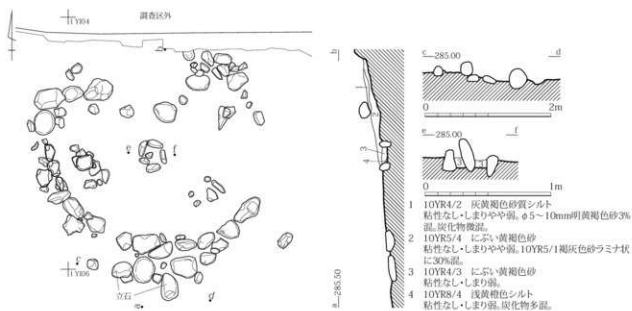
- I 10YR3/3 暗褐色シルト  
しまり強。II層ブロック5%混。耕作土。
- II 10YR6/6 明黄褐色シルト  
粘性ややあり・しまりあり。
- III 10YR6/2 灰黄褐色細砂ブロック混。  
10YR6/4 にふい黄褐色粘土  
粘性・しまりあり。II層やや多混。鉄斑5%混。
- IV 7.5YR6/4 にふい褐色シルト  
粘性弱・しまり強。φ5~100mm角礫20%混。
- V 10YR7/4 にふい黄褐色砂  
粘性なし・しまり強。
- VI 10YR4/3 にふい黄褐色砂  
粘性なし・しまり弱。φ1mm炭化物粒子微混。

- 1 7.5YR6/4 にふい褐色シルト  
粘性弱・しまり強。7.5YR3/3暗褐色砂混。
- 2 7.5YR3/3 暗褐色砂  
粘性ややあり・しまり弱。
- 3 7.5YR5/6明褐色焼土5%混。炭少混。
- 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
粘性・しまりあり。  
砂30%・10YR6/4にふい黄褐色ブロック5%・炭3%混。
- 5 10YR5/2 灰黄褐色砂  
φ3mm 10YR7/6黄褐色砂粒ブロック・炭化物微混。
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂  
粘性・しまりあり。φ3mm炭化物粒子微混。
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂  
粘性・しまりあり。
- 8 10YR4/3にふい黄褐色砂ブロック多混。

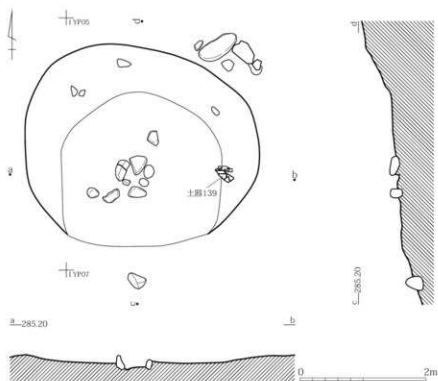
0 2m

SB1

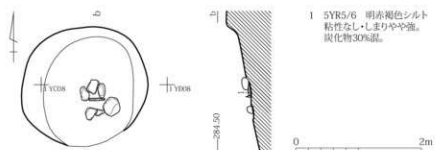
図版 11 SB2 敷石住居跡、SB3・4 竪穴建物跡



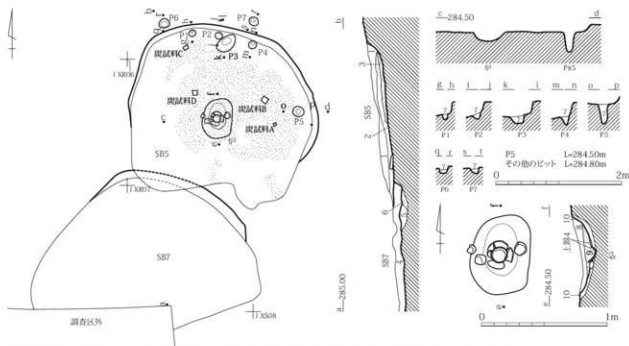
SB2



SB3

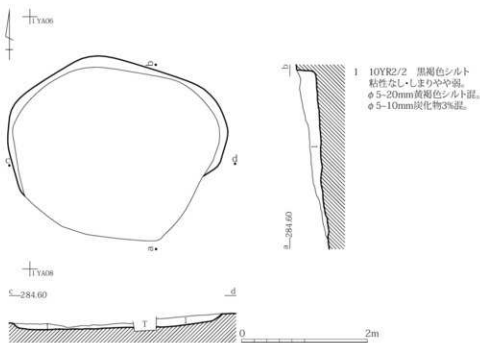


SB4



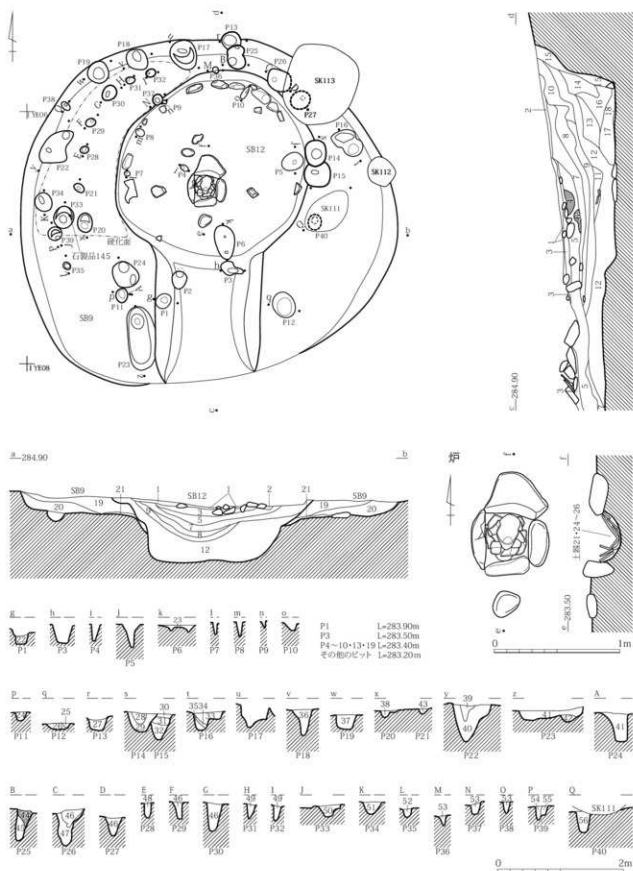
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 10mm 10YR6/4 にふい・黄褐色(粘性・しまりなし)ブロック・φ 10mm 炭1%混。
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 10mm 炭3%・φ 3mm 10YR6/4 にふい・黄褐色(粘性・しまりなし)ブロック1%混。
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 10mm 10YR6/4 にふい・黄褐色(粘性・しまりなし)ブロック20%・φ 20mm 炭10%混。
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 5mm 炭2%・φ 10mm 10YR6/4 にふい・黄褐色(粘性・しまりなし)ブロック1%混。
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 20mm 10YR6/4 にふい・黄褐色(粘性・しまりなし)ブロック5%混。
- 6 10YR6/4 黒褐色シルト にふい・黄褐色砂 粘性・しまりなし。φ 30mm 10YR2/2 黒褐色シルト(粘性・しまりなし)ブロック30%混。
- 7 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 5mm 10YR5/4 にふい・黄褐色砂(粘性・しまりなし)7%混。
- 8 10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性・しまりなし。φ 10mm 以下炭10%・φ 5mm 焼土1%混。
- 9 炭層。
- 10 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし。φ 10mm 5YR4/6 赤褐色シルト(粘性なし・しまりあり)ブロック25%・φ 5mm 炭10%・φ 5mm 10YR5/4 にふい・黄褐色砂(粘性・しまりなし)5%混。

## SB5・SB7



- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし・しまりやや弱。φ 5-20mm 黄褐色シルト混。φ 5-10mm 炭化物3%混。

図版 13 SB9 竪穴建物跡、SB12 敷石住居跡 (1)

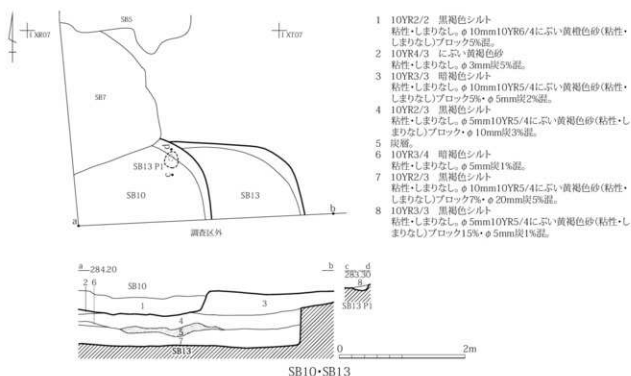
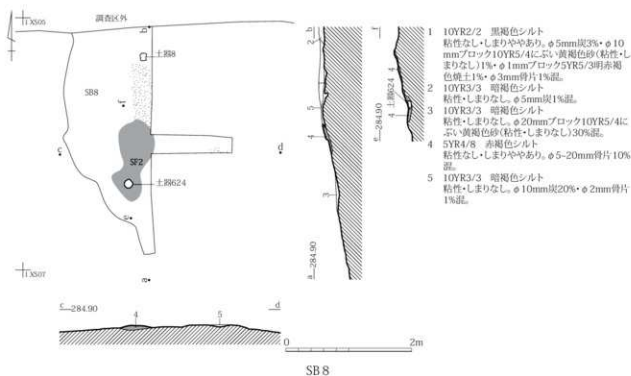


## SB12

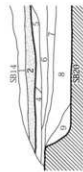
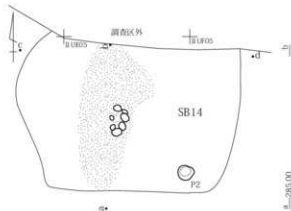
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。炭化物5%・焼土1%混。
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック5%混。
  - 3 10YR2/1 黒色シルト  
粘性ややあり・しまりやや弱。炭化物50%・焼土1%混。
  - 4 5YR5/6 明赤褐色シルト  
粘性なし・しまり強。焼土混。
  - 5 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。炭化物5%混。
  - 6 2.5YR8/6 黄色粘土  
粘性あり・しまり強。
  - 7 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。炭化物50%・焼土5%混。
  - 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト  
粘性ややあり・しまりやや強。炭化物1%混。
  - 9 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。炭化物40%・焼土2%混。
  - 10 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性ややあり・しまりやや強。φ30mm 10YR4/1褐灰色シルトブロック・φ5mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック微混。
  - 11 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR6/6明黄褐色シルトブロック5%混。
  - 12 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR6/6明黄褐色シルトブロック50%・炭化物1%混。
  - 13 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性ややあり・しまりやや強。φ20-30mm 10YR3/1黒褐色シルトブロック30%・φ5mm 10YR8/2灰白色シルトブロック1%混。
  - 14 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック3%混。
  - 15 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック30%混。
  - 16 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ40-50mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック40%混。
  - 17 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性ややあり・しまりやや強。φ10-20mm 10YR4/1褐灰色シルトブロック30%・φ10-20mm 10YR3/1黒褐色シルトブロック5%・φ5mm 10YR8/2灰白色シルトブロック2%混。
  - 18 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。
- SB9
- 19 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック10%・炭化物5%混。
  - 20 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 以下10YR7/6明黄褐色シルトブロック10%・炭化物1%混。
  - 21 10YR2/1 黒色シルト  
粘性なし・しまりやや強。
- Pr
- 22 10YR4/1 褐灰色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色粘土ブロック10%混。
  - 23 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5-10mm 10YR8/6浅黄褐色粘土ブロック15%混。
  - 24 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック5%混。
  - 25 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5-10mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック30%混。
  - 26 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック1%混。

- 27 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック20%混。
- 28 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。炭化物微混。
- 29 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック30%混。
- 30 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック10%混。
- 31 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック5%混。
- 32 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまり強。10YR3/1黒褐色シルト(粘性なし・しまり弱)50%混。
- 33 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5-10mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック2%混。
- 34 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。
- 35 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。
- 36 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ10-15mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック5%混。
- 37 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。10YR7/6明黄褐色砂(粘性なし・しまり弱)20%混。
- 38 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや弱。炭化物混。φ10-15mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック微混。
- 39 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ10-15mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック15%混。
- 40 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ10-15mm 10YR7/4に赤・黄褐色粘土ブロック20%混。
- 41 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5-10mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック20%混。
- 42 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。10YR4/2灰黄褐色シルト40%混。
- 43 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや弱。10YR7/6明黄褐色シルト(粘性なし・しまり弱)20%混。
- 44 10YR7/6 明黄褐色粘土  
粘性あり・しまりやや強。φ10-15mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック20%混。
- 45 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック5%混。
- 46 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。10YR7/6明黄褐色シルト(粘性なし・しまりやや弱)40%混。
- 47 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5-10mm 10YR3/2黒褐色シルトブロック3%混。
- 48 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。
- 49 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまり強。
- 50 10YR3/2 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。φ5mm 10YR7/6明黄褐色シルトブロック3%混。
- 51 10YR7/6 明黄褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。10YR3/2黒褐色シルト(粘性なし・しまり弱)20%混。
- 52 10YR4/1 褐灰色シルト  
粘性なし・しまり強。10YR7/6明黄褐色シルト(粘性なし・しまり弱)40%混。
- 53 10YR3/2 黒褐色砂  
粘性・しまりあり。10YR7/6黄褐色砂ブロック混。φ1-2mm炭化物粒混。
- 54 10YR5/6 黄褐色砂  
粘性・しまり強。10YR5/2黒褐色砂混。φ1mm炭化物粒・φ2mm 10YR5/1灰褐色粒少混。
- 55 10YR5/6 黄褐色砂  
粘性・しまり強。10YR3/2黒褐色砂少混。
- 56 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりやや強。10YR7/6明黄褐色シルト50%混。

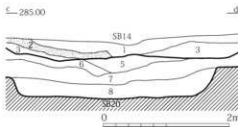
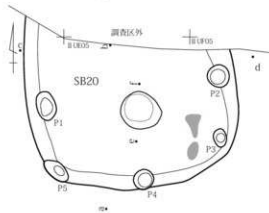
図版 15 SB 8・10・13 竪穴建物跡







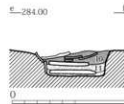
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
粘性・しまりあり。φ10mm炭化物粒多混。
- 2 10YR2/1 黒色炭化物層
- 3 10YR4/4 褐色シルト  
粘性弱・しまりあり。
- 4 10YR3/1 黒褐色砂  
粘性弱・しまりあり。
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト  
粘性・しまりあり。φ30-50mm10YR2/1黒色シルトブロック混。
- 6 10YR3/1 黒褐色砂  
粘性なし・しまりあり。
- 7 10YR4/1 褐灰色砂  
粘性なし・しまりあり。
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂  
粘性なし・しまりあり。
- 9 10YR5/2 灰黄褐色砂  
粘性なし・しまりあり。
- 10 炭化物・焼土層
- 11 炭化物層  
焼土混。
- 12 灰層  
φ20mm炭化物20%混。



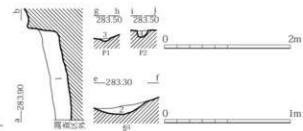
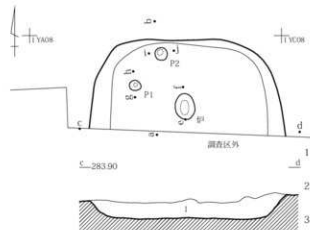
炉 上面(土器)



炉 下面(礫)

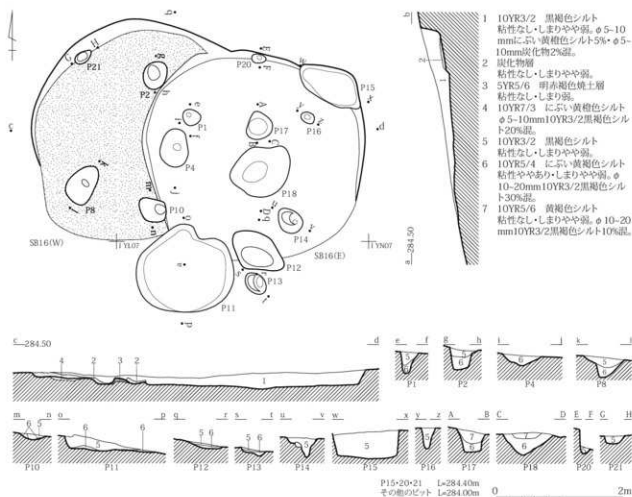


SB14・SB20

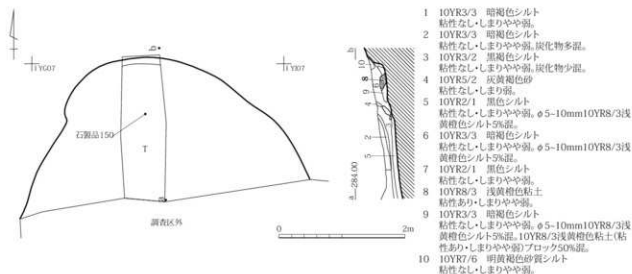


- 1 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性・しまりなし。φ5mm炭5%・φ10mm10YR5/4にぶい黄褐色砂(粘性・しまりなし)3%混。
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性・しまりなし。φ15mm10YR5/4にぶい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック10%・φ3mm炭2%・φ10mm焼土ブロック1%混。
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性・しまりなし。φ10mm10YR5/4にぶい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック7%・φ5mm炭1%混。
- 4 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性・しまりなし。φ5mm10YR5/4にぶい黄褐色砂(粘性・しまりなし)・φ5mm炭1%混。

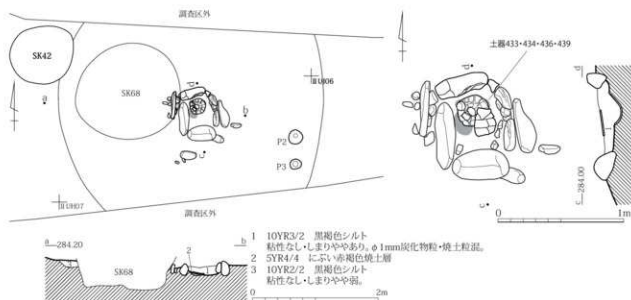
SB15



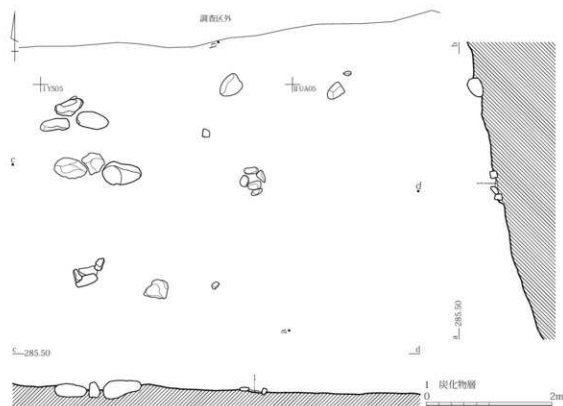
SB16



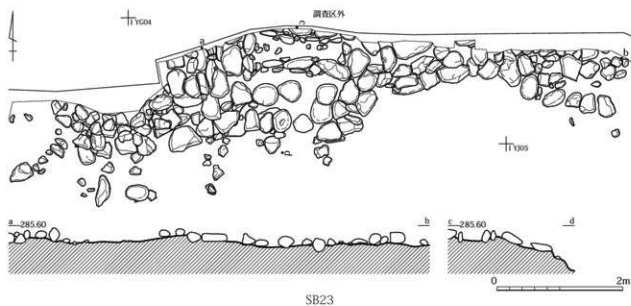
SB17



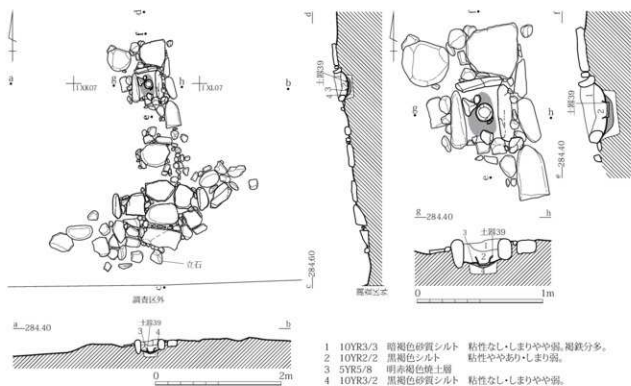
SB21



SB22

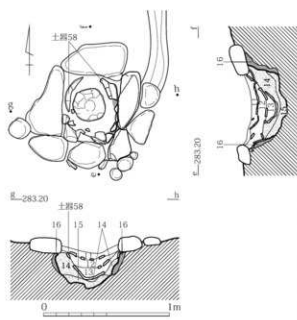
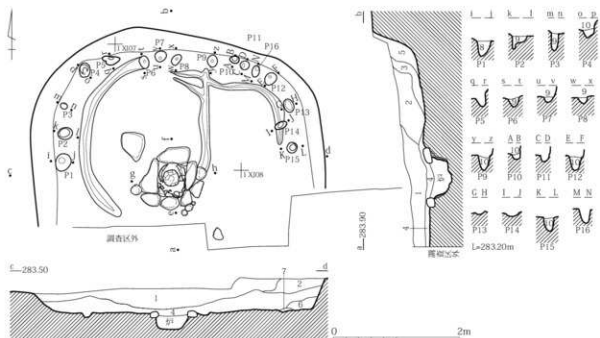


SB23



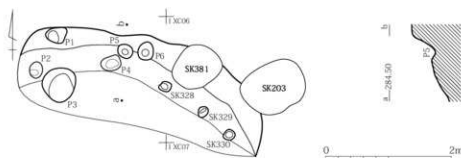
SB24



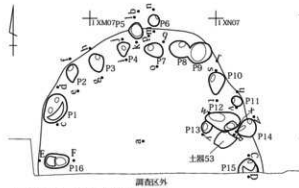


- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。φ 1-20mm 10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト 30%混。
- 3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。φ 1-10mm 10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト 5%混。
- 4 10YR2/1 黒色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。φ 5-20mm 炭化物 20%混。
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。
- 6 10YR3/2 黒褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト微混。
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。φ 10-20mm 10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト 20%混。
- 8 10YR3/1 黒褐色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。φ 5-20mm 10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト 30%混。
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。
- 11 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまり弱。
- 12 10YR3/1 黒褐色砂質シルト  
粘性ややあり・しまりなし。炭多混。
- 13 10YR2/1 黒色砂質シルト  
粘性ややあり・しまりなし。炭多混。
- 14 7.5YR7/6 褐色灰層  
しまり弱。シルト質。焼土 10%・骨片 5%混。
- 15 10YR1.7/1 黒色炭層破
- 16 5YR4/6 赤褐色焼土層

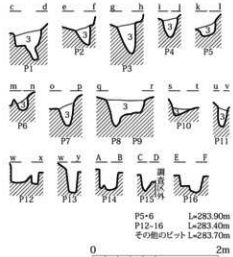
SB28



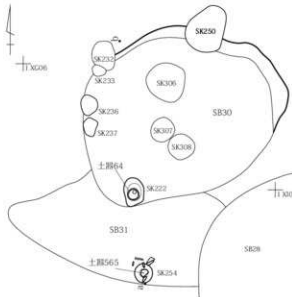
SB29



- 1 10YR4/3 にふい、黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱、 $\phi$ 5-10mm炭化物2%混。
- 2 10YR4/3 にふい、黄褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱、上面厚さ10mm 10YR7/4にふい、黄褐色シルト。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
 $\phi$ 5-30mm 10YR8/4 浅黄褐色砂質シルト30%混。



SB27



- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト  
粘性強・しまりややあり、 $\phi$ 10mm炭3%混。
- 2 7.5Y4/3 褐色シルト  
粘性・しまりややあり、2.5Y3/2黒褐色砂質シルト(粘性弱・しまりややあり)・ $\phi$ 15mm黄褐色粘土ブロック・ $\phi$ 20mm 焼土ブロック混。
- 3 2.5Y3/2 黒褐色シルト  
粘性あり・しまり弱、炭化物粒少混。

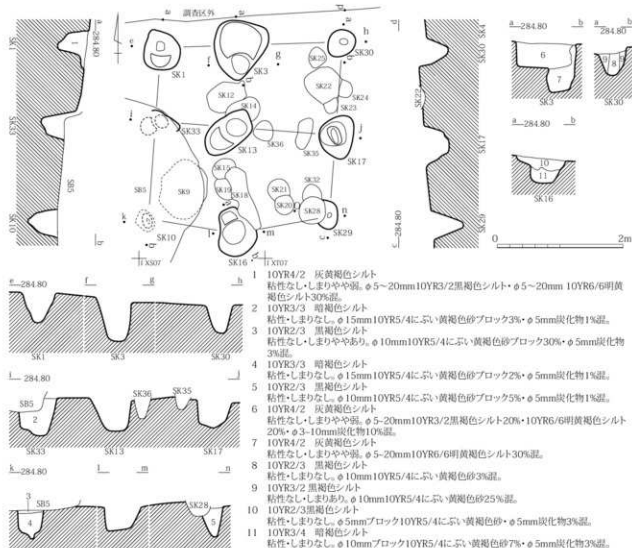
SB30・SB31



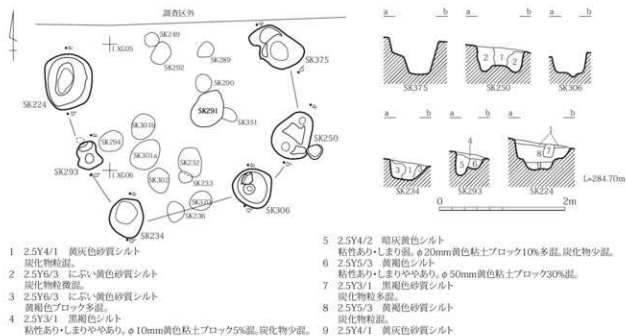
SB32





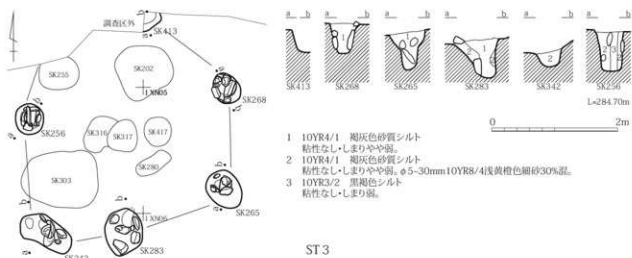


ST4

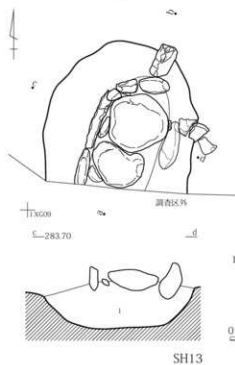


ST6

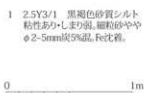
図版 25 ST 3 掘立柱建物跡、SH13 墓跡、SH9・2・8 配石遺構、SQ 6 遺物集中



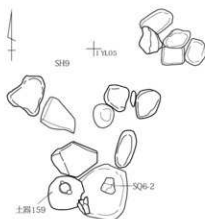
ST 3



SH13

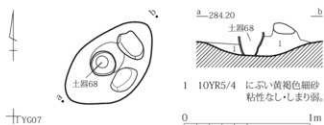


SH 2

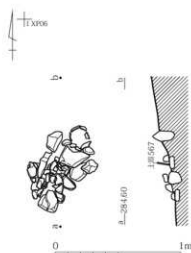


SH8 (SB12-B)

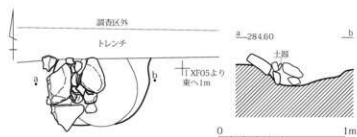
SH9, SQ6



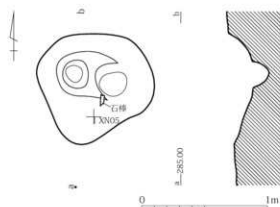
SK111



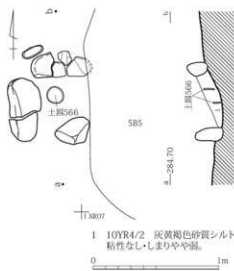
SQ18



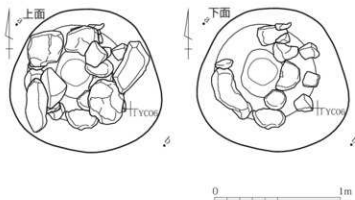
SK313



SK202



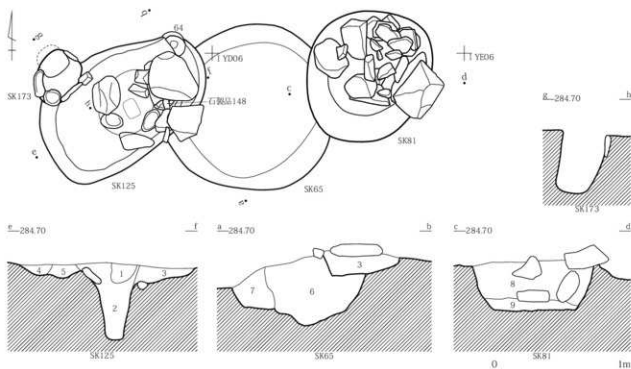
SH14



SK83

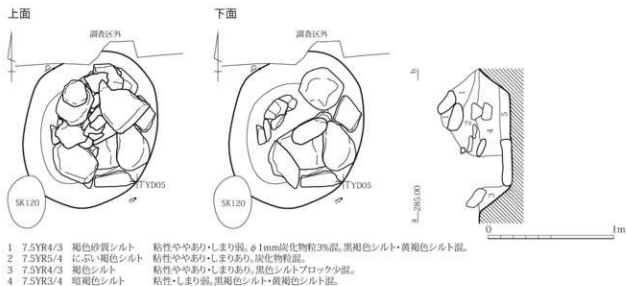


1 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりなし。  
2 10YR2/3 黒褐色シルト  
粘性なし・しまりややあり。φ5mm炭3%・φ5mm10YR  
5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック2%混。



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 10YR3/4 暗褐色粗砂<br/>粘性なし・しまりややあり。</p> <p>2 10YR2/2 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ20mm10YR5/2灰黄褐色シルト(粘性・しまりなし)ブロック5%・φ10mm炭2%・φ5mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック1%混。</p> <p>3 10YR2/2 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ20mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック20%・φ5mm炭1%混。</p> <p>4 10YR2/2 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ10mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック10%混。</p> <p>5 10YR2/3 黒褐色砂<br/>粘性・しまりなし。φ20mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック10%混。</p> | <p>6 10YR2/3 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ10mm炭15%・φ20mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック10%混。</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ5mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック3%・φ15mm炭1%混。</p> <p>8 10YR2/3 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ20mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック15%・φ10mm炭7%混。</p> <p>9 10YR3/2 黒褐色シルト<br/>粘性・しまりなし。φ20mm10YR5/4にふい黄褐色砂(粘性・しまりなし)ブロック25%混。</p> |
|---|---|

SK65・SK81・SK125・SK173

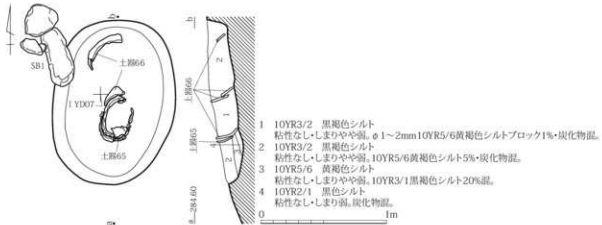


- |   |   |
|---|---|
| <p>1 7.5YR4/3 褐色砂質シルト<br/>にふい褐色シルト</p> <p>2 7.5YR5/4 褐色シルト</p> <p>3 7.5YR4/3 褐色シルト</p> <p>4 7.5YR3/4 暗褐色シルト</p> | <p>粘性ややあり・しまり弱。φ1mm炭化物粒3%混。黒褐色シルト・黄褐色シルト混。</p> <p>粘性ややあり・しまりあり。炭化物粒混。</p> <p>粘性ややあり・しまりあり。黒色シルトブロック少混。</p> <p>粘性・しまり弱。黒褐色シルト・黄褐色シルト混。</p> |
|---|---|

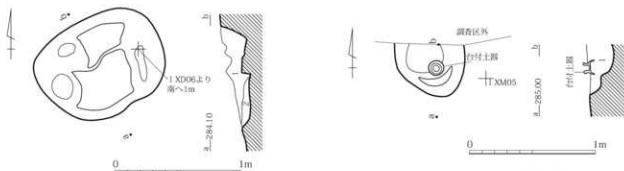
SK172



SK109

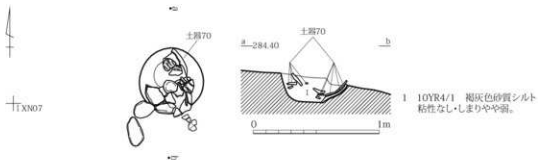


SK 8

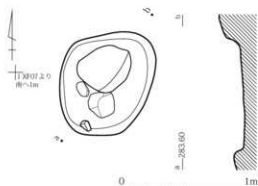


SK203

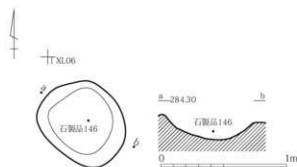
SK205



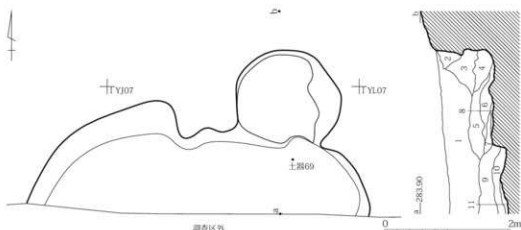
SK279



SK320



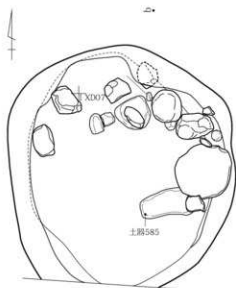
SK411



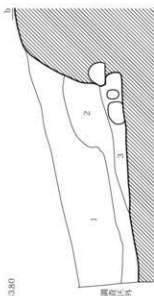
SK156

- 1 10YR2/2 黒褐色砂質シルト  
φ5-10mm炭化物粒多混。
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト  
粘性ややあり。
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト  
粘性ややあり。10YR3/3暗褐色砂質シルト・炭化物混。
- 4 10YR5/6 黄褐色シルト  
粘性ややあり。
- 5 10YR2/3 黒褐色砂質シルト  
炭化物混。黄褐色シルトブロック微混。

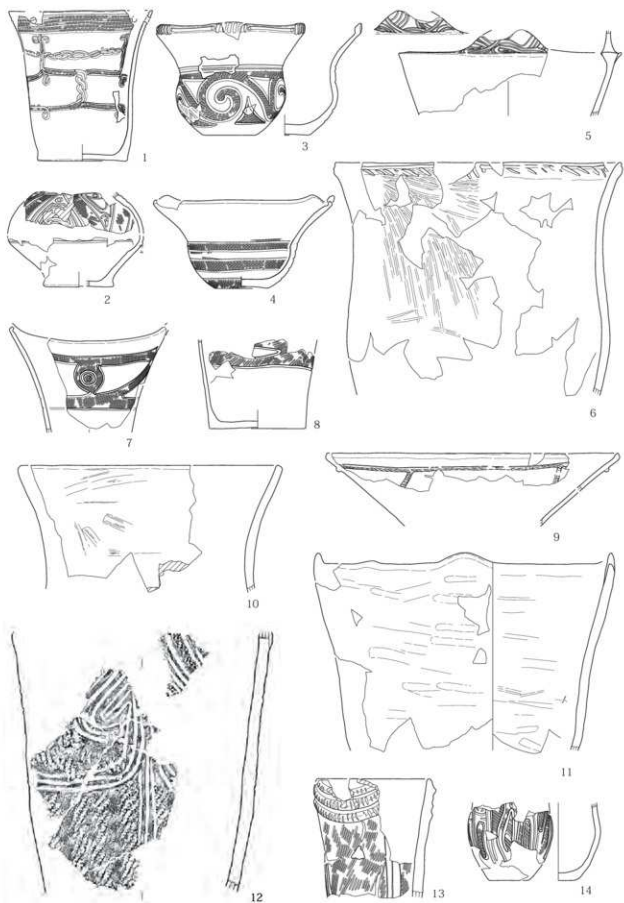
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト  
粘性ややあり。10YR3/3暗褐色シルト混。
- 7 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
- 8 10YR4/4 褐色粘土  
暗褐色シルト微混。
- 9 10YR3/2 黒褐色砂質シルト  
黄褐色シルト多混。炭化物混。
- 10 10YR2/2 黒褐色砂質シルト  
炭化物混。黄褐色シルト微混。
- 11 10YR4/4 褐色シルト  
10YR3/2暗褐色シルト混。



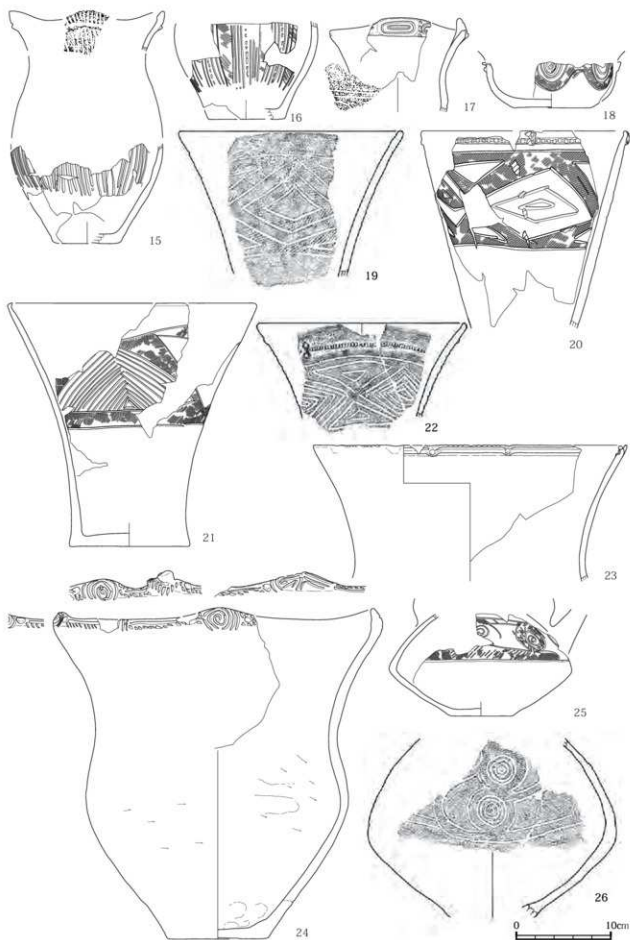
SK253



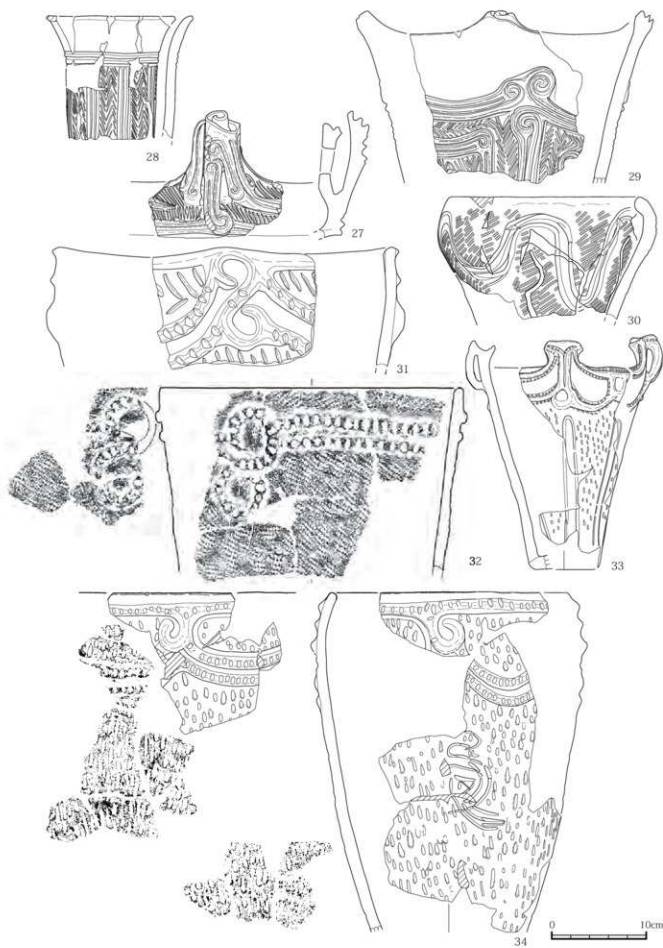
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。φ5-20mm10YR7/4にぶ  
い黄褐色細砂3%・φ5-10mm炭化物2%混。
- 2 10YR4/4 褐色砂質シルト  
粘性なし・しまりやや弱。φ5-20mm10YR7/4にぶ  
い黄褐色細砂20%・φ5-10mm炭化物7%混。
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト  
粘性ややあり・しまり弱。φ5-20mm10YR7/4にぶ  
い黄褐色細砂30%混。

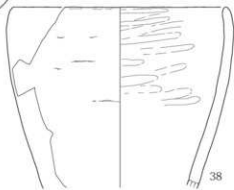
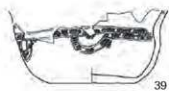
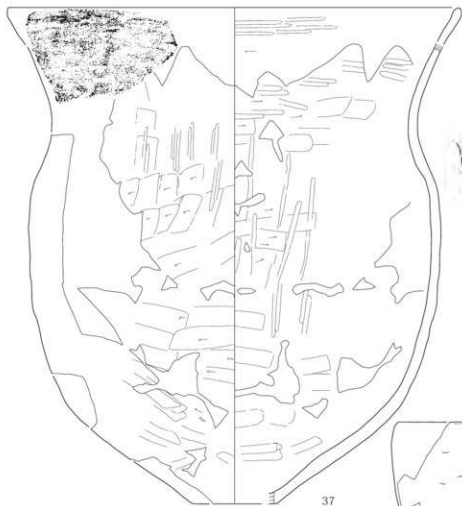
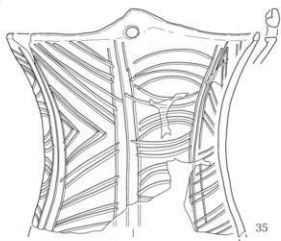
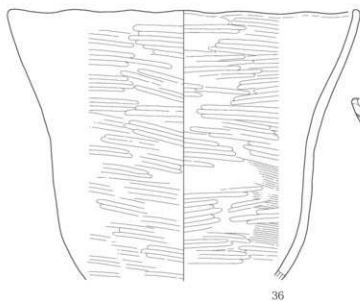


SB1 : 1・2、SB5 : 3・4、SB6 : 5・6、SB7 : 7、SB8 : 8、SB9 : 9~13、SB10 : 14

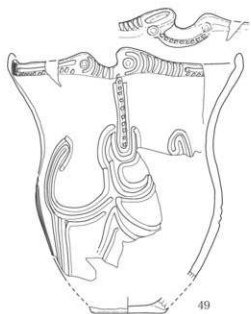
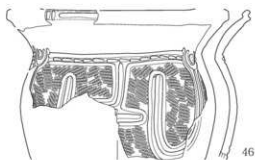
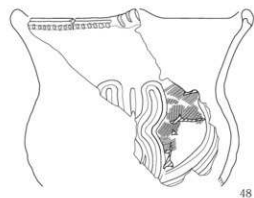
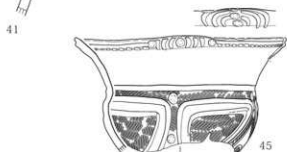
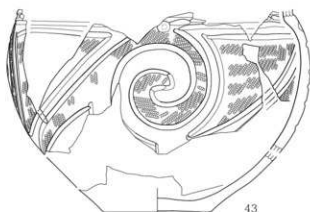
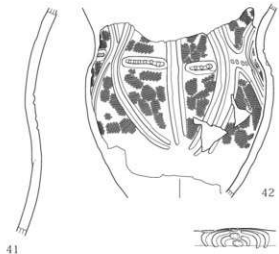
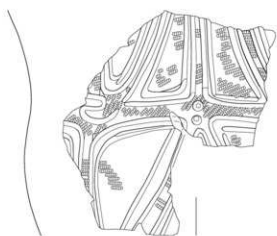


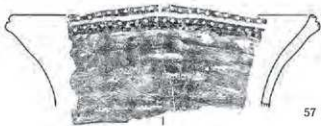
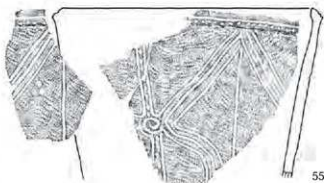
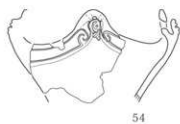
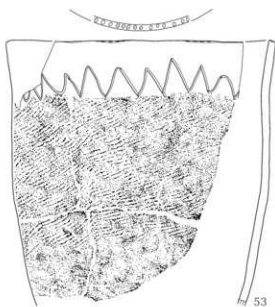
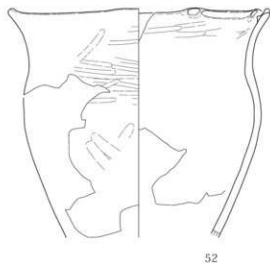
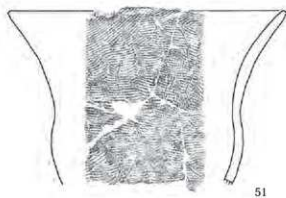
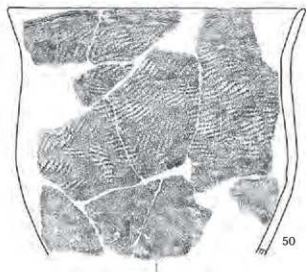


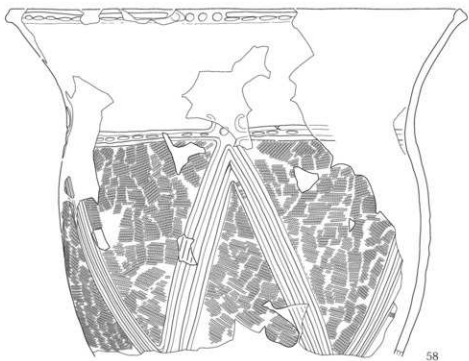




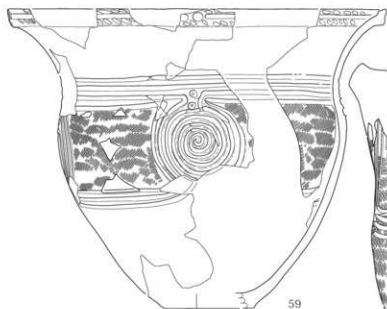
0 10cm



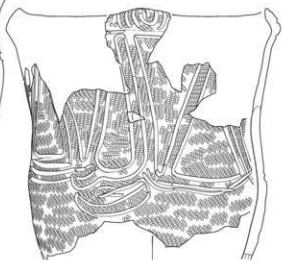




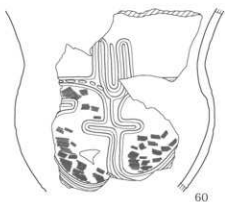
58



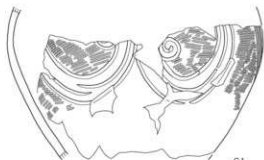
59



62



60



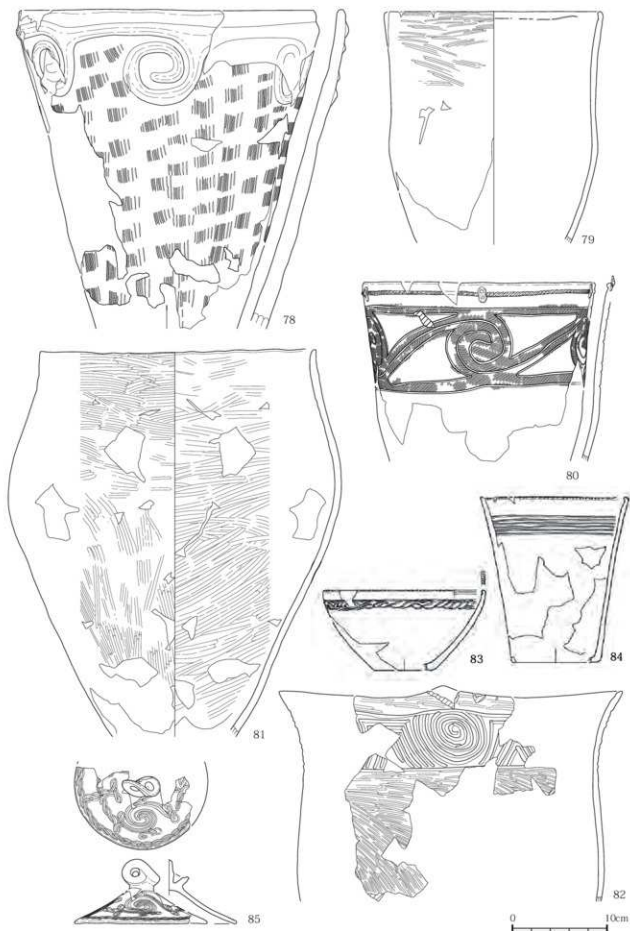
61





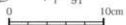
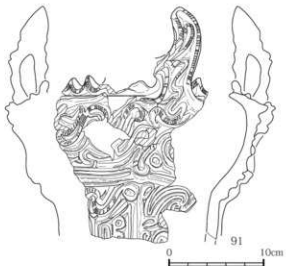
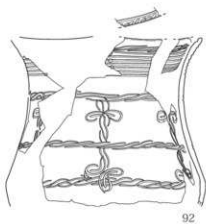
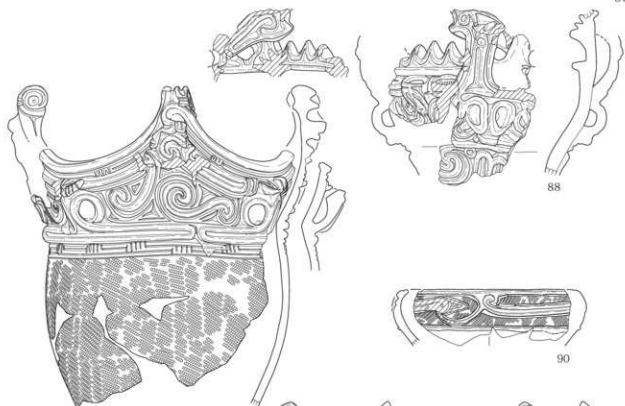
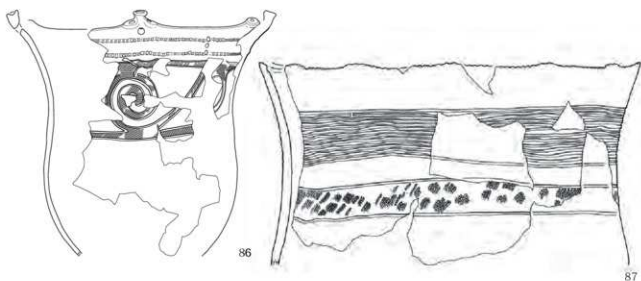


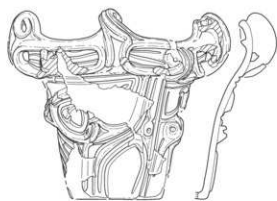
SK202 : 71、SK203 : 72、SK305 : 73、SH13 : 74、SQ1 : 75、SQ7 : 76、SQ9 : 77



SQ3 : 78, SQ6 : 79, SQ10 : 80, SQ11 : 81, SQ16 : 82, SQ17 (1) : 85, SQ27 : 83·84







93



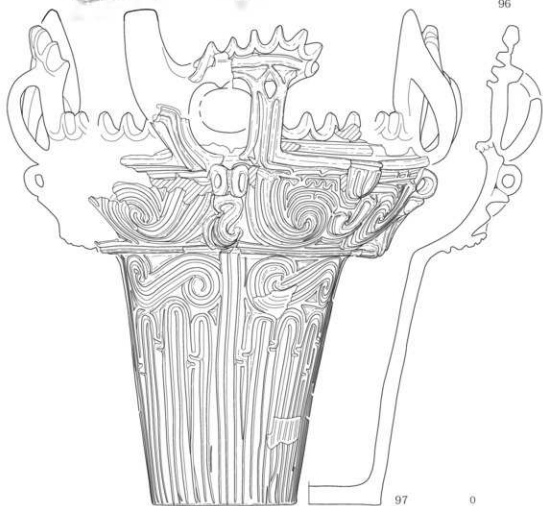
94



95

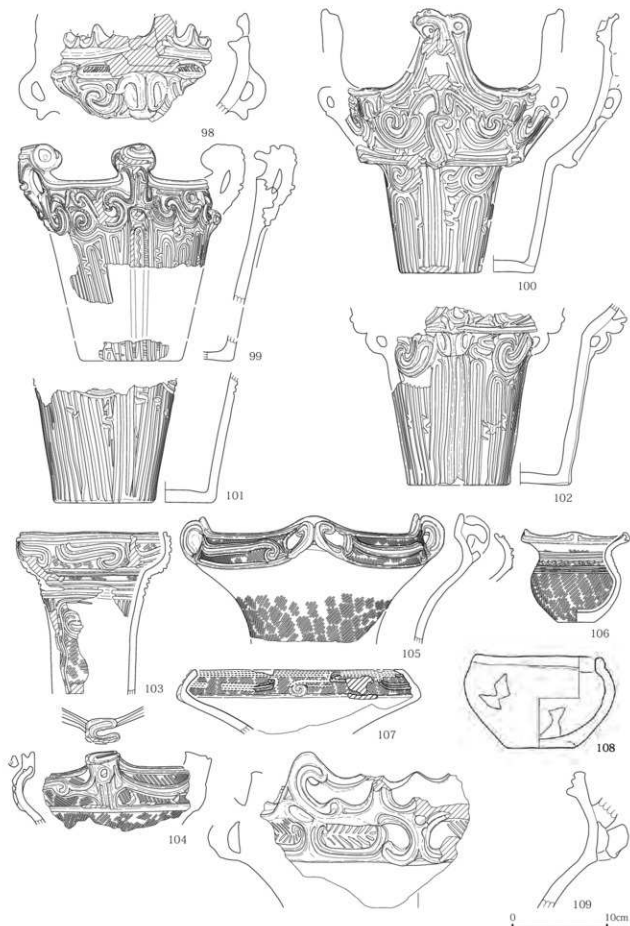


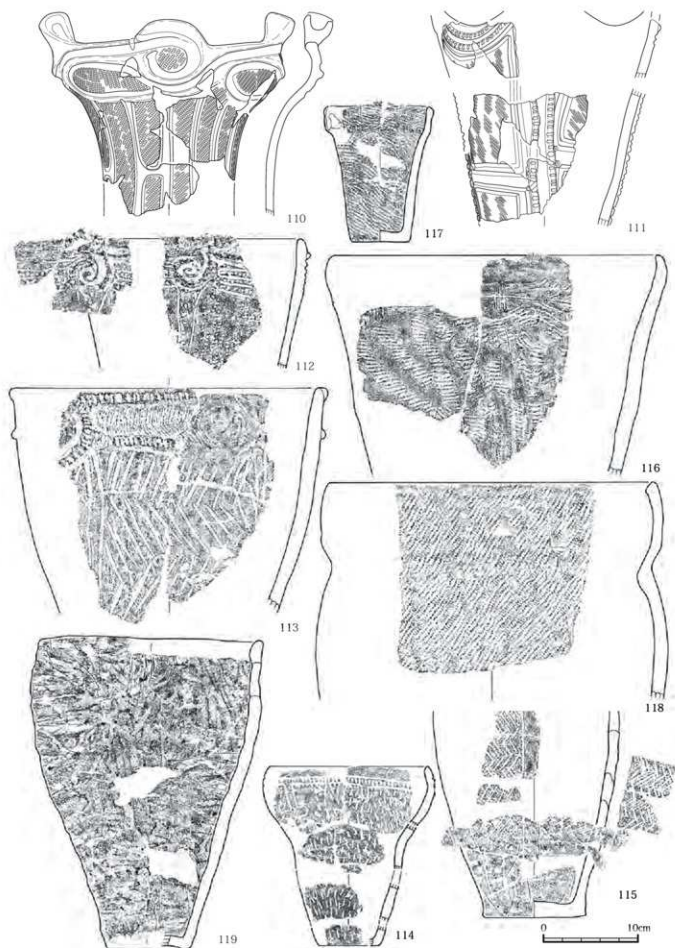
96



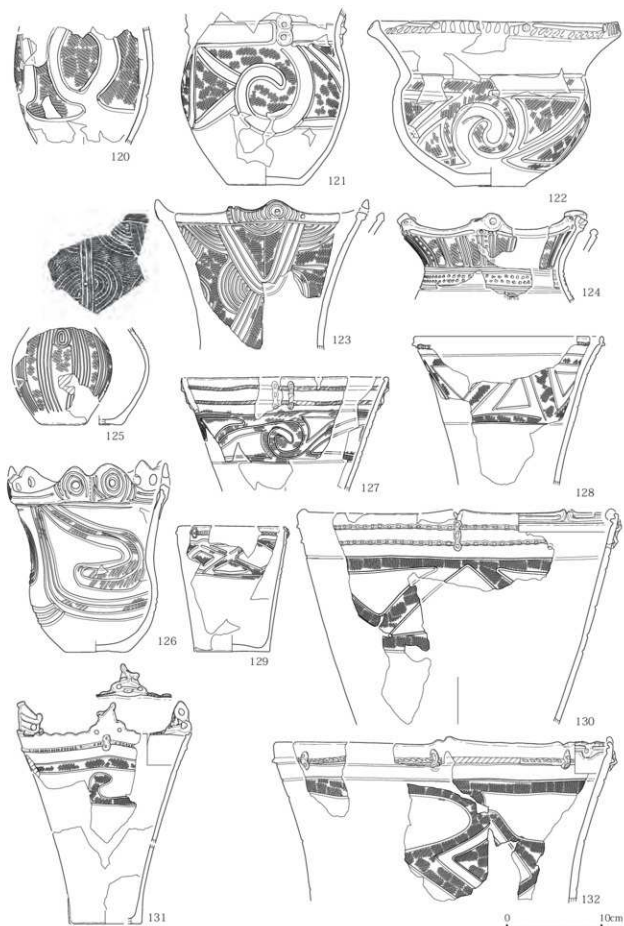
97

0 10cm

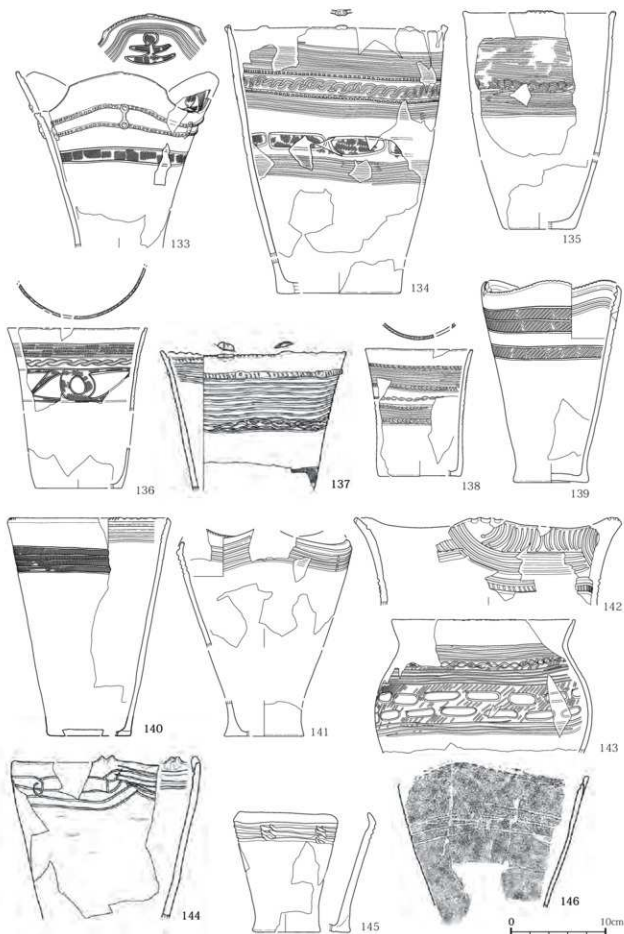




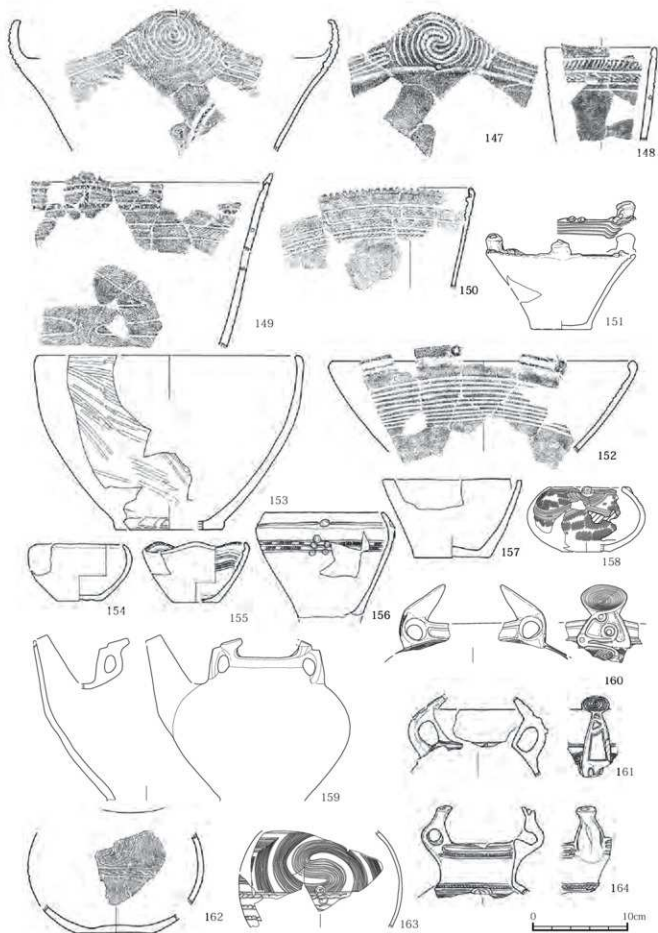
I WT07 : 117、I XA07 : 118、I YJ04 (以下I Yを省略、以後同じ) : 110・113、J05 : 112、K05 : 114、L06 : 111、L07 : 116、M06 : 119、2 b - 1区 : 115



I XA05 : 122, L・M06 : 126, R06 : 125, I YA07 : 123・131, G05 : 120, H06 : 130, J08 : 132, K05 : 124・128, K06 : 129, L06 : 127, 2 b - 1区 : 121

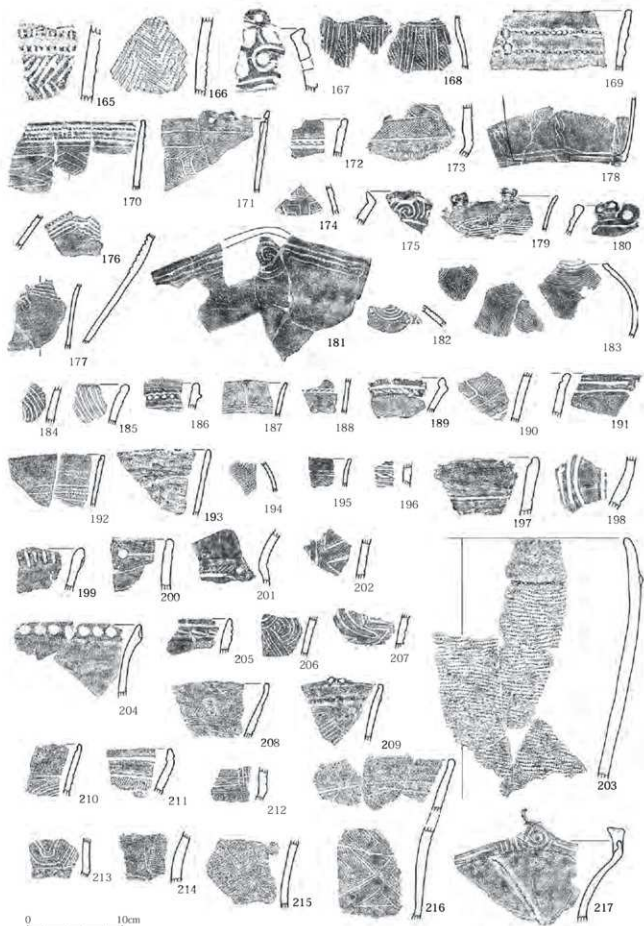


I XF06 : 140, G08 : 137, H07 : 143, I YA06 : 135, A07 : 136 • 138, C07 : 133, E05 : 134, H06 : 142, II UB06 (以下 II U を省略、以後同じ) : 144 • 145, C05 : 139, F06 : 141

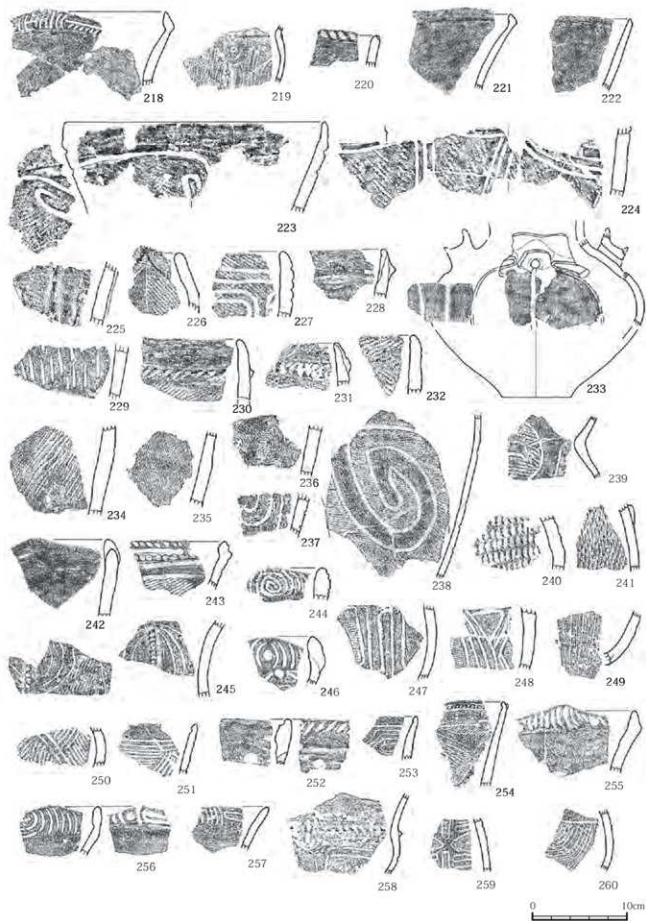


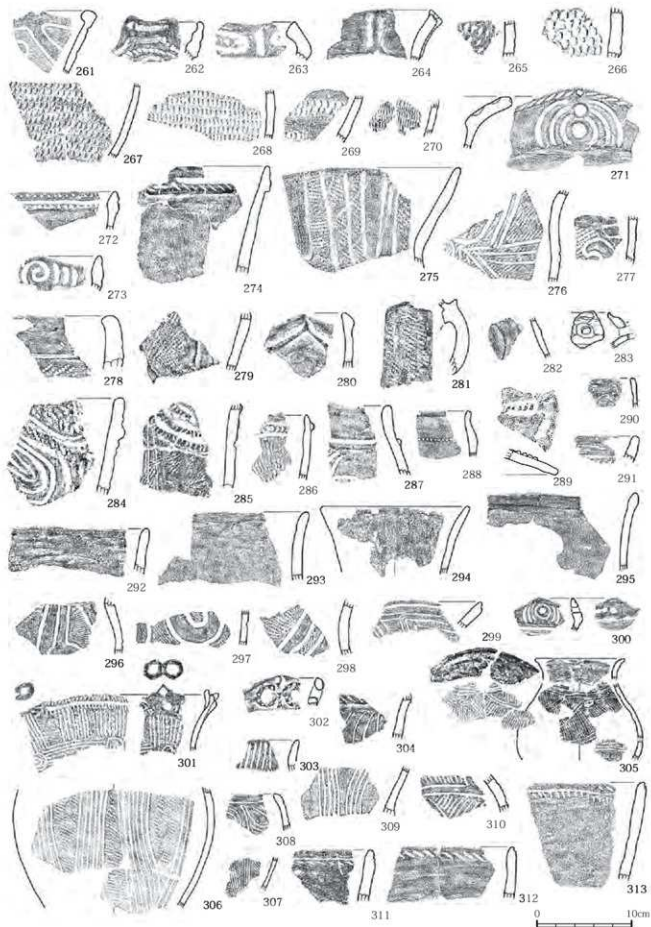
I XB05 : 150・152, H07 : 163, L05 : 159, T07 : 149, I YA07 : 147, H07 : 162, I06 : 161, I07 : 158,  
 II UB06 : 156・164, D06 : 148・153~155, 2 b-1区 : 151・157・160

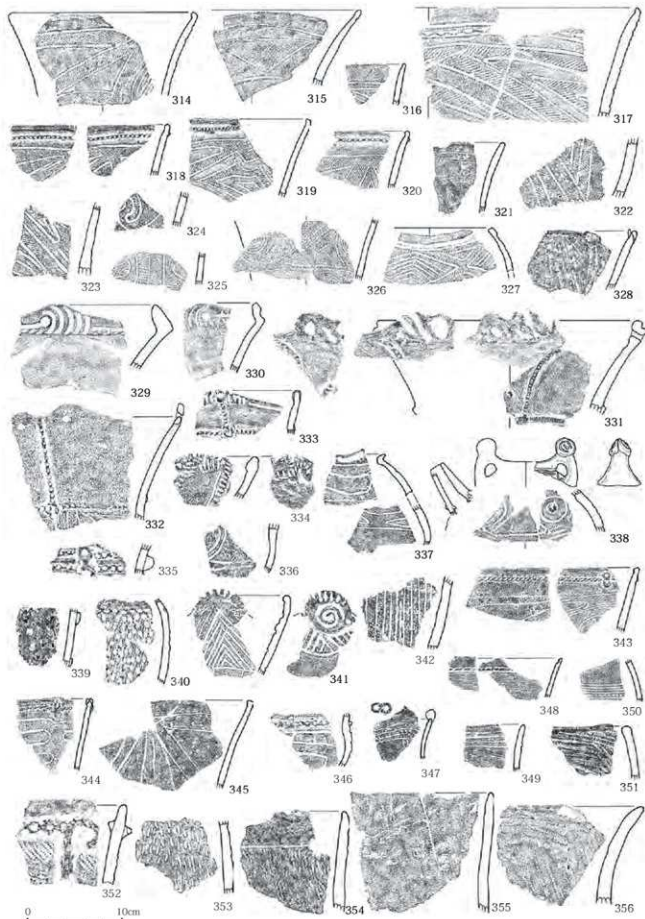




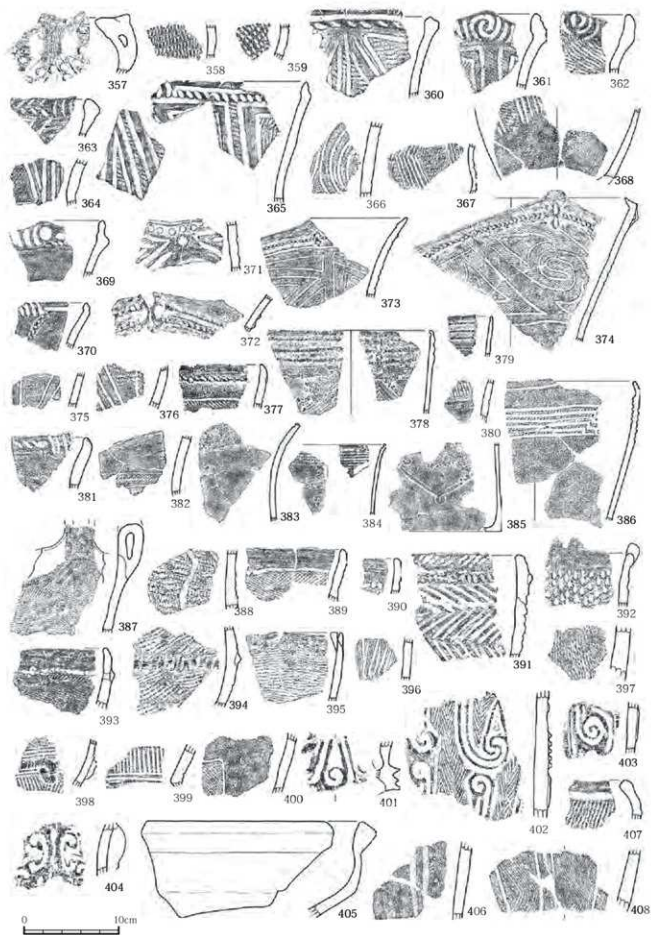


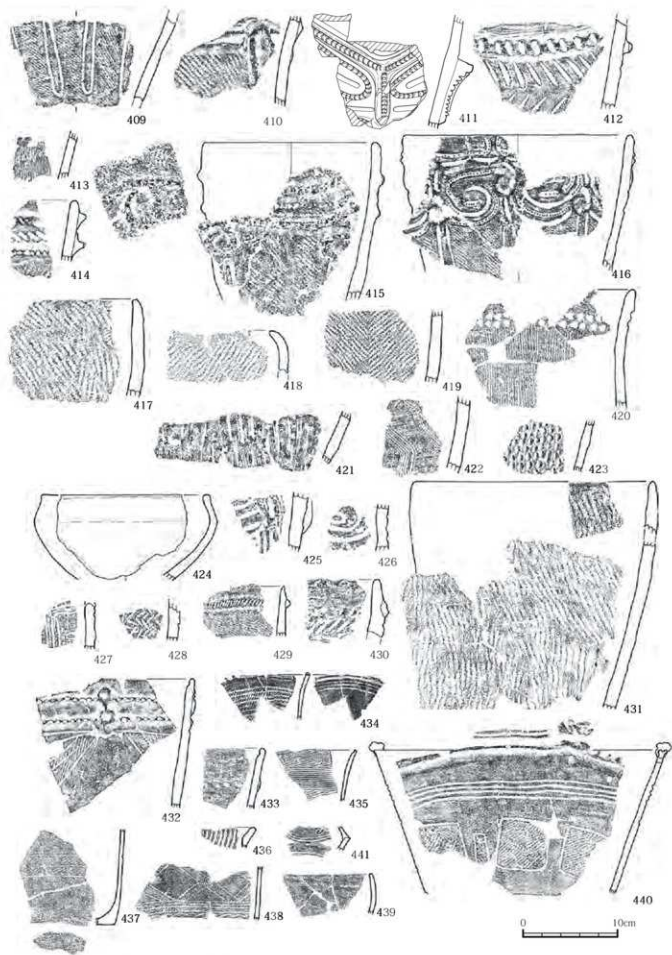






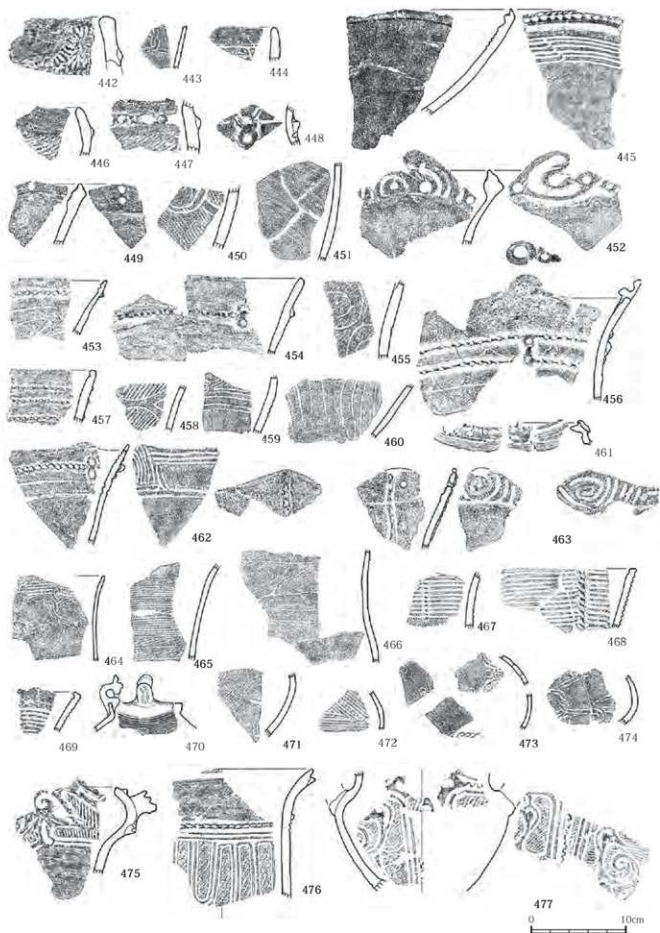
SB12 (2) : 314~338, SB12 - B : 339~351, SB13 (1) : 352~356

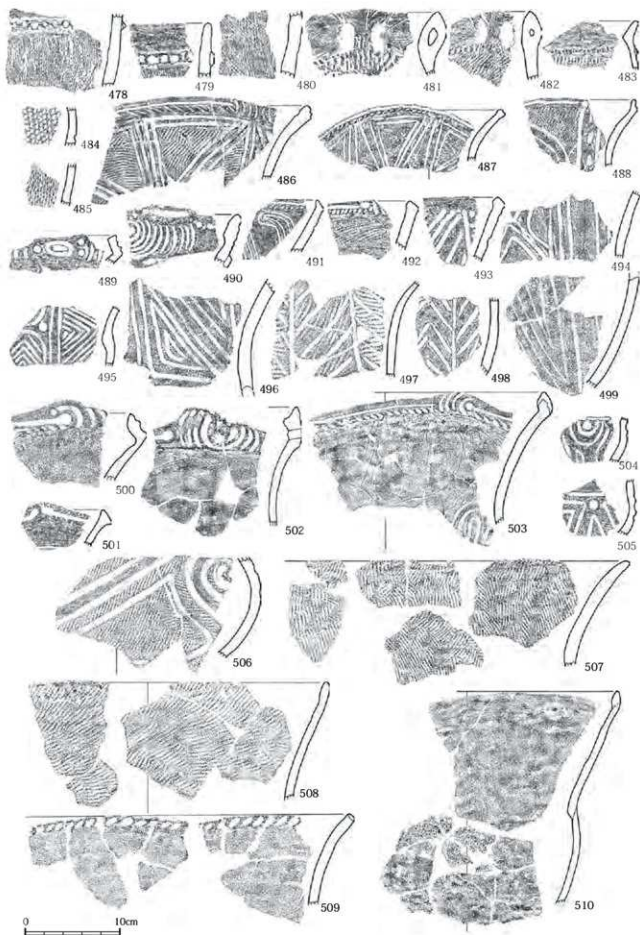


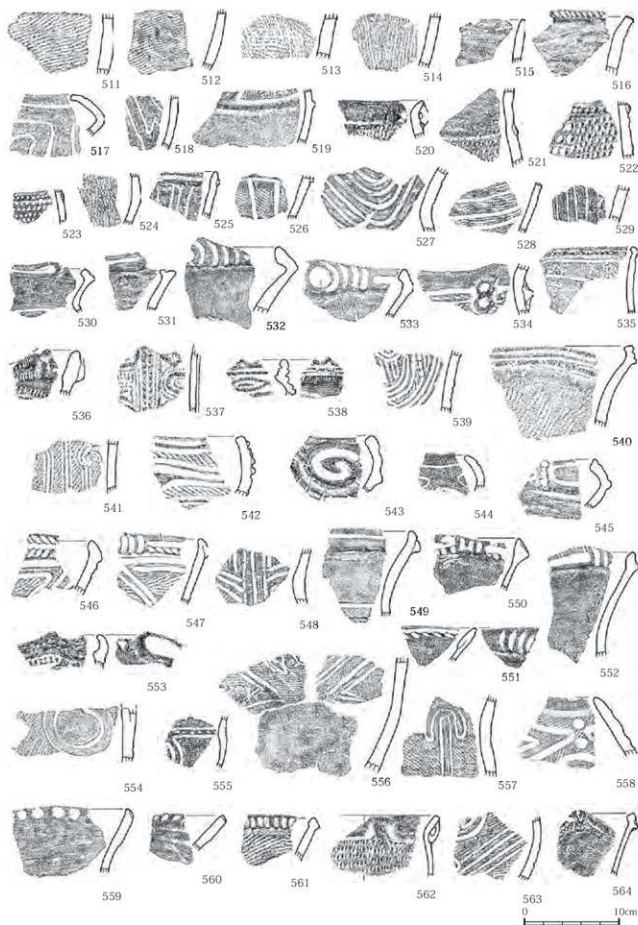


SB16 (2) : 409~423, SB17 : 424~431, SB21 : 432~440

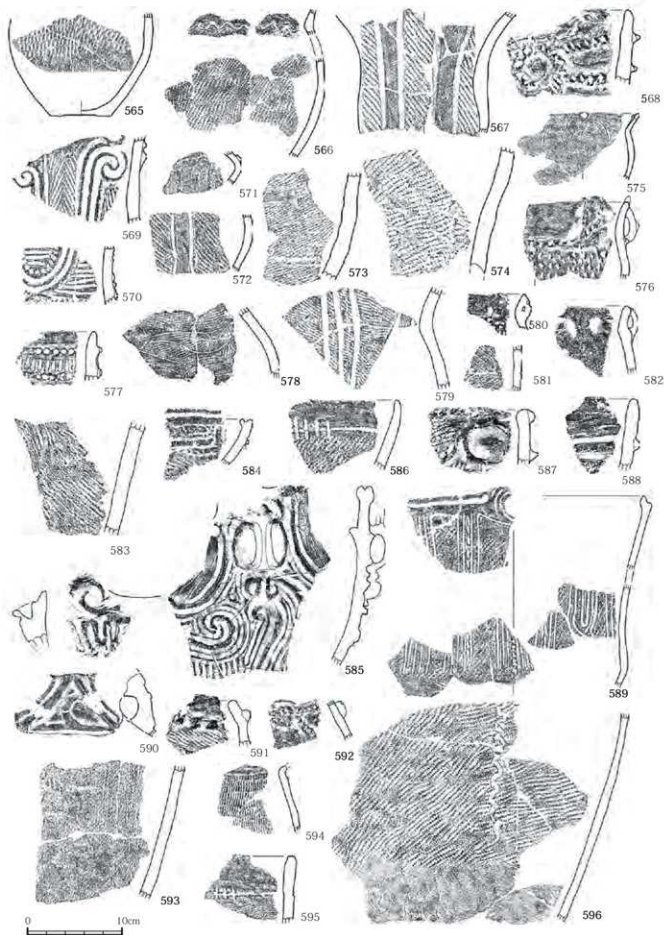




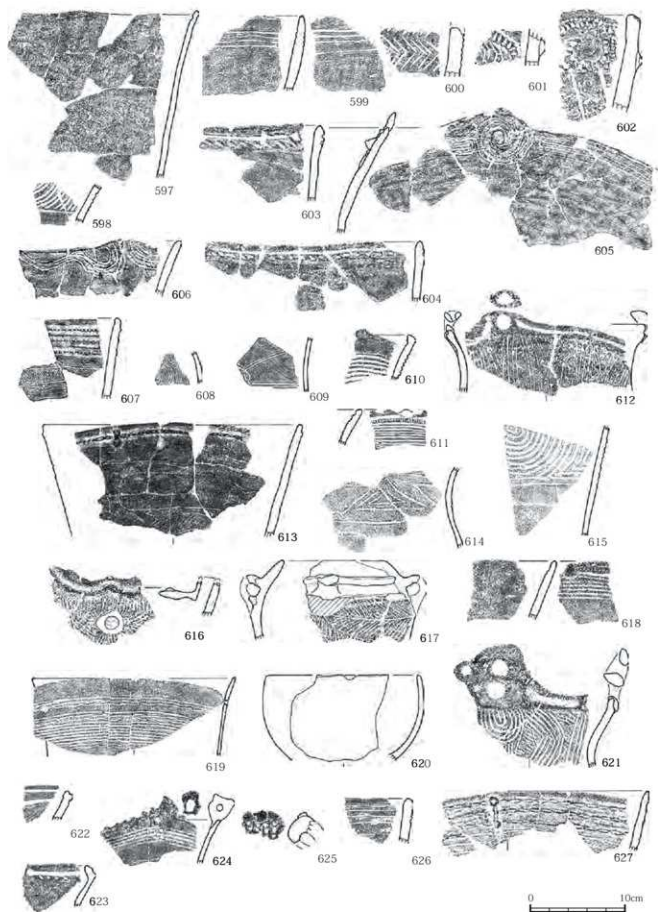




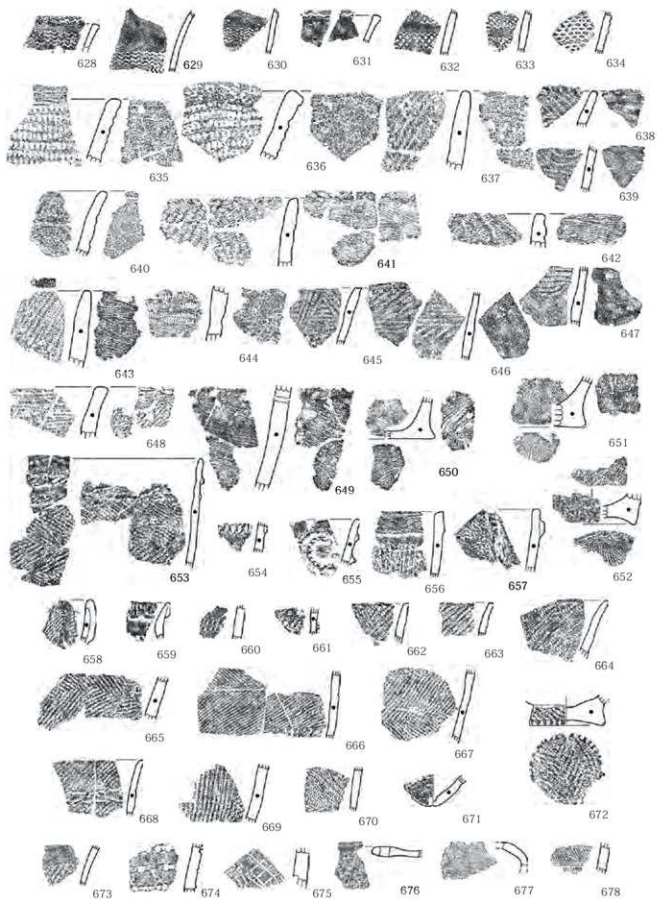




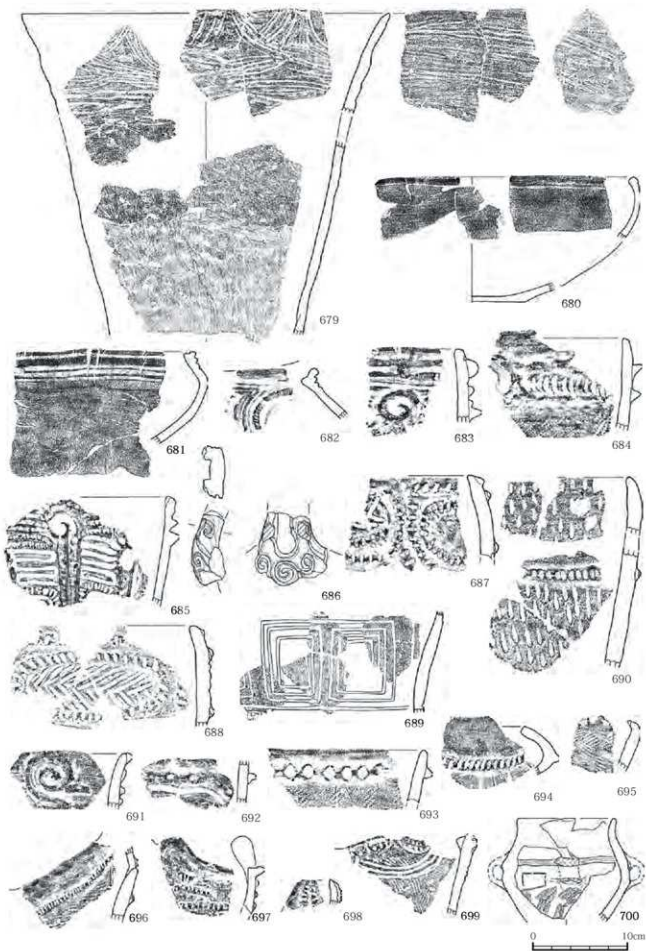
SK254 : 565, SH14 : 566, SQ18 : 567, SK 3 : 568, SK 5 : 575, SK10 : 580, SK12 : 569, SK51 : 570, SK65 :  
571 ~ 574, SK156 : 577, SK159 : 578, SK177 : 579, SK178 : 576, SK200 : 582, SK224 : 586, SK253 : 583  
~ 585, SK260 : 589, SK267 : 581, SK283 : 592, SK299 : 591, SK313 : 587 · 588, SK322 : 590, SK343 :  
596, SK379 : 593 · 595, SK396 : 594



SQ 1 : 597 · 598, SQ 2 : 599, SQ 3 : 600 ~ 602, SQ 4 : 603 · 604, SQ 5 : 605, SQ 7 : 606, SQ 11 : 607, SQ 13 : 608, SQ 14 : 609, SQ 15 : 610 · 611, SQ 19 : 612 · 613, SQ 27 : 614 · 615, SQ 28 : 616 · 617, SQ 29 : 618, SQ 30 : 619 · 620, SQ 31 : 621, SF 2 : 622 · 624, SF 4 : 625 ~ 627, SF 5 : 623



0 10cm • 含纖維





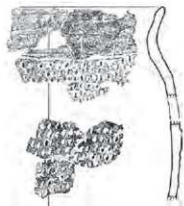
701



702



703



708



704



705



706



707



709



710



711



712



713



714



715



716



717



720



718



721



722



723



724



719



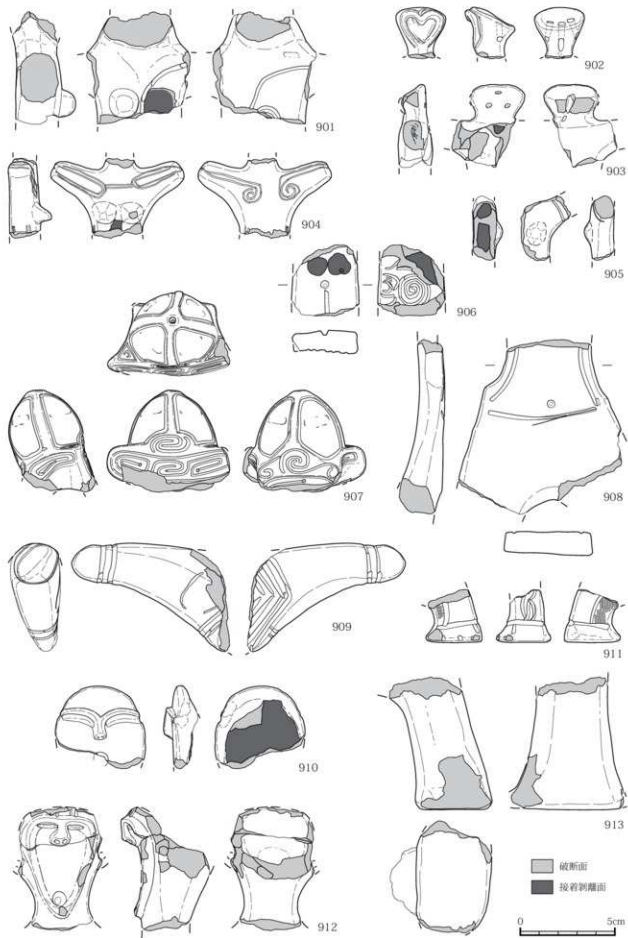
725

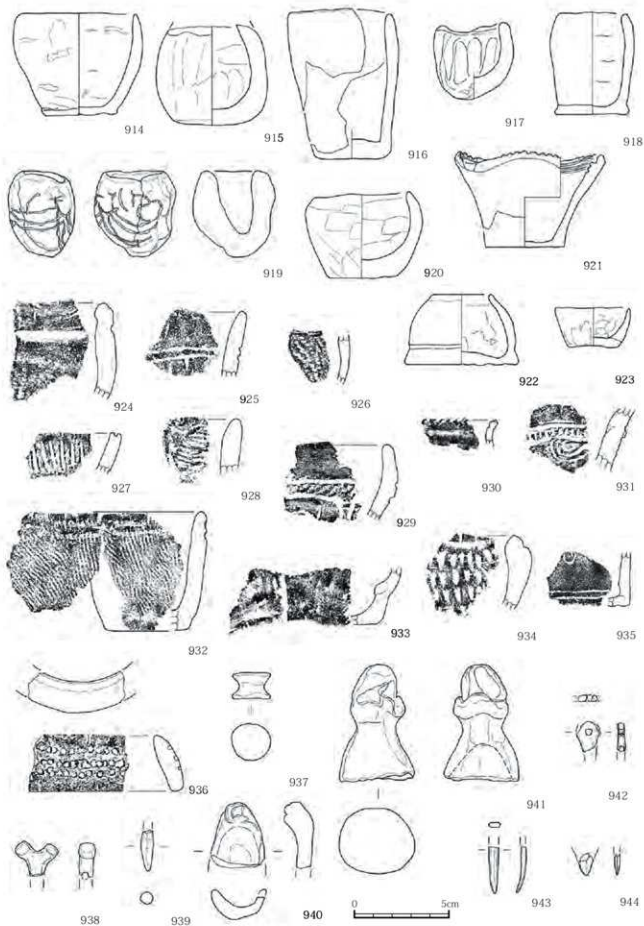


726



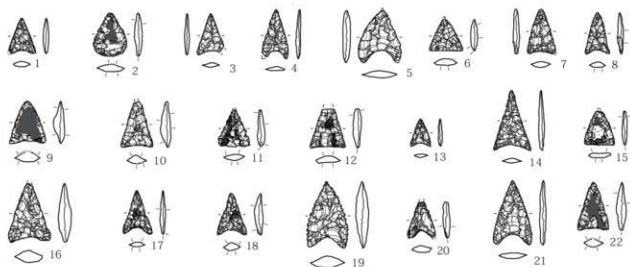




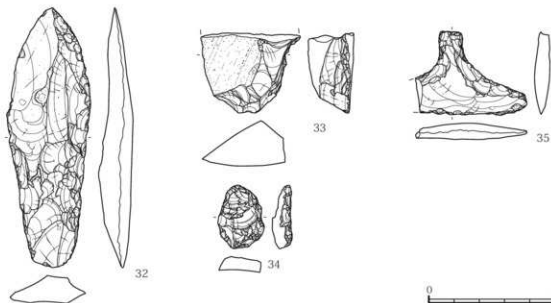
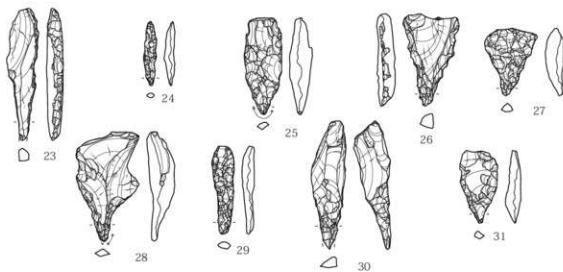


ミニチュア土器：914～935、その他土製品：936～941、骨角製品：942～944

図版 63 石器 1 石鏃、石錐、石槍、石匙、搔器



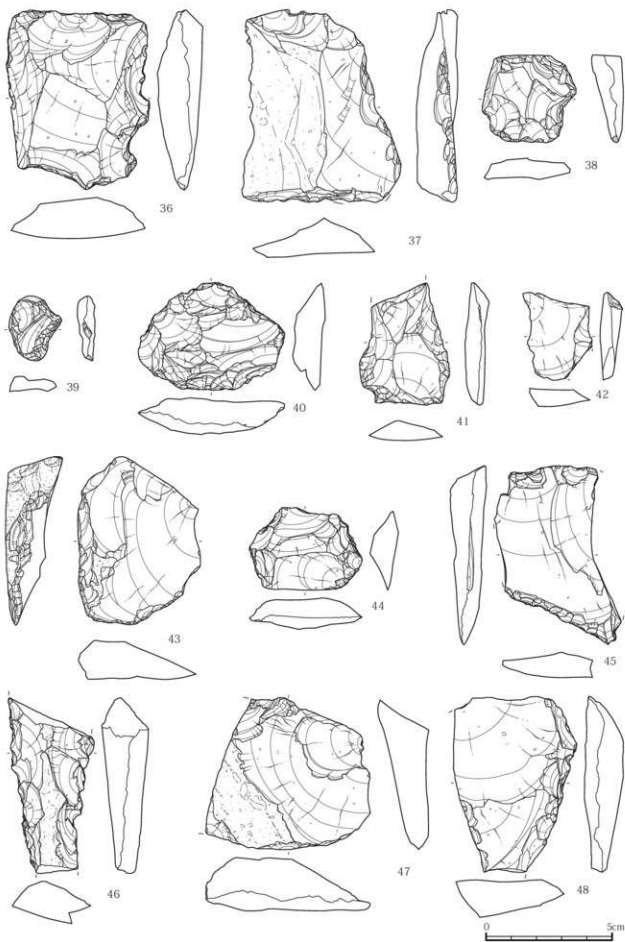
■ アスファルト



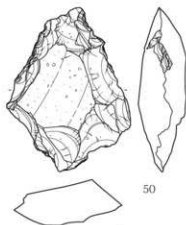
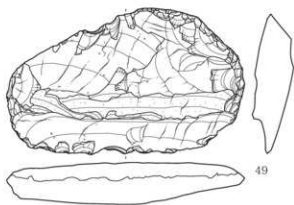
0 5cm

石鏃：1～22、石錐：23～31、石槍：32、搔器：33・34、石匙：35

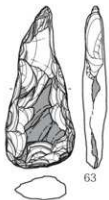
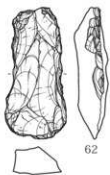
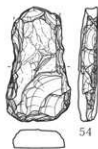


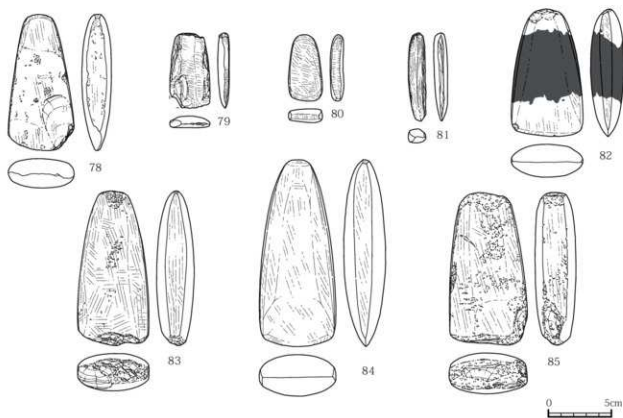
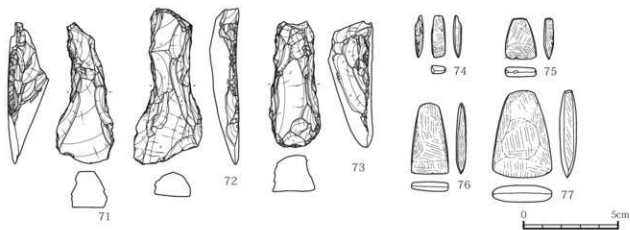
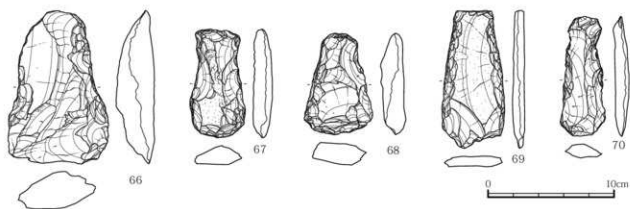


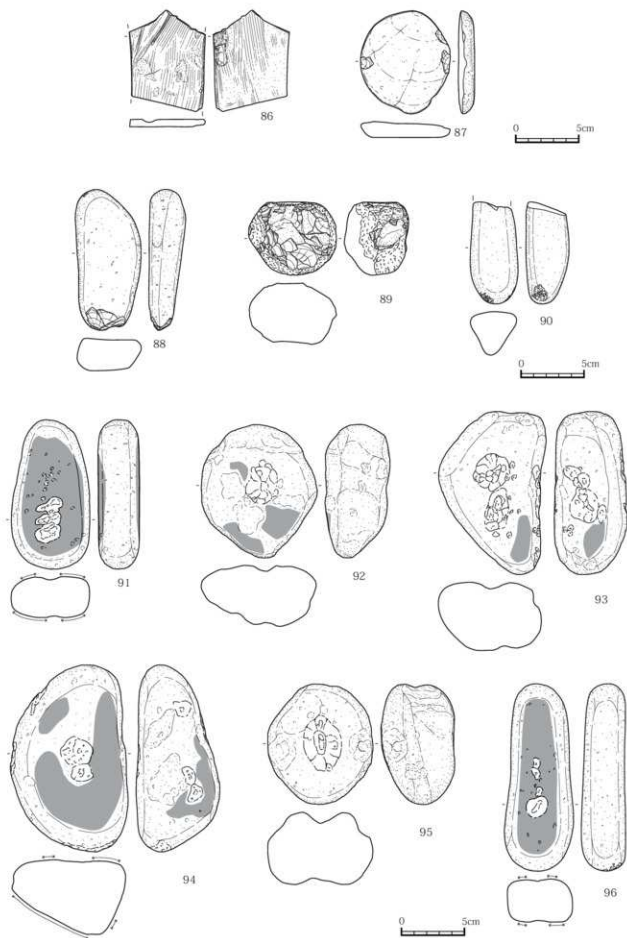
削器(1): 36~48



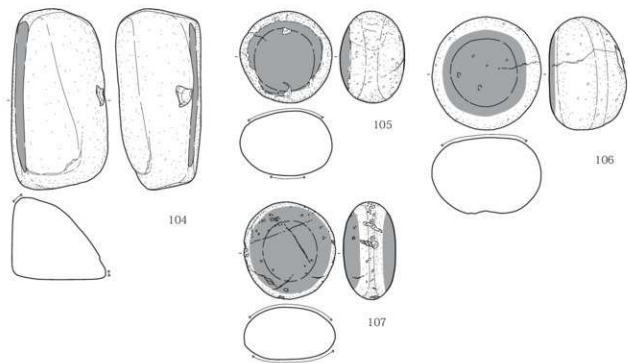
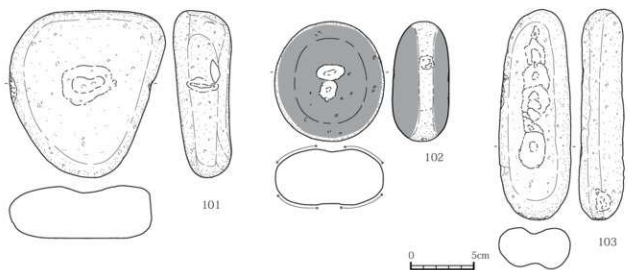
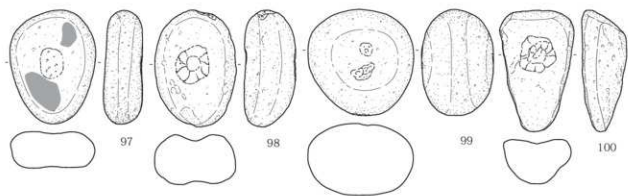
■ 磨损痕



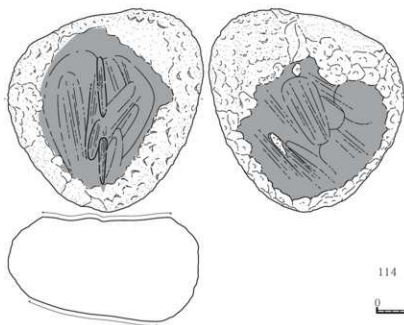
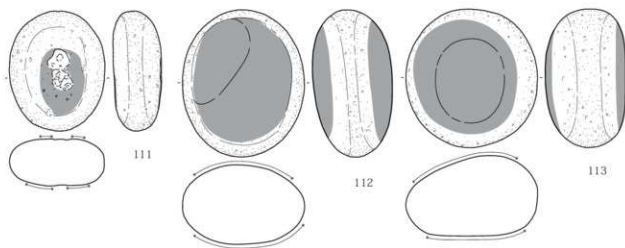
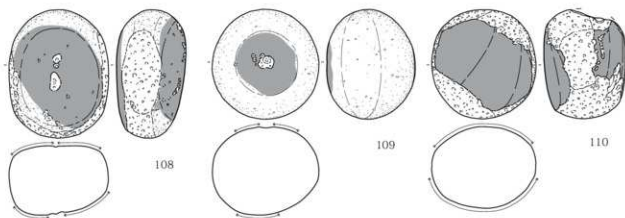




小形砥石：86、石錘：87、敲石・ハンマー：88~90、凹石（1）：91~96

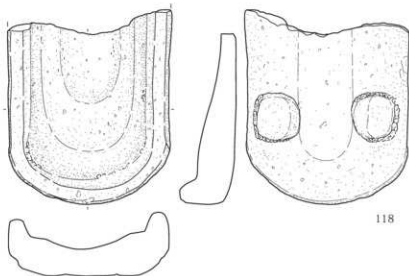
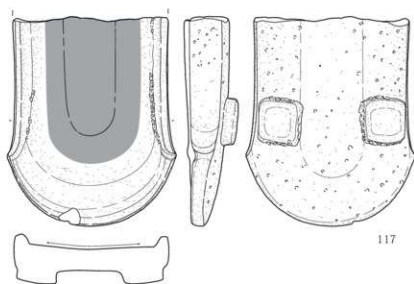
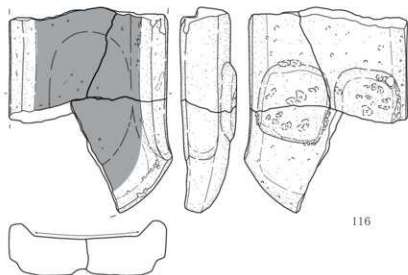
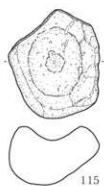


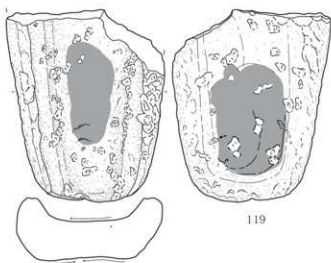
磨石(2): 97~103、特殊磨石: 104、磨石(1): 105~107



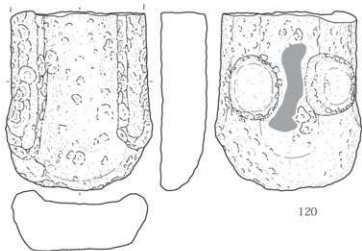
114



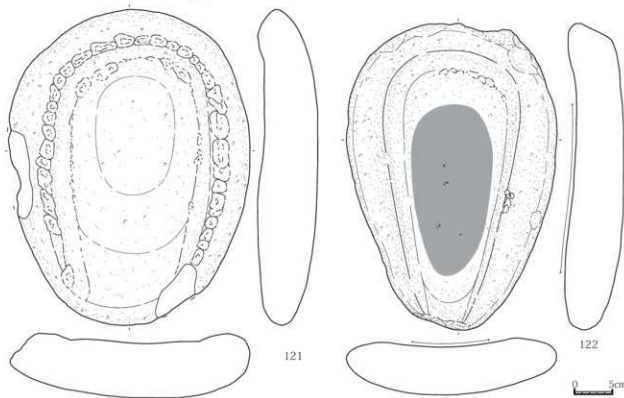




119



120

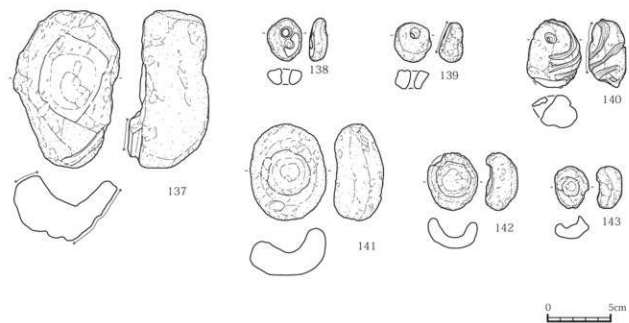
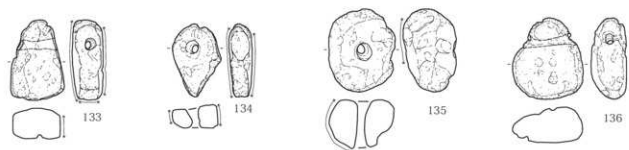
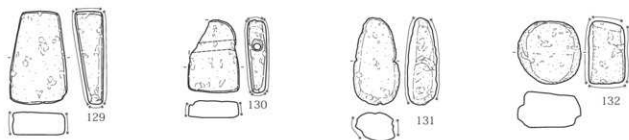
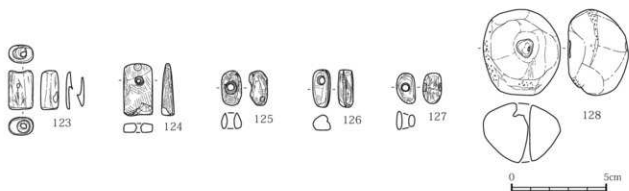


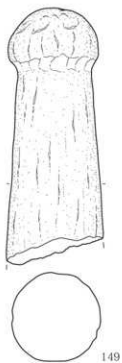
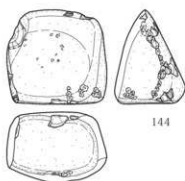
121

122

0 5cm









ひんご遺跡遠景（千曲川対岸、南東から）



調査区全景（北東から）



南壁のSQ29、SF33（北から）



2b-1区西壁土層（東から）



3区西壁土層（東から）



SB1 完掘 (東から)



SB1 完掘 (西から)



SB1 完掘 (北から)



SB1 礎出土状況 (IYC06) (南から)



SB1 が完掘 (東から)



SB2 完掘 (南から)



SB2 石完掘 (東から)



SB3 検出状況 (南から)



SB3 遺物出土状況 (南から)



SB4 検出状況 (北から)



SB4 断面 (東から)



SB6 完掘 (南西から)



SB7 礎出土状況 (南から)





SB5 炭出土状況 (南から)



SB5 完掘 (西から)



SB5 が完掘 (東から)



SB5 検出状況 (西から)



SB8 東西断面 (南から)



SB8 完掘 (南西から)



SB10 完掘 (南西から)



SB10 西壁断面 (東から)



SB9ピット完掘 (北から)



SB9遺物出土状況 (南東から)



SB12・12-B東西断面 (南西から)



SB12-B (SH8) 張り出部断面 (南西から)



SB12-B 検出状況 (南から)



SB9・12 完掘 (北から)



SB12 断面 (西から)



SB12 坑内土器検出状況 (2段階) (南から)



SB12 石柱出土状況 (南から)



SB13 完掘 (南から)





SB14 東西断面 (東から)



SB14 断面 (東から)



SB15 完掘 (南西から)



SB15 北断面 (北から)



SB16 炭分布状況 (南から)



SB16 完掘 (南から)



SB17 トレンチ断面 (西から)



SB20 完掘 (南から)



SB20 竪穴遺物出土状況 (東から)



SB20 竪穴石組 (東から)



SB21 竪穴完掘 (南から)



SB21 竪穴内土器出土状況 (東から)



SB22 東西南北断面 (南から)



SB22 竪穴出土状況 (東から)



2a 区西側全景 (南東から)



2a 区東側全景 (南西から)



SB2 (下)・23 完掘状況 (東から)



SB23 張出部石圍施設 (南から)



SB23 張出部石圍施設 (西から)



2b-1区中央全景 (南から)



2b-1区東側全景 (南から)





SB24 完掘 (南から)



SB24 遺物出土状況 (南から)



SB24 南北断面 (西から)



SB24 が完掘 (南から)



SB24 出入口部敷石 (東から)



SB26 床面溝完掘 (西から)



SB26 炉・敷石・炭化材検出状況 (南から)



SB26 炉東西断面 (南から)



SB26 炉完掘 (東から)



SB26 炉掘方 (東から)



SB28 完掘 (北から)



SB28 礫出土状況 (南から)



SB28 断面 (西から)



SB28 如埋設土器上層 (南から)



SB28 如完掘 (南から)





SB27 完掘 (北から)



SB27 完掘 (南から)



SB29 全景 (南から)



SB32 完掘 (東から)



SB30・31 周辺全景 (西から)



SB30・31 周辺全景 (南から)



3区全景 (東から)



2a・2b-1区全景 (東から)



ST2 (南から)



ST2 (東から)



ST2 (SK216) (西から)



ST2 (SK241) (西から)



ST2 (SK287) (西から)





ST3 (南から)



ST3 (東から)



ST3 (SK256) (南東から)



ST3 (SK265) (東から)



ST3 (SK268) (東から)



ST 4、SK81・83・109・172・173 (南から)



SK83 (南西から)



SK83 (北西から)



SK81 (南から)



SK172 (南から)



SK156 粘土探掘坑土層 (北東から)



SK156 粘土探掘坑検出状況 (北から)



SK253 貯蔵穴完掘 (南から)



SK253 貯蔵穴断面 (東から)



SK111 土器出土状況 (南西から)



SK202 土器出土状況 (東から)



SK313 土器出土状況 (西から)



SK205 土器出土状況 (東から)





SK8 土器出土状況 (西から)



SK279 土器出土状況 (北東から)



SK125 土器出土状況 (北から)



SK203 土器出土状況 (南から)



SK411 石棒出土状況 (南から)



SK320 検出状況 (東から)



SK180 石器出土状況 (東から)



SK215 完掘状況 (東から)



SH2 完掘状況 (東から)



SH10 完掘状況 (東から)



SH13 配石墓完掘状況 (南東から)



SH14 土器出土状況 (東から)



SH13 配石墓上面配石 (北から)



SQ3 遺物出土状況 (南から)



SQ7 遺物出土状況 (南から)



SQ9 遺物出土状況 (南から)



SQ11 遺物出土状況 (南から)



SQ16 遺物出土状況 (南から)



SQ18 遺物出土状況 (東から)



SQ12 遺物出土状況 (南から)



SQ13 遺物出土状況 (南から)





SQ33 遺物出土状況 (北から)



SQ34 遺物出土状況 (東から)



SF 2 截割状況 (西から)



SF23 截割状況 (南から)



SF25・26 検出状況 (南から)



SF27 検出状況 (東から)



SF29 截割状況 (東から)



SF33 検出状況 (北から)



2a区No 3注口 (図版 46-159) 土器出土状況 (南から)



3区No 3石皿 (図版 71-121) 出土状況



3区No 7縄文後期土器 (図版 44-126) 出土状況 (南から)



3区No 60石皿 (図版 70-117) 出土状況 (北から)



3区No 47縄文中期土器 (図版 42-99) 出土状況 (北東から)



3区No 78縄文中期土器 (図版 42-100) 出土状況 (北から)



3区No 98縄文中期土器 (図版 41-97) 出土状況 (北から)



3区No 17土偶 (図版 61-907) 出土状況 (西から)



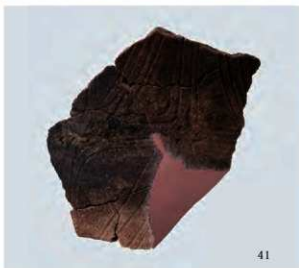


SB1 : 1・2・178, SB3 : 139, SB5 : 3・4, SB6 : 5・6, SB7 : 7, SB8 : 8, SB9 : 9・11・13





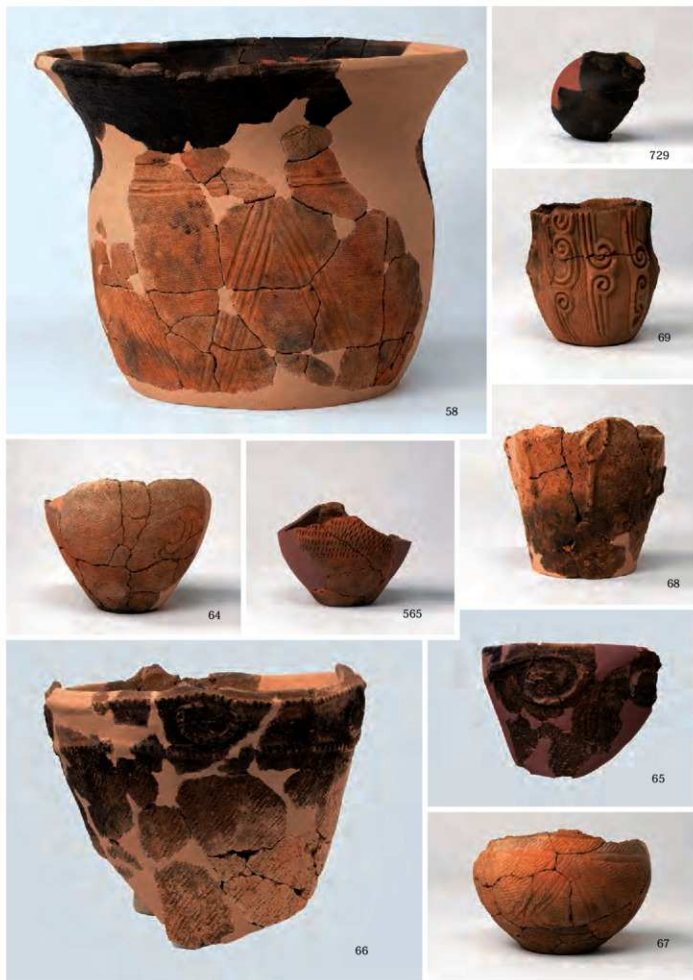






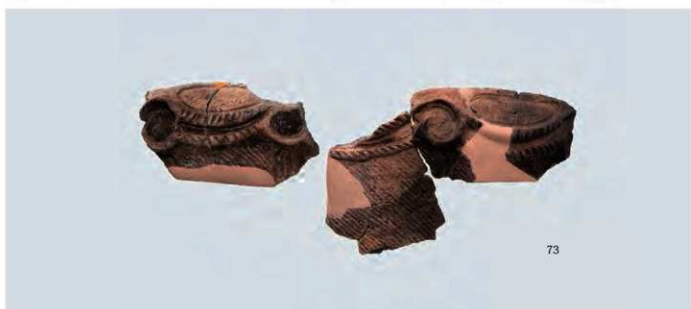


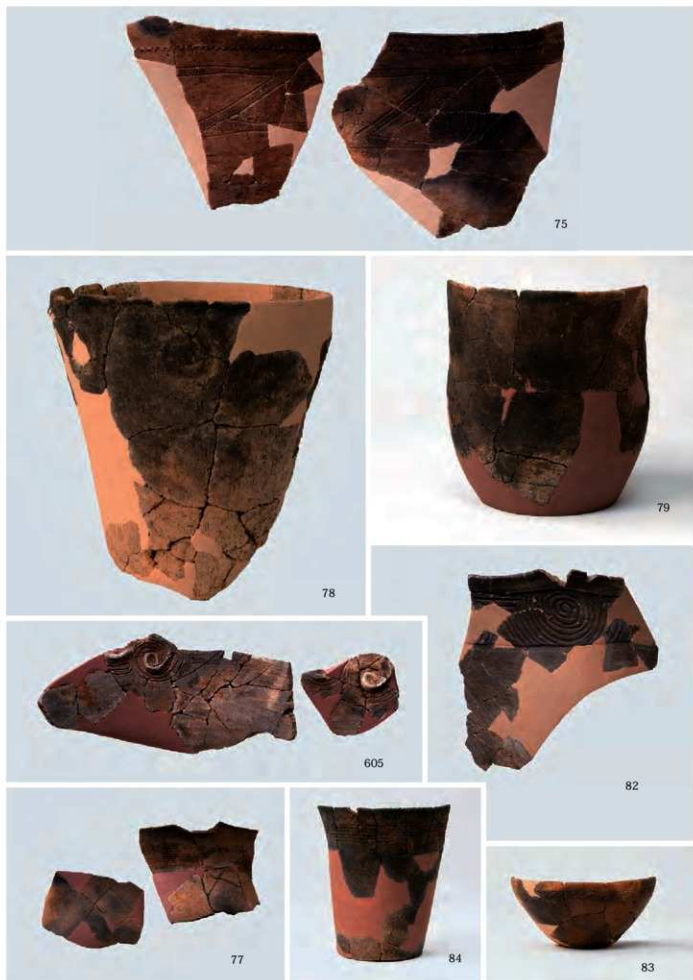




SB28 (3) : 58、SK 8 : 65・66、SK111 : 68、SK118 : 729、SK125 : 67、SK156 : 69、SK222 : 64、SK254 : 565

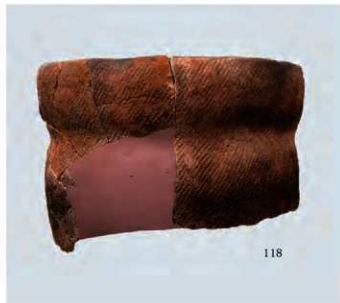






SQ1 : 75, SQ3 : 78, SQ5 : 605, SQ6 : 79, SQ9 : 77, SQ16 : 82, SQ27 : 83・84





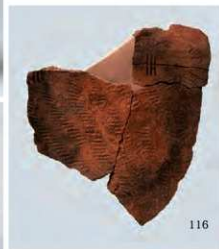


I X A07 : 98・101・102 (以下 I X を省略、以後同じ)、B08 : 96・97、D07 : 94、H07 : 95、I08 : 93



I WT07 : 109, I XA08 : 106, B07 : 107, C07 : 99・105, F07 : 104, G07 : 100, G08 : 103, I YH06 : 687・688 (以下I Yを省略、以後同じ)、K05 : 114, K06 : 735, K07 : 734, L06 : 111, M04 : 733





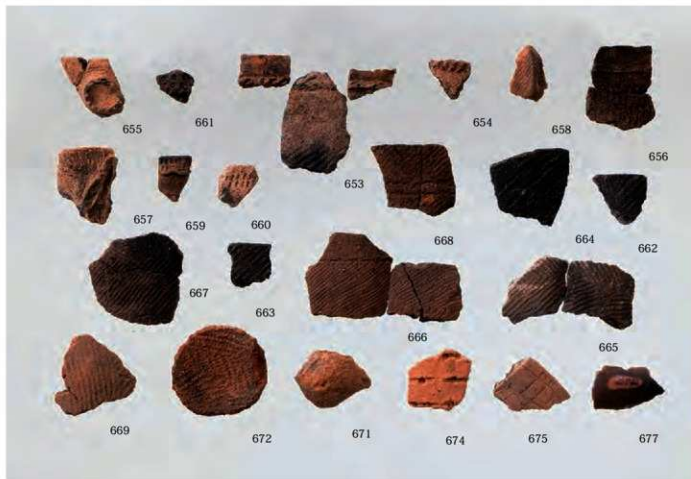






I XG08 : 137, L05 : 741, L06 : 742, M06 : 739, N06 : 740, O07 : 738, I YA06 : 135, A07 : 136・138, E05 : 134, E06 : 743, H06 : 142, K07 : 737

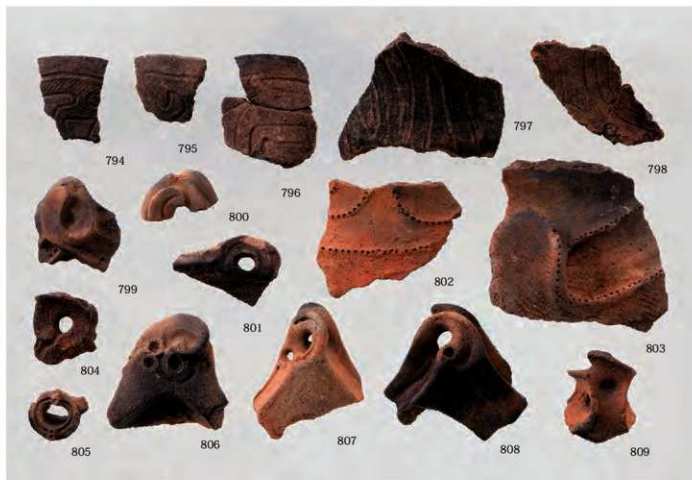




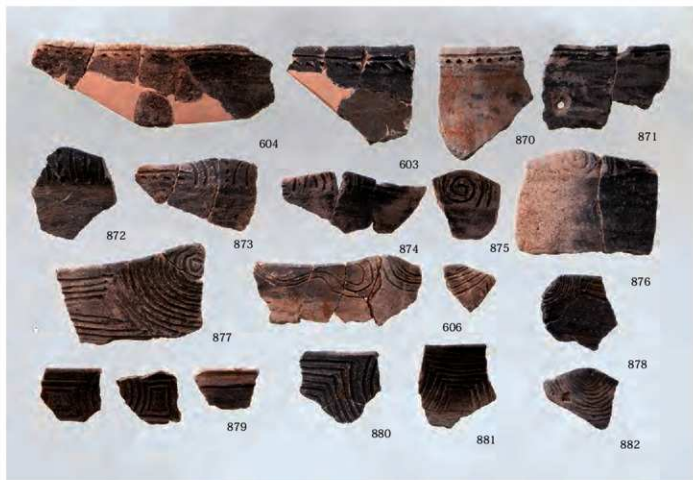




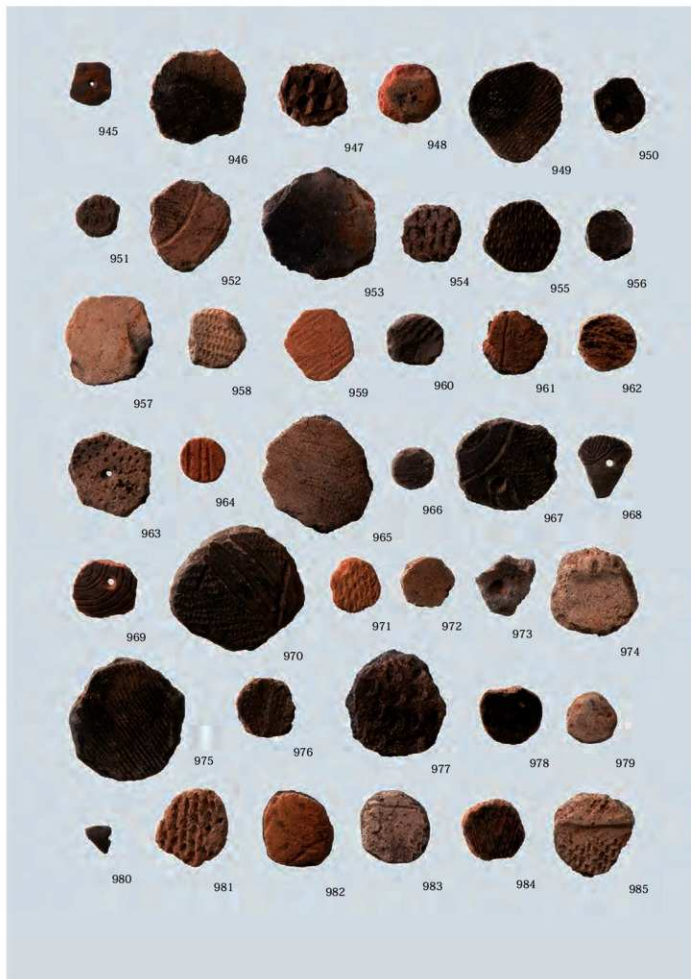


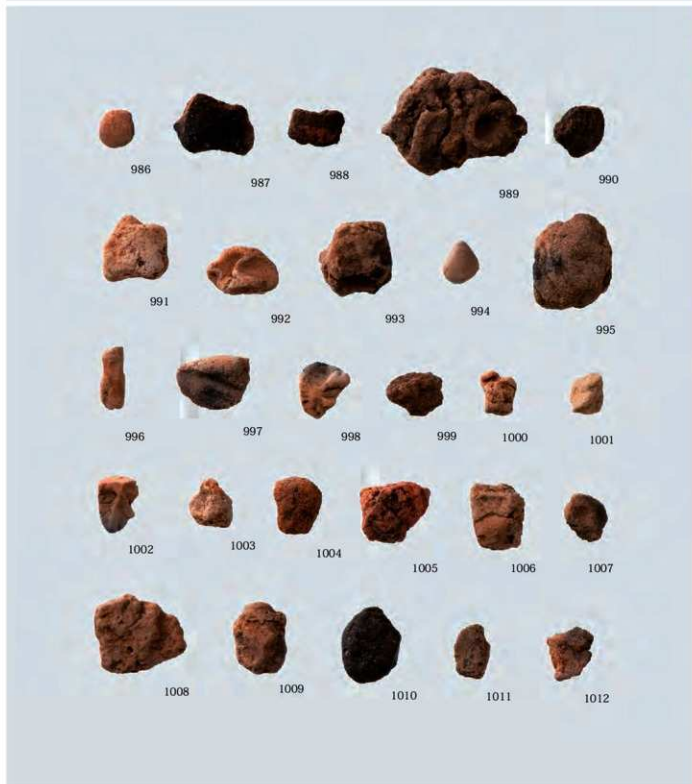
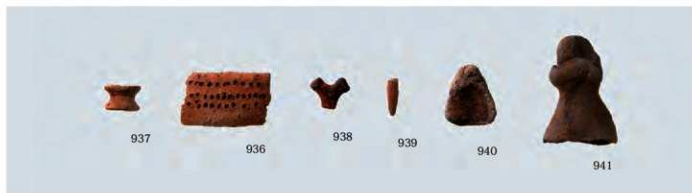




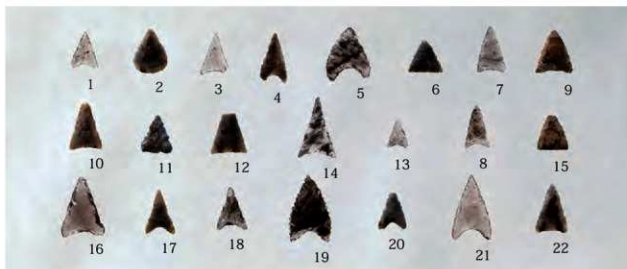












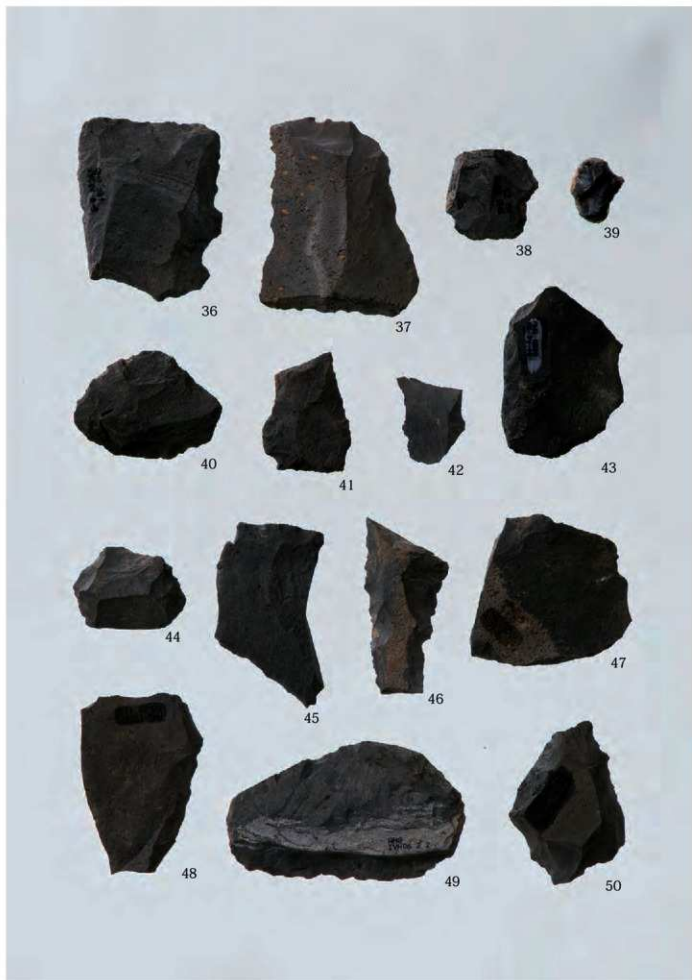
石鏃



石錐



石槍、搔器、石匙



削器





磨製石斧



砥石

86



石錘

87



88



89



90

敲石、ハンマー



91



92



94



95



102



98



97



93



96



101



99



100



103





特殊磨石、磨石



砥石



石皿



117



118



120



119



121



122



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



123



124



125



126



127



128

石製垂飾



129



130



135



134



141



133



137



131



142



143



132



140



138



136



139

輕石製品



147



145



149



150



148



146



三角壩形石製品

144

石棒

# 報告書抄録

ふりがな	ひんごいせき												
書名	ひんご遺跡												
副書名	社会資本整備総合総合交付金（広域連携）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一般国道筑作飯山線 下水内部栄村箕作～下高井郡沢温泉村明石												
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書												
シリーズ番号	118												
著者名	平林 彰 川崎 保 綿田弘実												
編集機関	（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター												
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL.026-293-5926												
発行年月日	2018年9月18日												
所収遺跡名	所在地	コ		北	緯	東	経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因			
		市町村	遺跡番号										
ひんご遺跡	長野県下水内部 栄村豊栄2153 ほか	20602	15	36° 59' 4"		138° 31' 44"		20150701 ～ 20161005	1.817	社会資本整備 総合交付金 （広域連携） 事業			
所収遺跡名	種	別	主な時代	主		な		遺	物				
黒部遺跡	集	落	跡	縄		文		堅穴建物跡23軒 敷石住居跡7軒 掘立柱建物跡6棟 土 坑33基 配石墓1基 配石遺構6基 土器集中35か所 炭・焼土集中36か所		縄文早・中・後期土器、 ミニチュア土器、土偶、貝 輪形土製品、石鏃、打製石 斧、磨石、凹石、石皿、削 器、磨製石斧、砥石、軽石 製品、石棒、装身具、三角 埴形石製品、骨角器、アス ファルト塊		土器付着物から年代測定 を実施。剥片石器は無炭 品質安山岩製が断然多数。 アスファルト付着土器破 片・石鏃・磨製石斧あり。	
要 約	①遺跡は千曲川左岸の河岸段丘上、地表標高約286mの微高地に広がる。調査地点は、東西方向の長軸を約110m、幅10mにわたって貫く形となった。												
	②縄文土器は早期押型文・絡条体圧紋文土器、前期羽状縄文土器から後期中業に及ぶ。多量に出土したのが中期中業馬高式期から、後期中業加曾利B1式期で、時期が明確ではない非意匠土器を除くと、特に中期末業と後期中業が多い。中期中業は、新潟県側の土器型式が断片し、末業には長野県側から伝わった型式が伴うようになり、この状況が後期中業に継続する。後期中業には長野県側の土器型式が増加し、中業には加曾利B1式が有文土器を占める。												
	③縄文後期中業の長野県の土器様相は、栗林類型、石神類型などが指摘され、関東地方とは異なることが知られながら、独自の型式名称はなかった。本遺跡では堀之内1式期はS B26・28、堀之内2式期はS B12出土の一括性が高い土器群を代表として、堀之内1式並行期に「ひんご1式」、堀之内2式並行期に「ひんご2式」の型式を提唱する。きわめて軽量・白色の、「軽白胎土」土器も見られる。												
	④石器組成は、切削具、石鏃、打製石斧、磨石類が20%前後で大差ない占有率を示す。剥片石器の素材には、千曲川で容易に採取できる無炭品質安山岩が多用されている。												
	⑤堅穴建物・敷石住居跡は、知跡などの痕跡も含めると、枋倉式期から加曾利B1式期まで、最大36軒を数える。この期間の変遷は、枋倉式期1軒、加曾利EⅢ・Ⅳ式、沖ノ原Ⅱ式期7軒、称名寺式期1軒、堀之内1式期8軒、堀之内2式期13軒、加曾利B1式期3軒と推移する。敷石住居跡は堀之内1式から見られる。												
	⑥調査区北側の平坦面で、掘立柱建物跡6棟を確認した。分布域が重なる土坑群には、多くの柱穴規模の穴が含まれるため、さらに多数の掘立柱建物跡の存在が予想される。												
	⑦墓跡と確認できる確実な遺構は、堀之内2式期の裏被葬をおこなった配石墓1基である。遺物包含層の上面付近に多数の遺物集中、炭化物・焼土集中が広がり、多くは堀之内2式期前後である。												
	⑧調査区全体に炭化物が多く、1mm網のフルイで水洗採取した炭化物、焼けた動物骨は多量である。種実ではトチノキを最多に、オニグルミ、クリ、ササゲ属が同定された。動物骨ではイノシシが多く、ほかにへび類、サケ科、コイ科、サメ類が同定された。土器付着炭化物の年代測定により、縄文中・後期土器型式の年代値を提示できた。												
	⑨集落の構成要素としては、長野県に多い堅穴建物跡、敷石住居跡と、新潟県に多い掘立柱建物跡の両者を認める。土器様相では、中期的新潟県側主体から、後期の長野県側優勢へと変遷する状況がうかがえる。信州産黒曜石と、越後産アスファルトの利用も、信越交流の一端を物語る。信越国境地域の特徴が顕現した、千曲川本流に面して立地する集落の生活状況を物語る、貴重な調査事例となる。												

平成 30 (2018) 年 9 月 18 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 118

### ひんご遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
一般県道箕作飯山線 下水内部栄村箕作～下高井郡野沢温泉村明石

発行者 長野県  
（一財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号  
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494